

一般国道
10号線

椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第2集

辻垣畠田・長通遺跡

福岡県行橋市大字辻垣所在遺跡の調査

1994

福岡県教育委員会

辻垣畠田・長通遺跡

福岡県行橋市大字辻垣所在遺跡の調査

卷頭 図 版



1



2



3

- 1 畠田・長通全景(南から)
- 2 長通・畠田全景(北から)
- 3 畠田地区全景(南上空から)



- 1 畠田大溝最下層(南から)
- 2 畠田大溝中区3層土器(9・13・14)
- 3 畠田大溝中区3層三又鍬



1 長通地区全景(南から)

2 長通3区大溝3下層勾玉・土器

3 長通3区大溝3下層勾玉





1

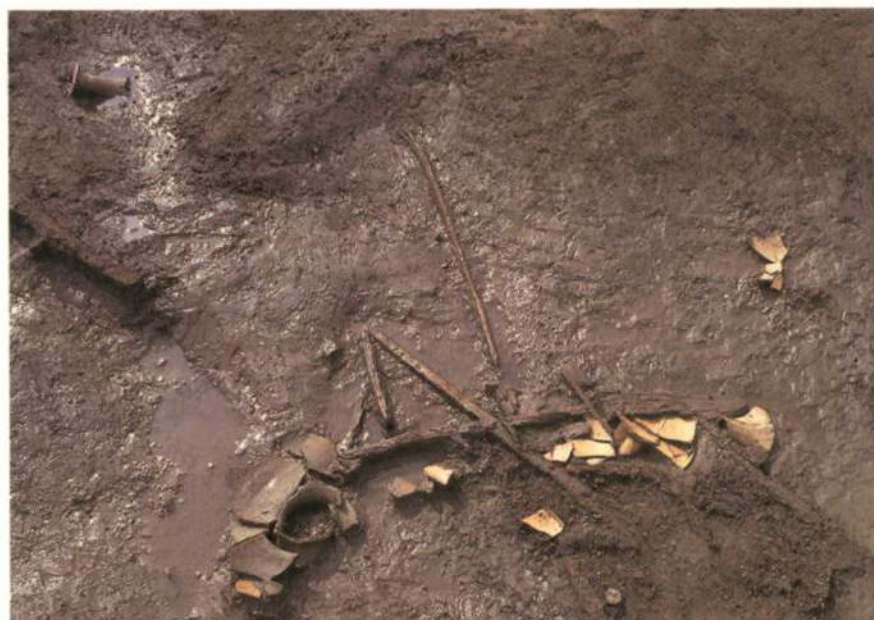


2



3

- 1 長通3区大溝4層玉・土器
- 2 長通4区大溝3下層土器群
- 3 長通4区大溝3下層土器群近景



- 1 長通4区大溝北側土層断面
- 2 長通4区大溝4層土器・石庖丁
- 3 長通5区大溝3下層土器・流木



1



2



3

- 1 長通5区大溝3下層土器・木器
- 2 長通5区大溝3層槽
- 3 長通5区大溝3下層木器



1



2



3

- 1 長通5区大溝3、4層土器・流木
- 2 長通5区大溝3下層土器・流木
- 3 長通5区大溝4層三又欵

1



2



3



4



- 1 長通大溝全景
- 2 長通5区北側大溝・環濠土層断面
- 3 長通5区南側大溝・環濠・井戸土層断面
- 4 長通5区南側大溝土層断面(東側)



1



2



3

- 1 畠田溝 1 ～ 4 土層断面
- 2 長通南半 (2 ～ 5 区) 全景
- 3 長通北半 (0 ～ 4 区) 全景



1



2



3

- 1 長通0～2区(南から)
- 2 長通3区溝1の鋤先痕
- 3 畠田環濠(溝5)土層断面



1



2



3

1 長通環濠(溝10)・長方形土壇

2 長通環濠(溝10)土層断面

3 長通環濠(溝10)下層土器



1 長通4号長方形土壇土層断面
2 長通5号長方形土壇
3 長通9号長方形土壇土層断面



- 1 長通2号貯蔵穴
- 2 長通3区不整形土壇
- 3 長通0～1区ピット群



1

長通5区大溝出土広片口三耳鉢1



2



5



9



14



15

長通地区出土朱付着土器(接合前)



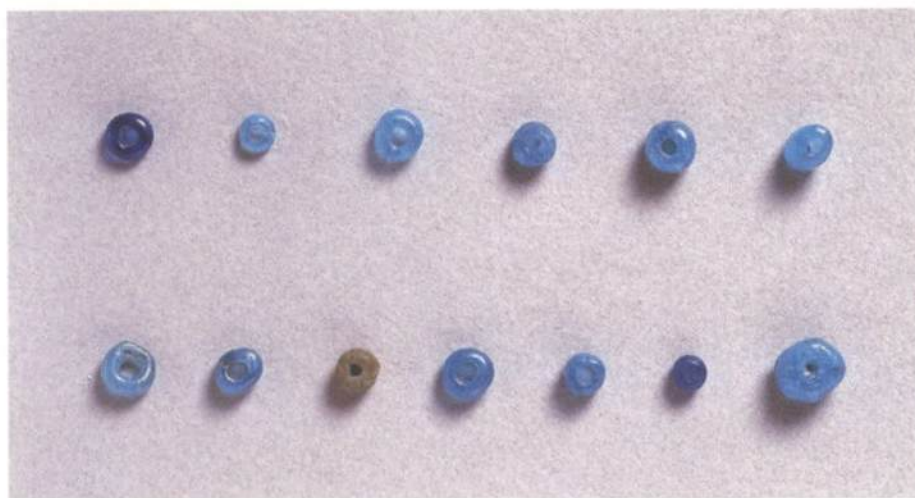
長通3区溝2出土船の絵土器(実大)



1



2



3

長通地区出土玉類(2倍大)

序

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和62（1987）年度から一般国道10号線椎田道路の建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。発掘調査は、平成2年度に終了し、椎田道路は平成4年12月25日に全線開通いたしました。

この報告書は、昭和62年度から昭和63年度に発掘調査を実施した行橋市大字辻垣所在の辻垣遺跡群についての2冊目のものであります。今回も弥生時代前期から古墳時代前期の遺構が中心ですが、出土した土器に瀬戸内海沿岸各地の土器が多く含まれており、それら各地との交流が盛んであったことがわかります。古くから大陸との交流拠点であった福岡県は、豊前地域においても瀬戸内海を通じて、国内各地との交流拠点であったことも証明されるかもしれません。

報告書として十分に条件を満たしているものではありませんが、地域間交流研究や文化財保護思想普及などに広く活用していただければ幸甚に存じます。

発掘調査および整理報告にあたって、御協力いただいた方々に深甚の謝意を表します。

平成6年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

例 言

- 1 この報告書は、昭和62・63年度(1987～1988)に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道10号線椎田道路建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査の記録である。
- 2 本書は、一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告の第2集で、辻垣遺跡群のうちのはたけだ 畠田とながどおり 長通地区を報告する。
- 3 遺構の実測は、柳田康雄・副島邦弘・小池史哲・緒方泉・日高正幸・穂積隆昌・五百路裕之・野田徹・田村悟・西田大輔・犬塚カヲル・田原フジ子・増田哲美・溝辺慶子・樋口恵子・荒巻朋子、出土品の実測を柳田・秦憲二・杉原敏之・平田晴美・若松三枝子・岡由美子・田中典子・橋口典子・棚町陽子・友永澄子・久富美智子、挿図の作製・製図を豊福弥生・原カヨ子、出土品の復原整理を岩瀬正信の指導の下に九州歴史資料館復原室で実施した。
- 4 遺構の写真撮影は、柳田・副島が、出土品の写真撮影を石丸洋・北岡伸一、空中写真を稲富が実施した。
- 5 本書の執筆は、石器を杉原敏之、朱の分析を本田光子・成瀬正和、他の全てと編集を柳田康雄が担当した。

本文目次

序

I はじめに	1
1 調査の経過	1
2 調査の組織と関係者	3
II 位置と環境	4
III 発掘調査の記録	7
1 発掘調査の概要	7
2 遺構と遺物	9
(1) 畠田地区	9
① 大溝	9
② 貯蔵穴	15
③ 環濠	16
④ 溝	18
⑤ 小溝	20
⑥ 柱穴	20
(2) 長通地区	22
① 大溝	22
② 環濠	65
③ 長方形土壇	67
④ 貯蔵穴	77
⑤ 溝	82
⑥ その他の遺構と遺物	102
(3) 石器	105
IV おわりに	119
1 弥生前期環濠集落	119
2 外来系土器	124
3 朱付着土器	126
付 辻垣長通遺跡出土の土器に付着している赤色顔料について	155

図 版 目 次

- | | | |
|---------|---|----------------------|
| 卷頭図版 1 | 1 | 1 畠田・長通全景 |
| | 2 | 2 長通・畠田全景 |
| | 3 | 3 畠田地区全景 |
| 卷頭図版 2 | 1 | 1 畠田大溝最下層 |
| | 2 | 2 畠田大溝中区3層土器 |
| | 3 | 3 畠田大溝中区3層三又鍬 |
| 卷頭図版 3 | 1 | 1 長通地区全景 |
| | 2 | 2 長通3区大溝3下層勾玉・土器 |
| | 3 | 3 長通3区大溝3下層勾玉 |
| 卷頭図版 4 | 1 | 1 長通3区大溝4層玉・土器 |
| | 2 | 2 長通4区大溝3下層土器群 |
| | 3 | 3 長通4区大溝3下層土器群近景 |
| 卷頭図版 5 | 1 | 1 長通4区大溝北側土層断面 |
| | 2 | 2 長通4区大溝4層土器・石庖丁 |
| | 3 | 3 長通5区大溝3下層土器・流木 |
| 卷頭図版 6 | 1 | 1 長通5区大溝3下層土器・木器 |
| | 2 | 2 長通5区大溝3下層槽 |
| | 3 | 3 長通5区大溝3下層木器 |
| 卷頭図版 7 | 1 | 1 長通5区大溝3～4層土器・流木 |
| | 2 | 2 長通5区大溝3下層土器・流木 |
| | 3 | 3 長通5区大溝4層三又鍬 |
| 卷頭図版 8 | 1 | 1 長通大溝全景 |
| | 2 | 2 長通5区北側大溝・環濠土層断面 |
| | 3 | 3 長通5区南側大溝・環濠・井戸土層断面 |
| | 4 | 4 長通5区南側大溝土層断面 |
| 卷頭図版 9 | 1 | 1 畠田溝1～4土層断面 |
| | 2 | 2 長通南半(2～5区)全景 |
| | 3 | 3 長通北半(0～4区)全景 |
| 卷頭図版 10 | 1 | 1 長通0～2区 |
| | 2 | 2 長通3区溝1の鋤先痕 |

		3	畠田環濠(溝5)土層断面
巻頭図版	11	1	長通環濠(溝10)・長方形土壇
		2	長通環濠(溝10)土層断面
		3	長通環濠(溝10)下層土器
巻頭図版	12	1	長通4号長方形土壇土層断面
		2	長通5号長方形土壇
		3	長通9号長方形土壇土層断面
巻頭図版	13	1	長通2号貯蔵穴
		2	長通3区不整形土壇
		3	長通0～1ピット群
巻頭図版	14		長通5区大溝出土広片口三耳鉢1
巻頭図版	15		長通地区出土朱付着土器・長通3区溝2出土船の絵土器
巻頭図版	16		長通地区出土玉類

図	版	1	1	椎田道路開通後の辻垣遺跡群周辺
			2	辻垣畠田・ヲサマル遺跡
図	版	2	1	畠田全景空中写真
			2	畠田・長通全景
図	版	3	1	畠田中区大溝3層土器群
			2	畠田中区大溝3層土器群
			3	畠田中区大溝3層三又鍬
図	版	4	1	畠田北区大溝4層土器
			2	畠田大溝最下層
			3	畠田中区大溝最下層
図	版	5	1	長通地区全景
			2	長通大溝全景
図	版	6	1	長通大溝全景
			2	長通3区大溝3下層
			3	長通3区大溝3下層土器群
図	版	7	1	長通3区大溝3下層土器
			2	長通3区大溝3下層勾玉
			3	長通3区大溝4層ガラス玉と土器群
図	版	8	1	長通4区大溝2層大壺

- 2 長通4区大溝3下層土器群
 - 3 長通4区大溝3下層土器群近景
- 図 版 9
 - 1 長通4区大溝3層土器
 - 2 長通4区大溝3層土器
 - 3 長通4区大溝3下層土器
- 図 版 10
 - 1 長通4区大溝断面
 - 2 長通4区大溝3層土器
 - 3 長通4区大溝4層土器・石庖丁
- 図 版 11
 - 1 長通5区大溝3・4層土器・木器・流木
 - 2 長通5区大溝4層三又鍬
 - 3 長通5区大溝3層土器
- 図 版 12
 - 1 長通5区大溝3下層断面と土器
 - 2 長通5区大溝3下層土器・木器
 - 3 長通5区大溝3下層槽
- 図 版 13
 - 1 長通5区大溝東南4層土器
 - 2 長通5区大溝東南4層土器
 - 3 長通5区大溝東南4層土器
- 図 版 14
 - 1 長通5区大溝土層断面
 - 2 長通5区大溝土層断面
 - 3 長通5区大溝と環濠の土層断面
- 図 版 15
 - 1 島田地区溝1～3
 - 2 島田地区溝1～4
 - 3 島田地区溝1～3土層断面
- 図 版 16
 - 1 長通地区全景
 - 2 島田地区溝1～5全景
 - 3 島田環濠(溝5)全景
- 図 版 17
 - 1 長通環濠(溝10)上層と長方形土壇
 - 2 長通環濠(溝10)と長方形土壇
 - 3 長通溝9
- 図 版 18
 - 1 長通環濠(溝10)下層土器
 - 2 長通環濠(溝10)と土層断面
- 図 版 19
 - 1 長通環濠(溝10)と長方形土壇
 - 2 長通環濠(溝10)と長方形土壇

- | | | |
|---|------|-------------------|
| 図 | 版 20 | 1 長通 1 号長方形土壙 |
| | | 2 長通 2 号長方形土壙 |
| | | 3 長通 3 号長方形土壙 |
| 図 | 版 21 | 1 長通 4 号長方形土壙土層断面 |
| | | 2 長通 4 号長方形土壙炭化材 |
| | | 3 長通 4 号長方形土壙 |
| 図 | 版 22 | 1 長通 5 号長方形土壙土層断面 |
| | | 2 長通 5 号長方形土壙 |
| | | 3 長通 6 号長方形土壙 |
| 図 | 版 23 | 1 長通 7 号長方形土壙 |
| | | 2 長通 8 号長方形土壙 |
| | | 3 長通 9 号長方形土壙 |
| 図 | 版 24 | 1 長通 10 号長方形土壙 |
| | | 2 長通 11 号長方形土壙 |
| | | 3 長通 12 号長方形土壙 |
| 図 | 版 25 | 1 長通 1 号貯蔵穴 |
| | | 2 長通 2 号貯蔵穴 |
| | | 3 長通 3 号貯蔵穴 |
| 図 | 版 26 | 1 長通 3 号貯蔵穴 |
| | | 2 畠田 1 号貯蔵穴 |
| | | 3 長通 0 区柱穴群 |
| 図 | 版 27 | 畠田大溝出土土器 |
| 図 | 版 28 | 畠田大溝出土土器 |
| 図 | 版 29 | 長通 3 区大溝出土土器 |
| 図 | 版 30 | 長通 3・4 区大溝出土土器 |
| 図 | 版 31 | 長通 4 区大溝出土土器 |
| 図 | 版 32 | 長通 4 区大溝出土土器 |
| 図 | 版 33 | 長通 4 区大溝出土土器 |
| 図 | 版 34 | 長通 4 区大溝出土土器 |
| 図 | 版 35 | 長通 4・5 区大溝出土土器 |
| 図 | 版 36 | 長通 5 区大溝出土土器 |
| 図 | 版 37 | 長通 5 区大溝出土土器 |
| 図 | 版 38 | 長通 5 区大溝出土土器 |

図	版 39	長通 5 区大溝出土土器
図	版 40	長通 5 区大溝出土土器
図	版 41	長通 5 区大溝出土広片口三耳鉢 1
図	版 42	長通地区出土広片口三耳鉢
図	版 43	長通地区出土広片口三耳鉢・朱付着土器
図	版 44	長通地区出土朱付着土器 畠田・長通出土大型土器
図	版 45	長通 0 区溝 1 出土土器
図	版 46	長通 0・1 区溝 1 出土土器
図	版 47	長通 1・2 区溝 1 出土土器
図	版 48	長通 2 区溝 1、畠田溝 2、長通 2～4 区溝 2 出土土器
図	版 49	畠田・長通溝 5・6・10、貯蔵穴、不整形土壇出土土器
図	版 50	畠田・長通出土手捏土製品
図	版 51	辻垣出土紡錘車・土製品
図	版 52	長通 3 区大溝 3～4 層出土玉類 長通 3 区溝 2 下層出土船の絵
図	版 53	長通 3 区溝 1 の鋤先痕石膏型、鉄鏃、縄文土器片
図	版 54	畠田・長通出土石器 1
図	版 55	畠田・長通出土石器 2
図	版 56	畠田・長通出土石器 3
図	版 57	畠田・長通出土石器 4

挿 図 目 次

第1図	畠田・長通遺跡の位置と周辺主要遺跡	5
第2図	遺跡の周辺地形図	6'
第3図	畠田地区遺構配置図	8
第4図	畠田・長通大溝土層実測図	8'
第5図	畠田北・中区大溝出土土器実測図(大溝1)	10
第6図	畠田中区大溝出土土器実測図(大溝2)	11
第7図	畠田中区大溝7層出土土器実測図(大溝3)	12
第8図	畠田中・南区大溝出土土器実測図(大溝4)	13
第9図	畠田貯蔵穴実測図	16
第10図	畠田環濠(溝5)土層実測図	16
第11図	畠田溝3・溝5出土土器実測図	17
第12図	畠田溝土層実測図	18
第13図	畠田掘立柱建物実測図	20
第14図	畠田・長通0区溝1出土土器実測図(溝1)	21
第15図	長通地区大溝実測図	23
第16図	長通0・3区大溝出土土器実測図(大溝5)	25
第17図	長通3区大溝3層出土土器実測図(大溝6)	26
第18図	長通4区大溝2～3層出土土器実測図(大溝7)	28
第19図	長通4区大溝3下層出土土器実測図(大溝8)	30
第20図	長通4区大溝3下層出土土器実測図(大溝9)	31
第21図	長通4区大溝3下層出土土器実測図(大溝10)	32
第22図	長通4区大溝3下層出土土器実測図(大溝11)	33
第23図	長通4区大溝3層出土土器実測図(大溝12)	34
第24図	長通4区大溝4・5層出土土器実測図(大溝13)	35
第25図	長通4区大溝6～最下層出土土器実測図(大溝14)	36
第26図	長通5区大溝2層出土土器実測図(大溝15)	37
第27図	長通5区大溝2・3層出土土器実測図(大溝16)	38
第28図	長通5区大溝3層出土土器実測図(大溝17)	40
第29図	長通5区大溝3層出土土器実測図(大溝18)	41
第30図	長通5区大溝3層出土土器実測図(大溝19)	42

第31図	長通5区大溝3・4層出土土器実測図(大溝20)	44
第32図	長通5区大溝4～6層出土土器実測図(大溝21)	46
第33図	長通5区大溝7層出土土器実測図(大溝22)	47
第34図	長通5区大溝7層出土土器実測図(大溝23)	48
第35図	畠田大溝出土大型土器実測図(大溝24)	49
第36図	長通大溝出土大型土器実測図(大溝25)	50
第37図	広片口三耳鉢各部名称	51
第38図	朱付着広片口三耳鉢実測図(大溝26)	52
第39図	朱付着広片口三耳鉢実測図(大溝27)	53
第40図	朱付着広片口三耳鉢実測図(大溝28)	54
第41図	朱付着土器実測図(大溝29)	58
第42図	朱付着土器実測図(大溝30)	60
第43図	長通3区大溝出土玉類実測図(大溝31)	62
第44図	長通第2次調査地区遺構配置図	66
第45図	長通長方形土壙実測図①	68
第46図	長通長方形土壙実測図②	70
第47図	長通5号長方形土壙実測図③	71
第48図	長通長方形土壙実測図④	72
第49図	長通長方形土壙実測図⑤	73
第50図	長通第2次調査地区土層実測図	75
第51図	長通環濠(溝10)・長方形土壙出土土器実測図	76
第52図	長通貯蔵穴実測図	78
第53図	長通出土土器実測図	79
第54図	長通地区北端壁土層実測図	81
第55図	長通溝1鋤先痕実測図	83
第56図	長通0区溝1東下層出土土器実測図(溝2)	85
第57図	長通1区溝1出土土器実測図(溝3)	86
第58図	長通2区溝1出土土器実測図(溝4)	88
第59図	長通2区溝1出土土器実測図(溝5)	90
第60図	長通溝1東出土鉄鏃実測図(溝6)	92
第61図	畠田・長通1～3区溝2出土土器実測図(溝7)	93
第62図	長通3区溝2出土土器実測図(溝8)	94
第63図	長通4区他溝2出土土器実測図(溝9)	96

第64図	船の絵の線刻土器片実測図（溝10）	97
第65図	畠田・長通出土手捏土製品実測図（溝11）	98
第66図	畠田・長通出土紡錘車・土製品実測図	99
第67図	長通溝6出土土器実測図	100
第68図	長通不整形土壙実測図	102
第69図	長通不整形土壙出土土器実測図	103
第70図	畠田・長通出土縄文土器実測図	104
第71図	畠田・長通出土磨製石鏃・石剣等実測図	105
第72図	畠田・長通大溝・溝出土石器実測図	106
第73図	畠田・長通出土石庖丁実測図	107
第74図	畠田・長通出土石鏃実測図	108
第75図	畠田・長通出土打製石斧等実測図	110
第76図	畠田・長通出土石器実測図	111
附 図	辻垣遺跡畠田・長通地区遺構配置図	

表 目 次

表1	一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財一覧表	
表2	長通出土ガラス小玉一覧表	63
表3	畠田・長通出土石器観察表	114
表4	畠田・長通大溝出土土器観察表	131
表5	畠田・長通大溝出土土器観察表（大型土器）	143
表6	長通出土朱付着土器観察表	143
表7	長通溝10出土土器観察表	144
表8	畠田・長通溝1・2出土土器観察表	145
表9	畠田・長通溝3・5出土土器観察表	151
表10	長通溝6出土土器観察表	152
表11	長通出土土器観察表	152
表12	長通不整形土壙出土土器観察表	153
表13	赤色物の分析結果と推定される赤色顔料の種類	156

表 1 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財一覧表

平成6年3月

箇所名	地点	遺跡名	遺跡の概要	(当初面積) 調査面積・㎡	調査完了 年月
一般国道10号 椎田道路 (5工区)	1	辻垣	環濠集落 旧河道	(33,400) 34,500	S62. S63
	2	徳永A 居屋敷	窯跡 横穴墓	(980) 1,050	H1. 3
	3	徳永B 鋤先	古墳 土近世墓	5,700	H2. 10
	4	徳永C 川の上	墳丘墓群 弥生・古墳	(11,250) 12,500	うち7,500㎡ H1. 4済 H2. 10完
椎田道路(5工区)合計				(51,330) 53,750	100%完
一般国道10号 椎田道路 (10工区)	5	山添	推定地	1,000	H1. 11
	6	石丸A	推定地	(3,000) 0	
		石丸B	縄文集落	3,500	S63. 12
	7	中村A	散布地	7,700	うち6,000㎡ S63. 12済 H1. 6完
	8-A	中村B	推定地	(3,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	8-B	中村B	推定地	(6,800) 150	完了
	9-A	黒峰尾	古墳群	(14,780) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	9-B	黒峰尾	古墳群	(5,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	10	選仏寺	推定地	(1,050) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	11	東舟入	推定地	(600) 0	試掘結果 遺跡ナシ
12	広山	推定地	(9,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ	
椎田道路(10工区)合計				(55,430) 12,350	100%完

I はじめに

1 調査の経過

一般国道10号線のバイパスとなる椎田道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査に至る経過については、『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集「辻垣ヲサマル遺跡」(1993年)を参照されたい。

椎田道路建設のうち、建設省北九州国道事務所が所管する工区の埋蔵文化財調査地点の第1地点に辻垣遺跡群がリストアップされたのが昭和61年3月の分布調査であった。昭和61年度は、用地買収が終了した地点から試掘調査を実施し、第1地点の辻垣遺跡も10月に実施した結果、JR日豊本線の南側のヲサマル地区と北側の畠田・長通地区が本調査対象となった。とくに長通地区においては、大量の土器群とともに、九州外から搬入された朱が付着した土器片が存在することも判明し、遺跡の重要性とその性格の解明が期待されることになった。

辻垣遺跡群の発掘調査は、昭和62年5月から昭和63年7月までの間で、建設工事の工期や用地買収に合わせて適宜実施した。

辻垣遺跡群のうち、今回報告する畠田と長通地区の発掘調査は、昭和62年5月6日から9月7日までと、用地未買収で残っていた長通の西南地区を第2次発掘調査として、昭和63年5月30日から7月3日まで実施した。以下その工程の抄録を掲載しておく。

5月6日(木) 現地で表土剥ぎ用のユンボの搬入方法等の打合せと、現場事務所及び駐車場用地借上げの交渉続行。

5月8日(金) 道路沿など発掘区域に杭を打ち、トラロープを張って立入り禁止の標示杭も打つ。ユンボによって表土剥ぎを始めると同時に、発掘調査事務所とするユニットハウスやテントを設置する。

5月11日(月) 作業員によって本格的な発掘調査を始めるので、作業員全員に作業内容、作業上の諸注意、安全作業について話す。調査においては、さっそく、古墳前期の溝が3本以上検出される。

5月15日(金) 溝をMと記号化して、M1～3の畠田地区の全景写真撮影を行い、実測も始める。東側の大溝は、北・中・南に東西のトレンチを設定して層位順に掘り下げ始める。

5月27日(木) M1～4の下層溝の発掘と実測完了。

5月28日(木) 大溝中区3層の下層で三又鍬が出土し写真撮影したが、保存状態が悪く、取上げに失敗した。畠田地区南部でM3・M4の下層に重複していた溝をM5として掘り始めた。弥生前期の土器が含まれている。

5月29日(金) M5の土層断面図作成。大溝中区4層の混土砂層には自然流木が多いが、木器らしきものがない。大溝底面の砂利層と部分的な粘土層に大木の根が流木として出土した。長通地区の表土剥ぎを始める。

6月4日(木) 畠田地区大溝の発掘と写真撮影まで完了する。

6月11日(木) 畠田地区の空中写真を撮影。長通地区は、北半部の表土剥ぎとM1～3及び大溝の発掘を続行する。

6月12日(金) 5月の安全月間には遅れたが、竹井教育長を中心とする安全パトロールが京築地方中心に実施され、現地に15時半すぎに到着した。

6月13日(土) 畠田地区の大溝を中心に、北九州大学の畑中健一教授による花粉分析のサンプリングを実施する。

6月17日(木) 畠田地区大溝の土層断面図作成を続行すると同時に、大溝の南側から埋め戻しも始める。長通地区は、5区の3層を調査続行。

6月23日(火) 作業中止期間が4日間であったところから、調査区全体の水抜き作業を1日中続行し、午前中で水抜きが終ったM1～3の調査を始めたところ、M1底面の粘土地山に砂で埋まった鋤先跡を多数検出した。M1は3本の支流に分かれる。

6月末から7月は、雨天の合間を縫って大溝とM1～7の発掘を続行。――

8月19日(木) 8月に入ってから長通地区の空中写真の準備を3回繰返してきたが、雨のため順延していた。やっと4回目で写真撮影に成功し、1～3区の水糸割付と実測を始め、5区のM1～2の下層部も掘り始める。KBCテレビ取材に来る。

8月21日(金) 0区～3区の実測がほぼ完了。3区不整形土壌の土器取上げ。3～4区のM2西の下層を掘り、4区で多量の土師器が出土する。

8月28日(金) M1～2下層の清掃作業後に、写真撮影を実施する。全体の実測を始める。

9月1日(火) 20分の1の平面実測とエレベーションが完了し、残っていた機材の整理と埋戻しを残すのみとなった。

長通地区の用地未買収で残っていた地区は、第2次発掘調査として、昭和63年5月30日から7月3日まで実施した。

5月30日(月) 現場は木材のチップ集積場であったところで、コンクリートの残骸除去をユンボによって始める。

6月6日(月) 表土剥ぎを続行。検出されていた弧状溝(M10)の東側に並行している長方形土壌群を検出した。土壌は浅いものがあるようだ。

6月14日(火) M10は断面V字溝で、弥生前期土器が出土する。4号長方形土壌には炭化材が多いが土器片は少ない。M10の土層断面図作成。

6月20日(月) 空中写真のための清掃を行い、午前中で写真撮影も完了する。午後から実測の

ための水系割付と実測を実施する。

6月24日(金) 午前中雨天。午後から作業開始。排水後、一部の実測と北側包含層の調査を続行したところ、東西方向の小溝(M9)を検出した。安全パトロールで、大平部長と葉石課長以下が15時40分頃来る。

6月30日(木) 排水後に実測を続行し、完了する。ユンボによって埋戻しも始める。

発掘調査終了後には、国道10号線から南側を椎田道路、北側を行橋バイパスとして道路建設工事が着工され、平成4年12月25日に開通し、完全供用されている。現在は、図版1-1のように国道10号線と日豊本線が立体交差しており、遺跡はその周辺に残っているだけである。今後は、行橋市教育委員会によって周辺の遺跡保存と調査が行われることとなる。

平成4年度に出土品の整理・復原作業を実施、平成5年度に報告書作成をすることとなった。

2 調査の組織と関係者

昭和62年度と63年度の辻垣畠田・長通遺跡の発掘調査と平成5年度の報告書作成するにあたっての組織と関係者は、下記の通りである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

	昭和62年度	昭和63年度	平成5年度
所 長	北之園 宏	高橋松男	岩田秀人
副所長(技術)	中溝文之	竹中幸生	中山高虎
建設専門官	古賀秀登	古賀秀登	安部純弘
工務課長	浜田 誠	衛藤恒利	中川博勝
工務係長	諏訪憲二	諏訪憲二	徳重栄紀
調査課長	久良木 裕	久良木 裕	山田茂利
調査係長	犬東昌生	田中敏則	柴田 智
建設技官	池田稔浩	池田稔浩	田邊 稔
建設監督官	桃坂 繁	桃坂 繁	

福岡県教育委員会

	昭和62年度	昭和63年度	平成5年度
総 括			
教育 長	竹井 宏	竹井 宏	光安常喜
教育次長	大鶴英雄	大鶴英雄	樋口修資
指導第2部長	大平岩男	大平岩男	丸林茂夫
文化課長	窪田康徳	葉石 勲	森山良一

参事兼文化財保護室長

柳田 康雄

課長補佐 平 聖峯

平 聖峯

清水 圭輔

技術補佐 宮小路 賀宏

宮小路 賀宏

参事補佐 柳田 康雄

柳田 康雄

井上裕弘・橋口達也

高橋 章

庶務

管理係長 加藤 俊一

池原 脩二

毛屋 信

事務主査 竹内 洋征

和田 健作

安丸 重喜

調査(昭和62・63年度)

参事補佐兼調査班総括

柳田 康雄

技術主査

副島 邦弘

主任技師

小池 史哲

技師

緒方 泉

文化財専門員

日高 正幸

なお、調査補助員として穂積隆昌・五百路裕之・野田徹・田村悟・西田大輔が調査に参加し、発掘調査の準備段階に作業員の手配等において辻垣地区の区長廣門常生氏の協力を受けた。

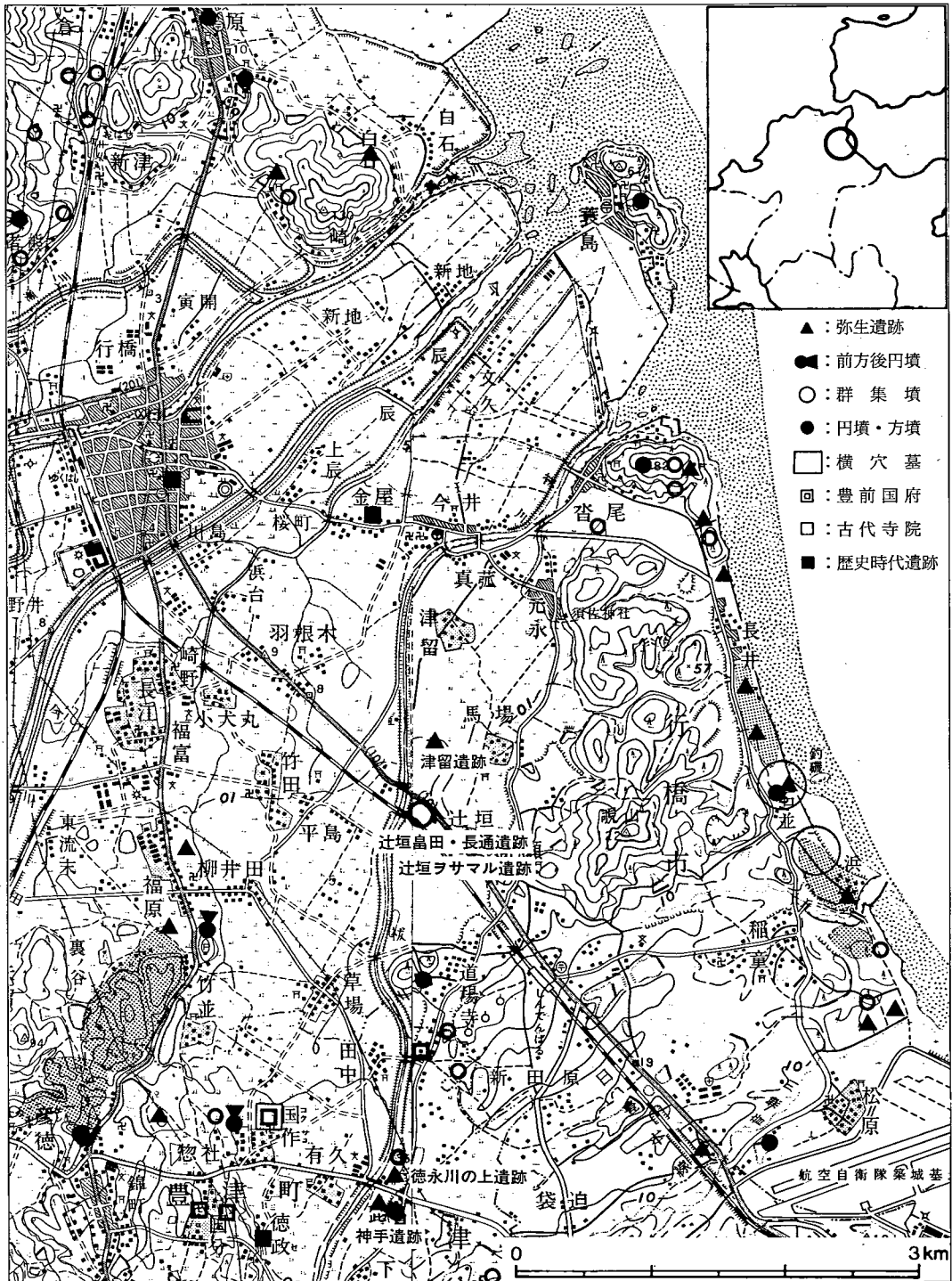
報告書作成については、図面の整理等で、関久江・土山真弓美・小国みどり・古賀八重子・近藤京子・坂本恵津子・高島妙子・寺町恭代・安永啓子・山崎緑が参加した。

II 位置と環境

辻垣遺跡群は、福岡県行橋市大字辻垣に所在し、小字の畠田・長通・ヲサマルの3地区を発掘調査した。辻垣遺跡群は、長峽川・今川・祓川の3本の河川によって形成された京都平野の東側に位置し、祓川右岸の標高10.5mから12.7mの微高地(自然堤防)上に立地している。

京都平野の中央には、現在行橋市街地があり、その東南側の豊津町大字国作を中心に豊前国府跡が確認されていることから、豊前地区の中心であったことがわかる。辻垣遺跡群は、弥生前期から古墳前期の集落関連の遺跡であることから、歴史的環境も時期をその時代に限定して紹介する。

京都平野の弥生前期遺跡は、北側の苅田町葛川遺跡(註1)、西側の行橋市下稗田遺跡(註2)、前田山遺跡(註3)、南側の豊津町神手遺跡(註4)、徳永川の上遺跡(註5)、東側の行橋市長井遺跡(註6)がよく知られている。このうち、長井遺跡のみ前期前半の時期に含まれる土器があるが、他の遺跡は中頃を含むものの、大半が前期後半を主体とする遺跡である。



第1図 辻垣畠田・長通遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50,000)

弥生後期は、平野西側の前田山遺跡、下稗田遺跡、南側の豊津町徳永川の上遺跡などで知られるように、後期末を中心とする墓地が確認されているだけである。なお、京都平野周辺では、弥生の小形仿製鏡と漢式鏡片が主に発見されているが、弥生時代と確実に認定できるのは小形仿製鏡と前田山6号石棺墓出土「長宜子君」銘鏡及び徳永川の上遺跡出土鏡6面のみであろう。このように京都平野の後期集落の発見はこれからで、辻垣遺跡の北側に隣接する津留遺跡(註7)は、弥生終末から古墳前期を中心とする遺跡で、辻垣遺跡と密接に関連する同一遺跡といえるかもしれない。

古墳前期は、京都平野北東端の海岸に向けて造営された九州一の規模を誇る苅田町の石塚山古墳で代表される。時期的には、福岡・糸島地区の多数の前期古墳と比較すると、九州最古の前期古墳とすることに問題がある(註8)。この地区の鏡の分布から見ると、弥生終末から古墳前期に小型鏡と鏡片が急激に集中するのも確実で、集落の急成長も予想できる。このような中で石塚山古墳以後の5世紀の御所山古墳、行橋市石並古墳、終末の巨石墳である勝山町橋塚・綾塚古墳や行橋市天生田出土の金銅沓などから後に豊前国府が造営されるゆえんが説明できるのではなかろうか。

註1 「葛川遺跡」『苅田町文化財調査報告書』3 1984

註2 福岡県行橋市教育委員会「下稗田遺跡」『行橋市文化財調査報告書』17 1980

註3 「前田山遺跡」『行橋市文化財調査報告書』19 1987

註4 福岡県教育委員会「神手遺跡」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』6 1992

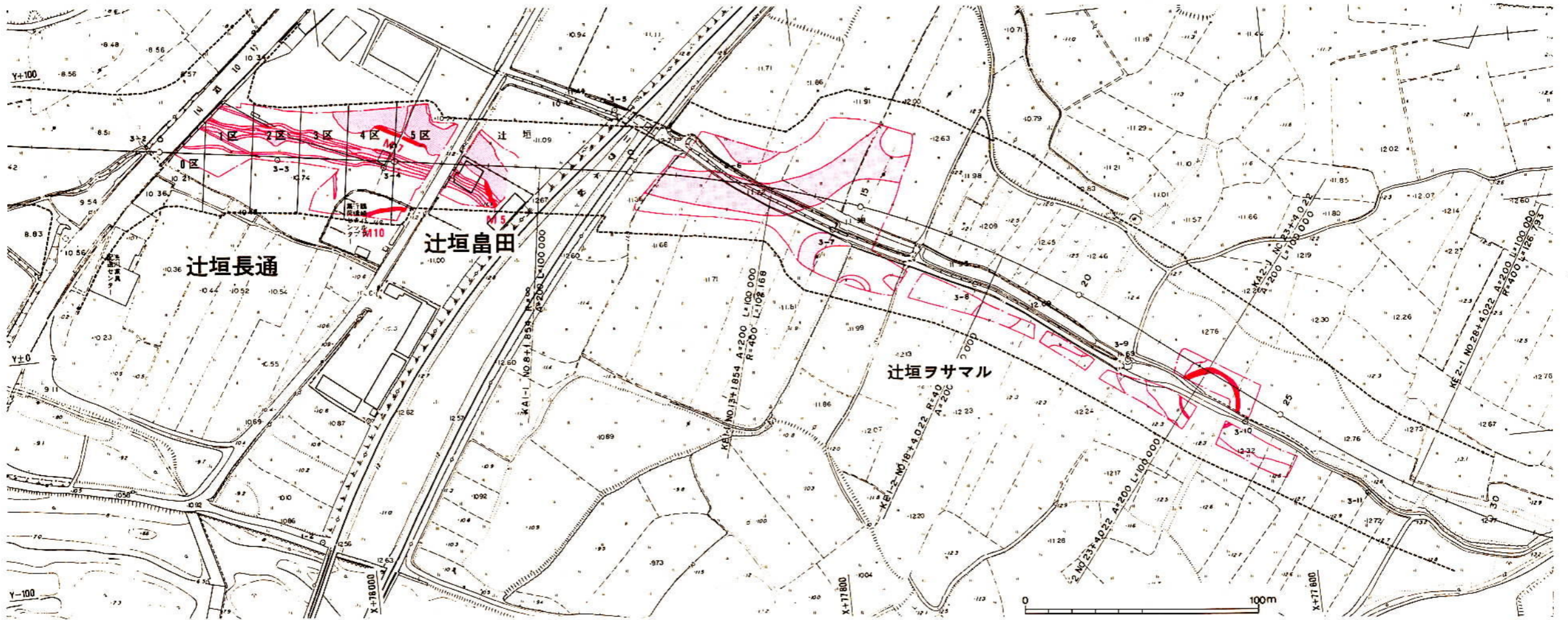
註5 神手遺跡と道路を隔てて存在する同一遺跡で、調査年次と施工主の違いで遺跡名が別になっているが、徳永川の上遺跡の方が面積も広く主体的な遺跡である。報告書は、1996年に刊行予定。

註6 定村貢二・小田富士雄「福岡県長井遺跡の弥生土器」『九州考古学』25・26 1965

註7 福岡県教育委員会「津留遺跡」『一般国道10号線行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1 1991

註8 柳田康雄「古墳の出現」『福岡県の歴史』光文館 1990

柳田康雄「北部九州の古墳時代」『日本の古代』5 中央公論社 1986



第2図 遺跡の周辺地形図 (1/2,000)

III 発掘調査の記録

1 発掘調査の概要

ここに報告する辻垣遺跡群のうち畠田地区と長通地区は、並行して走る国道10号線とJR日豊本線に挟まれた地区で、現況が水田となっていた。遺跡は、西側を南北に貫流する祓川の河口から直線距離で約3.5kmの自然堤防上にあり、現在標高10.7～11.1mの位置にある。

発掘調査にあたっては、字名を地区名としてJR日豊本線側を畠田地区、国道10号線側を長通地区に大別し、畠田地区が大溝のみ層位確認トレンチの北・中・南のトレンチ名を利用して北区・中区・南区に区分した。長通地区は、南北に115mあることから、南側を基点にして20m間隔に6分して、北から0～5区とした(0区のみ約15m)。

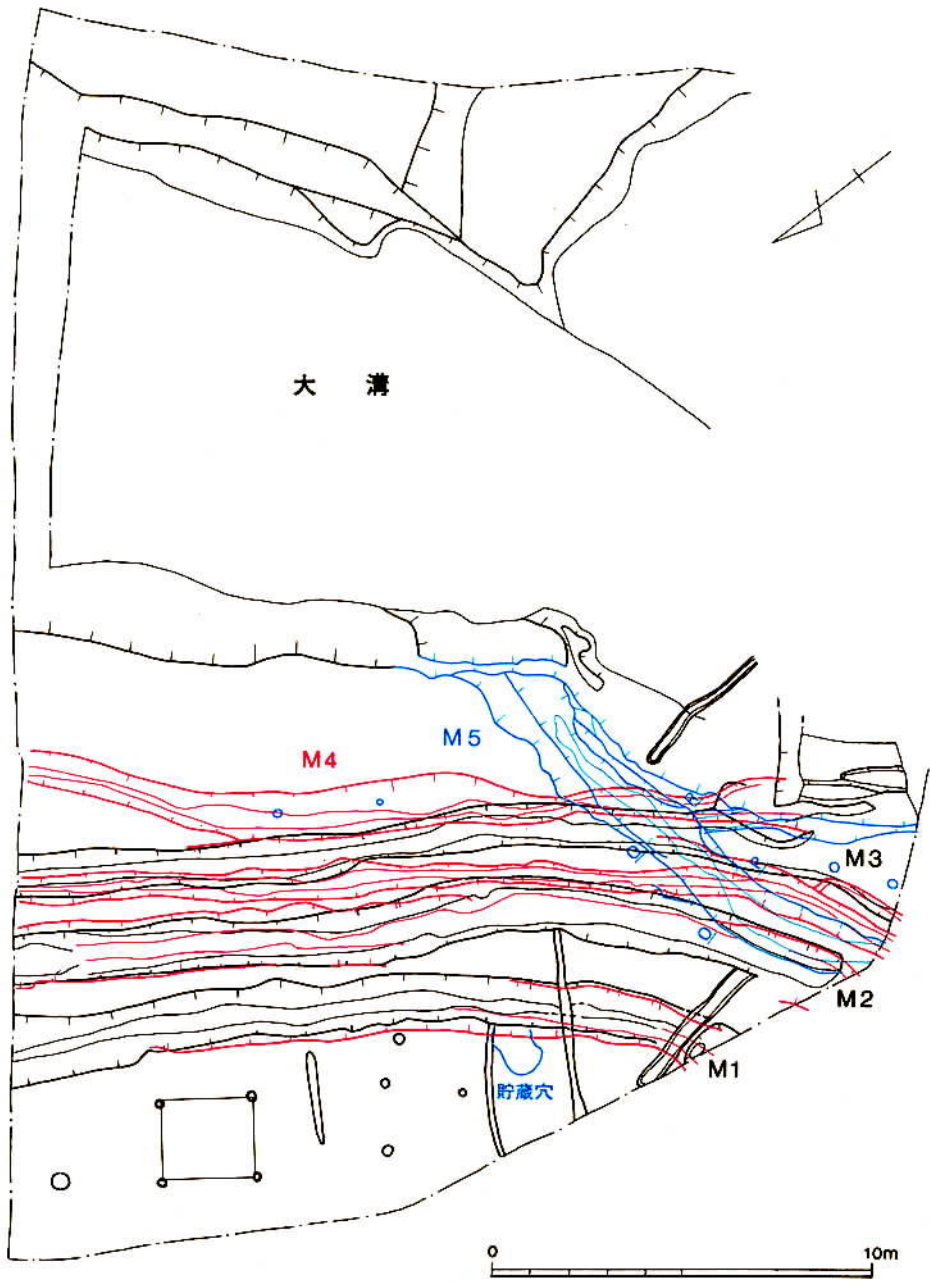
畠田地区から検出された遺構

大溝(旧河道)	1	弥生前期～古墳前期
環濠(M5)	1	弥生前期
貯蔵穴	1	弥生前期
溝(M1～4)	4	古墳前期
小溝	2	時期不明
柱穴	若干	時期不明

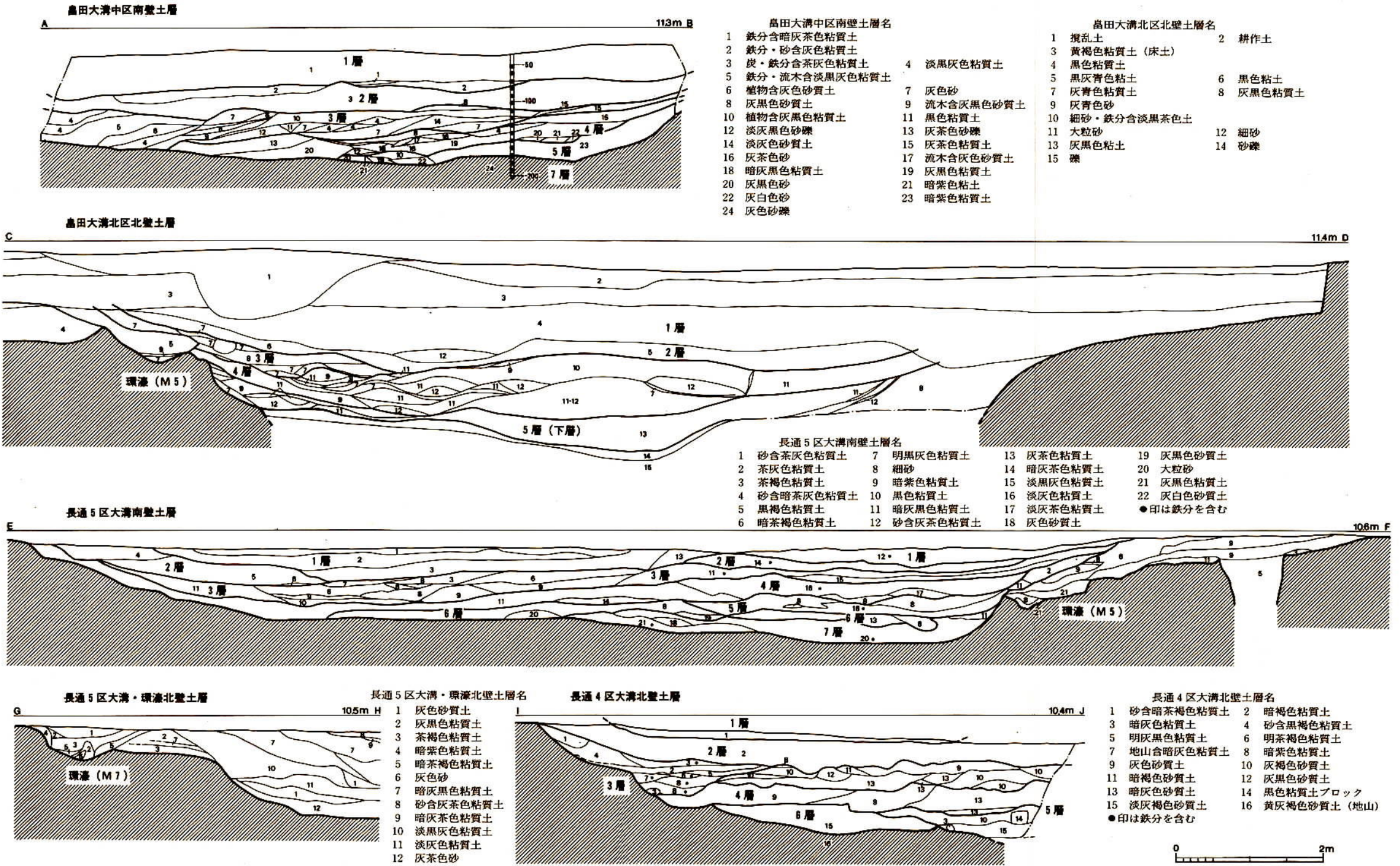
長通地区から検出された遺構

大溝(旧河道)	(1)	畠田地区からの続き
環濠(M7・M10)	2	弥生前期
長方形土壇	12	弥生前期
貯蔵穴	4	弥生前期
溝(M1～3)	(3)	畠田地区からの続き
小溝(M6・8・9)	3	弥生後期～古墳前期
不整形土壇	2	古墳前期
柱穴群	多数	古墳前期前後

畠田・長通の両地区共に、貯蔵穴や環濠の残存具合からこの地区が水田化された時点で、50cm前後削剝されたと考えられることから、とくに大溝など溝遺構は、本来さらに幅広いものであったろう。



第3図 畠田地区遺構配置図 (1/200)



第4図 畠田・長通大溝土層実測図 (1/60)

2 遺構と遺物

(1) 畠田地区(巻頭図版1、図版1～4、付図・第3図)

① 大溝(巻頭図版2、図版2～4、付図・第3・4図)

畠田調査区の東側半分を占める大溝で、北東側半分が幅13～15m、深さ約1.6～2.1mと一定しているが、南西側の半分は急に幅が20m以上に拡大し、底面も一定しない。溝の岸面は、北東半で西側が緩傾斜に対し、東側が急傾斜となっている。さらに、南西側半分は、両岸共に急傾斜で、激流によって粘土地山が抉られており、発掘すると崩壊しやすくなっている。大溝の北東側岸のみ、基盤が硬く締った礫層であるところからこの部分のみ崩壊を免れているのであろう。

大溝の埋没土層は、最上層の第1層に鉄分を含んだ黒色系粘質土があり、遺物を含まない。第2層もほとんど遺物を含まず、一部に砂質を含むが、大半は灰黒色や黒色粘土層である。

第3層から急に土器が多く含まれるようになり、完形品やそれに近いものが北区と中区で一括して出土する(巻頭図版2-2、図版3)。埋没土は、灰青色系の粘土と砂が交互に堆積し、三又鍬(巻頭図版7-3、図版3-3)や少量の小型流木が含まれている。一括の土器群は、緩傾斜の西側から流入したもので、北区と中区の第3層が西側からの流入土に限定できる。

第4層の混土砂層には自然流木が多いが、木器らしきものはない。北区の一部で第3層の完形土器が第4層に食込んでいるものがあるが(図版4-1)、砂層の具合から、この層以下の時期は、大溝が水路として活動していたことを物語っている。第3層の多数の一括土器群は、大溝が第4層まで埋没し、大溝としての機能を失った後に流入または投入されたものである。

第5層は、浅い西側が砂層で埋まり、深い東側が灰黒色粘土で埋まっている。粘土層には、若干の土器片と種子を含む。

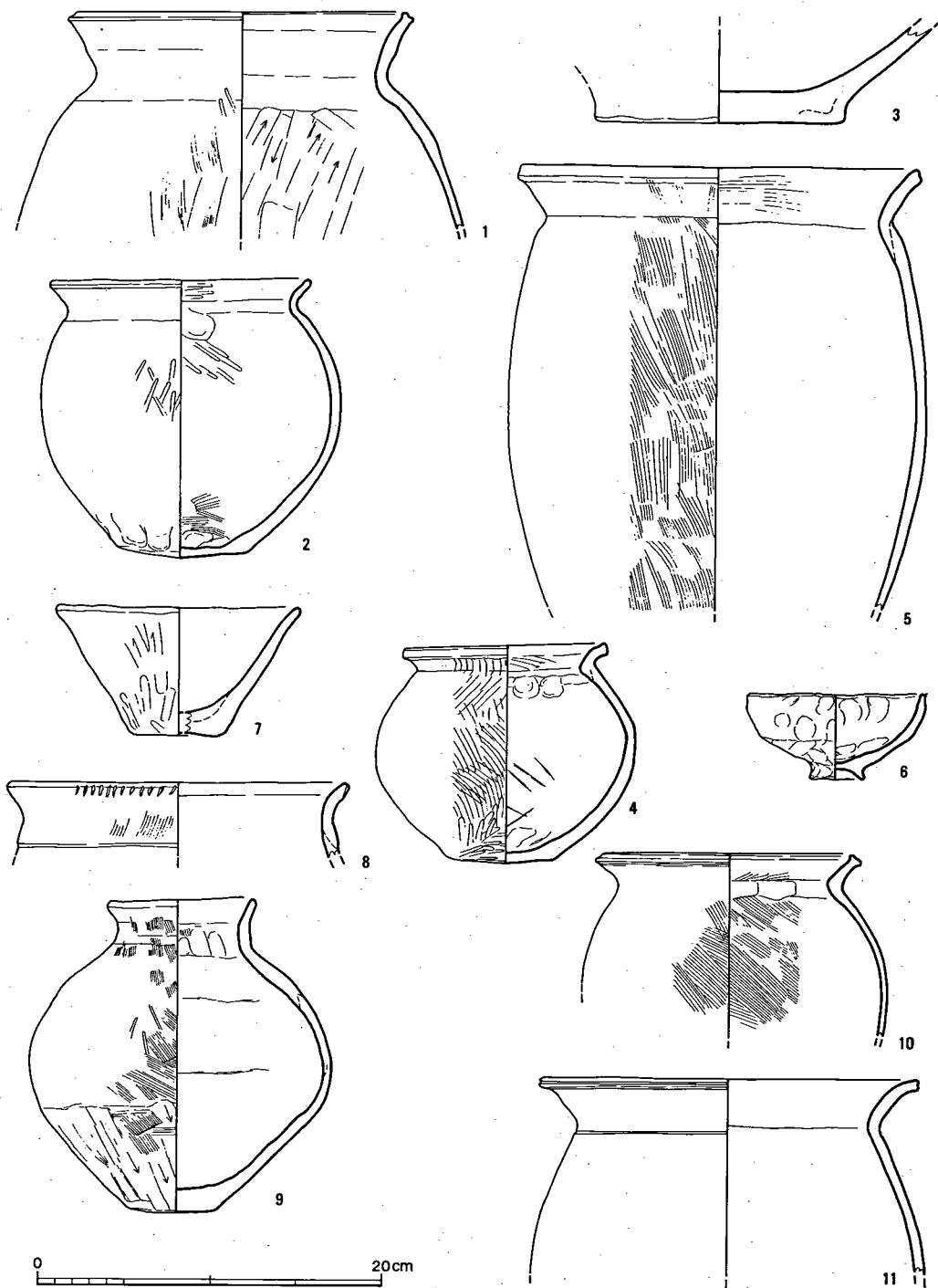
第6・7層は最下層の底面で、砂利層となり弥生前期土器片と若干の縄文系遺物を含んでいる。大溝底面には、部分的に粘土層もあり、中区で大木の根も発見され、若干の流木も含まれている(図版4-2・3)。

中区7層で、台脚状の手捏土器片(第65図9)も出土している。

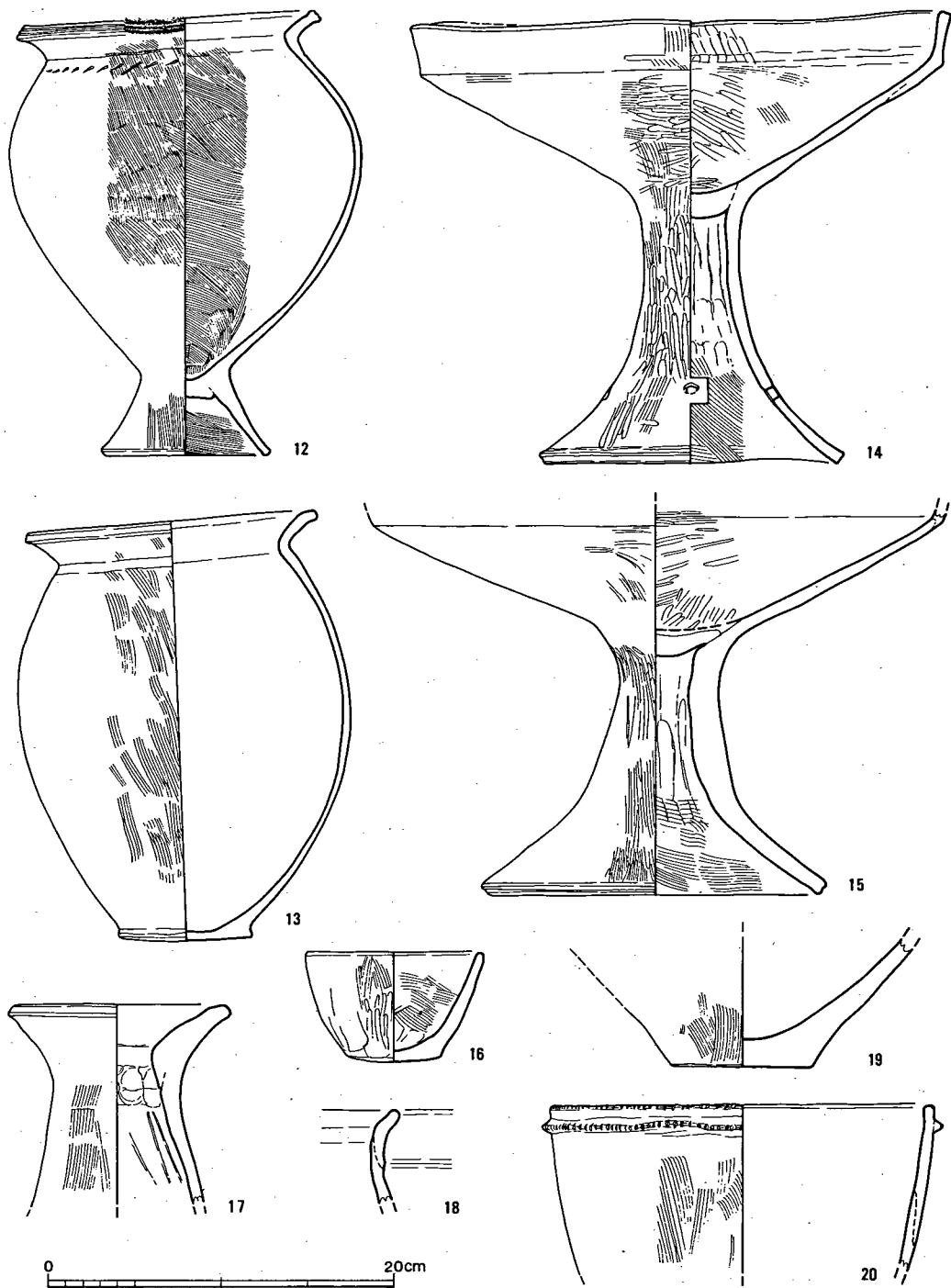
大溝の底面は、西岸側に灰青色粘土が基盤になるものの、北東岸ほど礫層となっている。

畠田大溝出土土器(図版27・28、第5～8図)

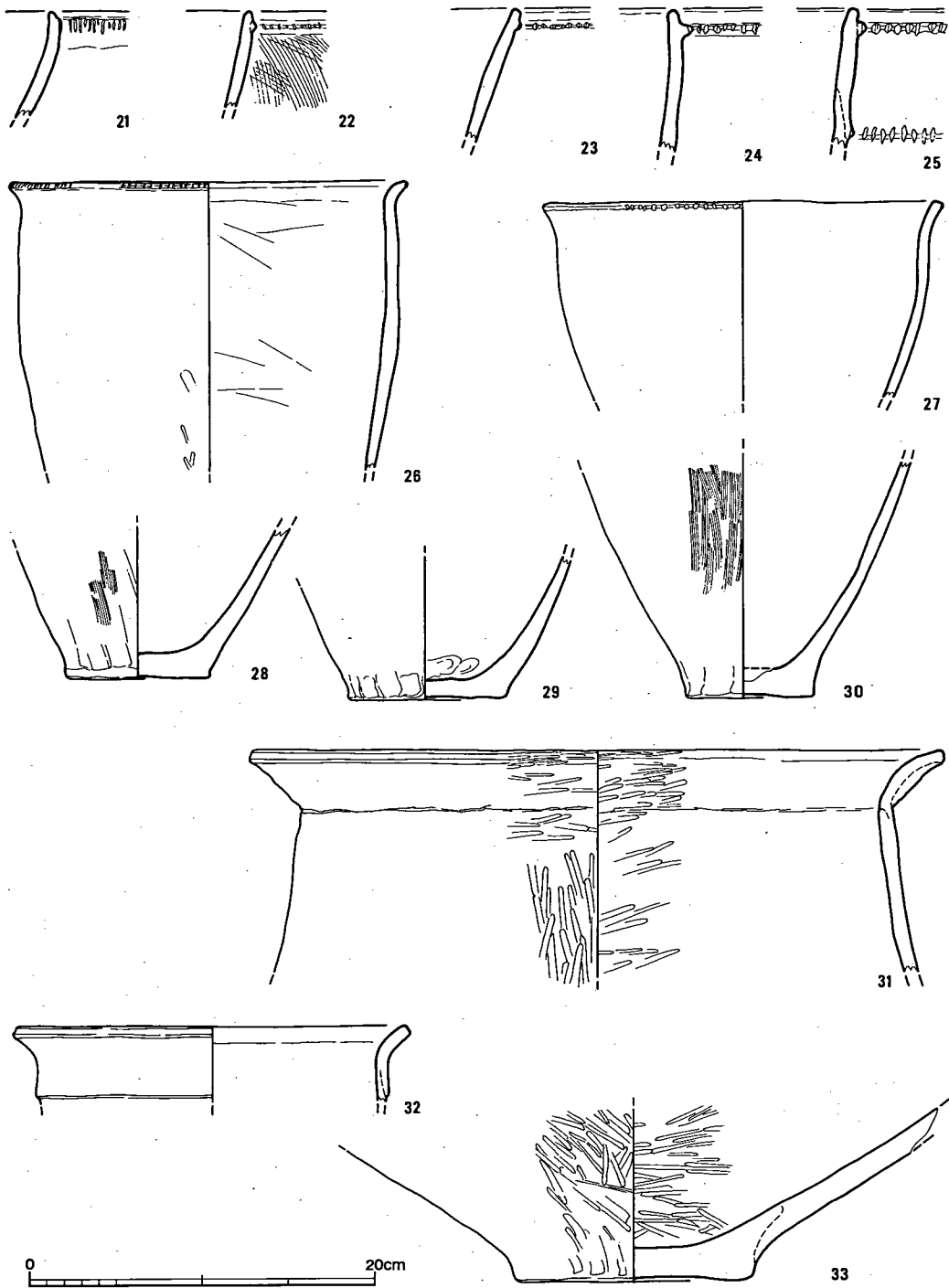
大溝の第1・2層は無遺物層に近いが、若干の土器片が検出されている。5・6が第1層、7・8が第2層から出土しているが、7・8は弥生前期土器で、大溝西岸の崩壊時に弥生前期溝(溝5)の遺物が混入したものである。1は布留系の土師甕で第3層から出土しているが、北区出土であるので、長通地区5区3層のように一部で3層に土師器が一括して混入する一連



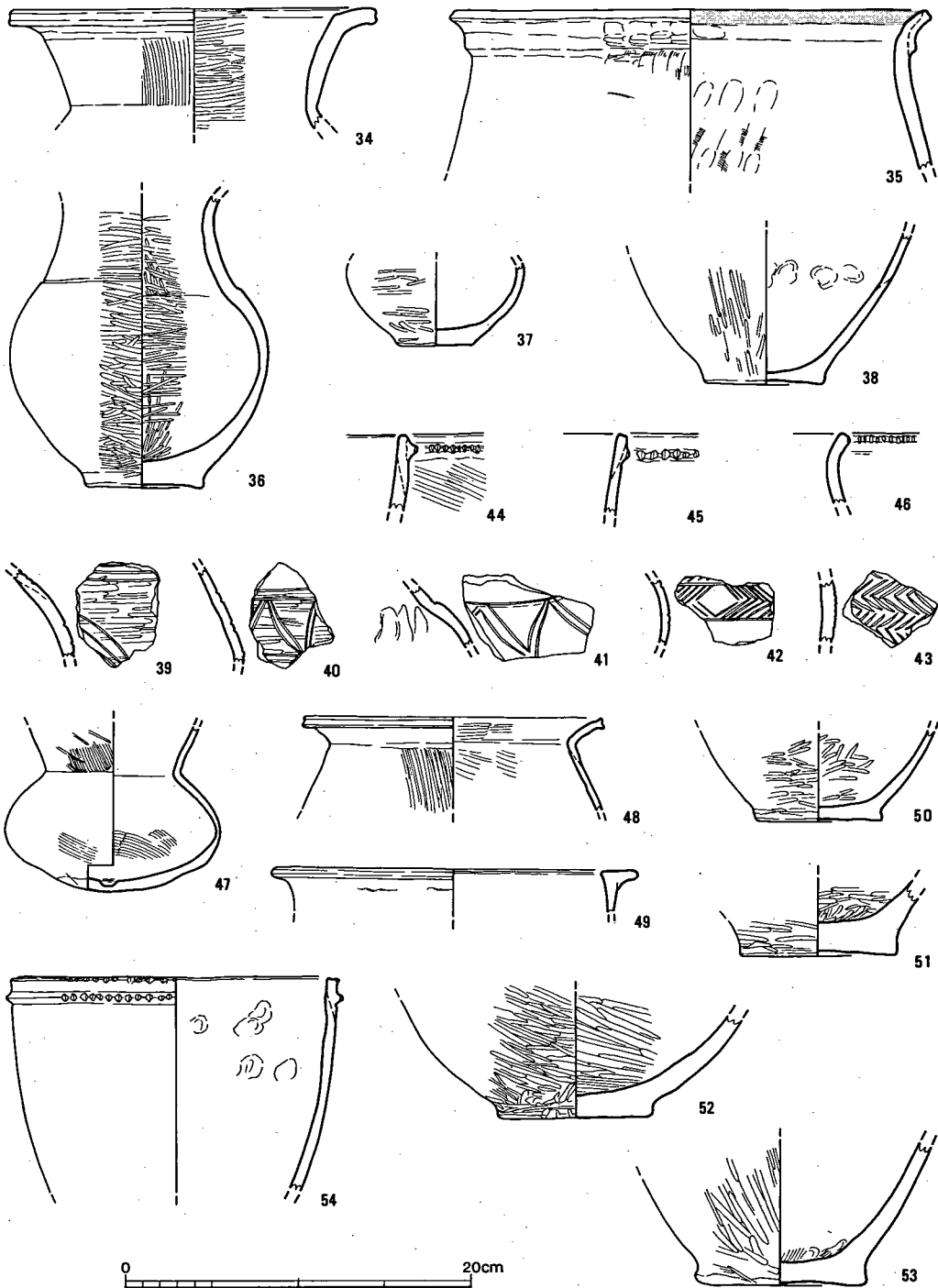
第5图 畠田北・中区大溝出土土器実測図(大溝1)(1/4)



第6图 畠田中区大溝出土土器实测图(大溝2)(1/4)



第7図 島田中区大溝7層出土土器実測図(大溝3)(1/4)



第8图 畠田中・南区大溝出土土器实测图(大溝4)(1/4)

のものとする。5・6は、3層と同じ弥生後期中頃。

2・9～17は、3層出土土器。2・9は壺、10～13が甕、14・15が高杯、16が鉢、17が器台である。2の短頸壺は、胴部中位以上の内外面にミガキが残るが、下部は指痕が残る荒仕上げとなっている。口縁の内側がわずかにくぼむ。9も短頸壺といえるが、短頸が直立し、口縁が外反する。全体に厚目の器肉で、丸味のある胴部下半外面を荒くケズルことによって直線的にしている。部分的に粘土継目と指痕が残り、ハケ目の後にわずかにミガキがある。甕のうち11は在来品であるが、口唇部先端と口縁下に沈線をもつところが多少違い、10・12のような口唇部の凹線の影響とも思える。10・12の口唇のように先端が厚くなるものや、12の頸部のヘラ圧痕は瀬戸内的なところであるが、12の脚台付が中九州的。12の法量は、口外径17.5cm、器高25.8cm、底径9.7cm、胴部最大径20.2cmの大きさ。13は、外反する口縁は在来的であるものの、中ぶくらのみの胴部と底部が九州的でない。

14・15の皿部屈曲高杯も在来品でなく、東方の影響で在来化しつつある段階のタイプで、皿部口縁が屈曲直立し、脚部しぼりと円盤充填が特徴。14の法量は、口外径31.1cm、器高26.1cm、脚頸部径6.4cm、脚底径17.0cmの大きさ。

16は鉢で、一部にミガキが見られるものの、ハケ目とケズリ状痕も残り。3層出土土器で底部が残るものは、全部が凸レンズ状のふくらみのある底部をするのが特徴であるが、13は、4層から接合できる破片が出土しているせいか平底に近い。

17の器台は、上半部にくびれがあり、その部分が肉厚なので新しい要素をもつタイプ。

3・4・13・18は、4層出土土器。3は前期壺の底部、18が前期壺口縁部。4は短頸壺で、2と比較すれば口縁の屈曲形態から古い型式であるが、底部がわずかにふくらんでいる。

19・20は、5・6層出土土器。19は壺底部であろうがハケ目調整。20は口縁端部角と突帯にキザミ目をもつ甕。

21～30・44～46の甕と34～43の壺は、7層出土土器。甕口縁は、外反せずにキザミ目突帯1本と2本のもの、外反して端部にキザミ目をもつものに分かれる。21は、わずかに内湾する口縁外側の段にキザミ目を施す。突帯は貼付に見えるものがあるが明瞭ではない。

外反口縁甕の口縁の屈曲はゆるやかであるが、端部のキザミ目が小さく、新しい要素がある。

34～43は壺で、34が中期前半であるが、他は前期。39～43の有紋壺は、7層の上部出土で、35・36の下部出土と比較すると新しさがある。弧紋・山形紋・無軸綾杉紋は、いずれもヘラミガキされた胴肩部に施されている。36は口縁部を欠損しているが、小型壺で内外面が丁寧なヨコヘラミガキされている。35は、中型というより大型の部類の壺で、口縁の屈曲がゆるく、貼付補強された幅が狭いのが特徴。口縁内側にミガキの後に丹塗りされた痕が残っている。

31～33・50～54は、畠田大溝最下層出土土器で、31・33・50～53が壺、32・54が甕である。31の大型壺は、口縁の屈曲が強く、屈曲部から先端を貼付補強している。器表面は、内面と口縁

外面が最後にヨコミガキされているが、頸部外面がタテミガキである。33も大型壺の底部で、前期の古い型式で珍しく、底部に爪痕がある。50～52の中型壺は、内外面共に丁寧なミガキで、50・52が底面までミガキがあり、51が底面ナデの後に指紋が残っている。53は、外面にミガキがあることから壺にしたが、内面にないことと、外面が二次加熱により赤変しているところから甕の可能性はある。

32の甕口縁は、外面に貼付による段をもつがキザミを施さない。54は、突帯と口縁端角にキザミ目を施すもので、胴部内外面がナデ調整。

47～49は、47・48が1～2層、49が34と同じ混入品であろう。

第35図の大型甕は、図版4—1のように4層で完形品がつぶれたかたちで出土したもので、球形胴の肩に1本、最大部に2本の台形突帯をめぐらし、くの字口縁で端部肉厚で面をもつのが特徴。胴部内外面の調整は、ハケ目が基本であるが、外面の上部に丁寧なタテのミガキ、下部に割合荒いヨコミガキが施されている。口縁端部の平坦面・球形胴とミガキは、北部九州外の要素であるが、中期的な堅牢な突帯と口縁部の屈曲度が北部九州の後期初頭の型式的特徴をもち、3層出土の土器群より明らかに古い。胴部内面下半の器壁の剝落が著しいのは、水瓶の使用法によるものであろうか。法量は、口径35cm、器高57.1cm、胴最大径60cm、底径15cmの大きさ。

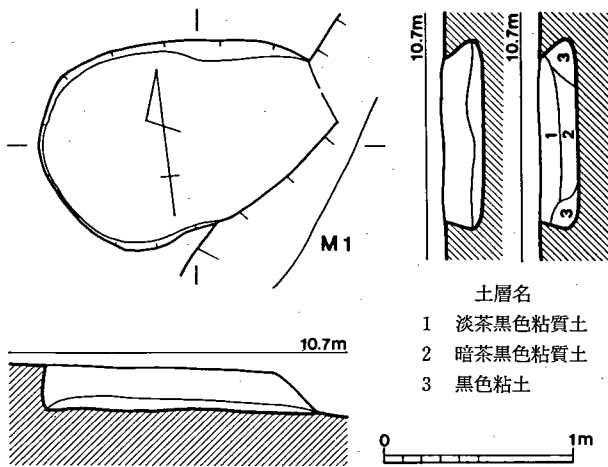
手捏土器(図版50—9、第65図9)

この辻垣遺跡群のなかで、弥生前期に属する手捏土器は、本例が唯一のものである。これは畠田大溝中区第7層の砂利層出土品で、7層の砂利層には1片の弥生中期前半の壺の破片が含まれていたが、その他が弥生前期と若干の縄文期遺物しかないところから弥生前期に含まれるものとする。

手捏土器は、脚部又は台部と思われる破片で、残存高2.9cm、裾径3.8cm、最小径2cmの大きさ。全体にナデ調整されているところから、手捏土器としては丁寧な作りとなっている。胎土には、細・小砂を含み、雲母も混入している。色調は、淡褐色から茶色をしているが、裾外面の一部に黒色部分がある。

② 貯蔵穴(図版26—2、第9図)

畠田調査区の西端で、溝1に東側を破壊されていた袋状堅穴の貯蔵穴である。平面形は、西側が円形で東側に隅丸長方形が重複したような形である。床面の大きさは、東西径が1.57m以上、南北径が最大1.0m、深さ0.25mである。壁面は袋状を呈すが、その傾斜が著しいことから復原しても深さが1m以上となることはないように思えるので、この地点の削剝が50cm前後であったことになる。貯蔵穴の中が現在の地山面の土質に似た黒色粘土や黒色系粘質土で埋没していることから証明できる。



第9図 畠田貯蔵穴実測図(1/40)

土には、赤褐色粒と微量の角閃石を含み、茶褐色と淡褐色をしている。時期は、共伴した土器細片から弥生前期と思われる。

貯蔵穴内からは、土器細片や黒耀石片が若干と土錘1個が出土した。

土錘(図版51-10、第66図10)

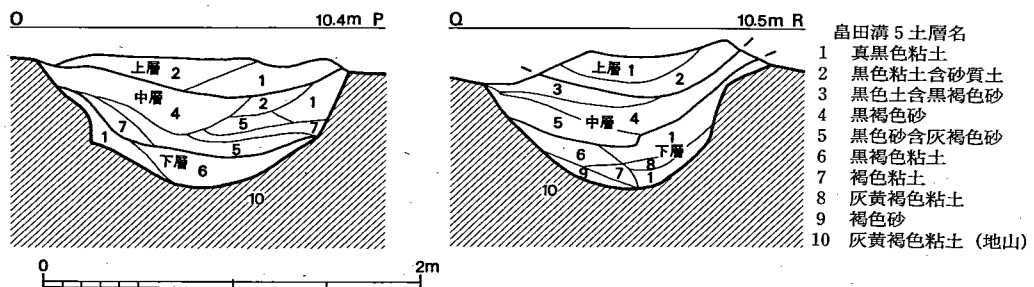
土錘は、ほぼ完形品で出土したが、表面著しく摩滅して、胎土に含有する石英などの砂粒が多く目立つ。形態は、中ぶくらの紡錘形をし、縦の中心に円孔が1個貫通する。大きさは、長さ3.6cm、最大径1.45cm、円孔径0.3cmで、現状で7.4gの重さがある。胎

③ 環濠(巻頭図版1-3、10-3、図版16-3、第3・10図)

畠田調査区の西南端から、東方向に弧状に延びて大溝に合流した現状となっている。発掘調査時に溝(M)5としたもので、M2~M4に上部の大半を破壊されている。大溝との関係は、大溝最下層の土器と時間的な差がさほどないことから同時期に共存していたものとする。

環濠は、現状で最大幅1.5~1.7m、深さ0.8m、長さ14mを発掘した。溝の横断面形は、底面に丸味のあるV字溝で、原形を復原したとしても、最大幅が2~2.5m、深さ1.3~1.5mの規模で、濠とするには小規模であるかもしれない。

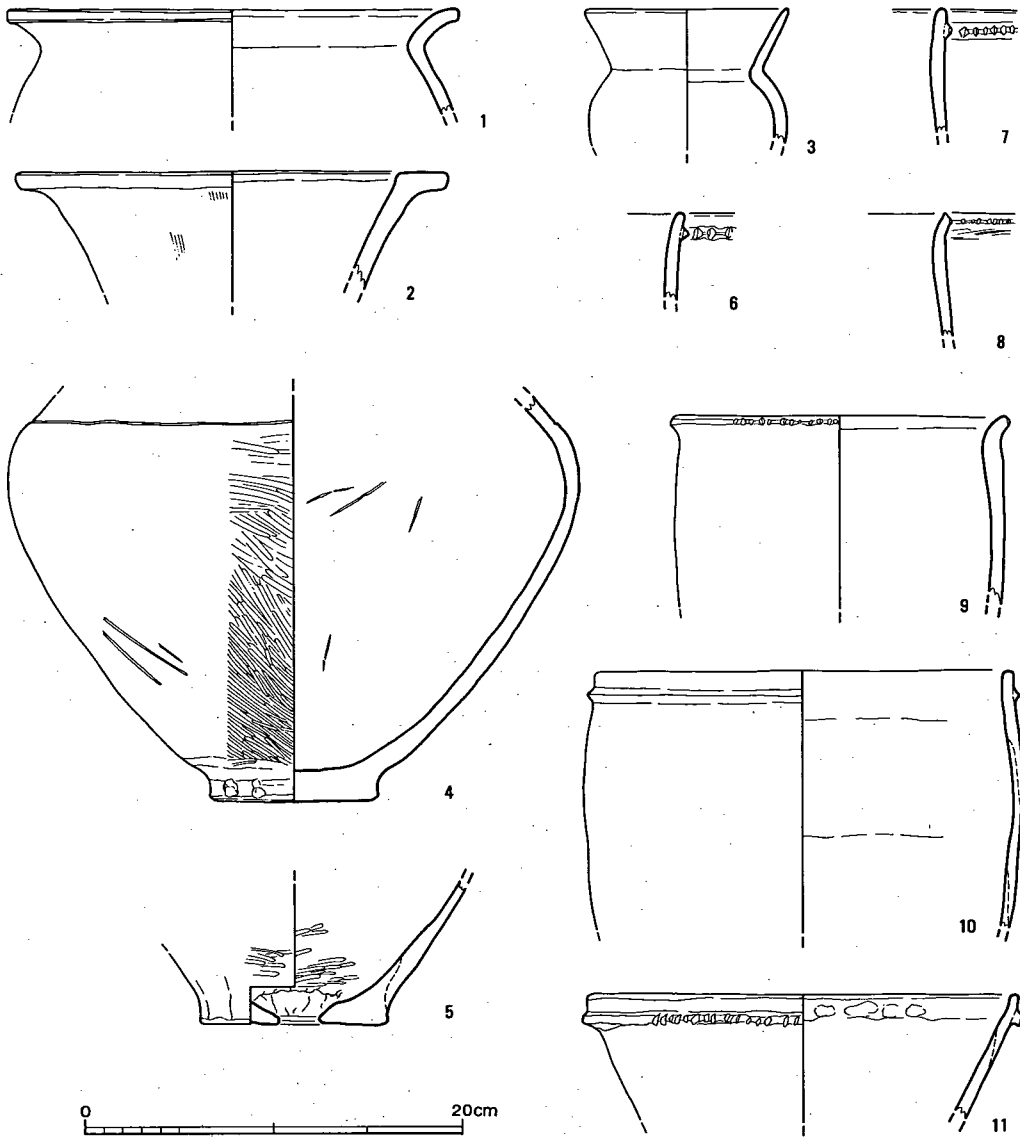
埋没した土層は、上層に黒色粘土と砂質土、中層に褐色砂、下層に黒褐色粘土が堆積しており、砂層が多いところから洪水などで急激に埋没したことが考えられるが、土塁がどちらに存



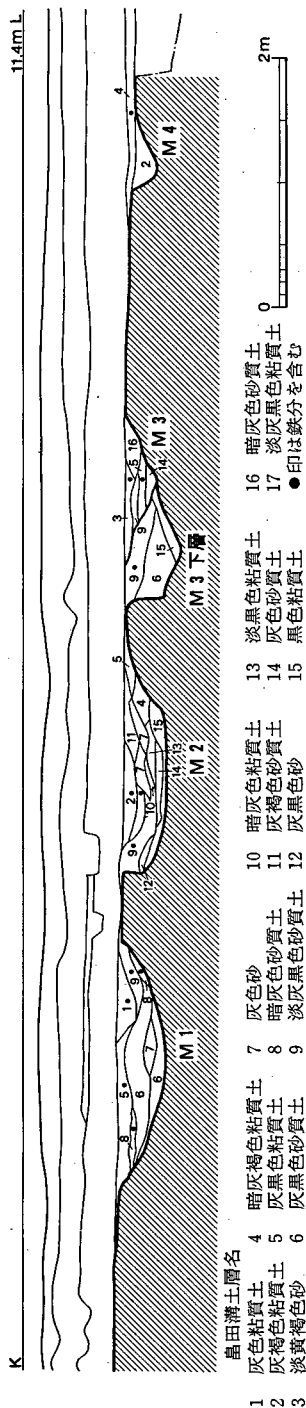
第10図 畠田環濠(溝5)土層実測図(1/40)

在したかは不明。ただし、北西側から最初に地山表土層と同じ黒色粘土や黒褐色粘土が流入しているし、貯蔵穴が北西側に存在すること、共存する大溝が東側に並行しているらしいことは、大溝北区北側土層図(第4図)左端のゆるいV字溝の存在が溝5とした環濠が延びている証明でもある。さらに、この環濠は、長通地区の環濠(M7)に続くものである。

遺物は、上層で前期後半を含む土器、中層で前期土器が多く、サヌカイト製石鏃も出土。下



第11図 畠田溝3・溝5出土土器実測図(1/4)



第12図 畠田溝土層美測図 (1/60)

層の土器が最も古いようだが細片であった。なお、大溝中区2層に前期土器(第5図7・8)があったが、この環濠との重複部分での出土であろう。

畠田環濠(M5)出土土器(図版49-4、第11図4~11)

環濠出土土器は、4・5が壺、6~11が甕である。環濠の上層で5・10が出土し、中層で4・6~9・11が出土している。

4の壺は、頸部以上を欠損しているので正確な時期が不明であるが、肩部の沈線、丁寧なヘラミガキ、底部の強調など古式の要素が多い。5は、内外面にヘラミガキがあることから壺としたが、焼成後に外側から底部穿孔していること、外面に2次の加熱があることから、深鉢である可能性がある。

環濠出土の甕は、口縁に三角突帯をめぐらすもの(6・7・10・11)、ゆるく外反した口縁端にキザミを施すもの(8・9)がある。口縁の三角突帯にキザミ目を施さない10は、口縁が内傾ぎみで新しい要素であろうが、口縁下に沈線をめぐらすものは含まれていない。甕の胴部の粘土継目は、10・11で外に傾いているのが観察できる。

④ 溝(巻頭図版1、9-1、図版2-1、15、第3、12図)

畠田調査区では、南西から北東に向かって延びる溝が4条あり、西側から溝1~溝4とした。調査現場では、溝1をM1と記号化したので、遺構図や出土品にもこの記号で記されている。溝1~溝4以外に、これより新しく、短い小溝が5条検出されているが、これらの埋土は表土と同じく灰褐色砂質土であるから近世以後のもので、出土品もない。

溝1(M1)

調査区西端の溝で、南西側が細くなり湾曲している。大きさは、北東側幅2m、南西側幅1.3m、深さ40cmで、横断面形が凸レンズ条を呈する。溝の埋土は、上層に灰色と灰褐色粘質土、下層に灰褐色砂質土と灰色砂が堆積している。

下層の砂質土の多さから、洪水などで急激に埋没したものと思われる。

出土品は、上層に須恵器蓋を含む若干の土師器があり、下層に5世紀初頭の土師器がみられるが、全体に遺物量が少ない。

溝2 (M2)

西側から2番目の溝で、溝1に並行して流れ、南西半で湾曲する。全体的に溝1と同形態であるが、底面が平坦で、横断面形が逆台形となる。溝の大きさは、幅1.5m、深さ35cmである。溝は、上層に灰褐色粘質土、中層に砂や砂質土、下層に灰褐色や黒色粘質土で埋没しており、中層の砂質土と下層の粘質土が明瞭に区分できることから、洪水で埋没した後に溝浚えをして再度洪水で埋没したようだ。

出土品は、上・中層で土師器に若干須恵器が混入するが、土師器が5世紀前半であるのに、須恵器は6世紀末のものであるから、須恵器を部分的な混入品と見るべきであろう。下層は、5世紀前半の土師器が少量出土する。

溝3 (M3)

溝の東側に接し、並行して流れ、埋没した後に掘り直している。東側に片寄って掘直され新しい方を溝3、古い方を溝3下層としている。溝の大きさは、掘り直しを含めて1.5m幅で、深さは古い方が45cm、新しい方が25cmと浅くなっている。溝の埋土は、新しい方が上層に砂と砂質土、中層に灰黒色粘質土、下層に灰色砂質土で、古い方が上・中層に砂質土、下層に黒色粘質土が堆積している。

溝には出土品が少なく、第11図1～3のように弥生中期・後期・土師器が混在している。

溝4 (M4)

掘り直した溝3より古く、溝3下層と共存していた可能性があるが、溝も浅く出土品がないために時期不明。溝幅は一定せず1m前後で、15～20cmと浅く、灰褐色粘質土で埋没していた。

畠田溝1 (M1) 出土土器 (第14図1～3、表8)

第14図1・2が須恵器、3が土師器である。1は、摘みも付く可能性がある蓋で、反りの立上がり方が小さい。2は、直径が12.6cmで1のような蓋が付く身になる可能性もあるが、天井部の丸味から蓋とした。天井部外面にV字形のヘラ記号がある。

3は高杯の杯部で、厚味のある器壁の内外面にハケ目の後にヘラミガキ調整され、脚部の接合が杯部側中心に凸部をもうけるソケット式であることが剥離面で判明する。

畠田溝2 (M2) 出土土器 (第61図77～82、表8)

77は、中層出土の須恵器蓋であるが、天井外面がヘラ切離しのままであるところから身になる可能性もある。外面上部に回転ヘラケズリ、下半にヨコナデ調整がある。

78・79は瀬戸内系土器で、78が口縁外面に凹線2本をめぐらすIV様式の長頸壺、79がいわゆる複合口縁の部類に属するが、内側にヘラミガキがあるところから壺の口縁部とした。胎土には、

石英・金雲母(多)・赤褐色粒(少)を含むが、角閃石を含まず、黄褐色から茶褐色を呈している。溝2の床面から出土しているので、弥生終末か古式土師器であろう。

80は溝2下層から出土した甕で、くの字口縁の内側がおさえてあるが弥生後期に属するものと思われる。

81・82は、溝2床面から出土した土師器高杯脚部である。81は柱状部から直角に近く屈曲して裾部を作り、82が裾開きでゆるく裾部の屈曲で構成されている。双方共に杯と脚の接合部は、ソケット式の結合である。

畠田溝3(M3)出土土器(第11図1～3)

溝3出土土器は少なく、出土土器も小片で全体に器面が摩滅しているものが多い。1は弥生後期前半の甕、2が中期前半の鋤先口縁壺である。

3は土師器の小型丸底埴であり、溝3の時期に近いものであろう。3は器壁が厚いところから古式土師器でなく、5世紀代に下るかもしれない。

⑤ 小 溝(図版15-1、第3図)

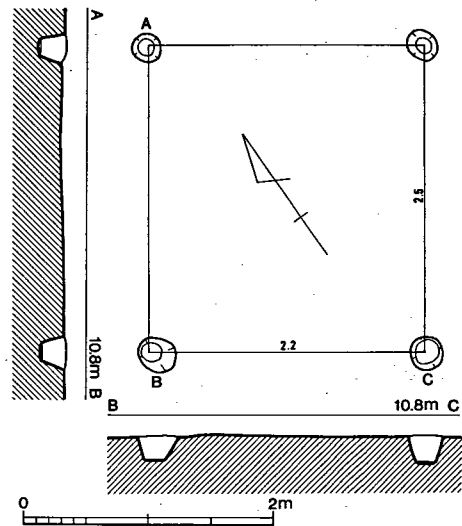
畠田調査区では、大溝と溝1～溝4以外に若干の小溝がある。これらの小溝は、発掘調査時に最初に検出できるもので、現在の耕作土と同じような灰褐色砂質土で埋没している。したがって、遺構の重複関係による時期は、溝1～溝4より新しいことになり、7世紀以後のものとなる。小溝は、調査区の西側に集中しており、北西から南東方向に向かうもの3条、ほぼ南北方向のもの2条で、規模が長さ2.5mから5m、幅20cm～40cmの浅いものである。出土品はない。

⑥ 柱 穴(図版2-1、第13図)

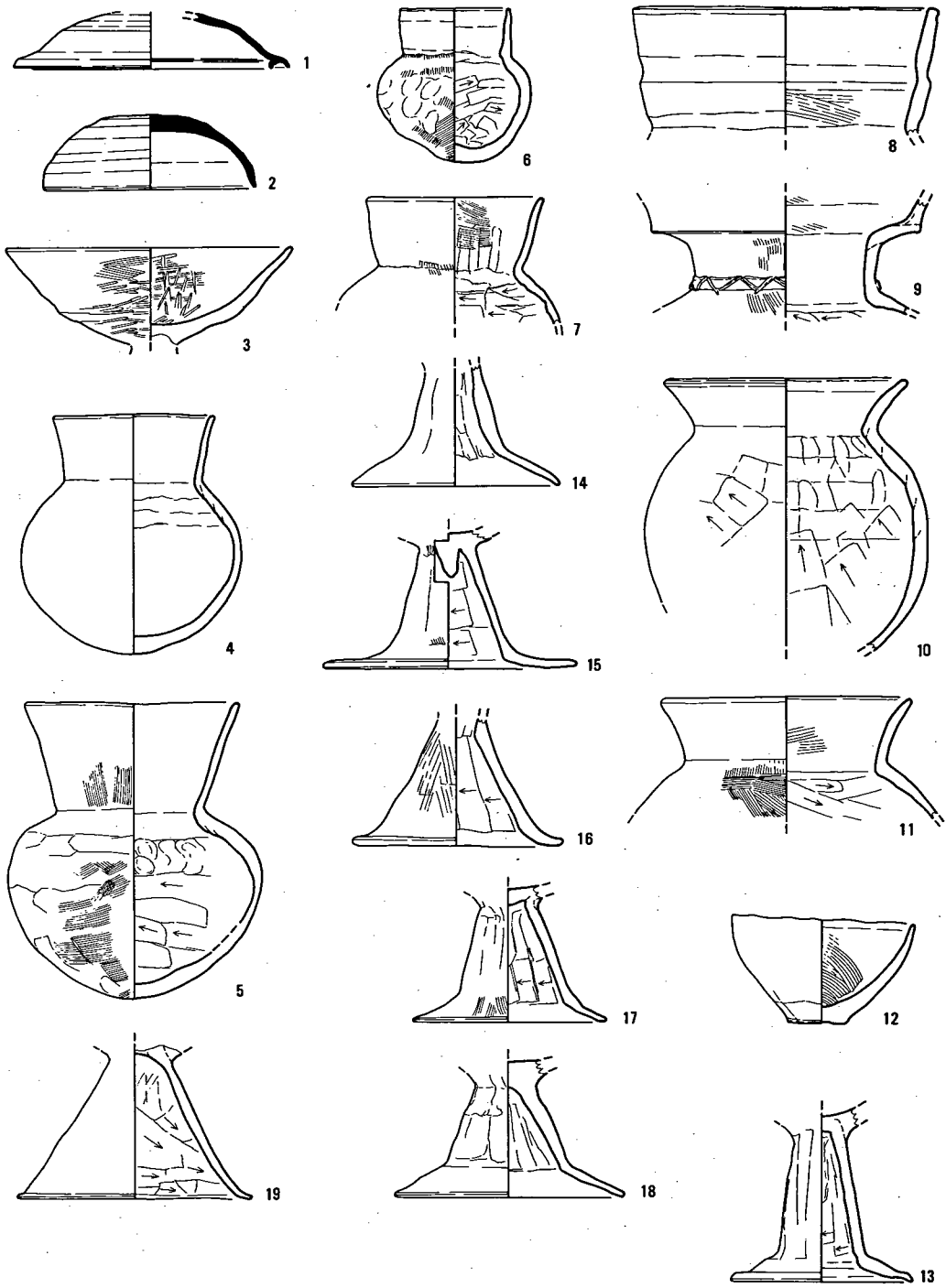
畠田調査区では、若干の柱穴が検出されている。調査区の西側に集中するもので、一見整然と並んでいるように見える。しかし、これらを建物を想定して考えた場合に、第13図のように1間×1間の建物としてしか拾えない。

1間×1間の建物は、柱間が北東-南西方向が2.45m～2.5m、北西-南東方向が2.15m～2.2mの規模で、柱穴も径23cm～31cm、深さ18cm～23cmの大きさである。

その他の柱穴は、2本が対になるものがあるとすれば、溝3東側に沿って2対がある。



第13図 畠田掘立柱建物実測図(1/60)



第14图 畠田・長通0区溝1出土土器実測図（溝1）（1/4）

(2) 長通地区(巻頭図版3～8・11～16、図版5～14・17～25)

① 大溝(巻頭図版3～8、図版5～14、第4・15図)

大溝は長通調査区の3区の一部と4～5区の南東側一帯を占めており、畠田地区から続くものである。大溝は、全体として南西から北東に向って流れるものと思われるが、道路の下の東南側と北半の東側から支流が流入するためか、西岸の北と南側で部分的に挟られて湾入している。したがって、畠田地区と同様に西岸の傾斜が急で、東岸が比較的緩傾斜となるが、西岸が粘土地山、東岸が礫地山であることも同様である。

大溝中央付近で並行している環濠は、大溝より古く、大溝によって南北側を破壊されているが、環濠で述べるが本来は共存するものであり、大溝を並行する環濠と区別することに問題があるので、最後のまとめで問題点を整理したい。

大溝の埋没土は、3区と4区の境の土層図(第4図)が大溝の西半分であるが、これによると第1層と第2層が褐色系の粘質土で平坦に埋没していることで、大溝の最期が静かなよどみであったことがわかる。

3層は、土層図では東側と西側に区分できるが、西側が土器等の遺物を多量に含んでいるので、西側から急激に流入したのではなかろうか。西側は、灰色・褐色・黒色・紫色系の粘質土で埋まり、東側が灰色・褐色・黒色系の砂質土で埋没しているところからも両者の違いがある。3層西側に含まれる遺物としては、ガラス玉類(巻頭図版3・4、図版7)や土器がある。

4層は、灰色系砂質土で埋っており、その状況からゆるやかな流れが想定できる。遺物も3層より古い型式を含むと同時に石庖丁の完形品(巻頭図版5-2、図版10-3)も出土している。さらに、3層下部から4層で出土した土器に広島地方系の土器がある(図版9-1)。

5層は、大溝の中心付近に堆積した層で、褐色系の砂質土で埋っている。遺物は少なく、弥生前期後半と瀬戸内系の中期土器片がある。

6層は西側にあり、淡灰褐色砂質土が堆積している。遺物は、最下層(大溝底面)も含めて一部の中期土器と前期全般の土器や磨製石鏃・磨製石剣片・打製石鏃などを含んでいる。

3区と4区の境の土層図は、大溝西岸が湾入した部分に設定されたものであったため、3区と4区の北半が全体的によどみであったことが土層図から伺える。

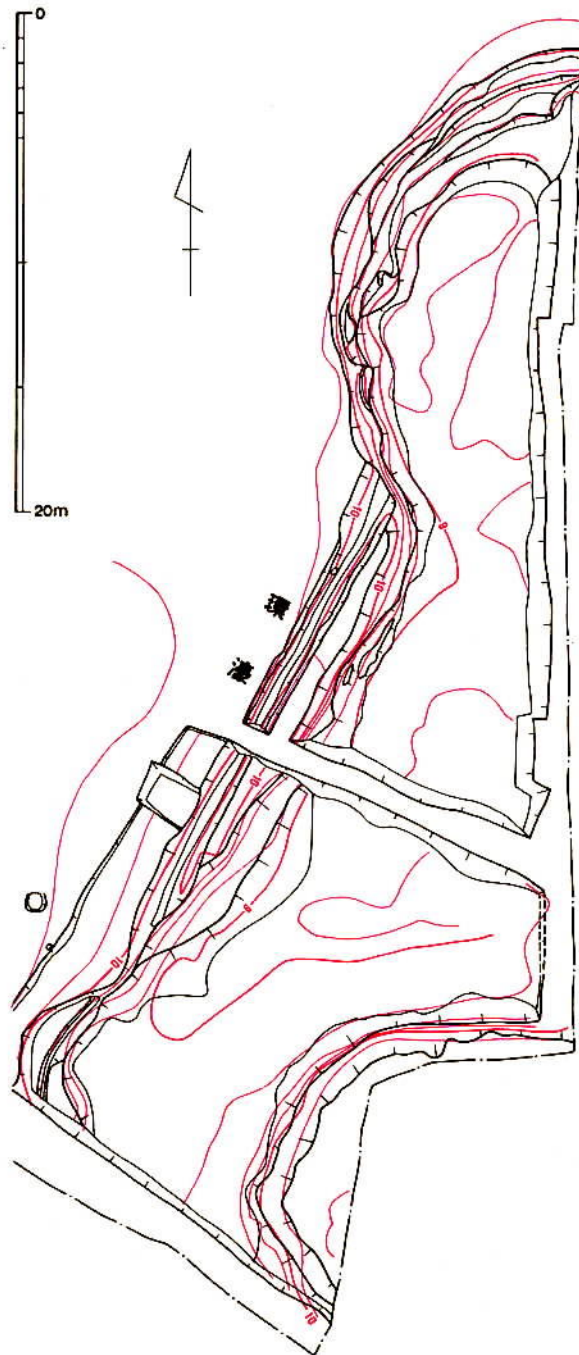
5区南側土層図(巻頭図版8、図版14、第4図)から、5区大溝の堆積状況を見てみたい。土層図によると、まず西端に最も古い井戸状の遺構があり、次に傾斜した堆積ながら大溝より古い層がある。井戸状遺構は遺物を含まず、発掘できなかつたが、次に古い遺構を畠田地区の環濠の続きと見なければならぬが、堆積状況に問題が残る。

5区大溝の埋没土の堆積は、単純ではない。堆積土を概観すると、西側半分が順調に堆積しているのに対し、東側半分では東端の土層のように数度のよどみと思われる大まかな堆積をその後数度の激流によって乱している。したがって、西半分の1～4層と東半分の1～4層で出土する土器の年代に大差がある。西側半分の3層は、畠田地区や長通地区の3区～4区と同じように後期中頃の土器群を主体とするが、長通地区4区・5区の東側半分において部分的であるが4層で古式土師器が一括出土する。その部分的なところとは、大溝西岸が湾入している対岸、すなわち、支流の入口付近と思われる5区東南端(図版13)と4区東南側(図版8-1)である。

大溝5区の堆積土層は、1層の西側が茶灰色系粘質土、東側が灰茶系と褐色系の粘質土。2層は、西側が茶灰色粘質土、東側が黒褐色系粘質土の堆積。

3層は、西側と東側がほぼ同じく灰黒色系の粘質土が堆積し、前述のように時期差のある土器群を含んでいる。多少の違いは、西側に土器群に伴って流木と若干の木器(巻頭図版5-3、7、図版11・12)が伴っていることである。

5区大溝3層で特記すべきこと



第15図 長通地区大溝実測図(1/300)

は、瀬戸内各地域の土器が含まれ、その多くに朱が付着し、朱加工に使用されたとと思われる特殊土器の完形に復原できる初めての例も発見できたことである。これら朱加工に使用されたとと思われる土器群は、他の在来系の土器群と共に西岸から第3層に一括して流入、もしくは投入されたものである。

4層は、東西両側に区別することに困難なほどであるが、強いて色別すると西側が淡灰色粘質土、東側が暗灰黒色粘質土で、東側が黒っぽい土層となり前述のように出土品に違いがある。

5・6層は、これも東西両側でほぼ同じであるが、西側が砂質土が多く、東側が細砂層のみであるところから、西側を5層とし、東側の最下層である6層とした。出土品は、前期と中期の土器が混存するが少ない。

7層は西側の最下層で、中央付近に灰黒色粘質土、西側の最も深いところが大粒砂層となっている。出土品は、一部中央付近で弥生後期土器が見られるものの、西側で前期末が主体となっている。7層では、有柄石剣片、直刃石庖丁・打製石鏃なども出土している。

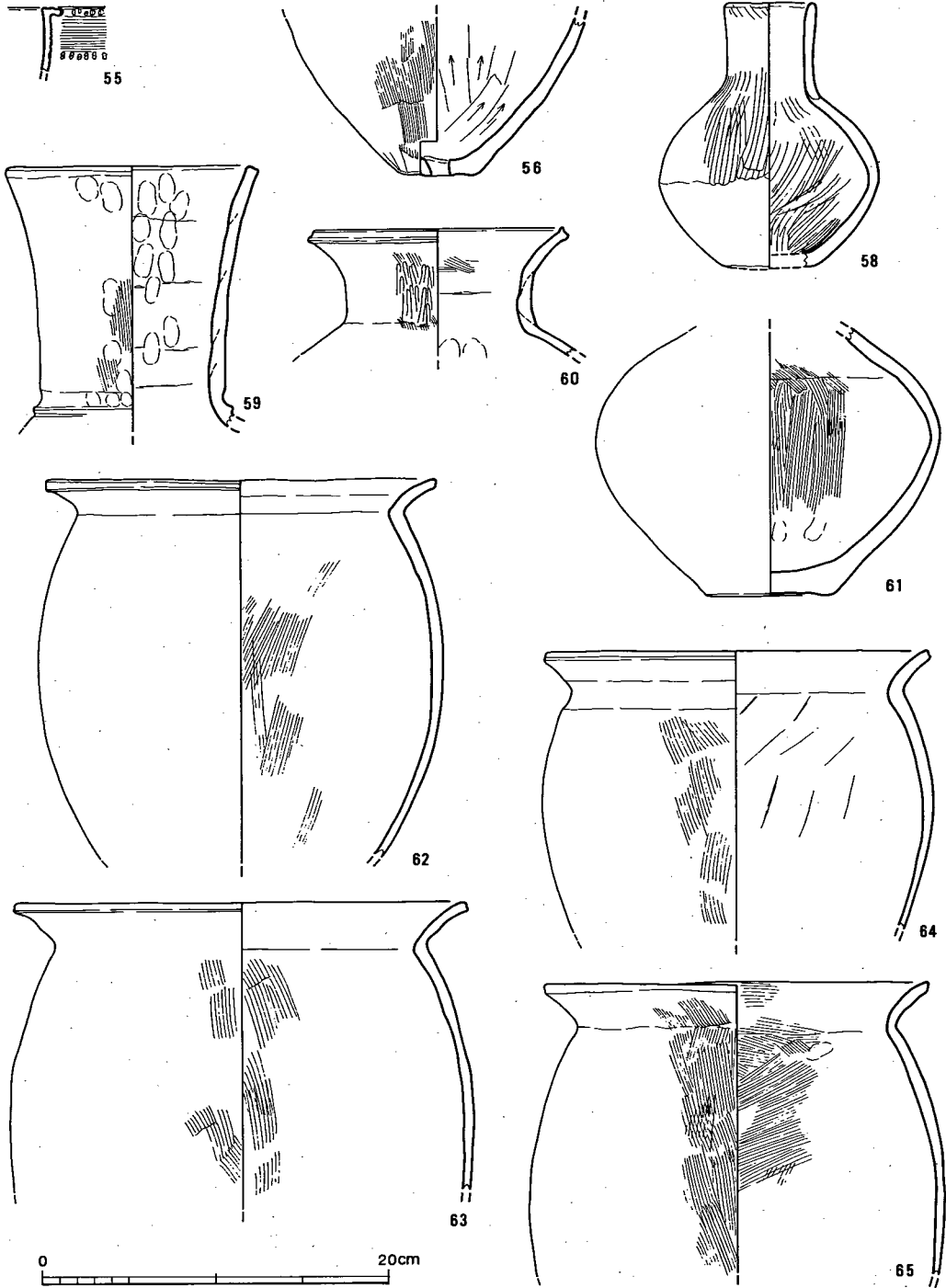
長通大溝出土土器(図版29~44、第16~42図)

大溝では北端にあたる3区から順に4区・5区出土土器について述べる。3区には、大溝端部の5~6mの三角形部分が含まれる。

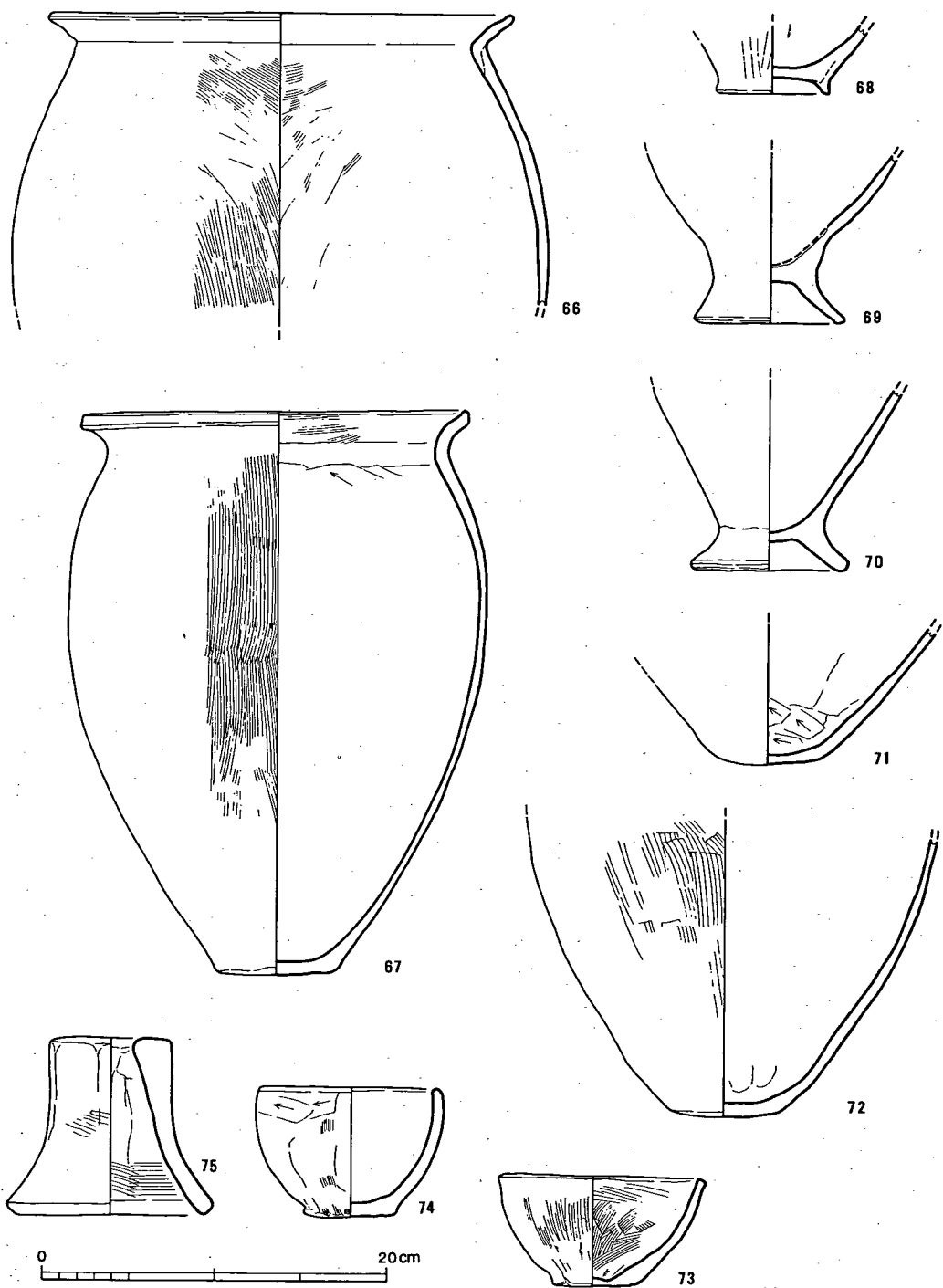
1・2層のよどみ層では、第16図56のようにわずかな土器片が出土している。56は、底部に焼成前穿孔を1個有する甕で、甗であろう。内面にケズリがあるところから土師器であるかもしれないが、小さな平底であることと甗であるところが気になる。

58・61・66・75・73は3層出土、59・60・62~65、67~72、74が3層下部出土土器である。順次3層出土土器の概要を述べると、58~61が壺で、58・59が細頸壺、60が広口壺であろうか。58は、荒いハケ目調整と胴下半部をケズリの後でナデ調整し、直立した頸部が特徴で、北部九州では後期後半にならないと見られない形式。底部は凸レンズ状を呈する。59は、長頸壺の類であるが、内外面共に脂痕が著しく、粘土紐の継目がよく観察できる。頸部下に小さな三角突帯をめぐらす。61も長頸壺と思われ、59の胴部もこのようなものであろう。60は、外反する口縁部内側を掴み上げるのが特徴で、北部九州以外の要素。頸部外面にタテミガキ調整がある。壺は、後期前半(61)と後半のものが混在する。

62~73は甕で、68~70に高台が付く。62~65は長目に外反する口縁部、66・67が割合短く外反する口縁部をもつ。67の口縁部のみ端部に面をもち、屈曲に丸味がある。甕のうち口縁から底部まで復原できたのは67のみであるが、67は胴下半が2次的加熱によって表面が剝離しているために、底部外面の形状が原形をとどめていない。71の丸底に近い底部のみ内面ヘラケズリが明瞭な以外では、67が内面ケズリの後にナデ調整しているようで他の甕との違いを見せている。68~70の高台付甕の口縁部は不明だが、68の荒いハケ目、69の丸味のある胴部、70の胴下半が細いという違いがある。3層下部の甕は、後期後半の特徴をもつ。



第16图 長通0・3区大溝出土土器実測図(大溝5)(1/4)



第17图 長通3区大溝3層出土土器実測図(大溝6)(1/4)

73・74は椀で、74が3層下部でガラス玉類と共伴している。両者は、器高と丸味の違いのほかに73が荒い作りで多少新しいようだ。75の支脚は、磨滅が著しいが外面にタタキが残る。

第36図2は、3区大溝3層出土の口径38.5cm、器高58.5cm、胴最大径42.8cm、底径12cmの大型甕である。最大径が上半にある長胴に、肉厚に補強された短めの口縁端部に擬凹線紋、口縁直下に指圧痕突帯紋を施す。突帯紋は、布目指圧痕とはなっていないし、突帯貼付後に口縁の補強がされている。胴部は、内面が荒いハケ目、外面がハケ目の後に底部付近のみ、ヘラケズリ状のナデとなり、厚味のあるわずかな上底となっている。これらの諸特徴は、瀬戸内でも愛媛県の中伊予地域などの第IV様式土器に関連するものであろうか。

大溝の3区部分では、第3層下部を含めて他の地区と比較して甕だけでなく新しい型式で構成されている。

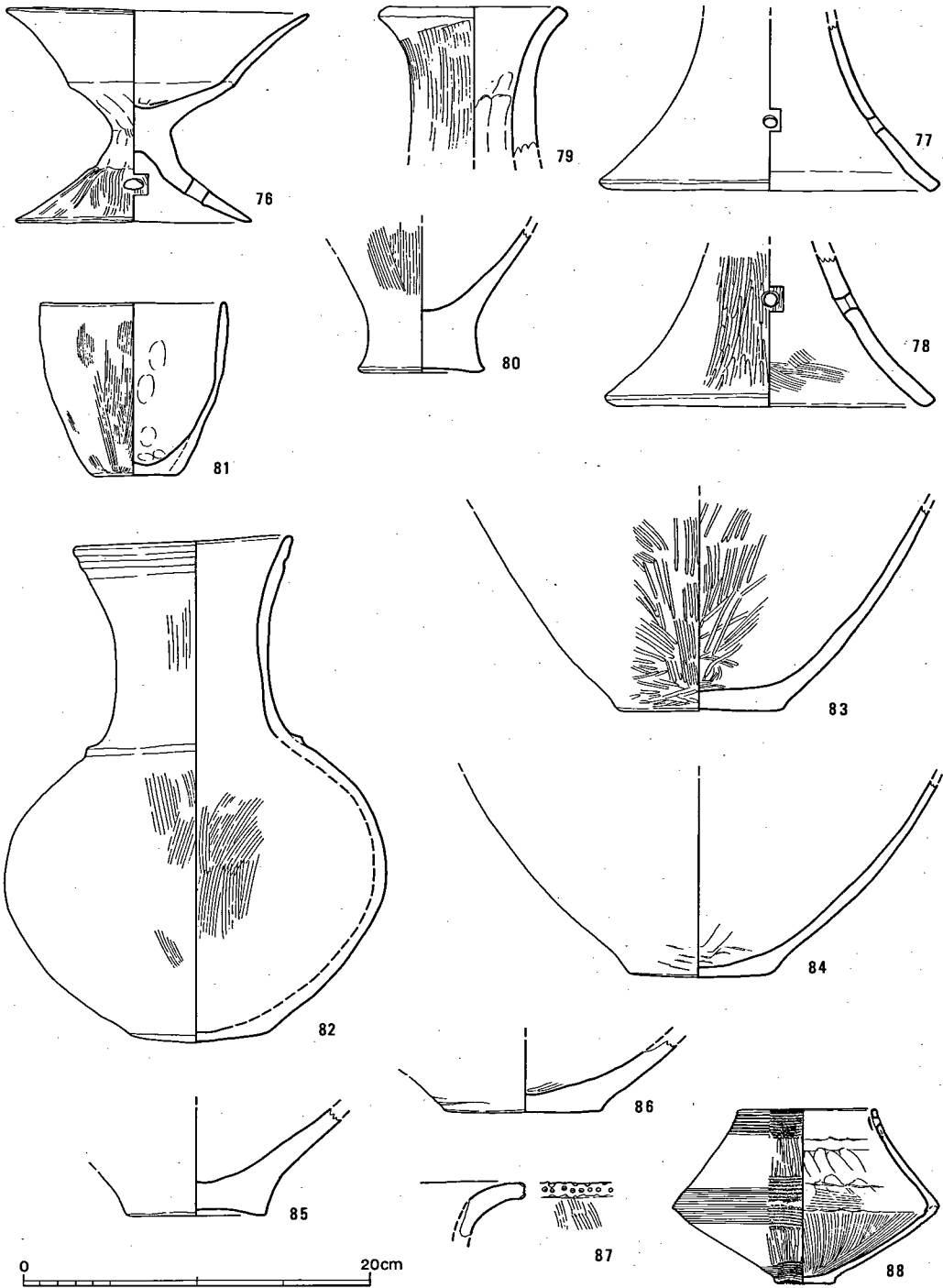
4区2層出土土器は76～80で、弥生中期・後期・土師器が混在している。76は土師器高杯で、短脚と杯部から古式土師器に属する。ハケ目が残るなど全体に荒仕上げとなっている。77・78弥生後期後半の高杯脚で、裾部に3～4個の穿孔がある。

79は器台で、2次の加熱を受けている。80は、中期初頭の甕底部で、極細ハケ目調整がある。

第36図3は、4区大溝2層東南部出土の複合口縁の胴径57cm、底径6.6cm、残存高67.4cmの大型壺である。口縁部を欠損し、直立した小さ目の頸部に長目の大きな胴部、小さ目の底部から構成されている。胴部は、下半部をふくらまして強調し、内面がハケ目後ナデ、外面がタタキ目の後にハケ目、さらにタテミガキ調整しているが、下半部にタタキ目が残っている。下半部のふくらみ部分には、補強のために外面に粘土を貼付けている。

85～86・97・107・109・113・114・120・122・125は3層出土、81～84・88～96・98～106・108・110～112・115～119・121・123・124が3層下部出土土器である。

82～86・88～92は壺である。口縁が判明しているもので、82が長頸壺、88が無頸壺、89・90が複合口縁壺である。82の特徴は、口縁部の幅広い2本の凹線で、北部九州以外の要素であろう。88は、異質の無頸壺で、算盤玉形胴部の上中下の3段に分けて櫛描沈線紋をめぐる。沈線は、口縁部が10本、胴上部と下部が各7本、胴部下端が9本の櫛歯状工具で直線的シャープさで施している。胎土は、細砂(雲母・角閃石・白色粒)を含むものの精製されたものを使用し、内面が黄橙～暗橙色、外面が黄橙～黒色の焼成で仕上がっている。口径8.0cm、器高10.0cm、底径3.5cmの完形に復原できたもので、山陽地方のIV様式の凹線紋の無頸壺との関連が問題になる。89・90の複合口縁中型壺で、89が在地系、90が外来系。89の頸部が直立するところが若干在地のものとう違うが、複合口縁は90と比較するまでもなく北部九州に通有なものである。90は、短頸で頸部から直接内湾する広幅の口縁部、頸部下端の刺突文、胴内面下半のケズリなどが瀬戸内の要素であろう。底部は、85が若干上げ底、83・86・88・90が平底、82・84・91・92が凸レンズ状底をしている。



第18図 長通4区大溝2~3層出土土器実測図(大溝7)(1/4)

87・93～112は、甕である。97・107・109が3層、その他が3層下部出土である。93～95・98～103・105・106～111は、在地系の甕であるが、99の口縁先端の凹線や102の口縁端部の摘上げ気味なところと胴部内面のケズリ状ナデに瀬戸内の影響が見られる。100は、球形胴と直立に近い口縁部が特徴で、短頸壺に近い形態をしている。96・97・104・112は、外来的要素が強いもので、96・97・104の摘上げ口縁と全体的な形態が北部九州的でない。96は、胴部径に対する口縁径の小ささと肉厚な胴部外面の密なハケ目が特徴。97は、細味の胴部の外面の荒いハケ目、内面のケズリ状ナデ、手捏による上底で、全体的に歪で荒い調整となっている。104も全体的に歪んで、口縁部のみ瀬戸内的特徴をもつ。108・109は、手捏状の小型甕で、108が胴部内面にケズリ状ナデ調整が見える。

93～95・98～103・105・106の在地甕は後期中頃を主体とし、101が後期前半の可能性がある。87・112は前期末、110・111が中期前半の甕である。110は、短く厚味のある口縁部と直線的胴部が特徴。87・112は、口縁端部両側のキザミ目と竹管紋が特徴で、口縁下の3本の沈線も幅が広く凹線紋的である。

113～117は、117が在地系、他が外来系高杯である。113・114は3層、115～117が3層下部出土である。113は、短脚で丁寧なミガキ調整が瀬戸内系、114が脚の外面裾部の不連続沈線が異質で所属不明。弥生前期高杯で、脚部下半の段が沈線に変化するものがあるが、位置が低くすぎることと、脚の角度が前期のものと違っている。115・116の高杯杯部は、屈曲部が直立する型式で、直立部が115は各面が平坦であるのに対し、116は凹凸があり、瀬戸内系の凹線紋の名残があり古さが見られる。117は、弥生中期の鋤先口縁系統の在地高杯で、外反した口縁、深味のある杯部、中実の脚部が特徴。全体に表面が摩滅しているため、ヘラミガキは脚部に見られるだけで、ハケ目も残るところから、丁寧な調整となっていない。

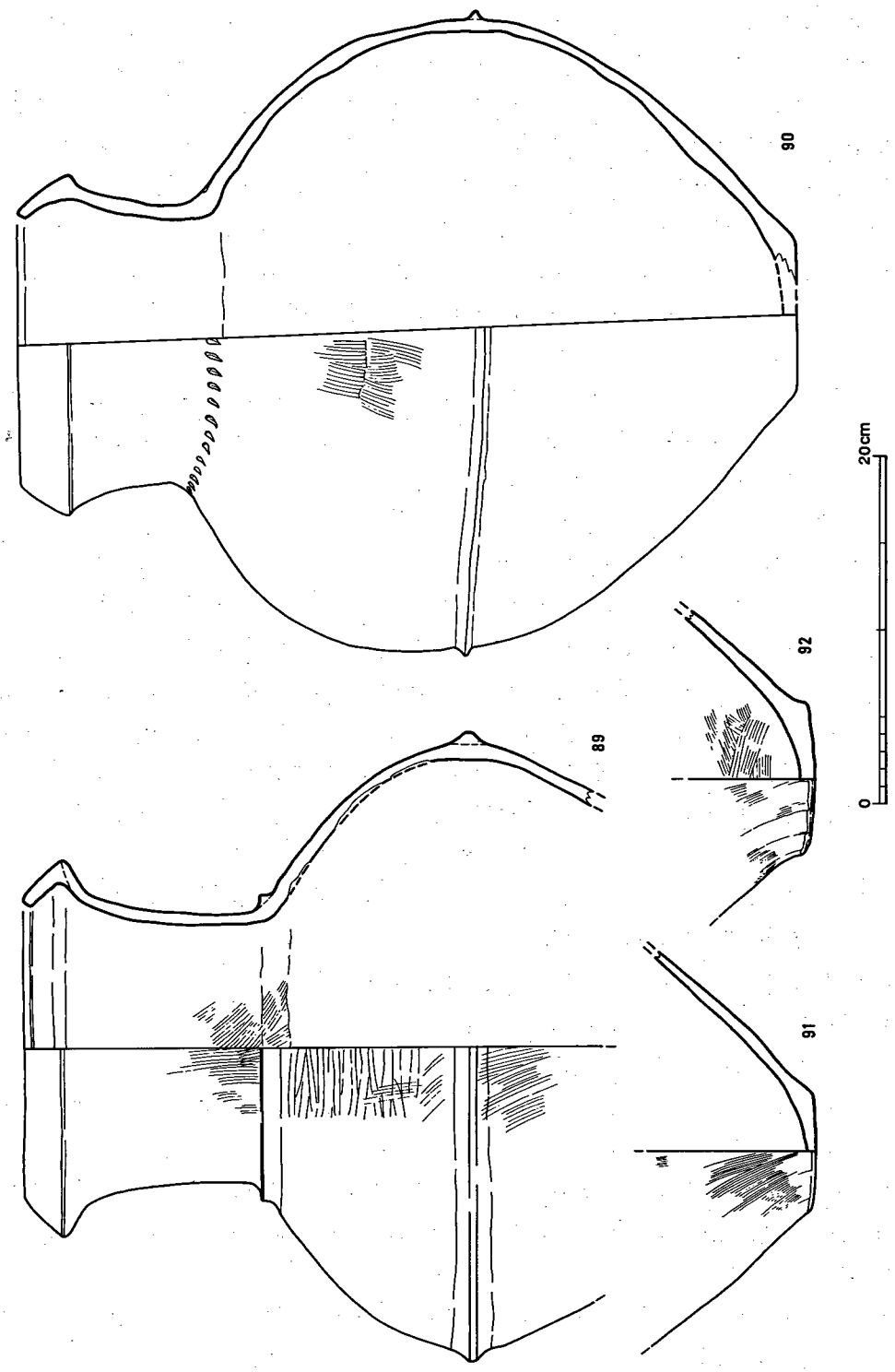
118は器台で、口縁と裾径に対して中間のくびれが細い点が違うが、在地系のものであろう。口縁部端の沈線状くぼみも違う要素であろう。

119は支脚である。上面の円孔は大き目で、内面のしぼり、外面のナデは荒い仕上げで、2次的に熱を受けているので、炉で使用したらしい。

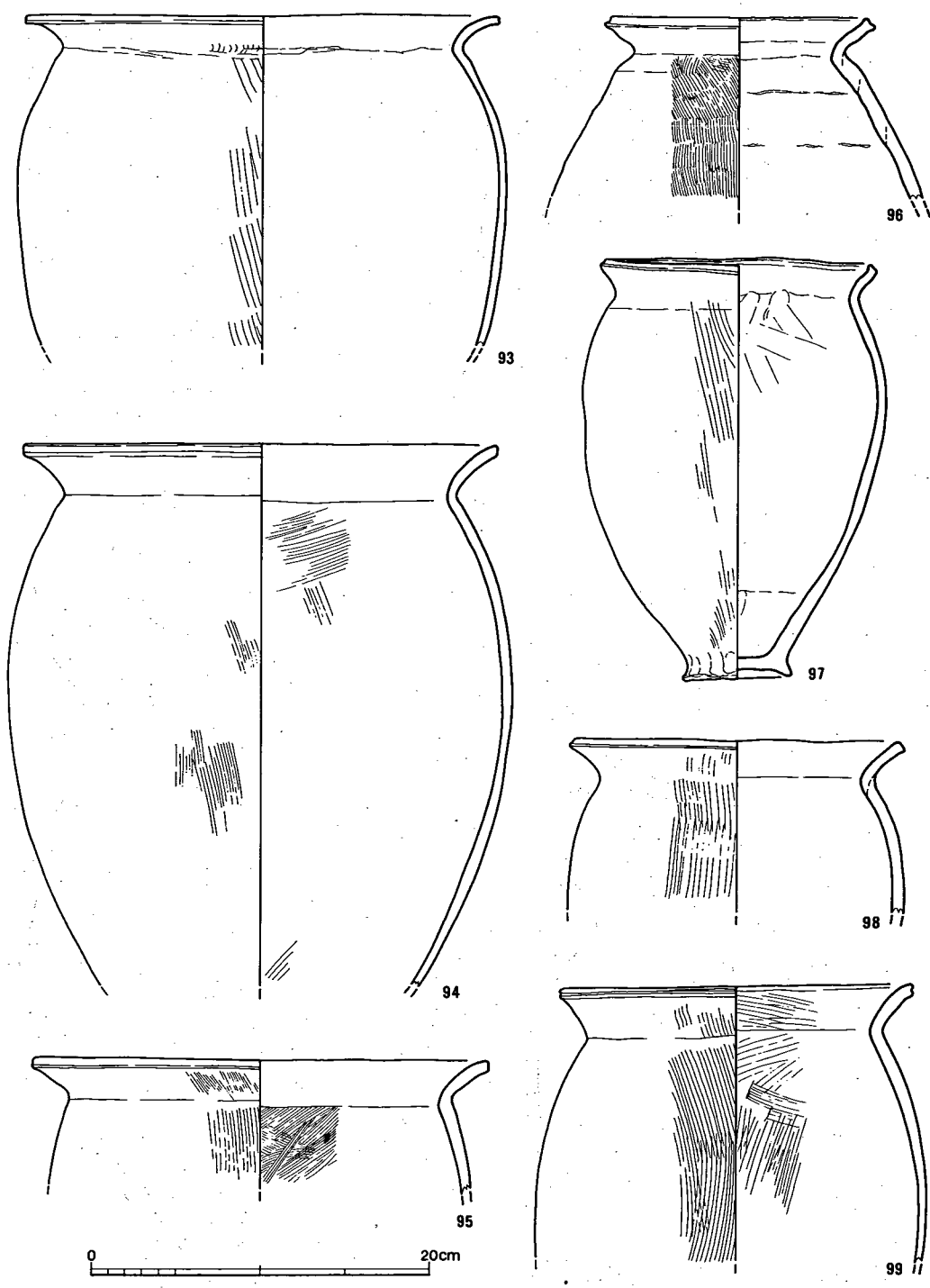
120・121は鉢で、120が3層、121が3層下部出土であるが、120が精製土器で平底であるところから後期初頭で古く、121が内面に指ナデ、外面底部付近にケズリが残るなど後期後半の特徴が現われ、新しい要素となっている。

122～125は鉢で、122・125が3層、他が3層下部出土である。122・125は胴部に丸味があり、125以外は底部をまだ強調した作りとなっている。123は、全体に手捏的な荒い作りで、外面に工具痕も多く見られる。

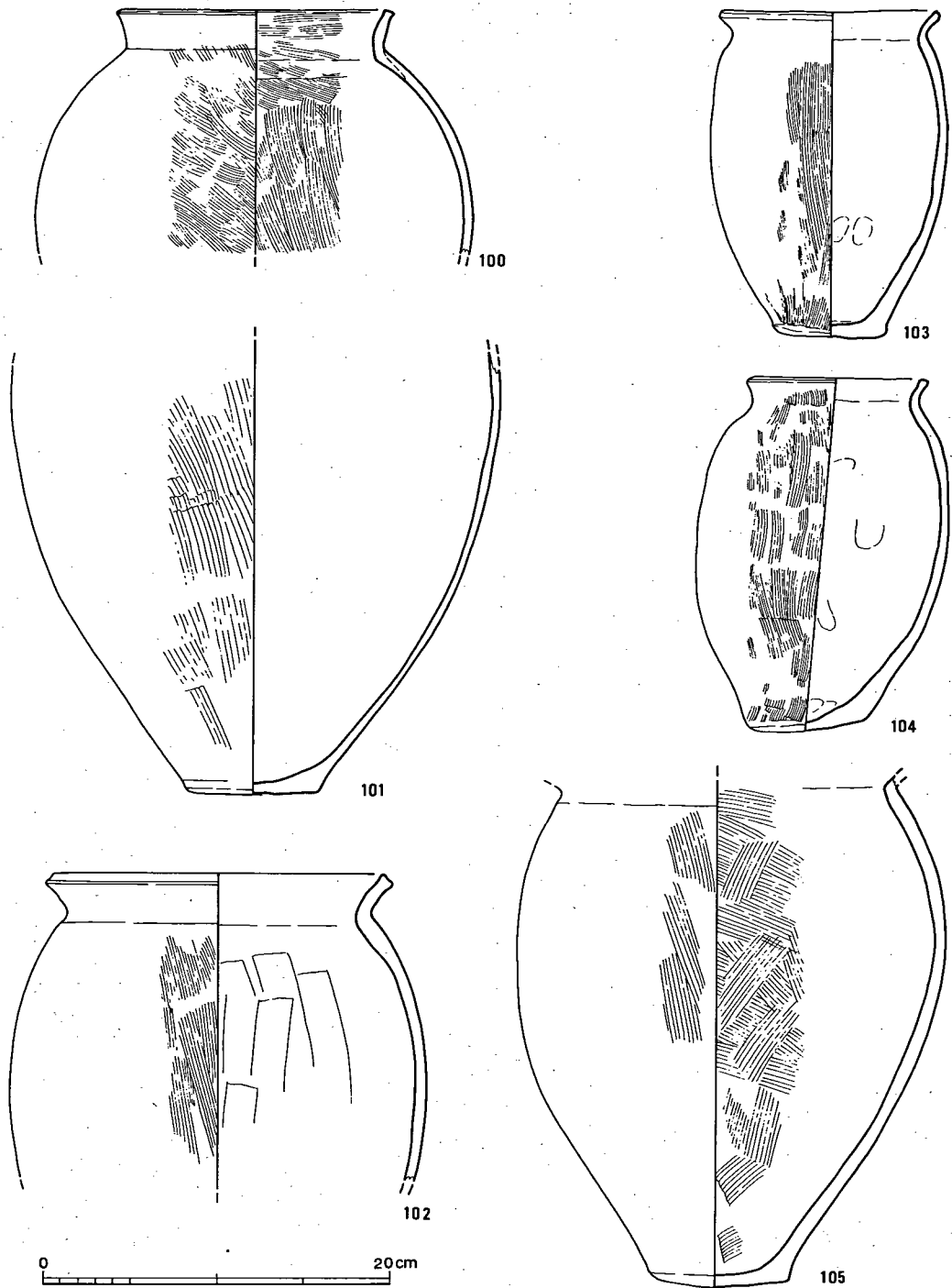
126～132は4区大溝4層出土土器で、132のみ破片が3層下部と両層にわたって出土し、反対に128が4層下部出土である。



第19图 長通4区大溝3下層出土土器実測図(大溝8)(1/4)



第20图 長通4区大溝3下層出土土器実測図(大溝9)(1/4)



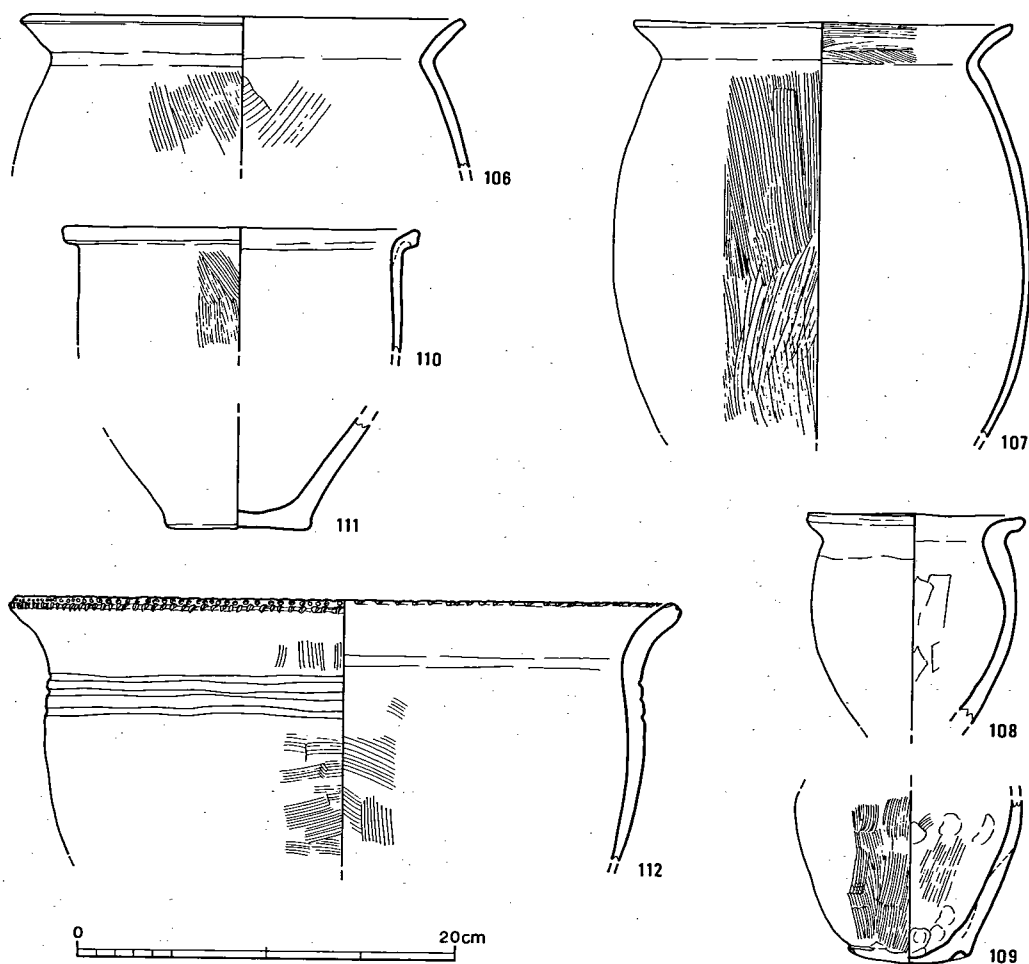
第21図 長通4区大溝3下層出土土器実測図(大溝10)(1/4)

126～128は長頸壺に分類できるであろうが、126の口縁が大きく外反し、128が口縁下に三角突帯1本をめぐらす。双方共に口縁端部を摘上げる特徴をもち、126・127が後期前半から中頃、128が中期に属する。

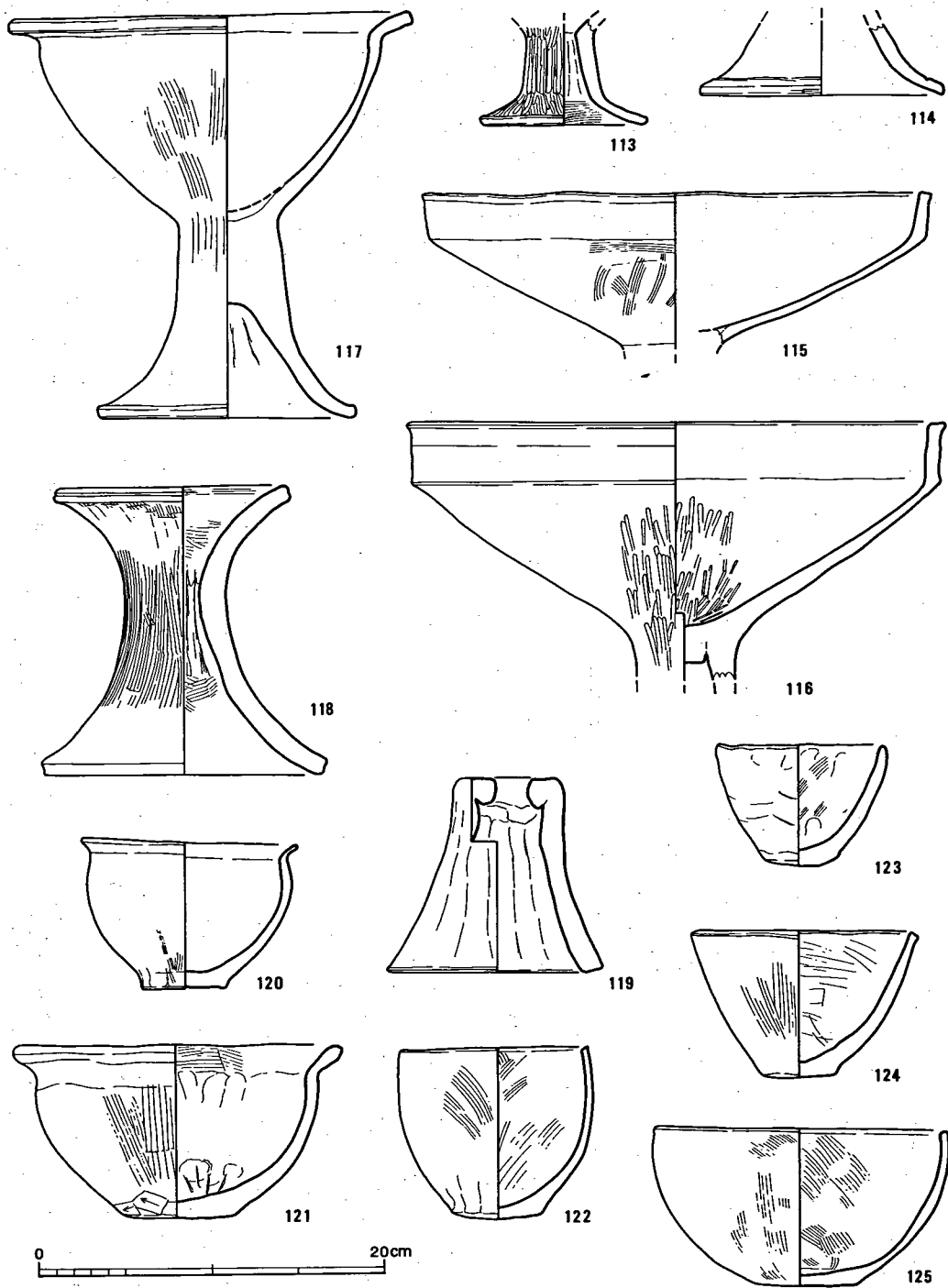
129・130は小型鉢で、胴部は129が直線的で、130が丸味があり、内面に指痕と工具痕がある。

131は小型甕で、手捏的ではあるが、内外面にケズリ状の工具によるナデが残っている。132は胴部に丸味のある甕で、口縁端部が摘上げ状を呈する。

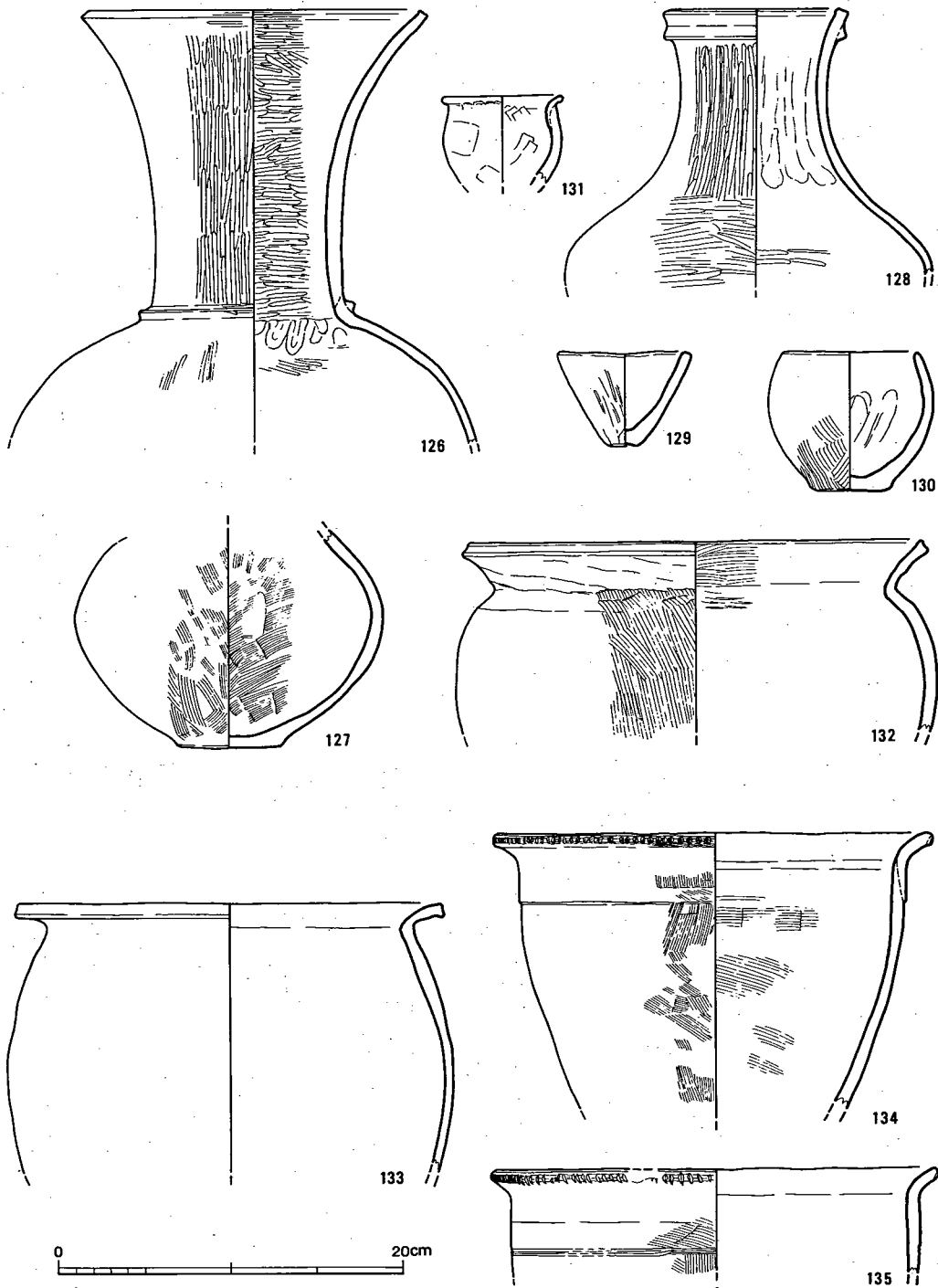
133～135は、4区大溝5層出土土器で、133が後期前半、他が前期後半に属する。133は、口縁部端に幅をもつところが古いが、胴部の丸味のある張出しが新しい。134は、キザミ目口縁下に小さな段をもち、135が小さな2本の沈線をめぐらしている。キザミ目は、134が口縁先端に、135が下端に施しており、135が新しい要素をもっている。134の口縁部のキザミ目には木目が明



第22図 長通4区大溝3下層出土土器実測図(大溝11)(1/4)



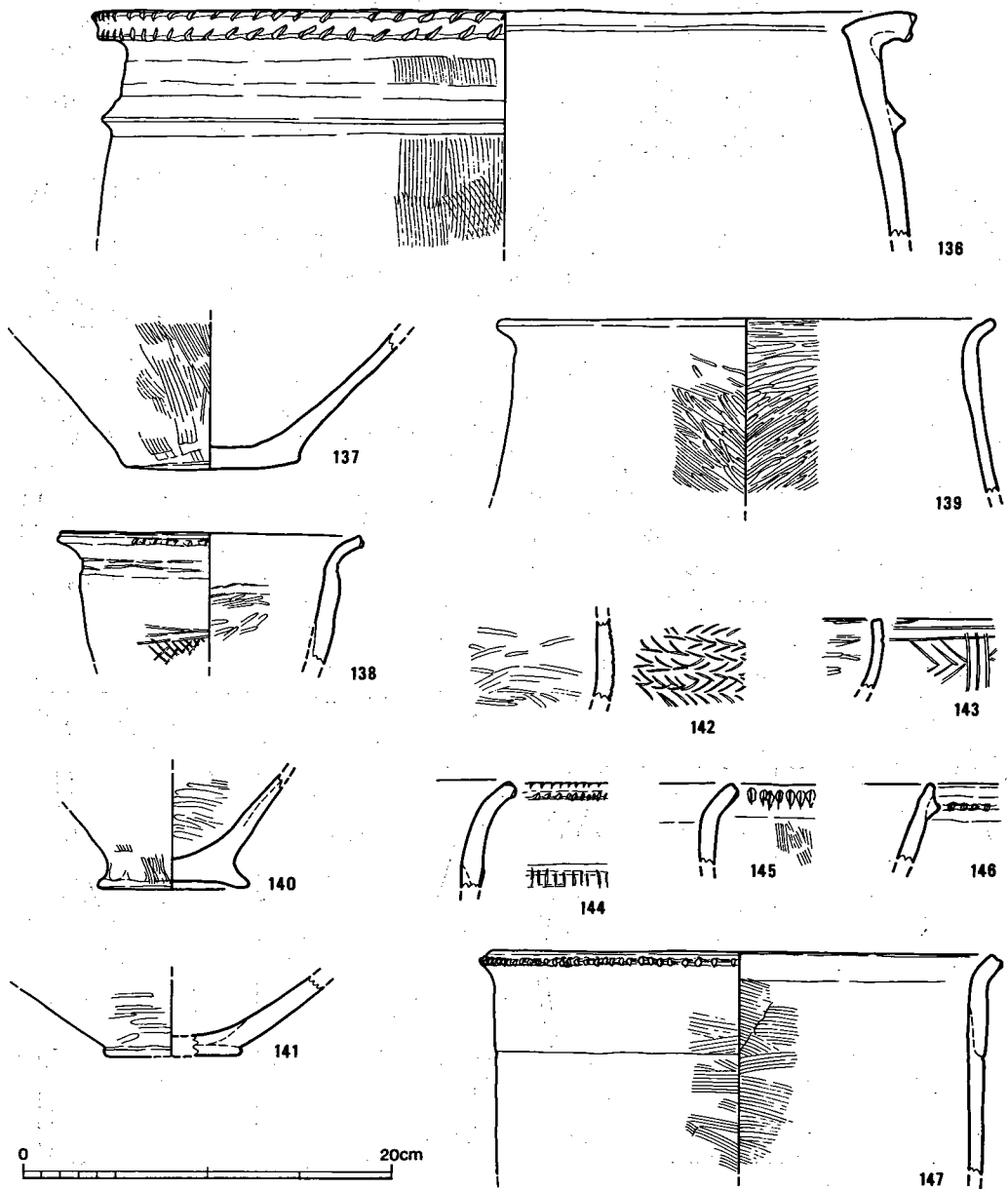
第23图 長通4区大溝3層出土土器実測図(大溝12)(1/4)



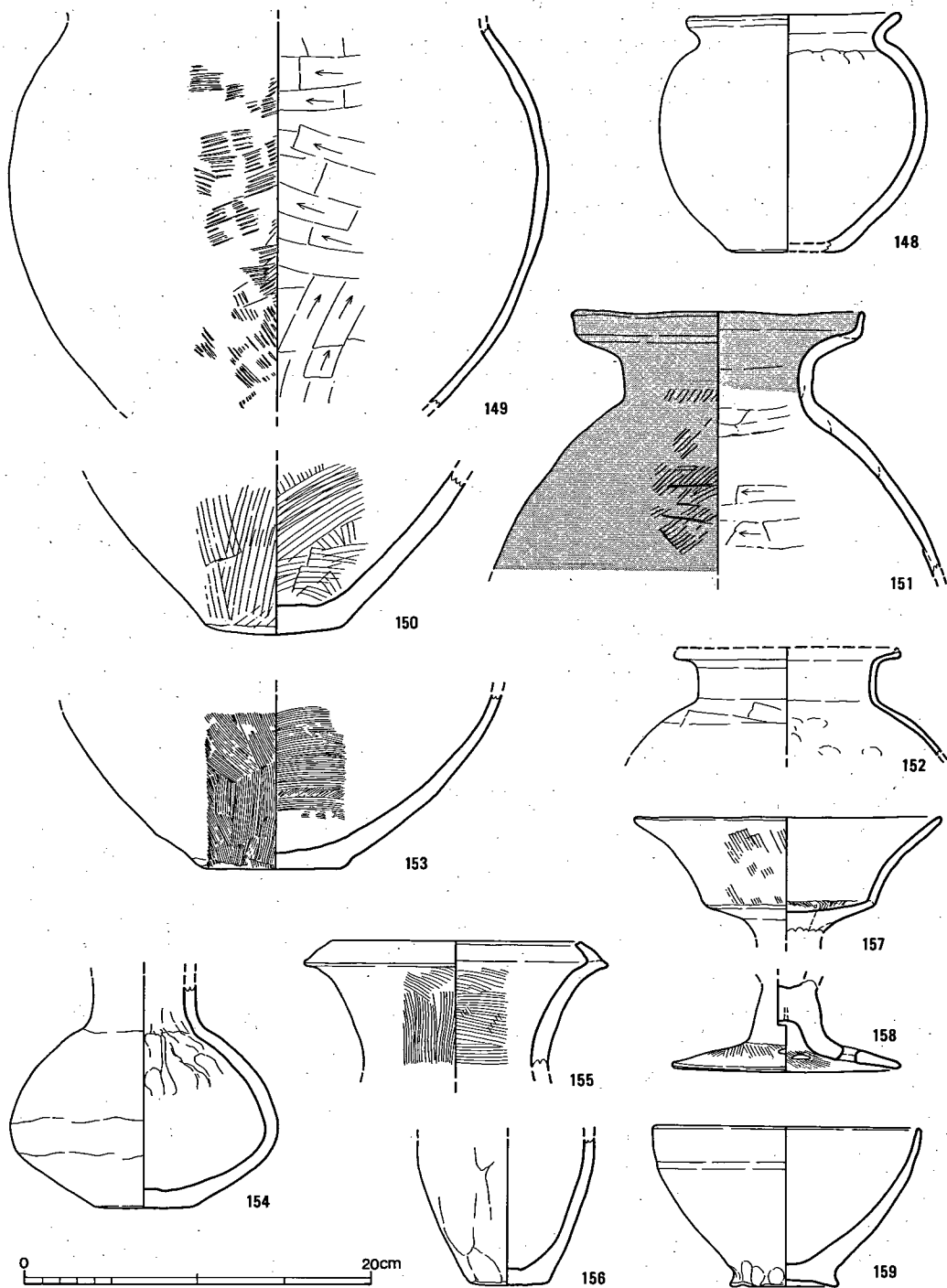
第24图 長通4区大溝4・5層出土土器実測図(大溝13)(1/4)

瞭に残っていることから、ハケ目と同じ板の原体が施文具として使用されているらしい。

4区大溝6層出土土器は136~139で、139が壺、136~138が甕である。139の壺は、口縁部の厚味のないゆるやかな屈曲と内外面の丁寧なヘラミガキ、精製された淡黄褐色の胎土に夜白式的要素を備えており、この時期としては大型の部類となろう。



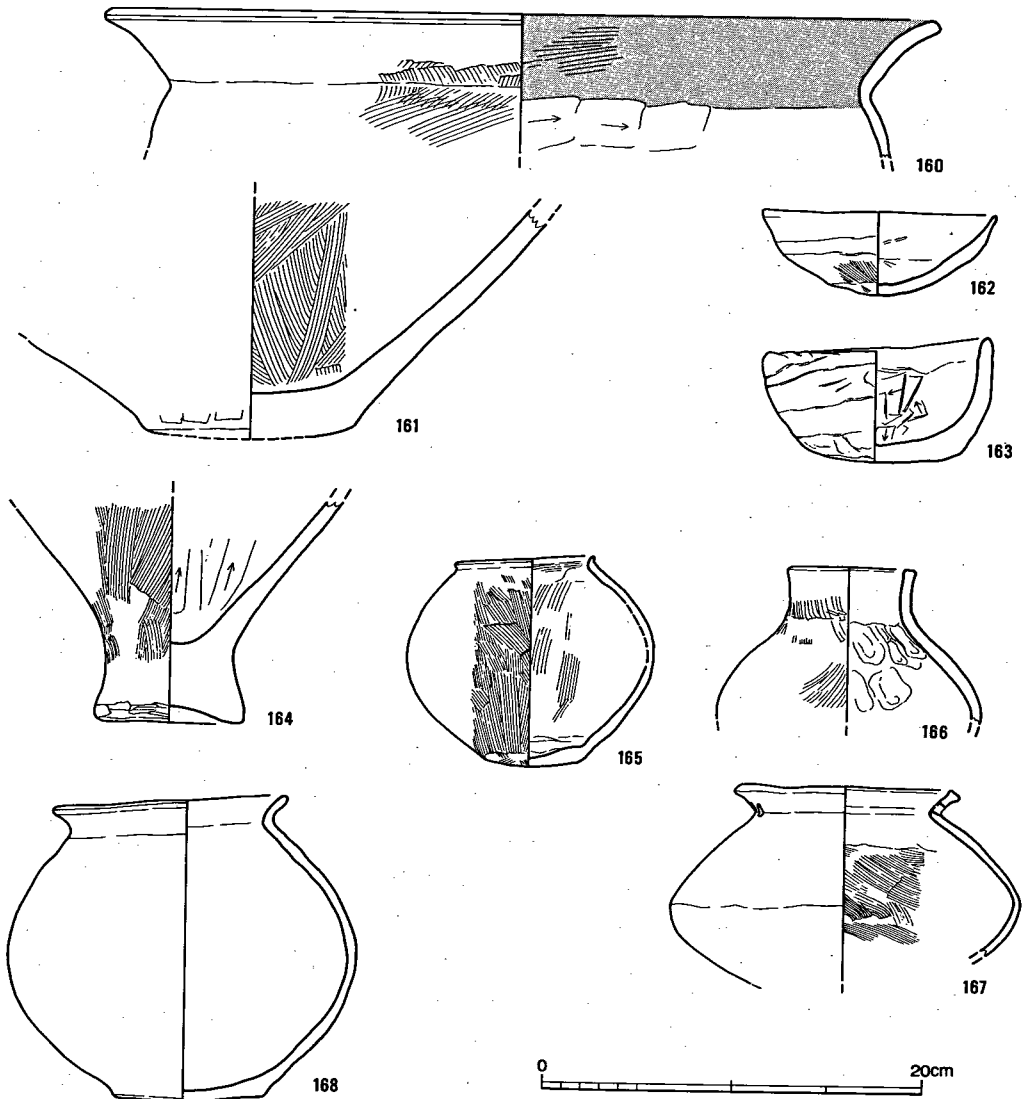
第25図 長通4区大溝6～最下層出土土器実測図(大溝14)(1/4)



第26图 長通5区大溝2層出土土器実測図(大溝15)(1/4)

136は、短く屈曲する逆L字口縁端の上下にキザミ目を施し、口縁下に三角突帯1本をめぐらしている。時期は、口縁部が短い点とキザミ目が残るところから中期前半であろうが、北部九州ではこの時期にキザミ目が残らない。137は、底部が凸レンズ状を呈するところから後期中頃のもの。138は、荒い仕上げであるが、口縁下端のキザミ目、口縁下の2本の不連続沈線、胴部外面の格子目状沈線、内面のミガキなど小型甕ながら施文を試みている。時期は、前期末。

4区大溝7層と最下層出土土器は140~147で、140~143が壺、144~147が甕である。



第27図 長通5区大溝2・3層出土土器実測図(大溝16)(1/4)

140は、内面にヘラミガキがあるところから鉢である可能性が強いが、上底気味の底部が特徴。141は、底部に前期でも古い特徴を残す。142は、綾杉紋、143が綾杉紋と直線紋の組合せであるが、143が無頸壺であろう。双方共内面はヘラミガキ調整されている。

144・145・147は、ゆるやかな外反口縁にキザミ目をもつが、144が上下2段に施している。146は口縁端外面の突帯に小さなキザミ目紋を施す。144・147は、口縁下に段を有するが、144にキザミ目があり、147にはない。

5区大溝出土土器は、148～244と特殊土器の1～11、朱付着土器の1～15である。

5区大溝1層出土土器は、第25図1の短頸壺で、口縁部の丸味のある屈曲、底部角の丸味などから後期後半のもので、全体的に摩滅しているところから表面の調整は不明。

2層出土土器は、149・150・156・161・164が甕、151～155が壺、157・158が高杯、159・162・163が鉢である。とくに149・151・153・158は、層位の逆転のある東南部出土で、古式土師器を主体としている。

149は、外面に1cmに5本の割の細いタタキ目、内面が丁寧なケズリで、器壁が5mm前後の厚さがある。器壁の厚さから庄内式でも新しいものに属するであろう。150は、レンズ状の底部から後期後半の甕。

151・152は、複合口縁状の摘上げ口縁をもつもので、152が全体に器壁が摩滅しているが、直立する頸部と摘上げ口縁は四国の吉野川下流に見られる特徴。151は、胴部外面にタタキ目だが、内面のヘラケズリ調整が完全でないために粘土の継目が残し、胴部中頃と上半の重ね方の違いがわかる。151の頸部内面から外面にかけて淡橙褐色の丹塗または化粧土が見られる。いずれも庄内式古相に併行する瀬戸内系土器であろう。153は、球形胴の内外面の細かいハケ目調整が特徴で、外面の一部に煤が付着している。154は長頸壺で、下半に重心のある胴部が特徴。155は複合口縁で、口縁部の屈曲が小さいところから後期前半のもので、4区3層出土の破片と接合できた。

156は小型甕で、外面にケズリ状のナデが残っている。

157・158の高杯は、158の短脚が岡山の才の町式、157が庄内式に相当するものであろう。

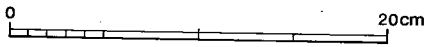
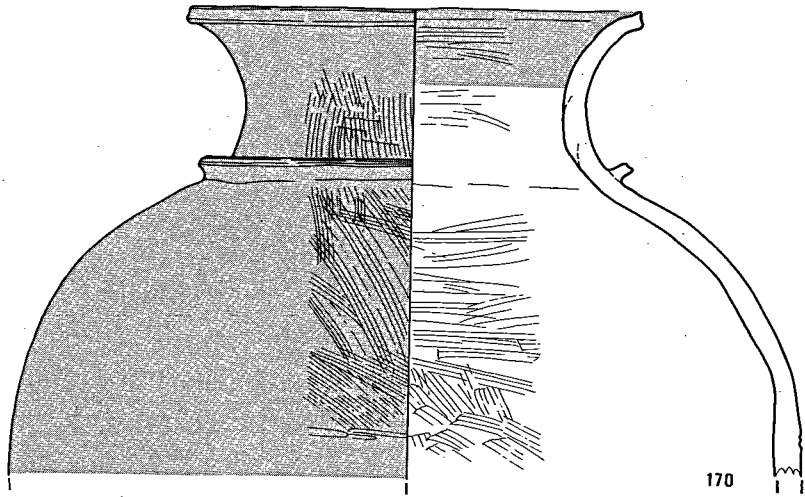
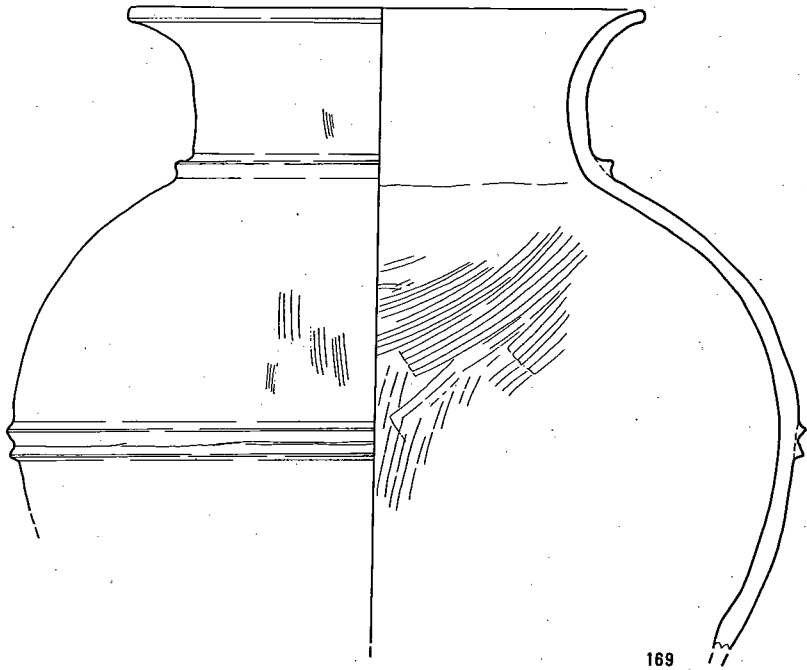
159の鉢は、上底と口縁下外面のわずかな段が特徴である。

160・161は中型の甕であるが、160の大きく外反する口縁内側に丹塗らしき痕跡、胴部内面がヘラケズリがある。162の内面にはハケ目が残るが、外面は摩滅している。双方共に後期後半であろう。

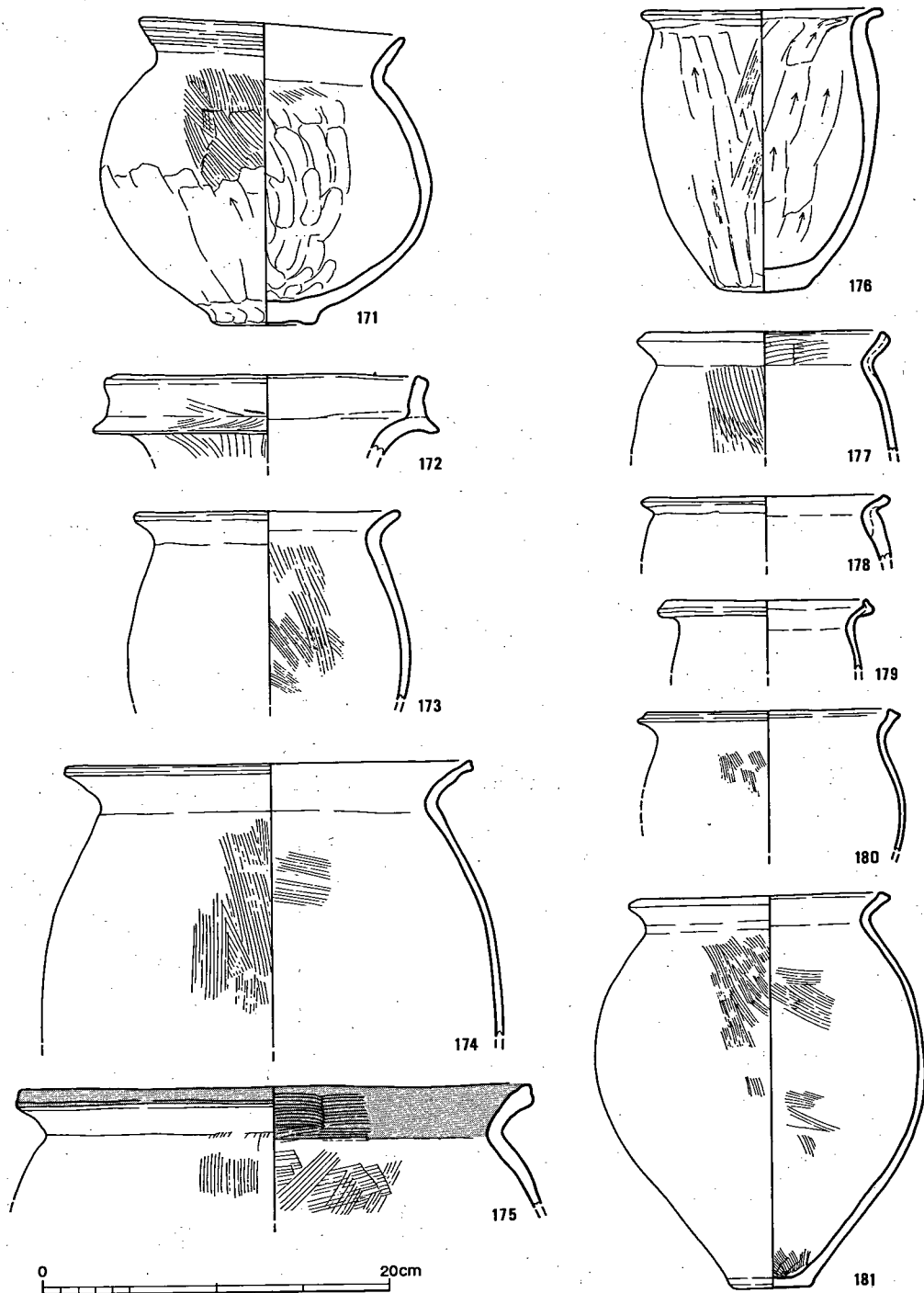
162・163の鉢は手捏的で、162の外面がケズリで丸底とした後にハケ目調整をしているが、163は未調整のままである。

164の甕の底部は、厚味のある上底の特徴から前期末から中期初頭のもの。

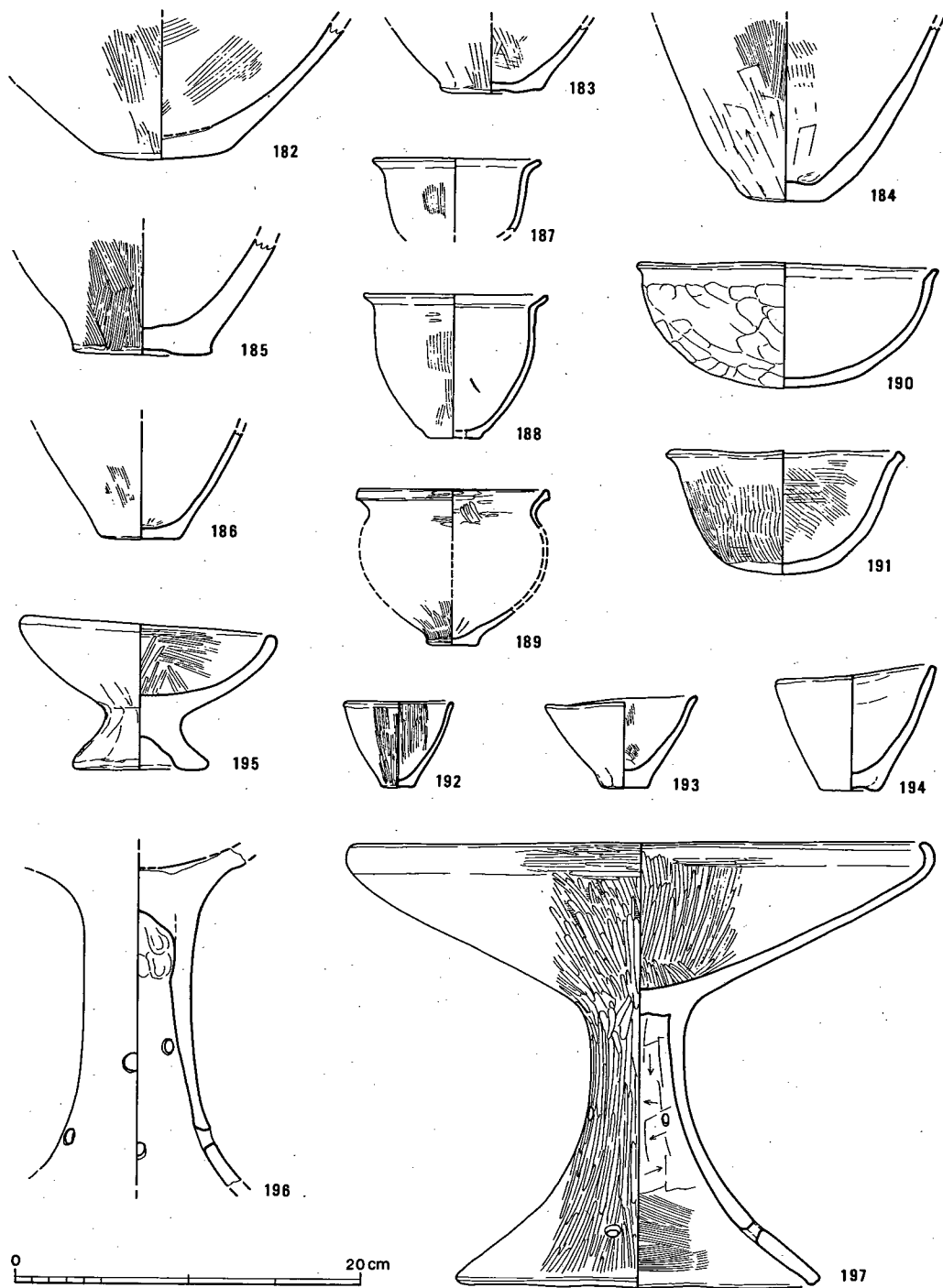
5区大溝3層出土土器は、165～172が壺、173～189が甕、190～194が鉢、195～200が高杯、



第28図 長通5区大溝3層出土土器実測図(大溝17)(1/4)



第29図 長通5区大溝3層出土土器実測図(大溝18)(1/4)



第30图 長通5区大溝3層出土土器実測図(大溝19)(1/4)

201が器台である。このうち、167・169・171・173・175・177・180・181・185～188・192・193・201が3層出土で、他が3層下部出土である。

165～168は短頸壺の各種で、167と168が時期違いの同類で、167が口縁の強い屈曲と2個2対の穿孔から中期的特色をもつ後初頭、168が口縁部と底部の丸味から後期中頃の特徴をもつ。165は、無頸壺ともいえ、底部の丸味が後期後半。166は直口壺にもなり扁球形の胴部をしている。

169・170は在地系の中型広口壺で、169が三角突帯、170が台形突帯をめぐらし、170が外面丹塗りであるところから時期差を示している。170は、胴部突帯が剥離しているが、頸部下端のような台形突帯が2本めぐらされていたものと思われるところから後期前半、169がそれより新しい後期中頃のもので、出土層位が下位のものが古くなっている。

171は、器形を全体的に見ると在地系の短頸壺であるが、いくぶん長目の口縁外面に擬凹線紋を施し、胴下半外面にケズリがあるにもかかわらず、強調された平底を備えている点が違っている。在地系であると、胴下半部外面にケズリを入れるのは、胴下半を細くしたり、丸底にするため、明瞭にその痕跡が見られるようになるのが後期後半になってからである。瀬戸内系土器との折衷様式であろうか。

172の複合口縁壺は、口唇部がわずかに外反しながら真上に立ち豊前地方の特色をもつ。

173～175は在地系甕であるが、178～181が瀬戸内系甕、175・176がその折衷形であろう。173は口縁部の屈曲に丸味があり、174が口縁が長く延びるところが新しく、175の口縁の屈曲度と厚味が古い要素である。175～181は、わずかなものもあるが摘上げ口縁で、177が在地系ともいえるが、176の胴部内外面のケズリが在地系にない荒仕上げとなっている。178は、短く小さな口縁と胴の厚味、179・180が口縁部のゆるやかな屈曲と器壁の薄さが特徴。181は、口径15cm、器高22.9cm、胴最大径18.8cm、底径4.9cmの大きさ。胴部中央よりやや上に最大径がある細目の下半部と口縁端の厚味に特徴がある。

182～186の底部は、その形態から182が後期後半の壺の可能性、183が後期中頃、184が後期後半、185が中期、186の胴下半が細目であることから外来系であろう。

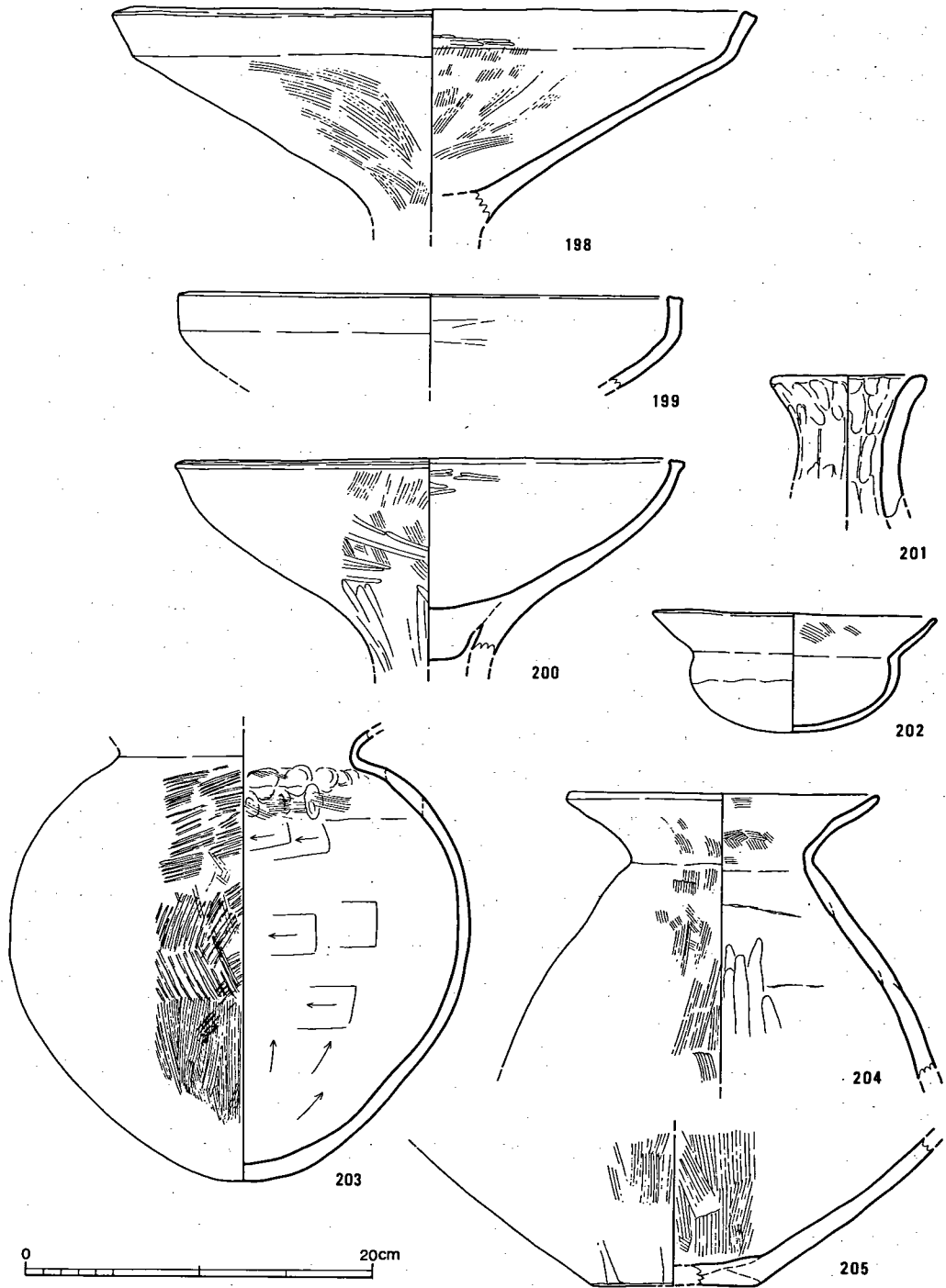
187～189は鉢形の甕で、189が瀬戸内系で口縁部に平坦面をもち、内外面の一部にミガキが残っている。口縁部の特徴は、山陽地方に関連するものであろうか。

190・191は鉢で、190が外面ケズリの後にナデられ、2層と3層下部からの出土で2層のものが混入したのであろうか。双方共に、口縁端部の摘上げが似ている。

192～194は小鉢で、平底である点など形態的に同じであるが、192のみ内外面がタテミガキで仕上げられている。

195は、高杯というより手捏的な台付鉢であるが、杯部内面がミガキ仕上げとなっている。

196～200は、外来系高杯であるが、197のみ分布の中心が豊前地域。197のように杯部先端が内側に小さく丸味をもって屈曲する形式は、山陽の備後・備中や四国の伊予地域の第IV様式な



第31图 長通5区大溝3・4層出土土器実測図(大溝20)(1/4)

どにある屈曲部外面に凹線紋を施す形式に系譜をもち、豊前地域で後期中頃に出現する。しかし、197は脚柱状部内面のケズリや裾端部のわずかな内湾が後期後半の特徴を明瞭に示している。しかも、脚部中段の3カ所の円孔、下段の2個対で3カ所の円孔の多さも196と同じく新しい要素である。杯部内外面と脚部外面は、丁寧なヘラミガキで仕上げられている。

198～200の外来系高杯は、198→200の順に古くなり、北部九州では後期中頃に編年され、198が杯部の外反する高杯に型式変化していく。

201の器台は手捏的で、2次的に熱を受けており支脚として使用されている。

5区大溝4層出土土器は202～211で、このうち202～206・209が部分的に層位に問題がある東南部端の一括出土品である。

202は鉢に分類されるもので、浅い皿状の体部から屈曲して大きく開く口縁部をもつ。口径16.3cm、器高6.9cmの大きさで、体部外面下半をケズリによって丸底としたあとでナデている。

203は庄内系の甕で、丸く外反する口縁の先端を欠損しているが、胴部外面上半の左下りのタタキ目と下半部のタテハケ目が特徴。胴部器壁は5mm前後と厚く、内面のケズリも口縁のかなり下から行われている。胴最大径26.5cmの大きさ。

204は、型式不明であるが壺であろう。特徴は、肩部が張らない胴部に大きく開く口縁部をもつことで、器壁の厚さと胴部内面に残る粘土継目と指ナデ痕から精製壺とはいえない。

205・206は底部で、壺であろうか。205は平底、206が凸レンズ状を呈し、内面ケズリ後ナデとなり時期差を示している。

209は高杯で、杯部上半にわずかに段をつけて内湾する。脚部を欠損するが、短脚で瀬戸内系のものであろうか。

以上のように5区大溝東南端の4層は、弥生後期土器と古式土師器が混在している。

その他の地区の5区大溝4層出土土器は、207・208・210・211のように、弥生前期(211)・中期初頭(210)・後期前半(207)が混在しているが、土師器を含まない。

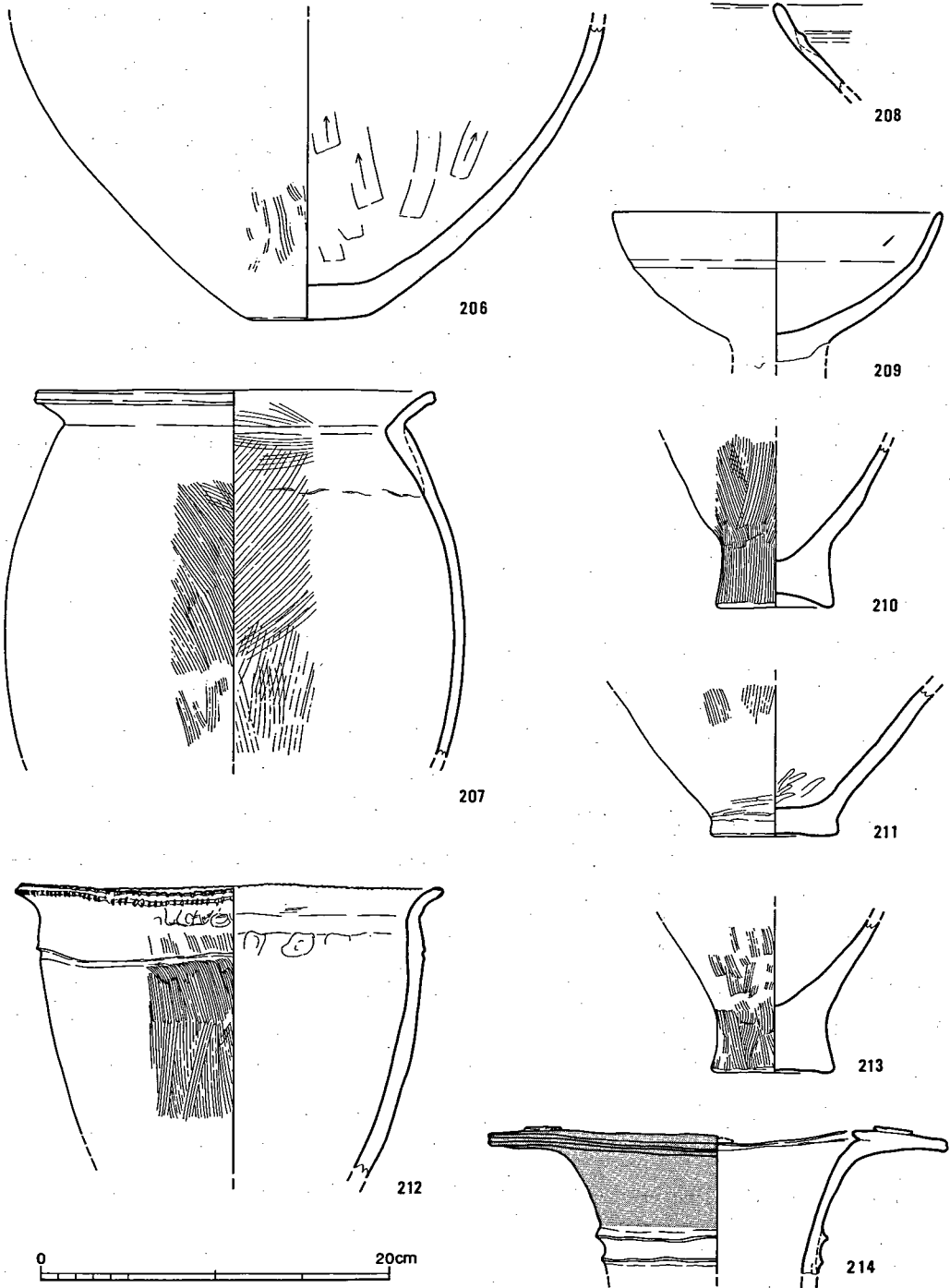
208は時期や型式が不明であるが、外面口縁下に低い台形突帯をめぐらしている。

207・210は在地系の甕で、時期差が大きくて資料価値が低い。210のような上底で厚底は、北部九州の前期末～中期初頭の特徴であるが、豊前地域で中期を通じて厚底が継続する。210はとくに底部側面をタテケズリによって、いっそう柱状に強調した後にハケ目を施している。

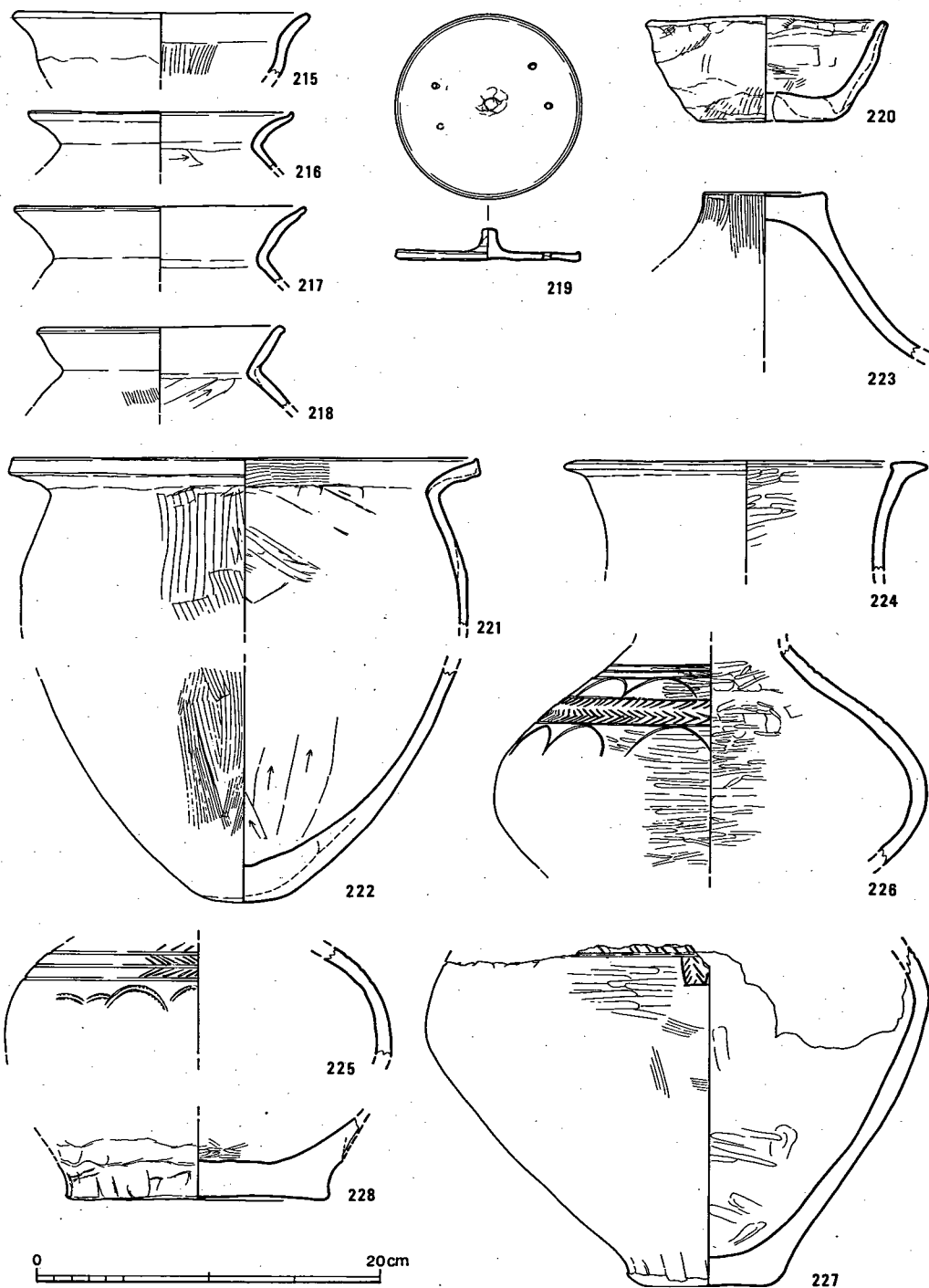
211は壺の底部で、内外面にミガキが残っている。

212・214は、5区大溝5層から出土しているが、接合できる破片が他の地区やさらに下層からも出土している。212の前期後半の甕は、4区大溝5層出土土器片と接合できたもので、丸く外反する口縁端部両側にキザミ目をもち、口縁下外面の段が沈線に変化する過程を示している。

214の中期末～後期初頭の丹塗鋤先口縁壺は、6層・7層・4区6層下部からの破片とも接合できたもので、溝出土土器の宿命であろうか。この壺の特徴は、幅広い口縁部上面に径2.2cm前



第32図 長通5区大溝4~6層出土土器実測図(大溝21)(1/4)



第33图 長通5区大溝7層出土土器実測図(大溝22)(1/4)

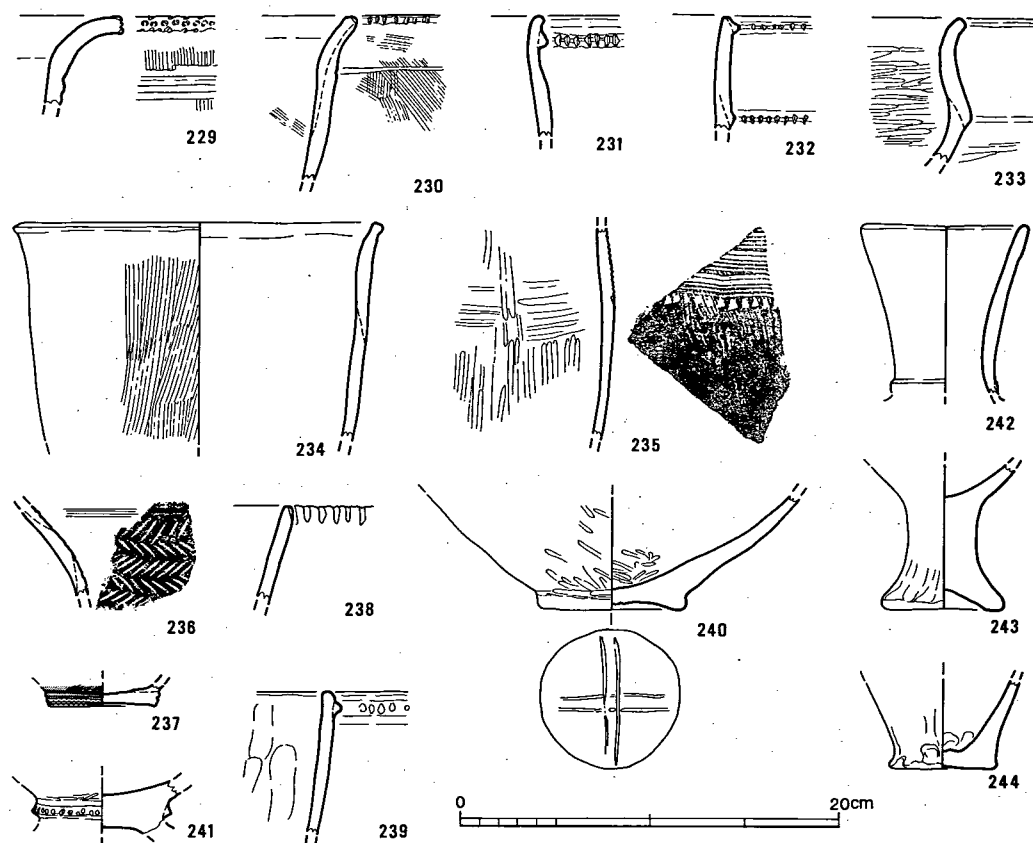
後の円形付紋が4個あることで、全体に形が歪んでいるところが、丹塗土器の退化型式というところであろう。

5区大溝6層では、213のような中期初頭の厚底甕も出土している。

土器番号と出土層位が前後するが、215～218は問題の逆転している層位の5区大溝東側3層出土土器である。215は在地系の胴外面をケズリによって丸底にした鉢で、口縁がゆるく外反している。

216～218は庄内系から布留系の甕で、216の口縁端の摘上げがあり、217と218はそれがなく順次新しくなっている。216～218は、4層東南端の土器群の古式土師器群と共に古墳時代初期に洪水等の自然力によって下層に混入したものであろう。

219は、発掘時から遺物整理の時点で出土層位が記入されなかったものであるが、北部九州にない蓋であるところから、恥を忍んで紹介する。蓋は、直径10.6cm、高さ1.7cmの小型で、北部九州通有の笠形が変化して扁平になり、中央の摘みが残ったものであろう。体部は、中央の摘



第34図 長通5区大溝7層出土土器実測図(大溝23)(1/4)

みを中心に対象の位置に2個2対の小円孔があり、縁上端を摘上げている。胎土には、極小細砂を含むが精製された粘土で、暗灰色・淡灰褐色の焼成となっている。北部九州では、笠形の蓋が中期末まで残っているところから、後期以後のものであろう。

5区大溝7層出土土器は、200～234であるが、ここでもまだ一部混乱が残っている。

200の手捏鉢は時期不明であるが、平底で安定しているので中期以前のものであろう。

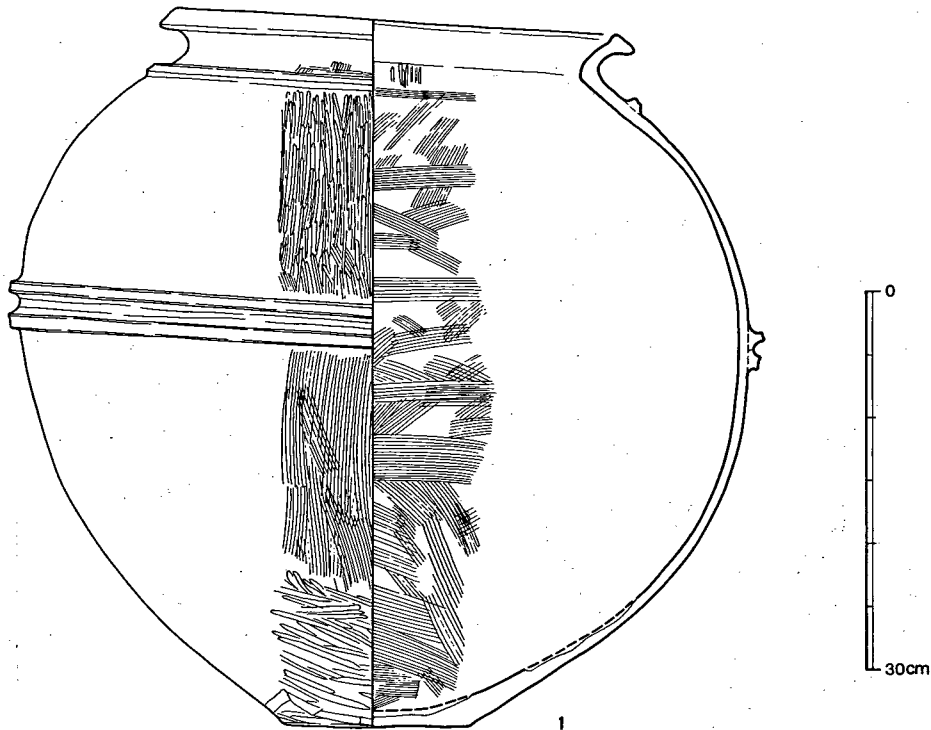
221・222は後期甕で、221の口縁端部の摘上げと口縁部が短いなどの形態から後期前半、222の底部の尖底に近いところと内面ヘラケズリから終末以後となろう。

223は、中期の大型蓋で、口縁部を欠損している。天井部の厚味がないところから中期でも新しい部類に入るだろう。

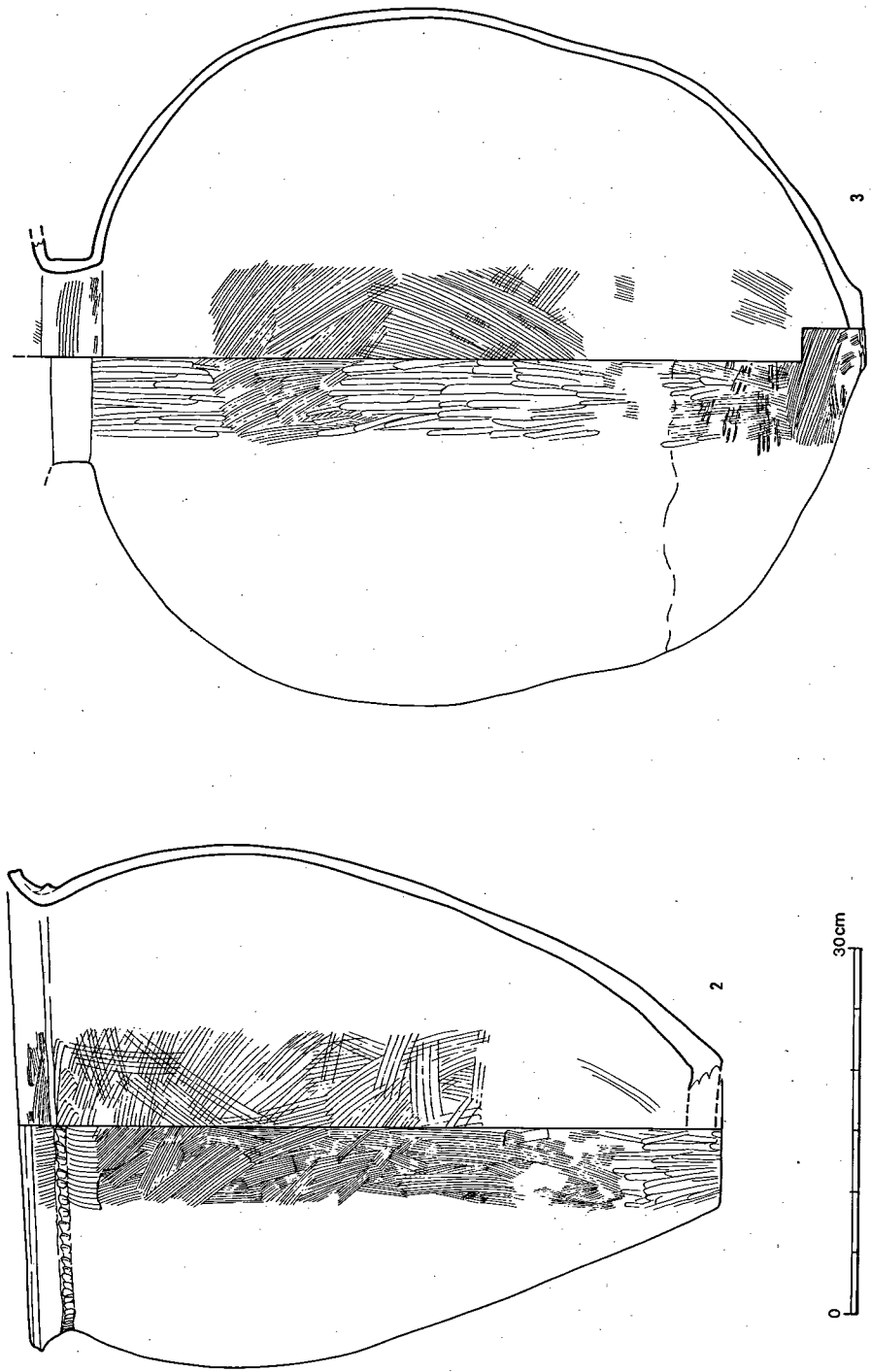
224は、鋤先口縁初期の壺で、頸部が直立に近く立ち、小さな口縁部が特徴。時期は中期前半。

225～228は7層出土の弥生前期壺で、225～227が肩部に紋様帯をもつ。225が球形胴、226が扁球形胴、227が肩張胴で、各々綾杉紋と弧紋や直線紋を組合せている。225の紋様は、貝殻状施文具による復線弧紋である。228は大型壺の底部で、内面にヘラミガキが残っている。

229～234は、7層出土の前期甕である。229は口縁端部に先割竹管紋・キザミ目紋と口縁下の



第35図 畠田大溝出土大型土器実測図（大溝18）（大溝24）（1/6）



第36図 長通大溝出土大型土器実測図 (大溝25) (1/6)

2本の沈線、230が口縁端のキザミ目と口縁下の1本の沈線、231が口縁突帯のキザミ目、232が口縁突帯とその下の突帯にキザミ目、233が胴部の屈曲と外反する口縁から深鉢形、234がほとんど外反しないキザミ目なしの甕という諸特徴を示している。231～233は古い要素、その他が新しい要素であろう。

5区大溝最下層出土土器は、235～244であるが、ここまできても一部混入が見られる。

242・243は中期以後で、242がさらに新しい長頸壺と思われるが時期や形態を知らない。243の柱状の底部は豊後以南の中期初頭の小型甕であろう。

235の甕は、口縁下に5本1組の櫛描沈線紋とその下に三角形刺突紋がめぐるところから、口縁が三角突帯状を呈するもので、広島県東部・岡山県や四国の愛媛県・香川県を中心に分布する、いわゆる「瀬戸内型甕」の前期末に属するものである。胎土に雲母・赤褐色粒・角閃石など細砂を少量含み、内面が肌色からにお橙、外面が暗茶褐色をし、外部に煤も付着している。

236・237・240は、最下層出土の壺で、236が胴肩部にヘラ描綾杉紋と2本の沈線、237が底部外周に沈線紋、240が底部外面にヘラ描復線十字紋を施している。237はとくに、外面全体に黒塗りの上に朱塗りが見られる。朱の分析をしていないが、色の鮮やかさから朱とした。237・240のような沈線紋の多様さは、北部九州にはなく、底部の沈線紋が山口県綾羅木Ⅲ式土器にある。

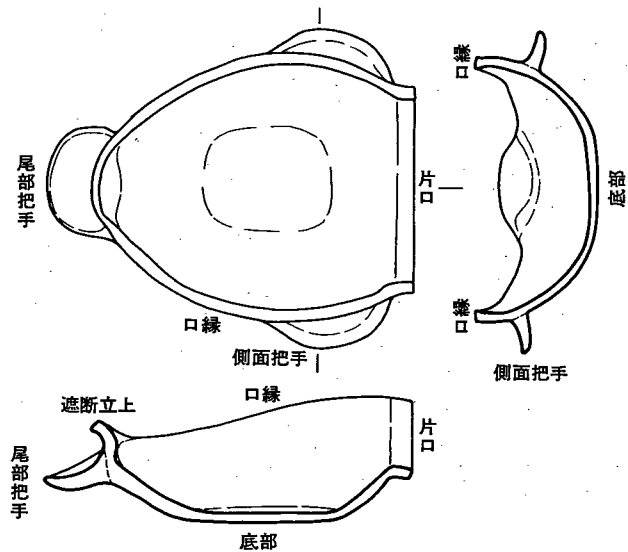
238・239・244は、最下層出土の甕であり、238が直行する口縁端外側にキザミ目、239が口縁の三角突帯にキザミ目、244が小型甕である。

広片口三耳鉢（巻頭図版

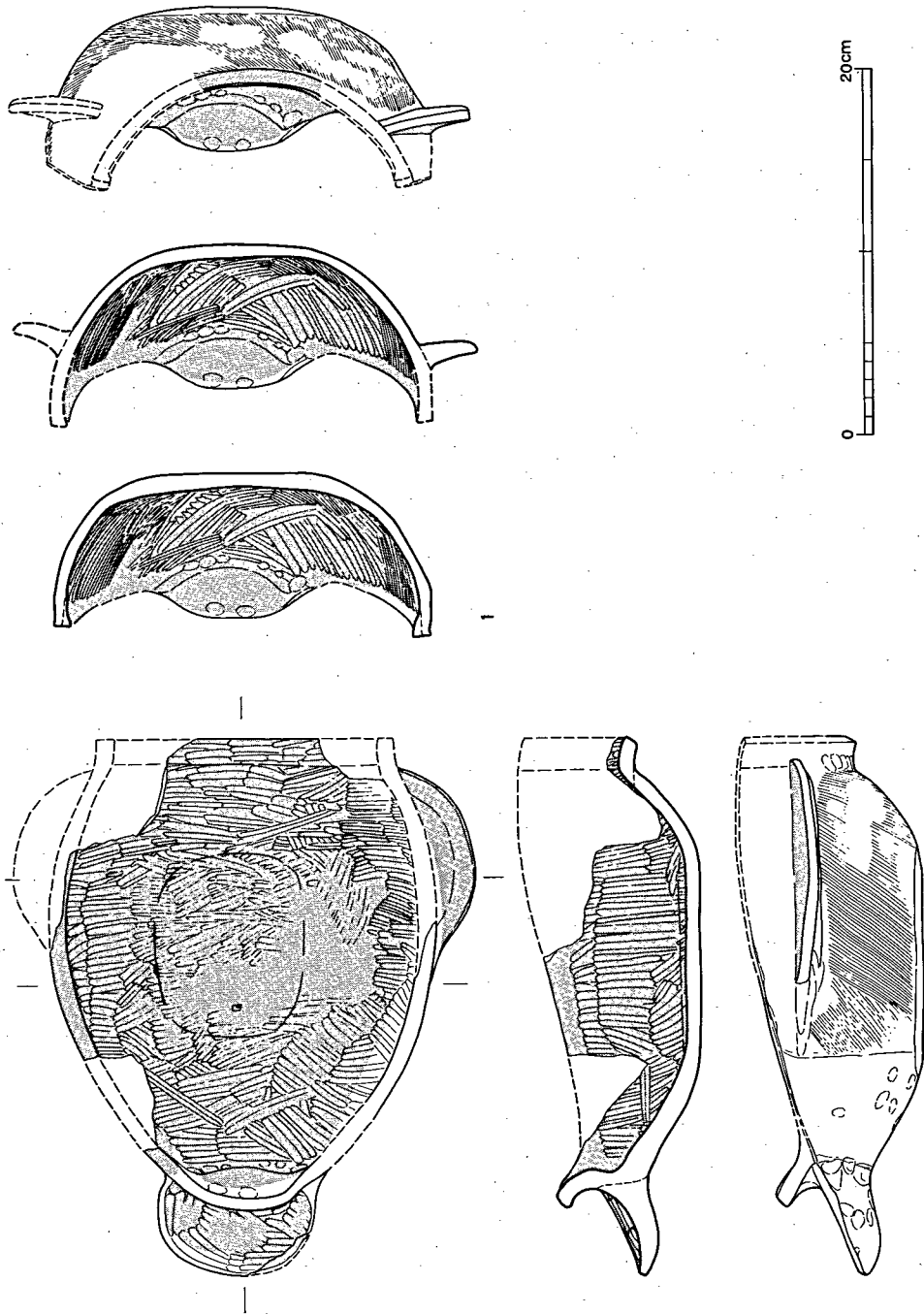
14、図版41～43、第37～40図）

長通3区大溝第3層下部を中心として、器内面に朱が付着した土器群が出土している。その大半が破片となって散乱していた。朱が付着している土器は、把手付の特殊形態のもの、壺・甕・鉢がある。ここでは、広い片口と把手(耳)が3個付く特殊形態の鉢を「広片口三耳鉢」として説明する。各部分名称は、第37図のとおり。

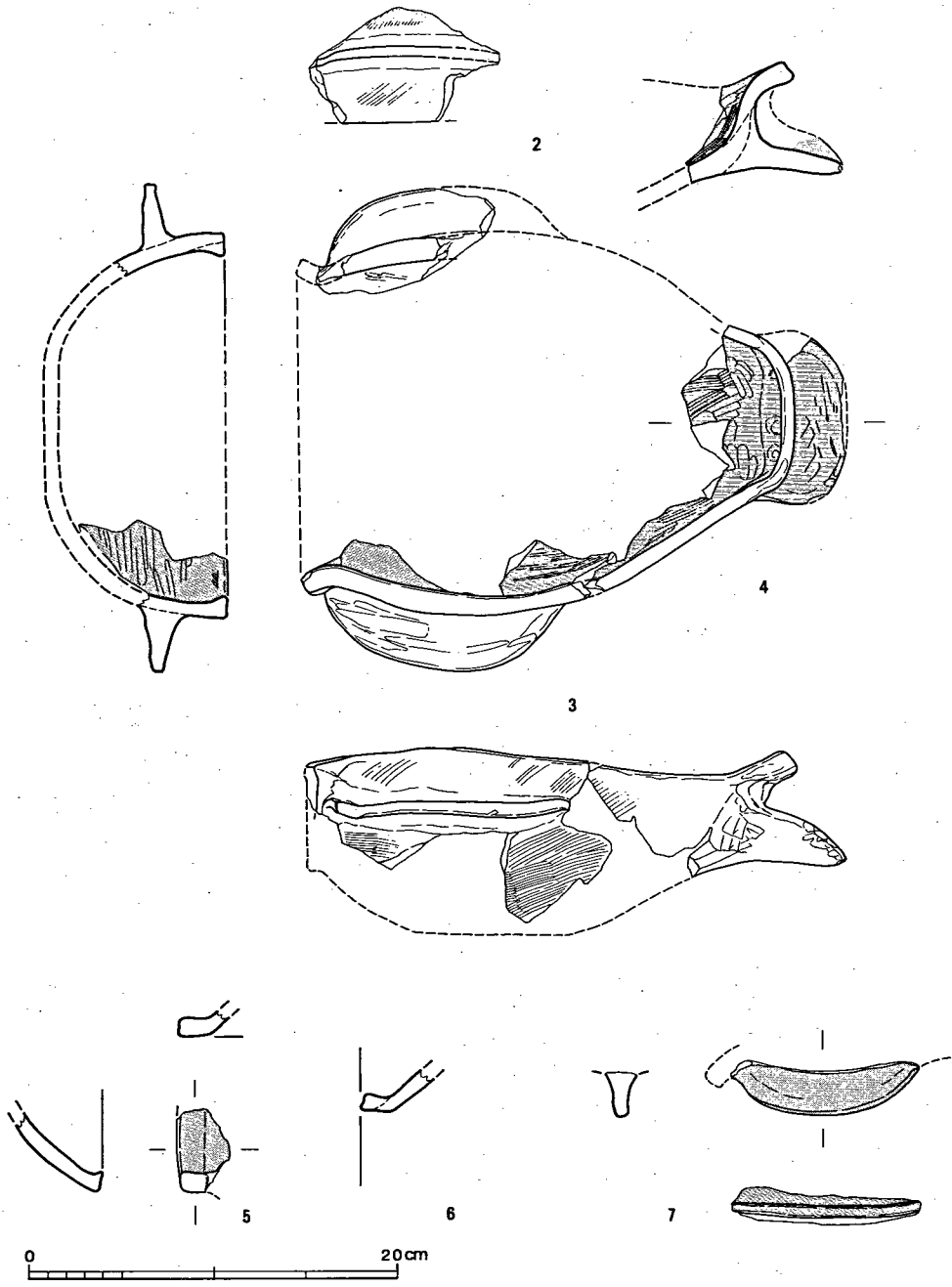
第38図は、広片口三耳鉢で唯一完形に復原できたもので、



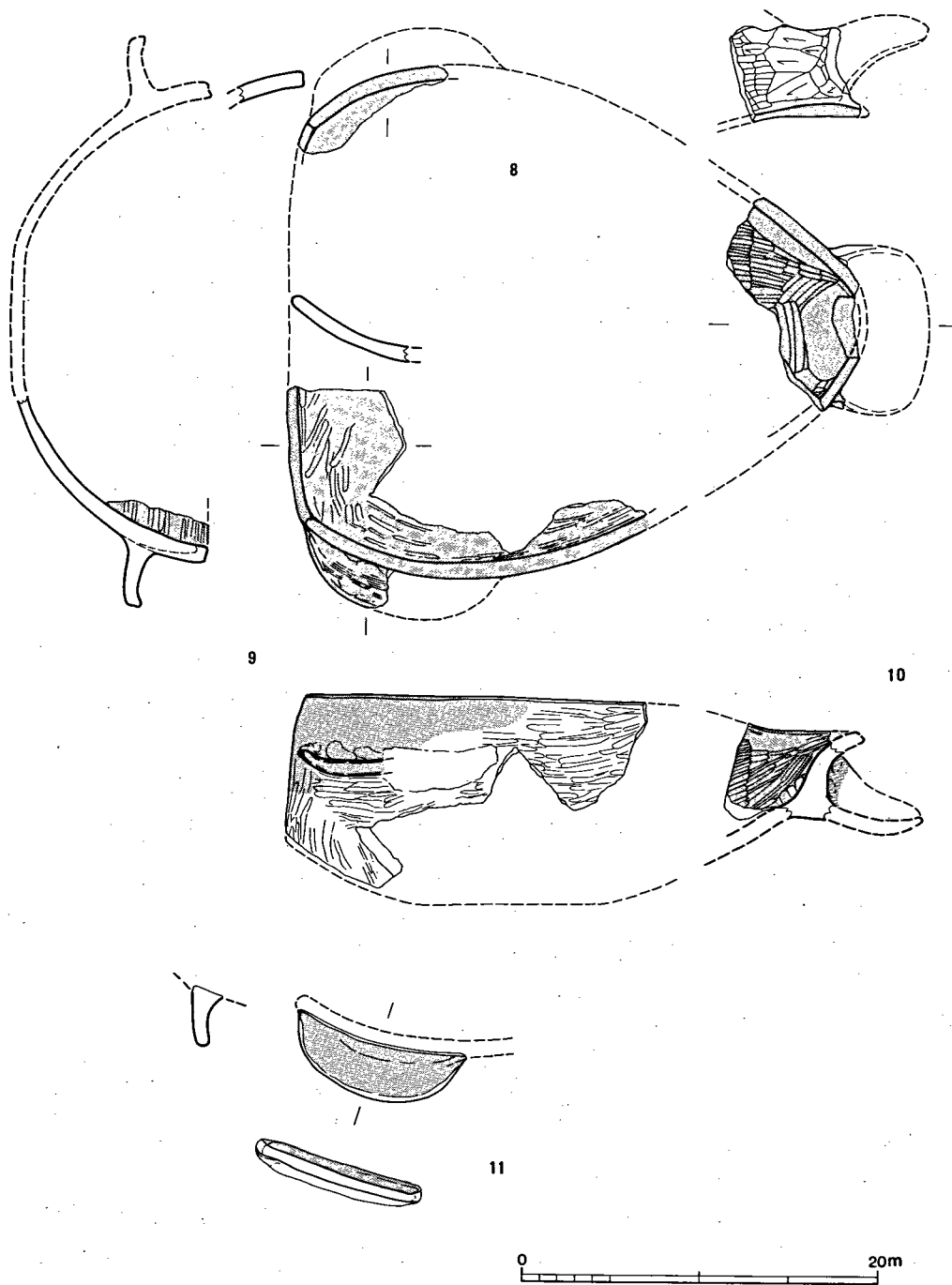
第37図 広片口三耳鉢各部名称 (1/6)



第38圖 朱付着広片口三耳鉢莢測圖（大溝26）（1/4）



第39図 朱付着広片口三耳鉢実測図（大溝27）（1/4）



第40図 朱付着広片口三耳鉢実測図（大溝28）（1/4）

全国的にも全形の実態が初めて明らかになったものである。

全体的な形態は、短頸の甕を縦切りにして、胴部両肩と底部(尾部)に耳(把手)を付設したものである。さらに安定をよくするために、胴部中央を平坦にして底部としている。胴部把手と尾部側把手の中間に輪切状に接合面があるところから、この製作にあたっては、甕の胴部下半部を最初に輪切状に切除した後に、割竹状に縦切りして、別ごしらえの尾部と把手を付設する方法をとったとも考えられる。この土器の用途は、把手が三方に付設するので、把手のない甕の口縁にあたる方が片口となり、内容物を2人で三方からかかえて、大きな片口から他の器に注ぐ目的も兼ね備えている。とくに片口と反対側の把手と容器内を遮断するように外反する立上りを付設している。

片口の口縁部は、短頸壺と同じようにわずかに外反した短いもので、胴部と接合する外面に指圧痕がある。胴部外面の把手から下にハケ目、底部外面にナデ、接合面から尾部側外面に指圧痕が残るようにナデ調整されている。胴部内面は、全面に丁寧なヘラミガキが施されているが、中央の底面が若干摩滅している。胴部把手は一方を欠損しているが、存在する一方が縁辺をヨコナデ、中央をナデ調整し、尾部把手上面がミガキと指圧痕が残るようなナデ調整をしている。

胴部内面全体と把手上面には、明瞭に朱が付着している。さらに、胴部外面の把手から下部は、2次の加熱されたための赤変や黒変と煤が付着しており、直接火に掛けて朱およびその加工品生産の一工程に使用したことが明らかである。

胎土には、石英・長石・赤褐色粒が割合多く混入し、角閃石と雲母も観察できる。色調は、内面が淡褐色、外面の熱を受けていない把手上面などが淡褐色で、加熱部分の中心が黒色で、周辺に向うにしたがって、黒褐色から赤褐色に変化している。

土器の大きさは、外形が全長29.6cm、最大高11cm、復原片口径16.2cm、胴最大幅21cmで、内法が長さ(口縁端から尾部内側)23.8cm、最大幅19.2cm、最大高9.9cmである。側面把手は、長さ11cm、最大幅2.7cm、厚さ1.2cm。尾側把手は、長さ8.6cm、最大幅5.5cm、厚さ1.6cmの大きさである。

第39図2～7は、第38図と同形態の特殊土器の破片である。朱が付着した広片口三耳鉢は、破片を形態・器面調整・胎土などから整理すると第39図と第40図のように2タイプに分類することができた。第39図は第38図と同形式で、片口に頸部をもつもの、第40図が片口がストレートで、頸部のような段をもたないものである。破片の識別にあたっては、胎土(表面)の色調はあまり参考にならなかった。なぜなら、第39図3のように接合できる破片でも出土地点と埋没条件の違いで本来淡褐色のものが黄褐色に変化していたり、同一個体においても部分において色調の違いは一般的である。

第39図のうち色調で明瞭な違いを見せるのが2で、茶褐色をしているところから、色調分類

では孤立してしまっただが、器面調整・胎土観察・把手の大きさから、3・4と同一個体であるという結論に達した。

2は、片口の頸部と把手の3分の2と口縁の一部の破片である。出土したのは、長通2区溝1東下層であるから、同形態土器破片のうちで最も北側に流されて出土した破片であり、遺跡全体が鉄分の多い水質であるところから茶褐色に変色したのであろう。器面調整は、胴部外面が斜方向のハケ目、内面が斜方向のミガキ、把手縁辺がヨコナデ、中央がナデで、把手下面中央部に指圧痕がある。全体に摩滅しているところから内面の朱の付着と外面の煤付着が見られない。胎土には、ルーベ観察で石英・長石などの細・小砂粒と赤褐色粒・金雲母・角閃石が混入していることがわかる。

3は、2の破片より大きく、片口の頸部・胴部・口縁の一部と完形の大きな把手からなる破片で5区大溝3層出土。頸部は、ゆるやかな屈曲で短く、各面が特段強調した作りとなっていないが、胴部口縁の上面を平坦に作ることから内側に補強されて突出している。把手は、長さ13cm、最大幅3.3cm、厚さ2cmの大きさで、縁辺をヨコナデ後に荒いミガキを上面に施し、下面には指圧痕がある。胴部外面にはハケ目があるが、把手から上がその後にナデられることから消えかかっている。内面は全面にミガキが施されている。胎土には、石英などの細・小砂をかなり含み、金雲母・角閃石と赤褐色粒(少量)が混入している。色調は淡褐色で、一部黄褐色をした破片がある。

胴部内面全体と把手上面の一部に朱が付着し、把手から下の外面の一部に煤が付着し、部分的に暗褐色になっている。

4は、5区大溝3下層から出土した尾面把手と胴部の破片である。形態や器面調整は、第38図1と同じであるが、把手の上面がケズリ状のナデ調整で、把手と遮断立上りの胴部との接合が、遮断立上りが胴部の内側に貼付け、把手がその後に外側に貼付けることが観察できる。

胎土には、石英などの細・小砂と金雲母・角閃石・赤褐色粒が混入し、淡褐色を呈している。胴部内面・立上りの両面、把手上面に朱が付着し、胴部外面下部が暗褐色になっている。

5～7は、片口頸部の小片と把手であるが、1～4と同一型式であることが明瞭に分類できるもの。6が4区溝2下層出土で、他の5区大溝3層出土と違っている。5・6は全体的に器面が摩滅して、6の外面にハケ目、5の内面一部に朱の付着と外面に指圧痕が見える。7の把手は、把手としては完形品で、胴部との剝離に胴部外面のハケ目が陰刻として残るほど保存状態のよいもので、その剝離の一方に屈曲があるところから1～3と同一形式の把手であることが明らかとなった。1の側面把手の一方が欠損することと、大きさがほぼ同一であることから同一個体とすべきかもしれないが、胎土に5～7においては共通して角閃石の混入が観察できなかったことから、1～4とは別個体とした。小破片であることから少量しか含まれない角閃石が表面観察で確認できなかっただけかもしれない。

7は、縁辺をヨコナデ、他をナデ調整し、上面に朱が付着し、下面に煤が付着して、色調が下面が黒褐色で他が淡褐色を呈している。

5～6の胎土には、石英などの砂粒と金雲母・赤褐色粒を含む。

したがって、片口に頸部を有するこの同形の広片口三耳鉢は、2個体が確実に存在し、さらに1個体が存在する可能性をもっている。2～4から復原できた広片口三耳鉢の大きさは、全長約29.8cm、胴部最大幅約20.7cm、器高約10cmである。

第40図8～11は、第38・39図と違った片口が無頸の広片口三耳鉢と判断したものである。8～11が1～7と明瞭に識別できるのは、第1に片口が無頸であること、第2に胴部外面が荒いミガキ調整であること、第3に側面把手が無頸である形態を示すこと、第4に胎土内に金雲母の混入が観察できないことである。第4の金雲母は、一部で普通の雲母が少量観察できるものもあるので角閃石と同じように確率が低いもの。

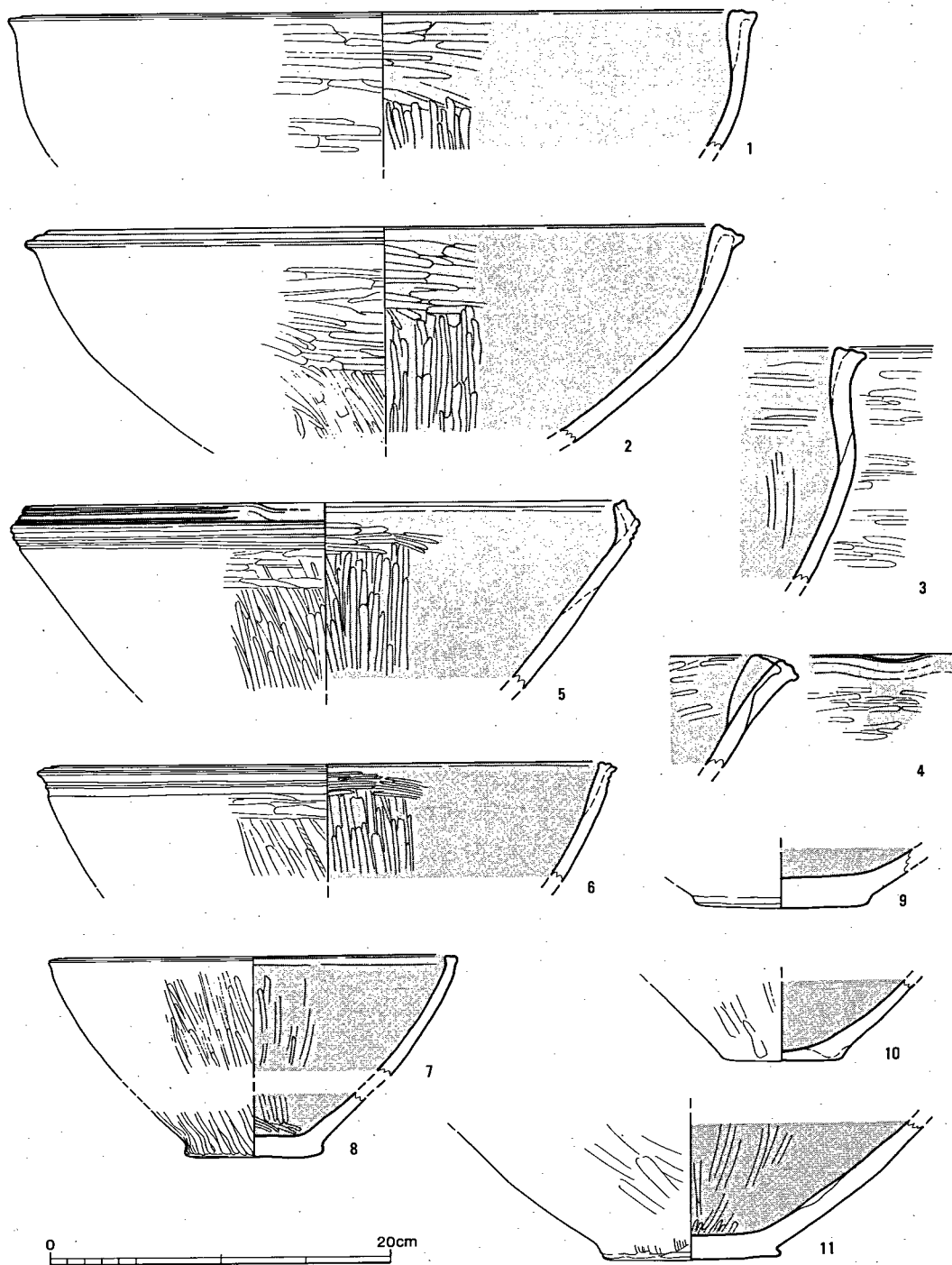
8は、片口と周縁の破片で、5区大溝3層出土であるが、2次的加熱によるためか全体的に摩滅しており、器面の調整が不明。しかし口縁上面と内面の微細穴に朱の痕跡が観察できる。胎土には、石英などの細・小砂粒をかなり含み、赤褐色粒・角閃石も混入しているが金雲母が確認できない。

9は、片口と口縁と胴部に側面把手が2分の1程残っている。この特徴は、片口端に丸味があり、口縁部も補強して厚味を増すものでなく胴部器壁と同じ厚さで終わっていることである。器面調整は、片口と口縁の縁辺がヨコナデされるが、胴部内外面がミガキが施されている。胴部のミガキは、外面が比較的荒いミガキで、側面把手の上部がナデに変っている。側面把手は、胴部に貼付けたもので、上面に湾曲度が著しく他と違っている。把手の器面調整は、縁辺がヨコナデ、上面にナデとハケ目、下面にナデが施されている。

朱の付着は、胴部内面全体と口縁から把手上面と側面と把手の破断面にまで達している。胎土には、石英などの細砂が多く、小砂も若干含まれるが、雲母・角閃石・赤褐色粒も微量混入している。色調は、内面が淡褐色で、外面の把手下面から下部が暗褐色から黒褐色で煤が付着している。9の破片の断面図の部分の内面が半径13cm前後のカーブを描いていることから土器の大きさを復原した。横側面把手の大きさは、胴部の剝離痕跡から長さ約11.5cm、最大幅3.3cm、厚さ1.3cmである。

10は、尾部の破片で、口縁はあるが、遮断立上りの先端と尾面把手を欠損している。これも1と4の尾部と同形態をしているが、違うところが外面調整である。それは胴部と尾部の接合部の外面を荒くケズリ取った後に胴部側面に荒いミガキを施しているところである。この胴部の荒いミガキ調整が1や4と違い、9と同一個体とした所以である。内面胴部は丁寧なミガキ、遮断立上りが両面共にナデ、胴部口縁がヨコナデ調整されている。

朱の付着は、内面と口縁の全面に、さらに外面に一部流れ、遮断立上り外面と胴部や立上り



第41图 朱附着土器实测图（大溝29）（1/4）

の破断面にまで達している。把手や立上りの欠損部分に朱が付着していることは、器が一部欠損しても使用されていたことで理解できるが、巻頭図版16-9のように胴部破断面にまで多量に朱が付着している理由を考えなければならないだろう。

胎土には、石英などの砂粒と雲母・角閃石・赤褐色粒が微量混入している。色調は淡褐色であるが、内面の口縁の下部が周縁に沿って帯状に黒色に変化し、その下部も暗褐色に変化している。この内面の色調の変化は、内容物の高温化がもたらしたものであろうか。

8~10から復原された広片口三耳鉢の大きさは、全長約36cm、胴最大幅約29cm、器高約11.5cm、注口径約22cmである。

11は側面把手の完形品で、大きさが長さ9.9cm、最大幅3cm、厚さ1.7~0.7cmのもの。これも8~10の側面把手が欠損するところから、同一個体としたいところであるが、大きさと断面形の湾曲が違いすぎるので別個体とすべきであろう。把手は全面にナデ調整され、内湾する上面が淡褐色で朱が付着し、下面が灰褐色である。胎土には、石英などの細・小砂をかなり含み、赤褐色粒と角閃石が微量混入している。

第40図の無頸形式の広片口三耳鉢は、把手が別個体であれば2個体が存在したことになる。

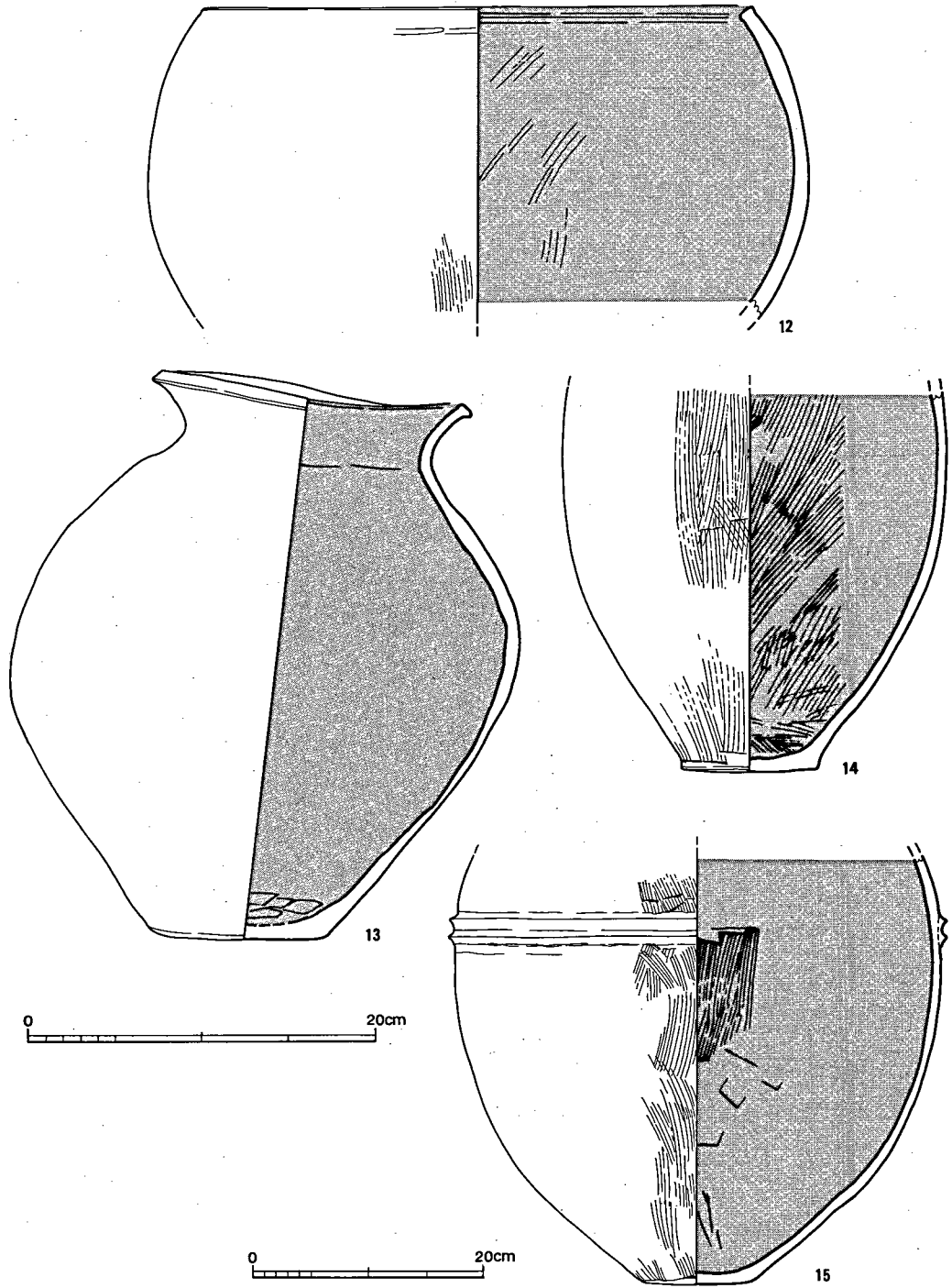
朱付着土器(巻頭図版15、図版43・44、第41・42図)

朱付着広片口三耳鉢に伴って、朱が付着した鉢・壺・甕も出土している。出土したのは、長通調査区の4区・5区の大溝第3層を中心としているが、地区としては3区の一部、遺構としては古墳初期の溝1・溝2からも出土している。

第41図と第42図12は、鉢と思われる資料で、外来系である。1・2は同形式の大型鉢で、1は溝1東と溝2西下層から出土した破片が接合でき、2が5区大溝3下層から出土した。1の破片は小片で、摩滅が著しいが、2は割合破片が大きく器面の保存がよい。1は口径41.2cm、2が口径39.2cmの大きさで、口縁先端に凹線紋を施す。調整は、口縁端部がヨコナデ、その下の内外面にヨコミガキ、その下の胴部が斜方向から縦方向の丁寧なミガキが施されている。

胎土には、1が石英などの砂粒が多く含まれ、赤褐色粒も割合多く、雲母・角閃石が微量混入し、2が石英などの砂粒が多く、赤褐色粒・雲母が混入し、角閃石も微量ながら見られる。色調は、1が褐色で、2が淡褐色を呈し、1の口縁付近に微量の朱が付着し、2は口縁と内面全体、さらに外面の一部まで朱が付着している。

3・4も1・2とほぼ同形式の鉢であるが、口縁下のふくらみが強く1・2とは違っている。しかし、口縁の凹線紋やミガキの手法は同一であり、4が片口となっている。したがって、1~3にも片口があると思われる。3は、胎土に細・小砂粒を多く、粗砂・雲母・赤褐色粒が若干混入し、褐色から橙茶色を呈している。しかし、内面に朱が付着し、外面は2次加熱のために赤褐色に変化している。4は、胎土に砂粒を多く含み、雲母・赤褐色粒も混入し、黄褐色を呈している。朱は、内面と外面の片口から流れ出たように付着している。



第42図 朱付着土器実測図 (大溝30) (1/4、1/6)

3は3区と4区の遺構検出時に、4が5区大溝3層から出土している。

5は、5区大溝第3下層から出土した片口付鉢である。屈曲した口縁部外面の2段に凹線紋を施すのを特徴とし、胴部が直線的に底部に向っている。器面の調整は、口縁部付近がヨコナデ、その下の内外面にヨコミガキ、その下がタテミガキが施されている。胎土には、砂粒を割合多く、金雲母を少量、赤褐色粒と角閃石が微量混入している。色調は、全体に淡褐色であるが、外面の一部に黒色部分がある。内面全体と口縁部に朱が付着している。大きさは、復原口径35.2cm。

6は、4区大溝3層から出土した復原口径32.4cmの鉢。口縁先端と外面に凹線紋を施し、胴部がわずかに内湾している。器面の調整は、1～5と同じで、順序としては下部からタテミガキ、ヨコミガキ、ヨコナデの順に施されている。胎土には、石英などの砂粒を含み、金雲母・赤褐色粒を微量混入するが角閃石が見られない。色調は淡褐色で、内面に朱の痕跡がある。

7は、5区大溝3下層から出土した口径22.8cmの割合小型鉢である。口縁部は、1～6と比較すると単純な作りで、わずかに先端を両側に広げて平坦にしているだけである。調整も、口縁部のみヨコナデで、その下の胴部内外面はタテミガキが施されている。胎土には、砂粒を多く含み、赤褐色粒も割合多く混入している。色調は、全体に黄褐色であるが、外面下半が2次加熱のために赤褐色に変化している。内面に朱の痕跡がある。

8は、5区大溝の2層と3層から出土した底部であるが、大きさから7と同一個体である可能性をもっている。内外面が丁寧にミガキが施され、内面に朱が付着している。内面は淡褐色であるが、外面が淡褐色から2次加熱のために赤褐色に変化している。底径8.2cmの大きさ。

9～11は底部破片で、9が4区溝2から、10が4区溝2西床面から、11が5区大溝2層西から出土しているが、いずれも内面に朱が付着しているところから、大溝出土朱付着土器関連資料としてここで紹介する。

9と11は、底径10cm前後の大型であることから、1～4の大型鉢の底部の可能性をもっている。9の調整は不明であるが、胎土に砂粒を多く含み、赤褐色粒も混入し、外面が褐色、内面が黄褐色から黒色を呈している。10は、底部外面に段をもたずに胴と接続し、外面にミガキが残っているが全体に器面が摩滅ぎみである。胎土には、砂粒を多く含み、雲母と赤褐色粒が混入し、外面が暗褐色、内面が黒褐色を呈している。底径は、7cmの大きさである。

11は、内外面共にミガキが施されているが、外面が粗い調整となっている。また、内面には表面が剝離した部分に薄く粘土を貼付けて補修した跡が残っている。外面に2次加熱による赤変が見られるところから、使用時の高温化によるものであろう。胎土には、石英などの砂粒を多く含み、角閃石も混入するが、植物の細い莖状物の混入も見られるところから、高温使用を目的として芻入りとした可能性がある。色調は、内面が茶褐色で朱付着、外面が黄褐色から茶褐色をしている。特記すべきは、特殊土器と同じように破断面にも朱が付着していることである。

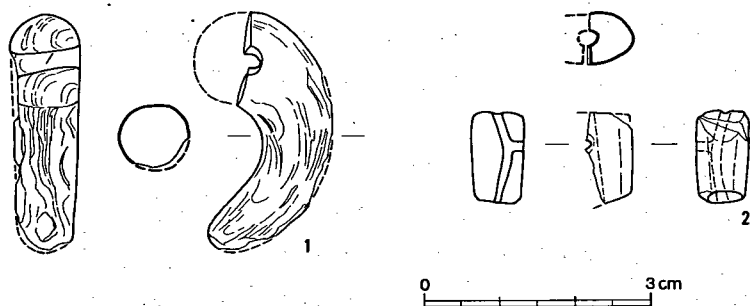
12は、4区大溝6層から出土した口径31.6cmの大型鉢で、胴部が半球形をしている。口縁部が7と同じように単純な作りであるところから、口径が小さければ無頸壺とすべきかもしれない。器面調整は、全体に摩滅が著しいので不明なところが多いが、内面に斜方向のミガキ、外面上部にヨコミガキ、下部の一部にタテハケ目が残っている。胎土には、石英などの砂粒を多く含み、雲母・赤褐色粒が混入している。色調は、内面が淡褐色で朱の痕跡があり、外面も淡褐色であるが火を受けて赤褐色や黒色に変化したところが多い。なお、本来は内外面に淡橙褐色の顔料が塗布されていた可能性もある。

13は、4区大溝3層下部から出土した外来系の壺である。全体に器形が歪んでいるが、胴部の最大径が中央よりやや上にあり、胴部から直接口縁部が外反している。口縁先端は両角を摘出して平坦面を作り、瀬戸内系壺であることを示している。底部は、わずかにふくらんだ平底で、内面に明瞭にケズリが見える。器面は全体に摩滅が著しく、調整法が不明であるが、内面に朱の痕跡がある。胎土には、大粒の砂粒を多く含み、雲母・角閃石・赤褐色粒も混入している。色調は、内外面共に黄橙色から橙色を呈するが、外面下半に黒色部分がある。さらに外面は、2次加熱のために表面が剝離、欠落した部分がある。壺の大きさは、口径17.4cm、器高31.6cm、胴最大径29cm、底径10cmである。

14・15は甕で、14が4区大溝第3層下部出土、15が5区大溝東3層出土の大型である。両方共に口縁部が欠損するので、土器の詳細な型式は不明であるが、14の底部が在地土器の15と比較しても安定した平底であることから、外来系の甕である可能性がある。14は、胴部内外面共に割合荒いハケ目で、ハケ目調整が底部外面まで施されている。内面全面に朱が付着している。

胎土には、細・小砂を多く、粗砂を若干含み、雲母・赤褐色粒・角閃石も混入している。色調は、全体に黄褐色で、内面が朱で朱色であるが、地色が黒色に変化し、外面下半も黒色に変化している。大きさは、胴最大径22cm、底径8cmである。

15は、胴部最大径部よりやや上に三角突帯2条1対をめぐらし、胴部内外面を粗いハケ目調整、内面にハケ目を消したと思われるナデの工具痕が残っている。底部外面にも不定方向の粗



第43図 長通3区大溝出土玉類実測図(大溝31)(1/1)

いハケ目がある。胎土には、細・小砂粒を多く、粗砂を若干含み、雲母・赤褐色粒が混入している。色調は、内面が灰黒色に変化し、外面が黄土色で一部に黒斑がある。内面全体に

朱が付着している。大きさは、胴最大径42cm、底径9.8cmである。

玉 類(巻頭図版16、図版52、第43図、表2)

玉類は、長通地区の3区大溝3層下部・4層と西側包含層や溝9などから出土している。

第43図1は、3区大溝3層下部から、第16・17図の後期中頃の土器群に伴って出土した**ガラス勾玉**である。分析をしていないが、乳白色に全体が風化しているところから鉛ガラスであろう。勾玉は、頭部の半分を欠損するが、風化しているために全体に縦方向のスジが明瞭に観察できる。このスジの観察によると、全体的なスジの方向として、頭部から尾の方向に流れており、次に頭部断面を横から見れば、孔を中心に渦状に巻いていることが熟視しなくとも判断できる。このことから考定できるガラス勾玉の製作法は、鑄型にガラス屑を入れて加熱する方法ではなく、飴状の半溶解のガラスを細棒に巻付けて引伸して整形する方法をとったと思われる。勾玉の大きさは、現在長3.13cm、頭部幅12.15mm、胴部幅9.45mm、頭部厚8.6mm、胴部厚7.9mm、尾部厚7.45mm、孔径3.2mm、重さ4.3gである。

2は、**多面体のガラス玉**で、3区大溝4層から出土したが、勾玉に近接して出土しており、時期的にも同一とできる。玉は、半透明の青緑色をしているが、全体に亀甲状の亀裂が無数にあり、勾玉のような風化はしていないが保存がよくない。現状での大きさは、長さ11.85mm、幅5.75mm、最大厚6.25mm、最小厚6.1mmで、径約1.3mmの細孔がT字形に貫通している。現在の重さは、0.55gである。

ガラス小玉(巻頭図版16-3、図版52-3、表2) ガラス小玉は、長通地区で13個を発見

表 2 長通ガラス小玉一覧表

(単位mm)

No.	出土地	長さ	径	孔径	色	備考
1	3区大溝3下層	1.65	3.9	1.2	紺色	伸、丸味
2	3区大溝3下層	1.5	3.0	0.75	空色	伸、丸味、気泡多
3	3区大溝4層	2.1	4.15	1.55	空色	伸、丸味、気泡多
4	4区大溝3層	2.65	3.45	0.9	空色	伸、丸味、表面摩滅
5	4区大溝3層	3.4	4.25	1.2	空色	伸、丸味、気泡多
6	5区大溝3層	3.8	3.55	1.2	空色	長く、伸、輪切
7	2区溝2西下層	1.95	4.35	1.7	空色	巻、丸味、細孔
8	A2-12 1層	2.15	3.6	1.65	空色	伸、丸味、細孔(中心孔と平行)
9	A2-13 1層	2.55	3.55	1.0	青色	丸味、表面著しく摩滅
10	A1-14 1層	2.05	4.15	1.45	空色	伸、丸味
11	B2-1 溝9	2.35	3.35	1.3	空色	伸、輪切
12	B2-4 溝9	2.25	2.75	1.25	紺色	伸、丸味
13	B2-4 溝9	3.25	5.45	1.3	空色	歪、伸、気泡多

することができた。1・2はガラス勾玉と同じ3区大溝3下層で、3がガラス多角形玉と同じ3区大溝4層で、4・5が4区大溝3層で、6が5区大溝3層で、7が2区溝2西下層で、8～10が西側包含層で、11～13が溝9で出土した。ガラス小玉には、紺色・空色・青色の3色があるが、9の青色とは表面が著しく摩滅しているためであり、本来は空色であるかもしれない。これらのガラス小玉の製作法は、含まれている気泡の伸び具合や配列から見ると、最初に穿孔されている飴状のガラス管を引伸して長くし、それを輪切りにした後に、再加熱して丸味をつける方法をとったと思われる。ただし、中央の孔以外に別に細孔がある7と8のうち7の方は、細棒に飴状のガラスを巻付けて作る方法をとった可能性もあり、6と11が輪切されたままの状態、玉に丸味がなく切口がよく観察できる。ガラス小玉の大きさは、表2のとおり。

把手状土製品(図版50—8、第65図8)

この把手状土製品は、図版9—3のように第20図の土器群に共伴して長通4区大溝3層下部から出土したものである。土製品の全体的形態は、粘土紐を把手状に曲げたもので、両先端と湾曲した内面が平坦になっていることから、把手状装飾として土器などに付属していたものであろう。両先端の平坦部のハケ目は、取り付けた場合に脱落しないようにするための工夫か、土器体部のハケ目痕が把手に陰刻として残ったものであろう。類例は、岡山県で大型鉢に対になって付設するものがある。

胎土には、石英などの砂粒と炭・黒色粒・赤褐色粒を若干含み、全体的に明淡褐色を呈している。大きさは、長さ5.3cm、最大幅4.9cm、肉幅1.1cm、肉厚0.95cmである。

木器(巻頭図版2—3・6、図版3—3、11—1・2、12—2・3)

木器は、畠田大溝中区3層で三又鍬片、長通5区大溝3層下部で杓子と把手付槽、5区大溝4層で三又鍬が出土しているが、どれも保存が悪く表皮だけであった。したがって、調査の経過でも述べたように写真撮影後に取上げが失敗したものが多く、大きさの記録にとどまった。

畠田大溝中区3層の三又鍬は、写真記録のみで終わったもので、大きさも不明。巻頭図版2—3のように三又鍬の頭部に長方形の柄穴の存在がわかる。時期は、共伴した土器から弥生後期中頃のものである。

長通5区大溝3層西側下部から出土した杓子形木器は、全長約33cm、皿部最大幅約9cm、柄長約20cm、柄最大幅約3.5cmの大きさで、柄が湾曲しているが皿部が抉れていない。

長通5区大溝3層下部西側出土の槽は、全長27.6cm、槽長24.5cm、槽最大幅13.2cm、柄長3.1cm、柄幅4cmの大きさで、槽部が肉厚な作りとなっている。時期は、杓子形木器と同じく、弥生後期中頃である。

長通5区大溝4層西側出土の三又鍬は、現存全長23cmの大きさで、頭部・1本の刃・刃先を欠損していた。三又鍬には、長方形の柄穴の一部と2本の刃が残っており、刃幅が1～1.3cmと作りが細身である。時期は、出土地点が大溝西側の土層の乱れがないことから弥生後期中頃より

古い可能性をもっている。

② 環 濠(M7・M10)

長通地区には、発掘調査時にM7とM10と呼んでいた溝が東西両側に各1本ある。東側のM7は、大溝の西側に並行して走るもので、西側のM10と対照的な存在である。

環 濠(M7)(巻頭図版3-1、8-1・2、図版14-3、第4・15図)

溝7(M7)は、大溝の西側に近接して造られているために、大溝の氾濫によって両端を破壊されていて、全長21.7mが調査できたにすぎない。しかし、このM7が畠田地区の環濠(M5)と本来は一連の溝であることが、畠田北端の大溝土層図(第4図)と長通大溝南端の土層図から明らかである。したがって、M7は断面V字形の環濠として大溝の西側に並行させる目的をもって造営されたと思われる。

現状での環濠の規模は、幅1.3~1.8m、深さ45cmであるが、第4図の大溝と環濠(M7)の関連の土層図を観察すると、大溝と環濠の間に土塁状の土の重層(巻頭図版8-2)が確認できた。この土塁状の土の重層を人工的な土塁として認めるか、畠田地区北端大溝と長通地南端大溝土層図に見られるような、大溝や環濠造営前からあった自然堆積とするかによって、環濠の規模が違ってくる。発掘時には、貯蔵穴が浅いことから現状の地形が1m前後削剝されたと思われていたが、上記の大溝前の自然堆積や長通地区の北側から西側に自然堆積と思われる包含層が存在することなどから、削剝されたとしても50cm前後であろうという考えに変っている。

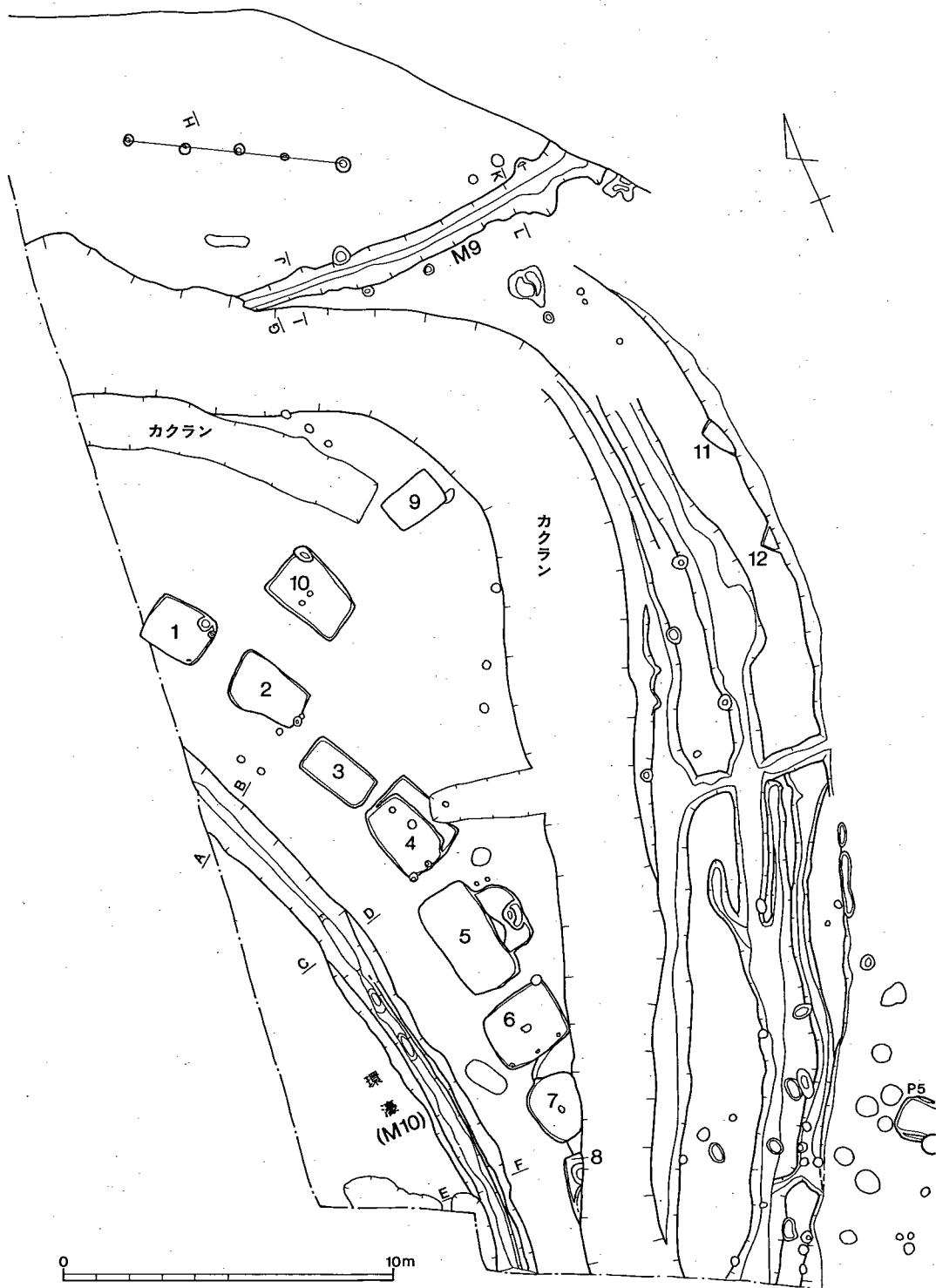
結論は、大溝と環濠の間に小規模の土塁状の構築物が存在した可能性があるということになる。時期は、若干の出土した土器細片によると弥生前期であり、畠田M5と一連であるとすることに矛盾しない。

環 濠(M10)(巻頭図版11、図版17~19、付図・第44・50図)

第2次調査の長通地区東側で検出された溝(M10)で、断面V字形の最も環濠らしきものである。環濠は、ほぼ北から南に流れているが、わずかに西側に湾曲していることから、検出当初は環濠の西側が集落の内側かとも思ったりした。しかし、発掘時の環濠の土層観察や長方形土壙や貯蔵穴など同時期の関連遺構が東側にあることから、M5やM7と同時期の環濠であるとの結論をもった。

環濠は、長さ19.5mを検出したにすぎないが、環濠の東側に並行して連なる長方形土壙との関連において重要性が増大する。環濠の規模は、幅1.2~1.6m、深さ65~80cmで小規模であるが、土層観察によって環濠外側の西側に土塁らしきものの存在が強くなった。第52図の土層に見られるように、西側から地山関係土砂が多く流入していることから小規模ながら土塁の存在を考えてよいであろう。

環濠内の堆積からは、上層で弥生前期土器(第51図)と太型石斧片や砥石(第72図-6~8)が、



第44図 長通第2次調査地区遺構配置図 (1/200)

中層で弥生前期土器が、下層で若干の前期土器と砥石が出土している。

環濠(M10)出土土器(図版49、第51図)

長通地区西側の環濠から出土した土器は、第51図1～3・5・6が上層、7～9が中層、4が下層である。

1～4は壺で、1が無文、2・4が綾杉紋と復線弧紋の装飾を施している。

1は、口縁部外側の貼付の幅が屈曲部にまで達していることから典型的な板付I式土器とはいえないが、頸部の傾斜や沈線状の段など古式の要素を多く残している。胎土には、細・小砂粒を含み、角閃石・雲母・赤褐色粒も混入している。器面調整は、口縁部にハケ目の後にヨコナデ、頸部の内外面にヘラミガキ、胴部外面にミガキ、内面にナデが施されている。色調は、全体に淡橙茶色であるが、外面の底部付近に大きな円形の黒斑がある。

2は、胴肩部に横の4条の沈線とその間に綾杉紋が施されている。

3は、底部の形態と粗製や色調から縄文土器の可能性のあるもの。

4は、口縁部を欠損した小型の粗製壺である。全体に形や紋様に歪があり、内面にも多数の指圧痕が著しく、仕上げが施されていない。胎土には、細・小砂粒や赤褐色を割合多く含み、雲母・角閃石も混入している。色調は、黄褐色から茶褐色を呈し、胴部外面に一部黒斑も見られる。紋様は、胴部上面を2～4条の沈線で2分割して、その間の上部に復線の弧紋と直線紋を、下部に向きの違う綾杉紋を施している。

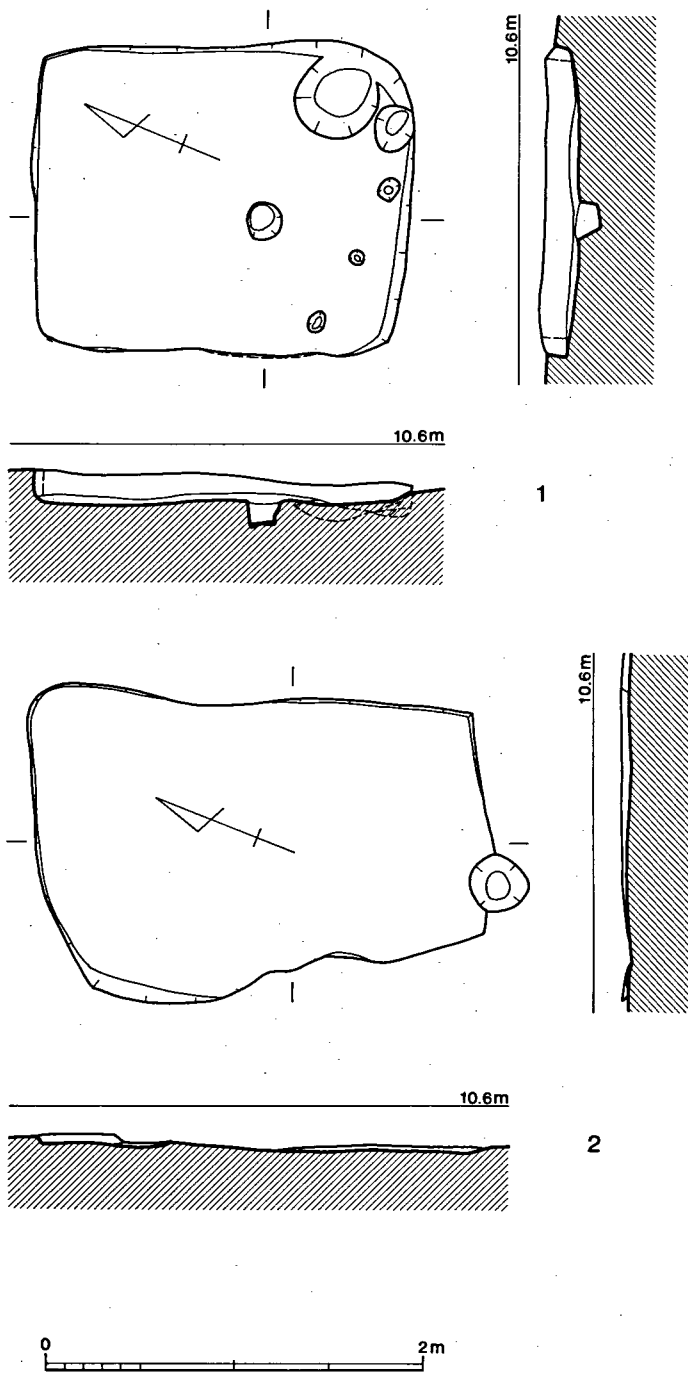
5～8は甕で、5が如意形口縁にキザミ目とその下部に1条の沈線紋、6が口縁に三角突帯1条でキザミ目なし、7が口縁部の三角突帯に割合大きなキザミ目、8が口縁部の三角突帯と口縁端に小さなキザミ目を施している。

9は高杯であり、瀬戸内で稀に見る皿部と脚部がラップ状に広がる形式であろう。脚部上端外面に貼付らしき低平な三角突帯をめぐらしている。器表面が摩滅しているので詳細は不明だが、皿部の内外面がヘラミガキ調整されている。胎土には、石英などの砂粒を多く含み、雲母・角閃石などが混入している。色調は、黄橙色から暗橙色を呈し、2次加熱のために赤褐色になった部分もある。

以上の土器から判断できる環濠(M10)の時期は、板付I式の要素を残した遠賀川以東の最古式板付系土器の時期から以後の土器が含まれているが、環濠造営時期の最下層に計測できる土器がなかったことがおしい。

③ 長方形土壇(巻頭図版11～12、図版19～24、第45～49図)

長方形土壇は、一部側壁面が内湾するところが大型の貯蔵穴とも考えられるが、この地域の貯蔵穴としては形態や大きさが違うし、柱穴らしきものもあることから住宅跡と考えられるが確証を得るに至らなかったことから仮に付けた名称である。



第45図 長通長方形土壙実測図① (1/40)

長方形土壌群は、1号から8号のように環濠に並行して連なる1群と9号・10号のように環濠に直角方向に並ぶ2群、11号・12号のように1号～8号と対照的な位置に並ぶ可能性をもった3群に分かれる。1号～8号長方形土壌は、環濠内側に並行して連らなると述べたが、はたして計測してみると実態はどうであろうか。各長方形土壌と環濠までの距離は、1号～4号が各2m、5号～8号が1.5mとなり、規定された位置に配置されたことになる。各土壌間の間隔は、各自の項で示す。

1号長方形土壌(図版20—1、第45図)

1号は最も北側に位置するもので、南北方向に長軸を向けている。土壌は、長径2m、短径1.65m、深さ18cmの面積3.3m²の規模で、壁面が垂直に近く、内湾している部分もある。床面には、中央付近に1個と南壁近くに大小5個のピットがある。土壌内には、上層に黒褐色粘質土、下層に灰黒色粘質土が堆積し、埋土に若干の土器片が混入していた。

2号長方形土壌(図版20—2、第45図)

2号長方形土壌は、1号の南側1mに位置するが、かろうじて床面が残存している状態である。土壌は、長軸がほぼ南北方向で、長径2.43m、短径1.63m、深さ6cmの平面形が平行四辺形の面積約4m²規模である。土壌の床面にはピットはなかったと思われるが、南壁に新旧関係の不明なピット1個が検出されている。土壌内には、暗黒褐色土と若干の土器細片があった。

3号長方形土壌(図版20—3、第46図)

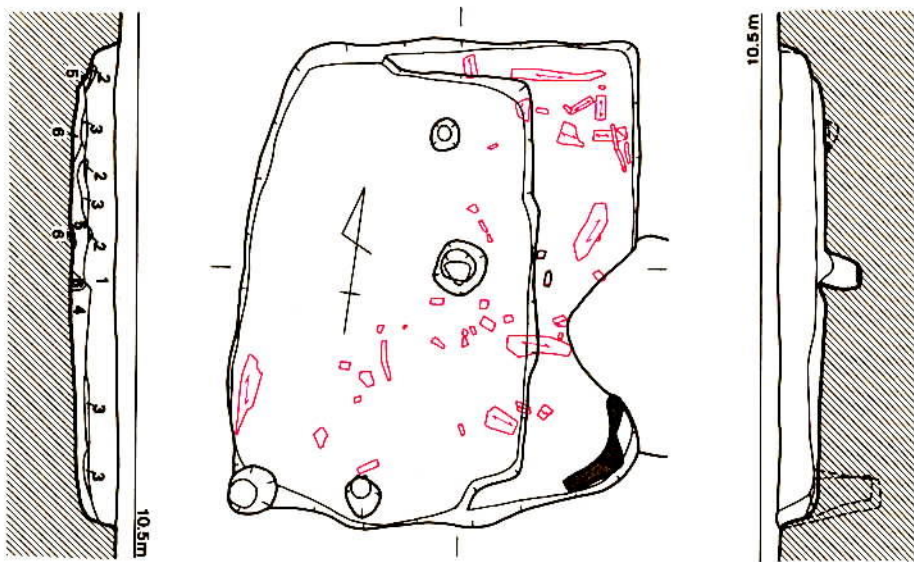
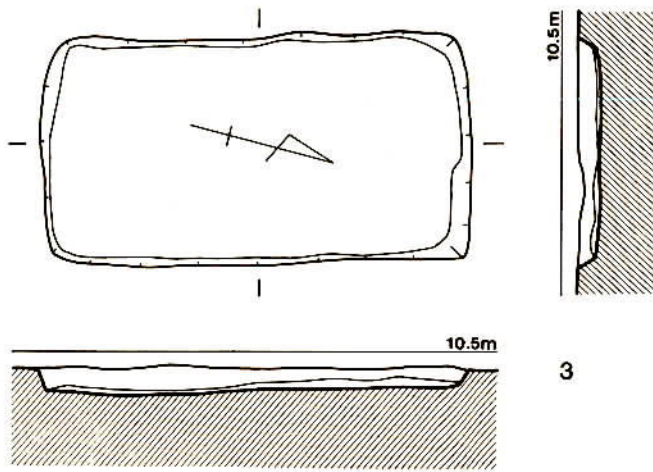
3号長方形土壌は、2号の南側90cmに位置する典型的な土壌である。土壌は、長軸をほぼ南北方向に向け、長径2.29m、短径1.2mの長方形プランの2.7m²の広さで、深さ12～15cmで残っていた。この土壌も床面にピットもなく、壁面も湾曲しない。土器片は出土しなかった。

4号長方形土壌(巻頭図版12—1、図版21、第46図)

4号土壌は、3号の南側30cmの近位置にあるが、これは4号が当初80cmの位置にあったものが面積が拡張されたために近接したことがわかる。4号土壌の当初の規模は、南北の長軸径2.45m、短径1.6mで3.9m²の面積であったものが、長径2.55m、短径約2.1mで面積が5.4m²に拡大されている。4号土壌が後に拡張されたことは、第46図で明らかのように、拡張された浅い床面に合せて旧床面を埋戻していることと、拡張された施設が火災で消失した後に一気に埋戻したことも土層で明確に読取れる。

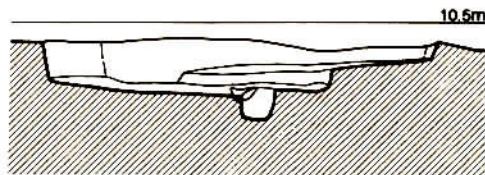
拡張された4号土壌は、土壌と呼ぶより小型竪穴式住居と言える規模になっており、竪穴の上部に木造の建造物が存在していたことも、炭化した木材が証明している。床面は、当初が深さ30cm、拡張して15cmの深さになっており、床面の中央の柱穴が当初から存在しているが、他の3個は不明である。しかし、南北の対照的位置にある穴は、上部構築物があれば、支柱穴として使用可能な位置に存在する。出土品は、炭化材と焼土以外にほとんどない。

5号長方形土壌(巻頭図版12—2、図版22—1・2、第47図)

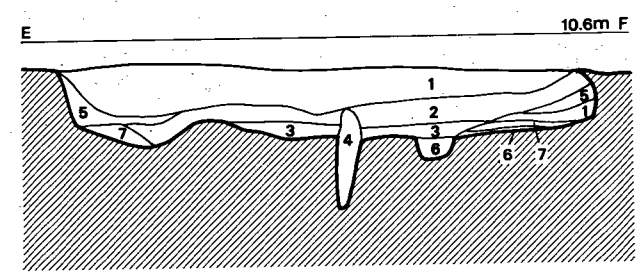
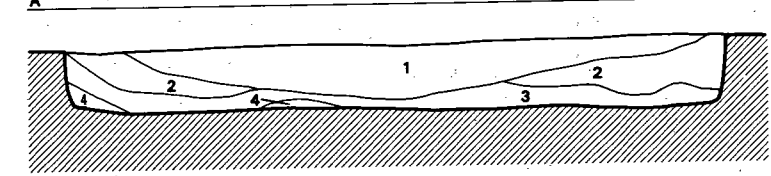
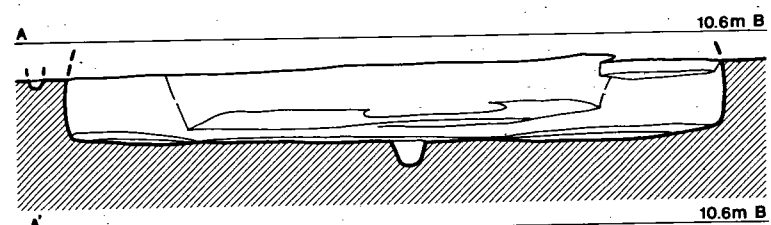
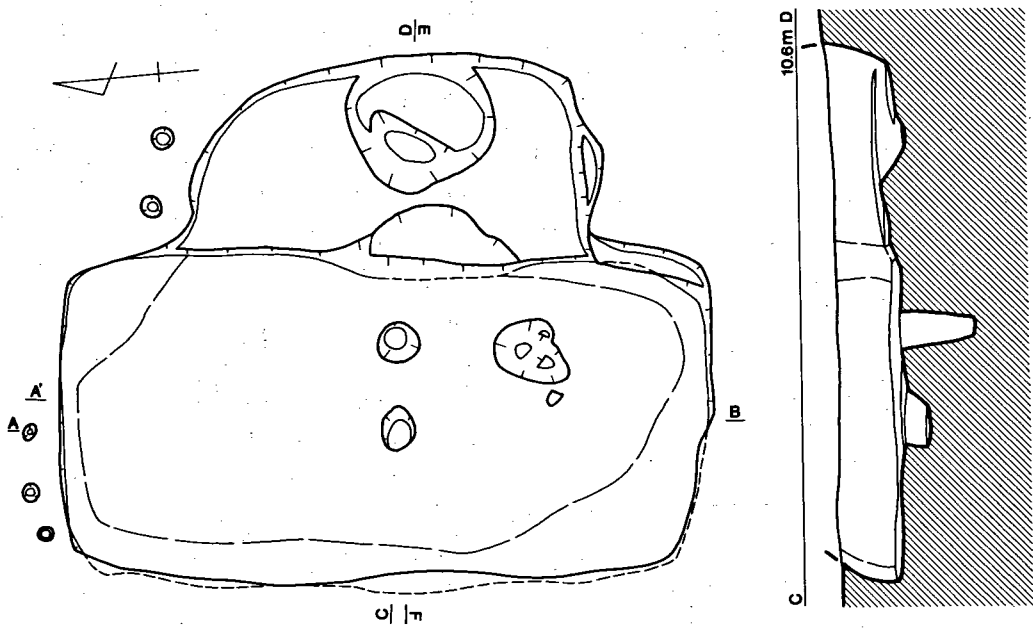


長通長方形土壇土層名

- 1 地山粒混入暗茶黑色粘質土
- 2 炭化物
- 3 暗茶黑色粘質土
- 4 暗灰色粘質土
- 5 灰黑色粘質土
- 6 茶黑色粘質土



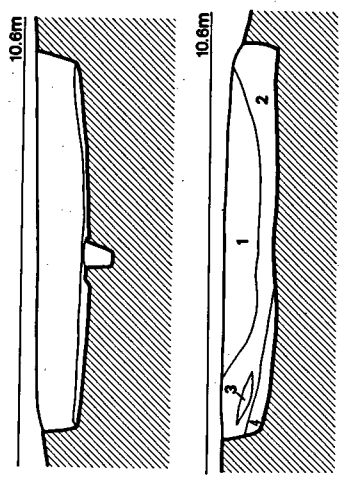
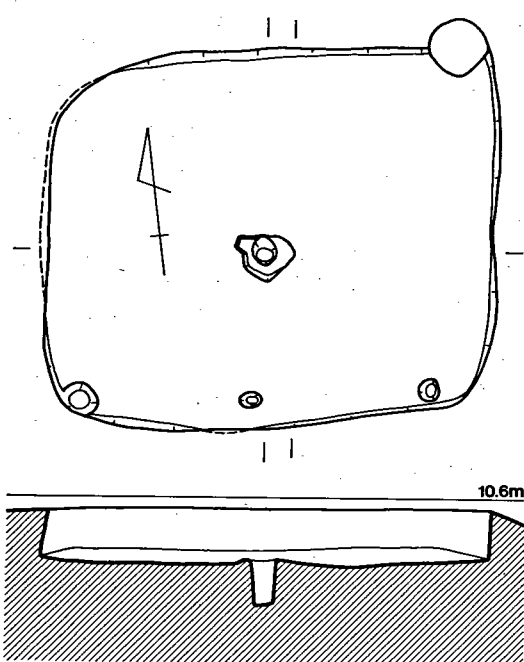
第46図 長通長方形土壇実測図② (1/40)



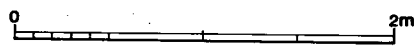
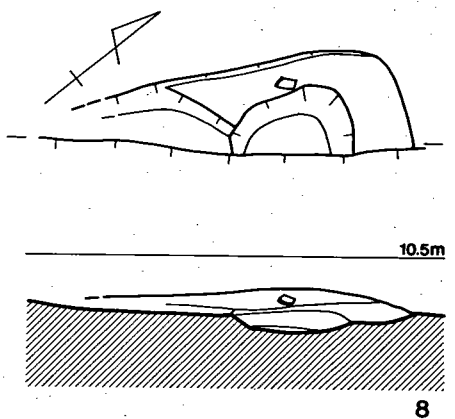
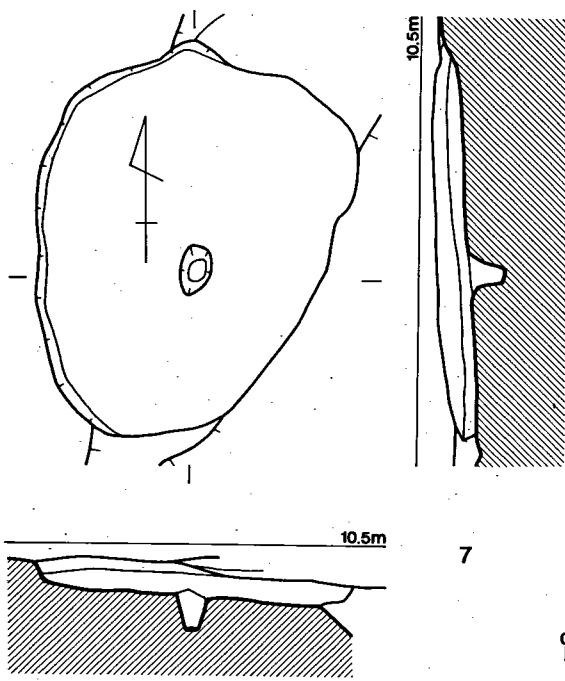
- 長通5号長方形土壙土層名
- 1 地山混入暗茶黑色粘質土
 - 2 地山ブロック混入暗茶黑色粘質土
 - 3 地山粒混入暗茶黑色粘質土
 - 4 暗黒色粘質土
 - 5 暗茶黑色粘土
 - 6 暗灰黑色粘質土
 - 7 黒茶色粘質土



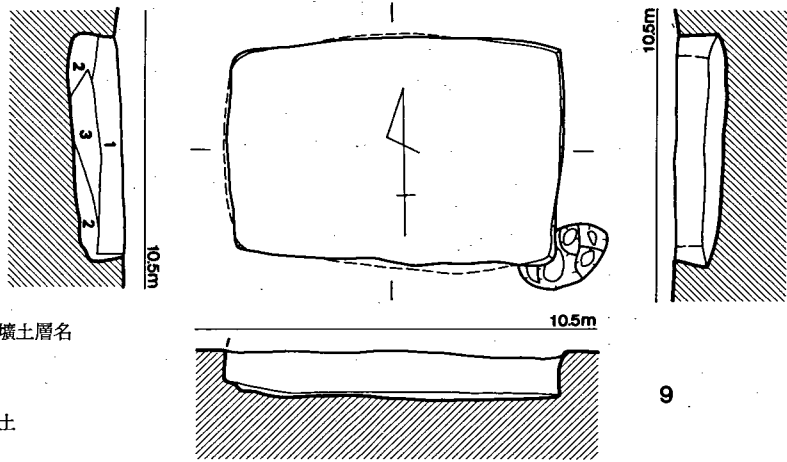
第47図 長通5号長方形土壙実測図③ (1/40)



- 長通 6号長方形土墳土層名
- 1 地山粒混入暗茶黒色粘質土
 - 6 2 地山粒混入暗茶黒色粘質土
 - 3 地山ブロック混入暗紫色粘質土
 - 4 地山ブロック混入暗茶黒色粘質土

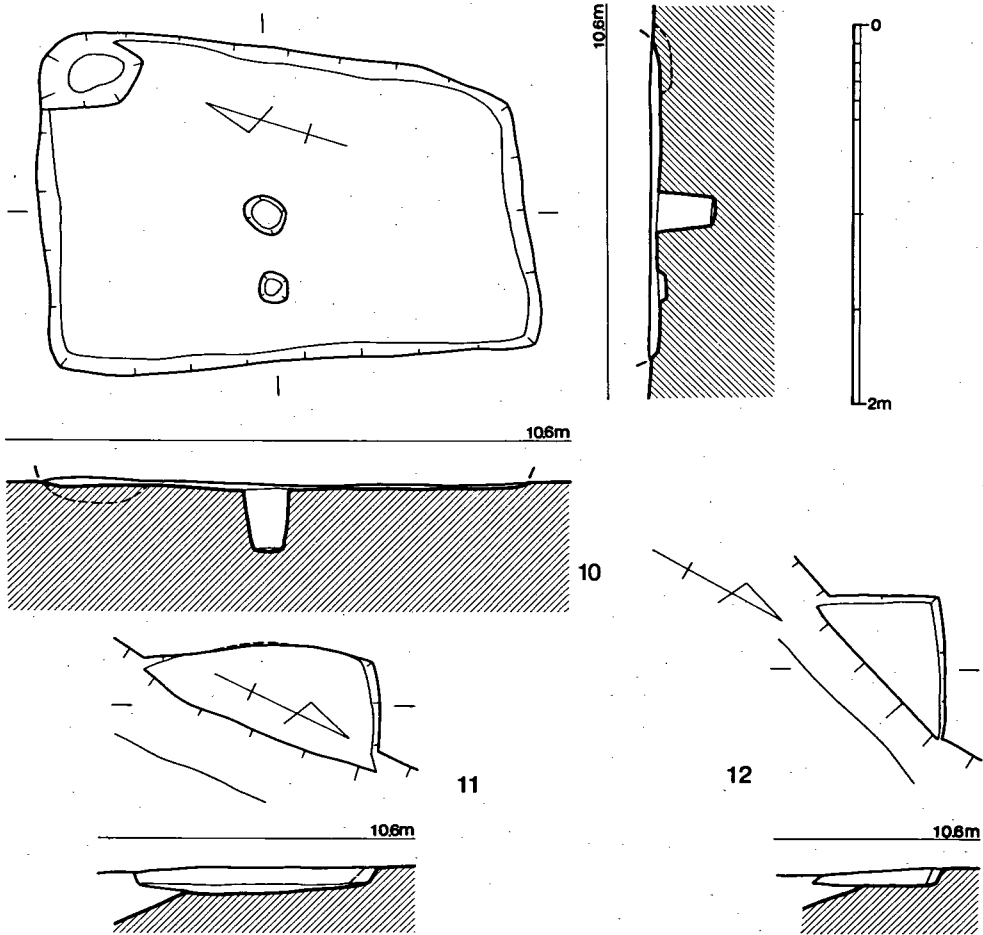


第48図 長通長方形土墳実測図④ (1/40)



長通9号長方形土壇土層名

- 1 暗黒色粘質土
- 2 灰黒色粘質土
- 3 暗灰黒色粘質土



第49図 長通長方形土壇実測図⑤ (1/40)

5号は、4号の南側70cmに位置し、これも東側に4号とは違った張出部があり、拡張したとすると当初南北の長軸が3.45m、短径1.7mの5.9㎡規模であったのが、東側に南北径2m、東西1.05mの2.1㎡増設して8㎡の規模に達していることになる。しかし、5号の場合は、土層から拡張したことが証明できないので、当初から東側に円形土壇付のベッド状遺構が付設していたことになり、遺構の廃棄後しばらく自然埋没にまかせてあったものが、4号のようにある時点で一気に埋戻されたことになる。

遺構の床面には、本体部の中央に2個の柱穴と浅い楕円形土壇、張出部に大きな円形土壇があるが、本体部の東側柱穴が主柱になるらしく廃棄後も柱が立っていた痕跡が土層図に現われている。これに対して、張出部の円形土壇の半分は、早く埋められていた可能性が強いことになる。土壇の床面は、一見平坦に見えるが、本体部の四角や壁面に近い部分がわずかに上がる傾向をもっている。壁面は、とくに本体部の湾曲が著しく袋状を呈する特徴があり、遺構の用途と名称決定を困難にしている。さらに、遺構外の北壁に沿って並ぶ小穴も、この遺構の屋根構築に関連することになる。出土品として、若干の土器細片があった。

6号長方形土壇(図版22-3、第48図)

6号土壇は、5号の南60cm位置し、1号～8号の中で唯一長軸を東西方向に向けている。土壇は、東西の長軸径2.4m短径2mで、面積4.8㎡の規模である。床面には、中央の主柱穴と南壁の両角と中央に各1個の小柱穴があり、上部構造物の存在が確実なものとなっている。壁面は垂直で、部分的に内湾するところから、本来内湾した壁面であったのだろう。

7号長方形土壇(図版23-1、第48図)

7号土壇は、6号の南側60cmの位置にある隅丸胴張長方形プランであったと思われる。土壇間の距離も4号以南に来るにしたがって短縮されている。土壇の東南が破壊されているので正確な規模は不明であるが、南北最大径約2m、東西最大径1.7mで、面積も約2.8㎡であったことになる。床面には、中央に主柱穴も残っている。計測できる出土品はなかった。

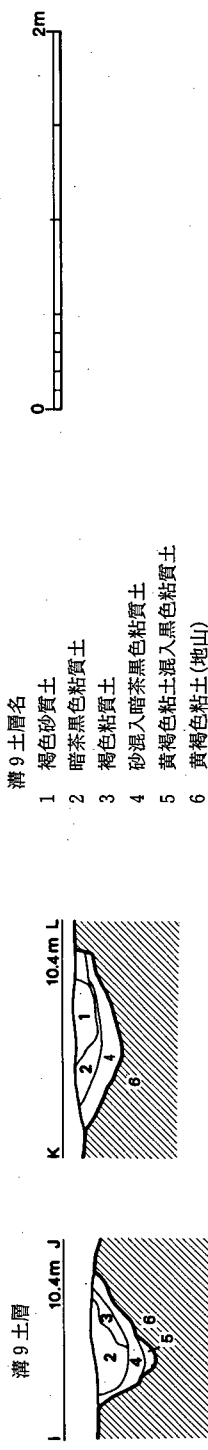
8号長方形土壇(図版23-2、第48図)

8号土壇は、7号の南側40cmの割合定位置にあるが、全形の4分の3以上を失っており、残存部分も攪乱されている可能性がある。しかし、外形の長方形部分は本来の形を整えており、中にある穴が攪乱部分であろう。前形の規模や出土品は不明である。

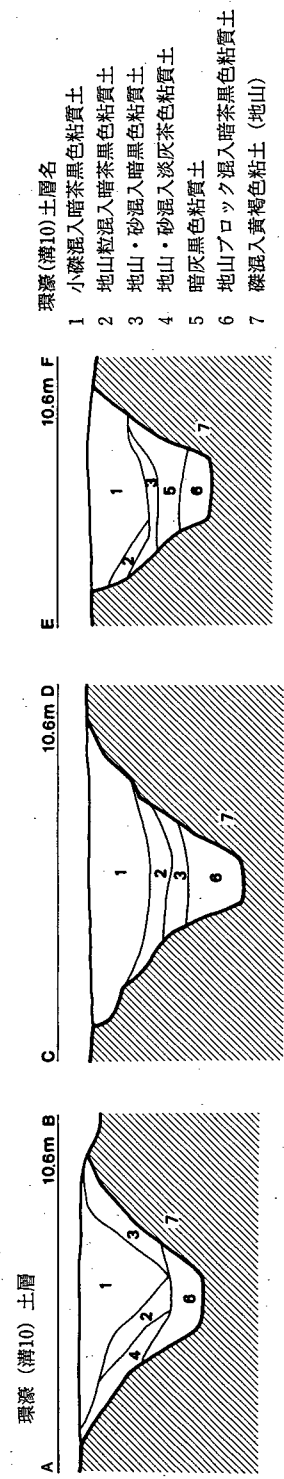
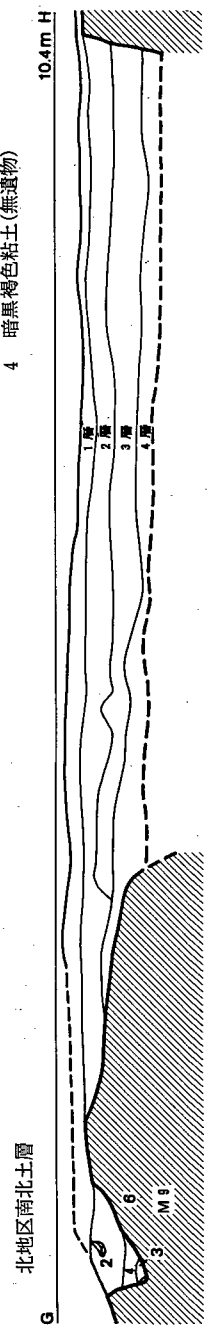
9号長方形土壇(巻頭図版12-3、図版23-3、第49図)

9号土壇は、10号の東側2.4mの位置にあり、初めて隣接土壇から若干離れている。土壇の長径の主軸方向が東西、長径1.8m、短径1.23mで、面積が2.2㎡となっている。床面には柱穴らしきものもなく、本体外の周辺も攪乱らしきもの以外に発見されなかった。出土品も発見されなかった。

10号長方形土壇(図版24-1、第49図)



- 北地区南北土層名
- 1 黑色土混入黑褐色粘質土
 - 2 暗茶黑色粘質土(部分黑褐色砂質土)
 - 3 真黑色粘土(無遺物)
 - 4 暗黑褐色粘土(無遺物)

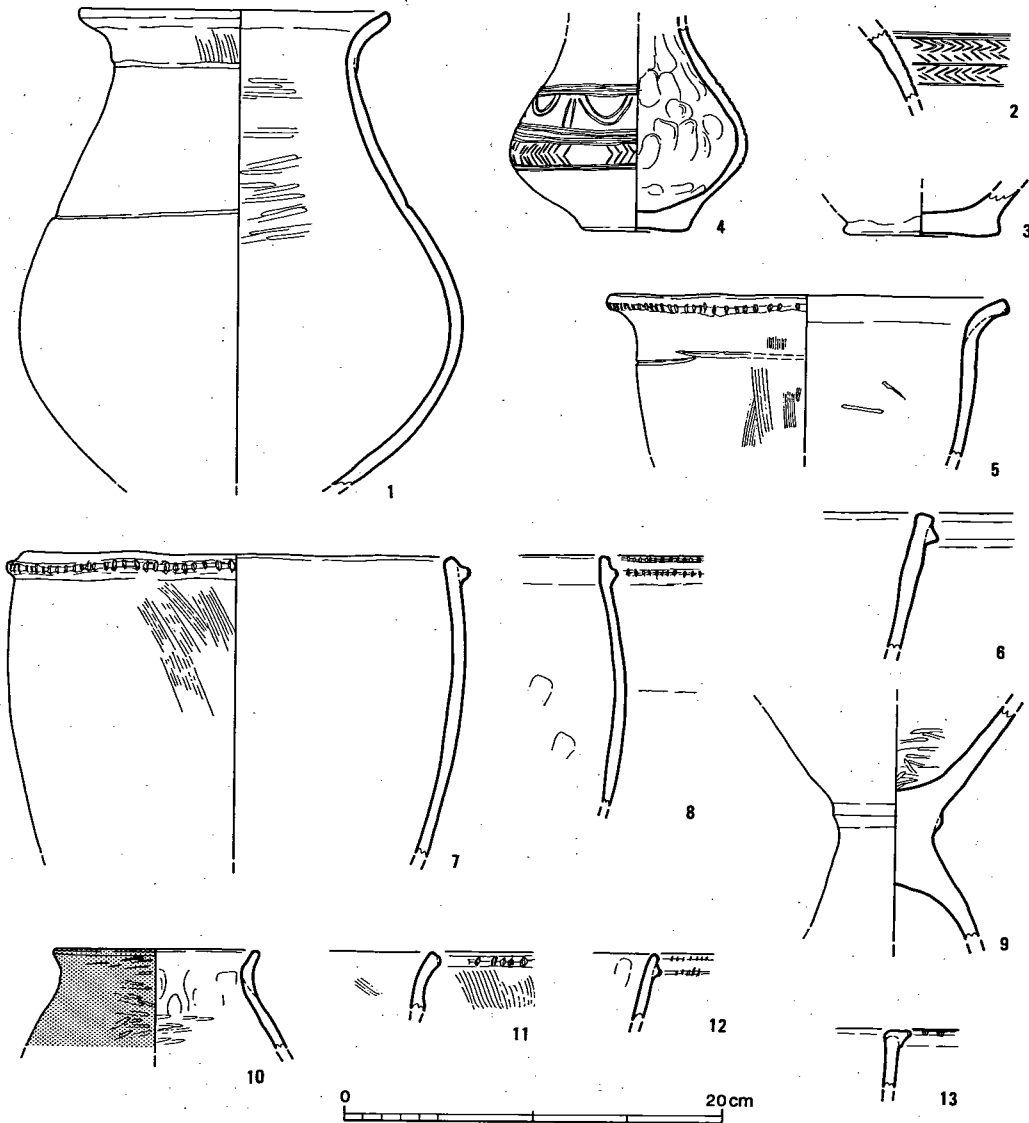


第50図 長通第2次調査地区上層実測図 (1/40)

10号土壙は、2号土壙の東側1.6mの距離に主軸方向も並行した位置にある。土壙は、南北の長軸径2.57m、短径1.3~1.8mの不整台形をしている。この土壙も床面がかろうじて残っていたものであるが、床面中央の主柱穴の存在と、その横の補助柱穴が4号~6号に共通するものであろうか。出土品は発見されなかった。

11・12号長方形土壙(図版24-2・3、第49図)

11・12号土壙は、1号~10号土壙との関連も不明だが、形態と主軸方向に類似点があること、



第51図 長通環濠(溝10)・長方形土壙出土土器実測図(1/4)

埋没した土が同一であることから一連の土壌群に加えた。出土品は、11号に石皿状の砥石の破片が出土しただけである。土壌間の距離は、最も近い9号が8m、対照的位置にある4号までが13.7mの位置にある。

長方形土壌出土土器(第51図10~13)

長通地区の長方形土壌は、数が12基と多かったにもかかわらず、後世の削剝のため遺構が浅かったために出土品が微量で細片であった。

第51図10が1号長方形土壌、11が2号土壌、12・13が5号土壌出土土器片である。

10は、外面黒塗りの壺で、内外面共にヘラミガキが施されている。壺の口径は11cmで、口縁に貼付などの補強をしていないことや黒塗りであることなど古式の要素が残っていることから板付I式と同時期に属するものであろう。1号土壌では、もう1片別個体の黒塗り壺の頸部か胴部の破片がある。

11~13は甕の口縁部の細片で、口径も不明である。2号土壌から発見された11は、口縁端外側にキザミ目を持ち、口縁下に段をもつ可能性がある。12は、口縁端外側と三角突帯に小さなキザミ目を持ち、13が口縁部の三角部にキザミ目を施している。

出土品から見た長方形土壌の時期は、1号の黒塗り壺が板付I期までのぼる可能性があるものの、外の例が確実に前期末の様相を呈している。このことは、M5・M7・M10の環濠も同様で、板付I式の時期に掘削した遺構もあるが、弥生末まで使用されていた遺構も存在する可能性をもっていることになる。

④ 貯蔵穴(巻頭図版13-1、図版25、26-1、第52図)

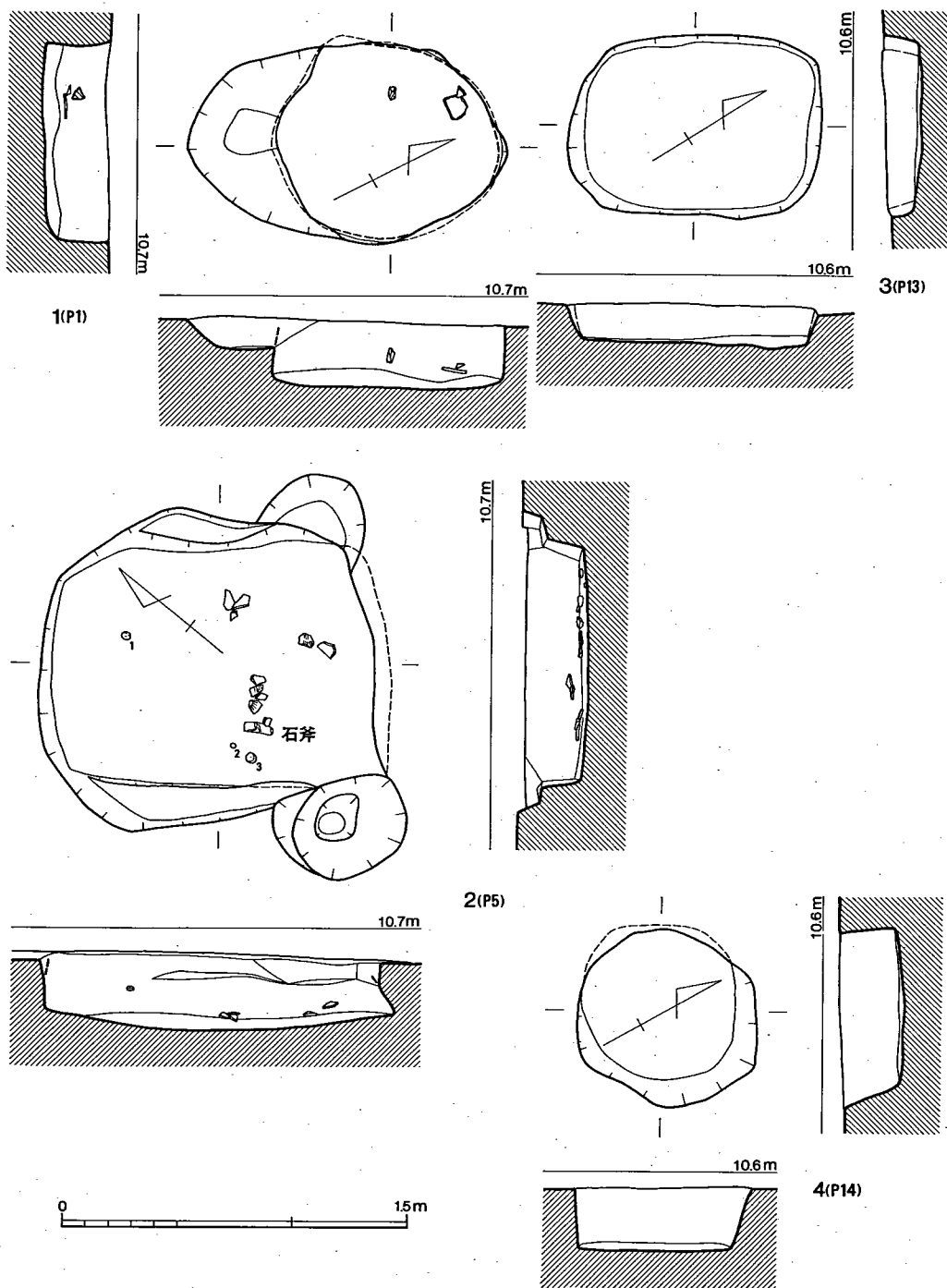
長通地区では、多数の柱穴や土壌が検出されたが、それらの発掘が完了するまでその判断ができないものが多かったことから、出土品の取上げの都合上P1~P17等の記録方法をとった。したがって、ここで取上げる貯蔵穴とは、P1~P17の中で貯蔵穴と認定したものに限定して詳報し、その他を略報としたい。

ここでの貯蔵穴とは、壁面が内湾すること、または内湾した可能性のある円形と長方形の土壌とした。長通地区でも畠田地区と同じように貯蔵穴は、小型で浅い土壌であり、先に紹介した長方形土壌とは明確に区分できる。P1~P17のうち、貯蔵穴と認定できたのは、5区に集中しているP1・P5・P13・P14であり、円形がP1・P14で、長方形がP5・P13であった。

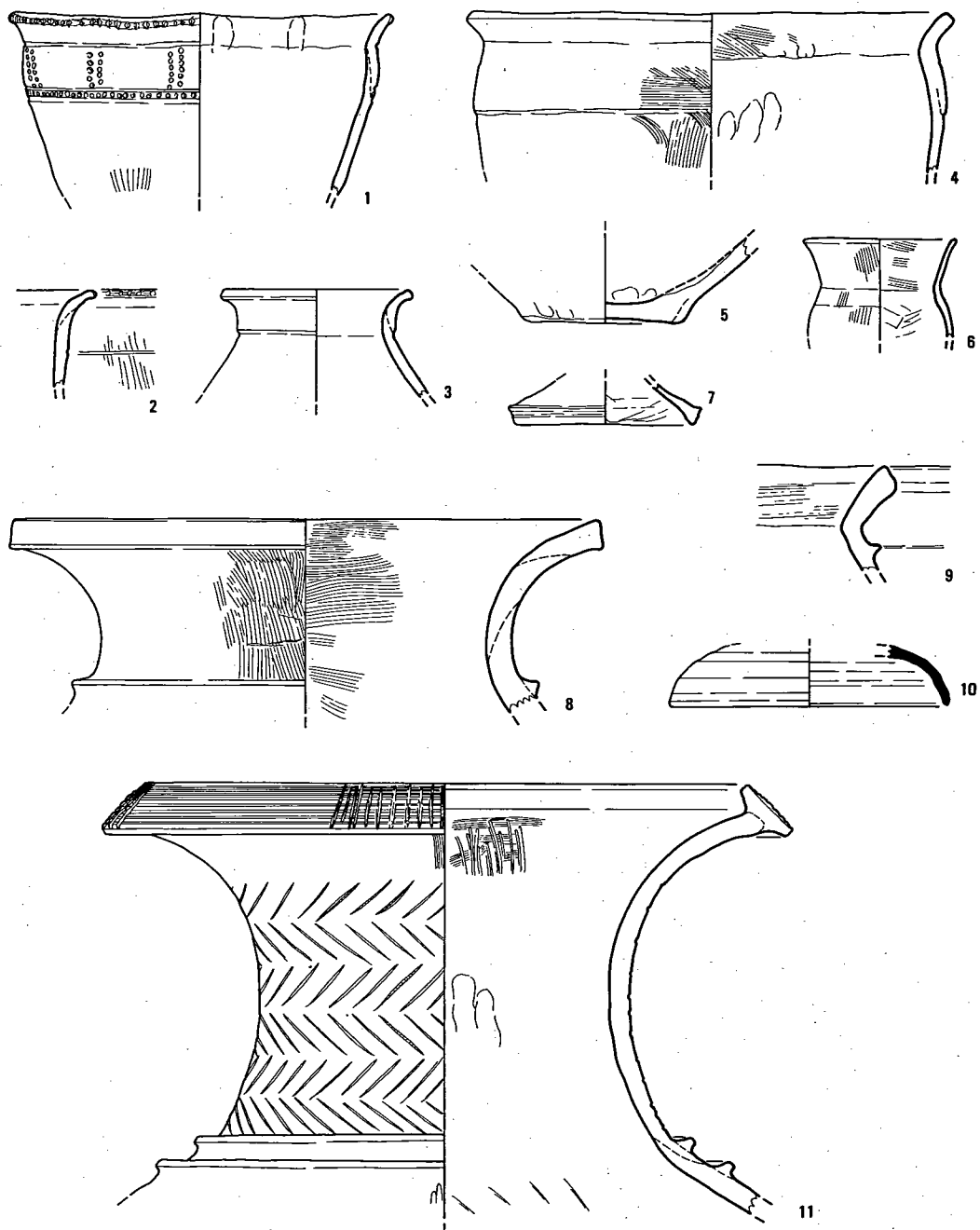
1号貯蔵穴(P1)(図版25-1、第52図)

1号貯蔵穴としたのは、5区南端の大溝に近い位置で検出した円形土壌である。貯蔵穴の大きさは、床面で長径1m、短径0.85mの楕円形で、深さ0.28mであった。貯蔵穴の壁面は内湾する部分が多く、垂直に近い壁面も本来は内湾して、典型的な袋状貯蔵穴である。

貯蔵穴では、珪質岩原石・打製石鏃(第74図47)と若干の弥生前期土器片が出土した。



第52図 長通貯蔵穴実測図 (1/30)



第53図 長通出土土器実測図 (1/4)

2号貯蔵穴(P5)(巻頭図版13-1、図版25-2、第52図)

2号貯蔵穴としたのは、5区南端のM1西側で検出したP5のことで、小型長方形土壌である。貯蔵穴には、これより新しい柱穴状のP4・P6・P7が重複していたために、土壌の壁面が破壊された部分が多い。

2号貯蔵穴は、壁面が破壊されている部分が多いことから床面で計測すると、長径1.45m、短径1mの大きさで、面積としては、約1.3㎡の小型である。この貯蔵穴は、壁面の破壊も多いが、東南壁の一边が典型的な袋状壁面として残っており、その急傾斜の壁面を復原すると、本来の貯蔵穴の深さが然程なかったことを示している。現状での貯蔵穴の深さは、最も高い壁面から34cmであるから、地表を削剝した部分を復原しても深さが70～80cm程のものであったろう。

2号貯蔵穴内からは、若干の弥生前期土器(第53図)・土製紡錘車3個・土錘・石斧片が出土した。

3号貯蔵穴(P13)(図版25-3、第52図)

3号貯蔵穴は、5区の溝3(M3)の東側で検出されたP13のことで、隅丸胴長長方形の土壌である。貯蔵穴の大きさは、床面の長径が96cm、短径が72cm、深さが17cmの小型である。壁面には袋状部分が残っていないが、垂直に近く立っている部分も残っている。

4号貯蔵穴(P14)(図版26-1、第52図)

4号貯蔵穴は、5区の溝3の東側で検出したP14で、小型円形袋状堅穴である。貯蔵穴の大きさは、床面で長径74cm、短径68cm、深さ27cmの小型である。壁面は、西側に袋状に内湾する部分が残っている。

以上のように貯蔵穴と認定したのは、長方形2基、円形2基の合計4基であるが、出土品がないために時期が特定できないものもある。

次に貯蔵穴ではないが、出土品が計測できたピットを紹介しておく。

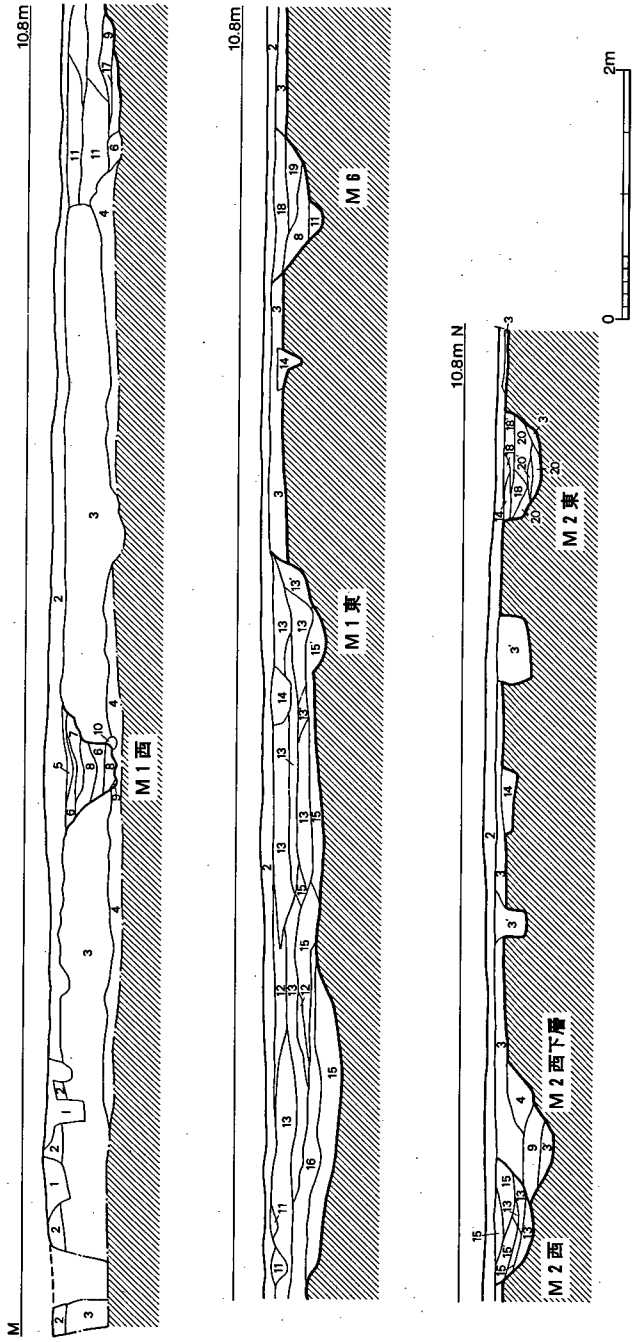
P3は、長通5区の2号貯蔵穴(P5)の北側で検出された直径55cm、深さ43cmの柱穴で、弥生前期土器(第53図1)が出土した。柱穴としたのは、直径20cmの柱の痕跡を検出したからであるが、掘立柱建物とできる一連の柱穴が検出できなかった。

P12は、5区の3号貯蔵穴(P13)の西側で検出された柱穴で、石の礎板をもっている。柱穴の大きさは、直径40cm、深さ22cm、柱径約20cmで、底に一边10×12cmの方形の自然石を利用した礎板がある。これも掘立柱建物としての一連の柱穴が検出できなかった。

P16は、2区の東端で検出された直径75cmの丸底の円形土壌である。出土品としては、第53図6・7のような土師器が若干発見された。

貯蔵穴出土土器(第53図)

貯蔵穴から出土した遺物は少なく、計測できたのは、2号貯蔵穴(P5)から出土した若干の土器片と紡錘車3個、および1号貯蔵穴出土の打製石鏃である。



- 長通地区北端壁土層名
- | | | | |
|--------------|----------------|-------------|-------------|
| 1 淡灰褐色土 (耕土) | 2 黄灰褐色粘質土 (床土) | 11 砂合暗褐色粘質土 | 12 淡灰黑色砂質土 |
| 3 黑色粘質土 | 4 暗褐色粘質土 | 13 灰黑色砂質土 | 14 暗灰黄色粘質土 |
| 5 粘土含暗褐色砂質土 | 6 灰褐色砂質土 | 15 暗灰褐色砂質土 | 16 灰色砂礫土 |
| 7 淡灰褐色砂質土 | 8 灰褐色粘質土 | 17 灰褐色砂礫土 | 18 灰黑色粘質土 |
| 9 灰色砂質土 | 10 黑色粘土 | 19 灰色粘質土 | 20 砂合灰黑色粘質土 |

第54図 長通地区北端壁土層実測図 (1/60)

第53図1は、柱穴(P3)と2号貯蔵穴から出土した甕で、口縁部のキザミ目、口縁下の沈線と竹管紋の組合紋が特徴となっている。器形は、胴部上端でわずかに内湾して、口縁がゆるやかに外反している。調整は、沈線紋や竹管紋の外に、口縁内面の指圧痕とナデ、外面胴下半にハケ目が残っている。粘土の継目は、一部であるが胴部と口縁部の接点で外傾していることが観察できた。胎土には、石英などの砂粒を含み、赤褐色粒・黒耀石・角閃石・雲母などが混入している。色調は、うす茶色からこげ茶色をし、黒斑もある。

2は、P4出土として取上げていたが、P4とした柱穴が2号貯蔵穴内に掘られたものであることから、本来は2号貯蔵穴に含れていた土器片が混入したものであろう。2は、ゆるやかに外反した口縁先端にキザミ目を施こし、口縁下に1条の沈線をめぐらしている。この場合は粘土継目が内傾している。土器の時期は、弥生前後半である。

3・4は、2号貯蔵穴から出土した壺と甕の口縁部の破片である。3は、口縁外面の屈曲部に段をつけた板付I式に近い形式で、粘土継目が外傾している。4は、ゆるやかに外反した口縁先端にキザミ目がなく、口縁下には段をつけている。弥生前期後半に属する。

5はP12に下層から出土した壺の底部。底部の内外面に指圧痕があり、あとはナデである。

6・7は、P16から出土したもので、6が小型丸底埴で、7が瀬戸内系の脚裾部である。7は、裾端に擬凹線紋がわずかに残り、内面にケズリがある。7の胎土には、砂粒をほとんど含まないが、雲母や赤褐色粒が混入して茶褐色を呈している。

貯蔵穴出土土製品(図版51、第66図)

第66図の1～4は、2号貯蔵穴から出土した紡錘車3個と土錘である。

紡錘車は、1が径3.6cm、厚さ1.45cm、孔径0.4cm、重さ20.15gで、胎土に細砂と角閃石を含み、灰褐色と灰黒色である。2は、径2.9cm、厚さ1.7cm、孔径0.45cm、重さ15.8gで、胎土に細砂と角閃石を微量含み、淡褐色から灰褐色を呈する。3は、径3.9cm、厚さ1.1cm、孔径0.6cm、重さ22.4gで、胎土に細砂と角閃石を微量含み、茶褐色から淡褐色を呈する。

土錘(4)は、長さ4.9cm、最大径1.2cm、孔径0.2cm、重さ7.1gの大ききで、片面に1条の溝をもつ。胎土には、石英などの砂粒を含み、角閃石が割合多く混入している。この類は、玄海灘・響灘・周防灘・瀬戸内西部に見られるもの。

第66図の1～4の紡錘車と土錘は、2号貯蔵穴で共伴した土器が弥生前期中頃から後半であり、これらと同時期のものとなる。

⑤ 溝(巻頭図版1、3-1、9-2・3、10-1・2、図版5、16-1、第54・55図、付図)

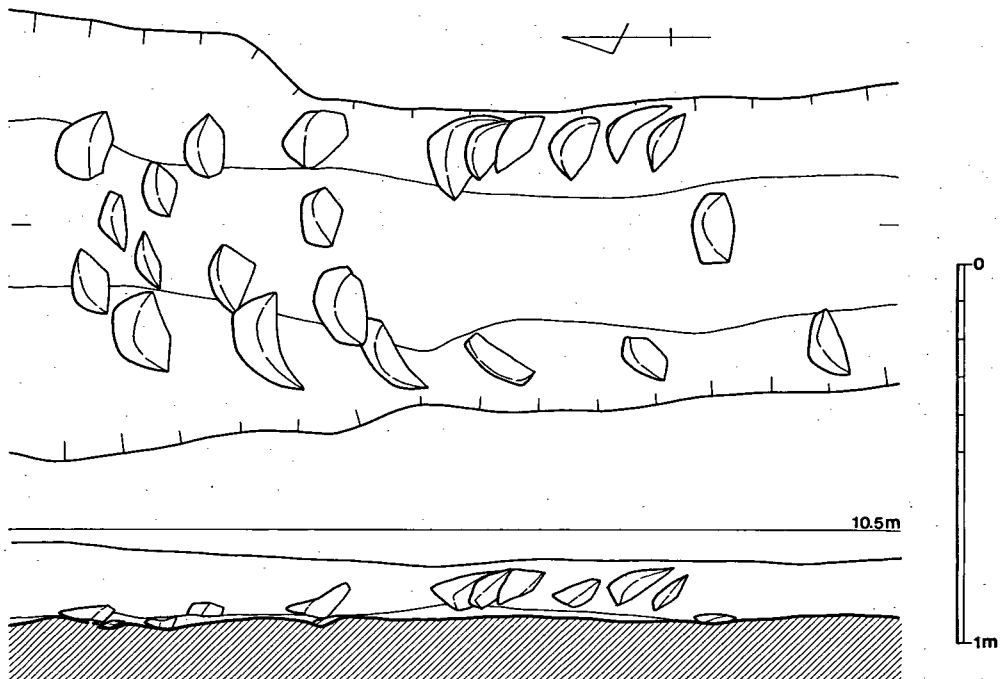
長通調査区では、縦貫する形で数条の溝が北に向かって流れているが、基本的に畠田地区の溝1～溝3から連続するもので蛇行しながら、途中で分岐したり消滅したりしている。長通調査区が略南北に長いので、道路建設の中心杭を基準にし、20m毎に東西に輪切りにする形で0

区から5区まで6分割し地区分けとした。したがって、遺構や出土品を説明するにあたっては、地区名と遺構名を併称することになっている。

溝1 (M1)

溝1は、4区南側で分岐することから、分岐した北側では東溝を溝1東(M1東)、西溝を溝1西(M1西)とした。溝の形態は畠田地区と変わりがないが、溝1東が倍近くの大きさとなり、2カ所で中州を形成するところもあり、主流も溝1東であったことがわかる。溝1東の大きさは、広い部分で2mのところもあるが1~1.5m幅が多く、北側の深いところで40cm、南の浅いところで20cmのところがある。横断面形も、全体的に舟底状を呈するが、底面が平坦なところもある。全体に灰黒色の砂質土で埋没している。3区で部分的に溝底面にU字形鋤先痕が多数残存しているところがあった(巻頭図版10-2、図版53、第55図)。鋤先痕は、最大のもので幅25cmに達しており、その形状からU字形鉄刃の鋤で溝を掘削したことが明らかで、鋤先痕の形状と重複から、北側を向き南にさがりながら掘削したことが伺える。鋤先痕が検出できたのは、埋土が砂質であったからで、これは掘削後すぐに洪水で埋没した証拠ともなるであろう。

溝1東からは、0区~2区の下層で多量の土師器が出土している。土師器は、古式土師器と5世紀前半代のものが混在しているところが多いが、下層程古式土師器が多くなる傾向にある。



第55図 長通溝1 鋤先痕実測図 (1/20)

3区で少量ながら須恵器があり、古式須恵器もあった。3区～5区は、土器量が少なく、溝全体に弥生終末の土器片もあるが、後期土器と古式土師器に岡山地方の土器片が若干混入している。また、1区～2区では手捏土器も5個以上出土し、2区床面で鉄鏃、5区で線刻のある滑石製紡錘車も出土している。

溝1西は、北に向かって蛇行し、溝1東から離れて行く。溝の大きさは、幅1m前後で平均しており、北側ほど深く40cm程の逆台形の断面形をしている。溝は、下層が灰褐色の粘質土、中・上層が砂質土で埋没し、出土品はほとんどなく、主流が溝1東であることを証明している。

溝2 (M2)

溝2も4区中程で分岐し、溝1東に並行しながらも同じく蛇行して流れている。溝2も、溝2東と溝2西に区分して記録している。東西両溝とも規模はさほど変わらないが溝2西が多少幅広い部分がある。溝2東が幅1m前後、溝2西が幅1～1.5mで、深さが東が30cm、西が45cmである。埋土は、東が黒色系の粘質土、西が上層に褐色系粘土、中層に灰色砂質土、下層に黒色粘質土がある。溝1東に隣接する溝2西下層に多数の土師器が含まれていたが、地区が2区～4区で溝1東の0区～2区とはずれており、出土する土器も古式土師器が少なく、5世紀の土師器と弥生終末土器が多い。とくに3区下層から出土した船の絵の線刻のある土器片(巻頭図版15)は重要である。また、船の絵に直接関連しないが、瀬戸内系の大型土鍾(沈子)も2区で出土している。

溝1東と溝2西は下層では重複しがちであるが、出土品を地区毎に区分してあるので、一部に古式須恵器が混入するものの、一括資料としての資料価値があるものと考えられる。

溝3 (M3)

溝3は、長通調査区南端から26mのところまで消滅するが、溝2がこの部分で分岐するので、溝2東に接続する可能性もある。溝の規模は小さく、幅が1m前後であるが北側ほど細くなり、横断面形が舟底状を呈している。

溝3からは、畠田地区と同様に出土品が少ない。

溝6 (M6)

溝6は現地調査の時点で、最初に溝Dとしていたもので、調査途中で溝6に改変したものである。調査区北から長さ約23m、幅約80cm、深さ約30～40cmの規模で検出された。溝の横断面形は舟底状を呈するが、2段に分かれているところもあり、埋没土の層位も上下2層に分かれるところがある。

出土品は、弥生土器の混入があるものの、溝1～溝2と違って5世紀代の土師器を含まず、古式土師器の範疇に属する土器のみで構成されている。

溝7 (M7)

溝7は、長通地区4区・5区の大溝の西側に並行しているV字溝のことである。しかし、この

報告では、畠田地区の溝5に連続するものとして環濠としている。

溝8 (M8)

溝8は、現地調査の時点では溝Bとしていたものであるが、報告で溝8と改称した。調査区北側から長さ約29mを検出したもので、重複する溝1西や多数のピットより新しく、暗灰黄色粘質土で埋没している。溝幅は50cm前後で、南側程細くなり、横断面形が逆台形をしている。出土品がほとんどなく時期不明。

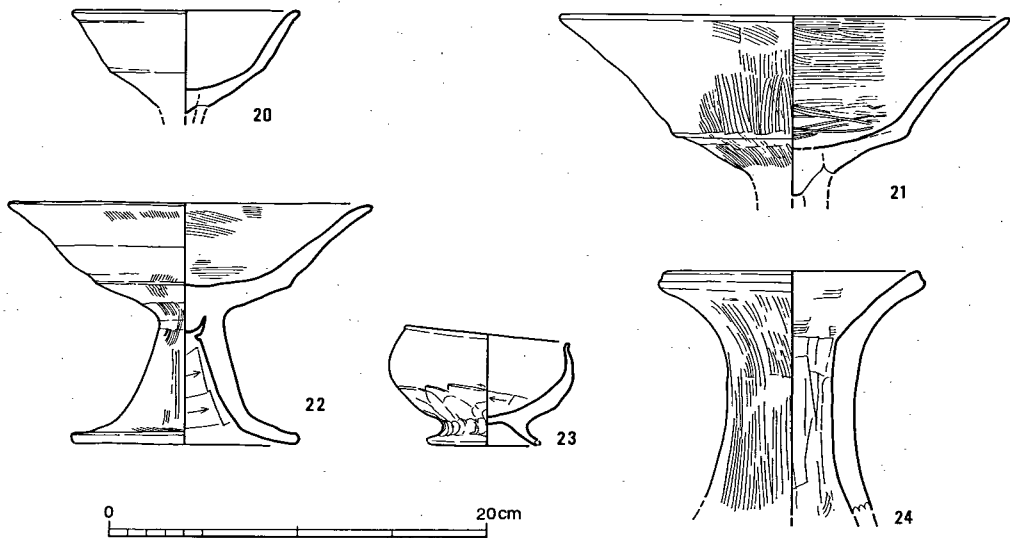
溝9 (M9) (図版17-3、第44・50図)

溝9は、第2次調査で、長方形土壌群の北側で検出されたもので、ほぼ西から東に流れる小溝である。溝は、長さ11.5m検出され、幅が東側広く1m、西側が0.7mあり、深さも東が深く20~30cmである。溝の横断面形は、第50図のようにV字形から舟底形となっている。溝からは、若干の弥生後期土器(第53図8・11)とガラス小玉が出土しており、弥生後期前半から中頃の時期のものとする事ができる。

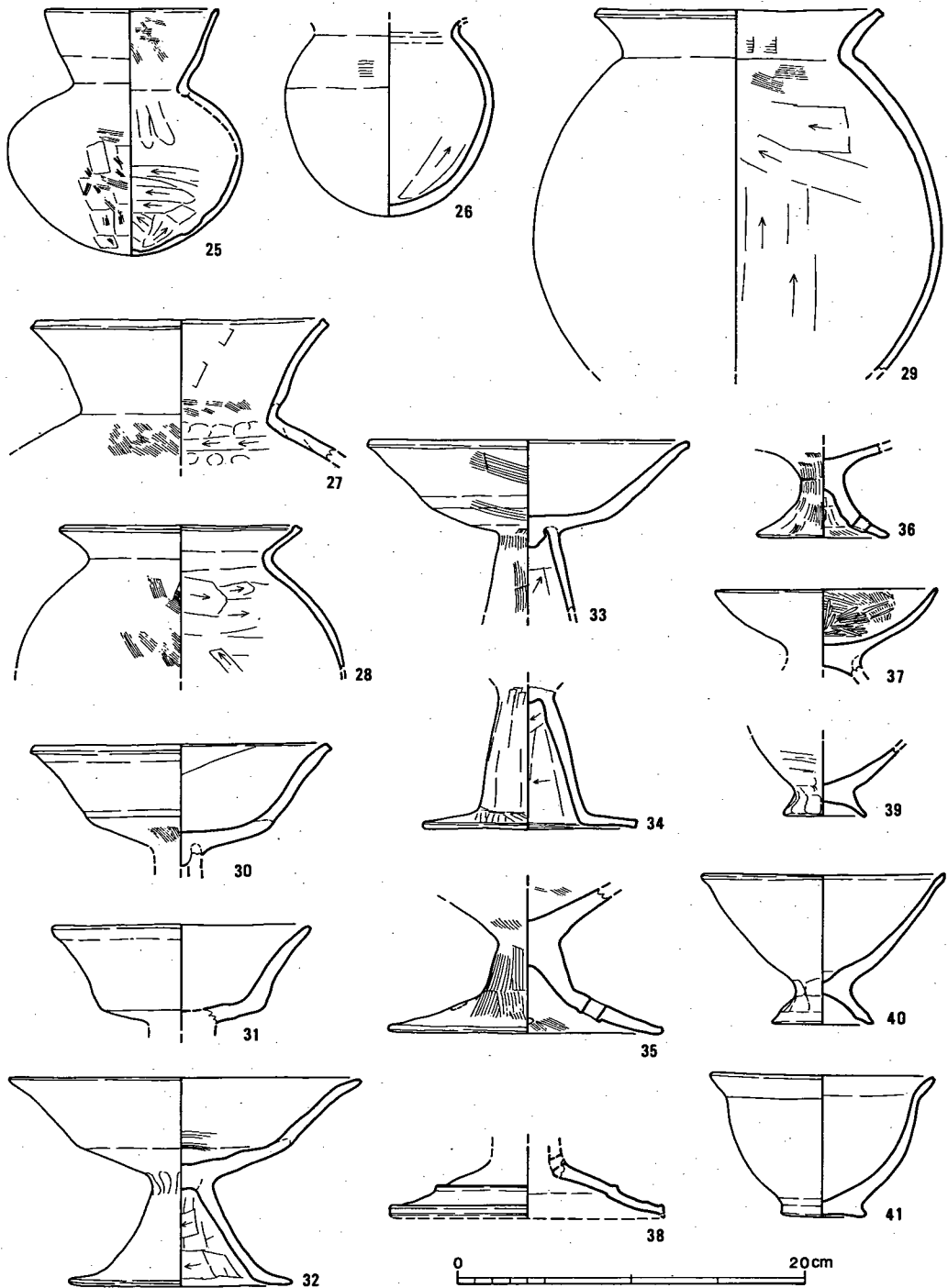
長通溝1 (M1) 出土土器 (図版45~48、第14・56~59図、表8)

長通地区の溝1~溝3は、南北の全長が100以上あり、その中でも均一に遺物が出土するわけでないので、各溝を地区毎に区分して取上げてある。したがって、大溝出土品を説明したように0区~5区の順に紹介していく。

0区溝1東出土土器(第14図4~19、第56図20~24) 第14図4~9は、溝1東下層から出土した土師器壺である。このうち4~7が広口丸底壺、8・9が複合口縁壺である。4・5・7



第56図 長通0区溝1東下層出土土器実測図(溝2)(1/4)



第57图 長通1区溝1出土土器実測図(溝3)(1/4)

は、形態的大差がないので、保存のよい5で代表すると、球形でわずかに尖底の胴部内面だけでなく外面もケズリによって成形し、ハケ目調整で仕上げている。頸部は、下半にわずかにふくらみとわずかな外反を示している。これに対し、4は頸部がわずかに外反するだけで、6が手捏的で直立口頸である。いずれも、胴部内面上半に粘土継目がよく観察できる。

8・9は、溝1東下層から出土した複合口縁壺であるが、8の複合口縁は形骸化し、9の複合口縁は古式の様相をよく残している。9は頸部下端に山形状キザミ目をもつ突帯1本をめぐらしている。胎土には、雲母・角閃石・赤褐色粒などの細砂を含むが、精製された粘土で、橙色から黄橙色に焼成されている。

10・11は、溝1東下層出土の小型甕である。双方共に同形態の広口甕であるが、10は胴部内面に粘土継目が残り、ケズリが丁寧でないことから器肉も厚く、11よりも新しい様相を呈する。

12は、溝1東下層出土の鉢で、体部下端の一部にケズリがあるが、安定した平底であるところから弥生後期前半のものである。

13～22は、溝1東下層出土の土師器高杯である。13～19の高杯の脚部は、柱状部の角度や裾部の形態に小差が見られる。古式の様相を残しているのが14と18で、柱状部内面をケズリの後にナデ調整、裾部屈曲大きく直線的にのびるため短脚に近い。19は、柱状部がなく直線的に開脚する型式で、その他が両者の中間的形態を示す。20～22が高杯の杯部で、22が唯一の完形品である。20は小型高杯であるが、21・22と比較する杯部があまり開かない型式で、14・18のような脚部が付くのではなからうか。21・22は、大小の差はあるが、同形態で脚部をソケット式に組み合わせるもので、22のように15～17の脚が付くもの。

23は、溝1東下層出土の台付鉢で、体部下半と台部外面が手捏的で、ケズリや指痕が見られる。体部内面下半にもケズリが見られる。

24は、溝1東下層出土の弥生系統の器台で、くびれ部が上半にあるところから、弥生終末前後のもの。体部内面は、ナデ調整である。

0区溝1東下層出土土器は、混入している弥生土器は別として、古式土師器に属するのは9の複合口縁壺のみであり、他の多数が5世紀初頭前後に編年されるものである。

1区溝1東下層出土土器は、第57図25～第58図43である。

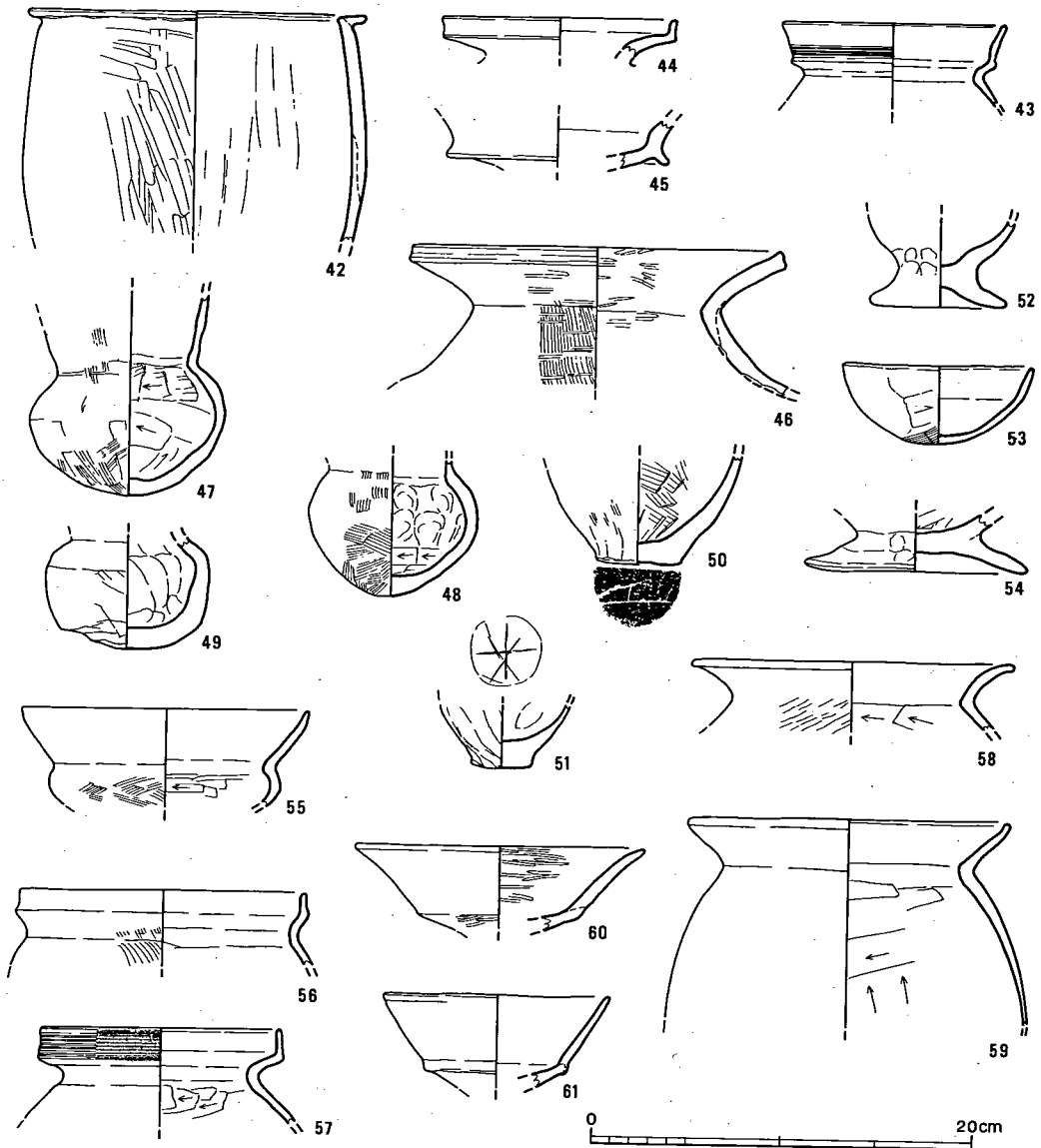
25～27は、広口壺である。25が肩の張子球形胴の内外面の下半をヘラケズリの後に外面がハケ目とナデ調整をしている。26の球形胴も同様な調整であるが、摩滅が著しい。27は、広口口縁の先端内側を摘上げており、布留系古式形態を示している。

28・29は、溝1東下層の甕で、28が口縁部端の摘上げが庄内式の名残があるが、胴部外面が極細ハケ目調整である。胴部内面のケズリも頸部より若干下から削られている。29、肉厚の外反口縁の甕で布留式系最終段階以後に出現する型式。

30～36は、溝1東下層出土の高杯である。35・36のように短脚で裾部が大きく開き、杯部下半

の傾斜角の強い型式が古式に属し、他が5世紀初頭前後に編年される型式である。しかし、32のように脚部が若干開くものと、33・34のように柱状を呈するものは、杯部の形態にも若干の差があり、後者が新しい型式となろう。

37・38は、溝1東下層出土の器台になる可能性のあるもの。また、37は台付鉢、38が加飾高杯の系統にあるものかもしれない。37は、内面がハケ目の後に部分的にヘラミガキが施されている



第58図 長通2区溝1出土土器実測図(溝4)(1/4)

る。38は、図面の天地が不明なところがあるが、高杯か器台の脚裾部で段を有する精製土器である。

39～41は、溝1東下層出土の台付鉢で、39が手捏、40が直線的に開く鉢部とくびれのケズリ、41が口縁部のゆるい屈曲と上底状台部で、3者に41→39の順の型式の変遷経過がわかる。

その外に図示できなかったが深鉢形の製塩土器らしき破片も0区と1区で出土している。

42は、弥生前期末～中期初頭の甕で混入品である。口縁部は、三角突帯から逆L字形口縁に変化したばかりのもので、胴内外面を板状工具によってミガキ状にナデている。粘土の継目は、外傾している。紋様はないがこれも「瀬戸内型甕」に属するのであろうか。

43は、複合口縁甕で、口縁部外面に櫛歯状工具による擬凹線紋を施している。胎土には、赤褐色粒・角閃石・雲母の微粒を含むものの砂粒をほとんど含まず、色調も淡黄橙色を呈し、北部九州で製作されたものでなく、山陽地方の弥生終末のものであろう。

2区溝1東下層出土土器は、第56図44～第57図76である。このうちでも、44～46・50・52～54・58～61は、1区に隣接する北側出土品である。

44～46は、瀬戸内でも山陽の吉備地域の酒津式系の壺であろう。44は、開いた頸部に小さく直立する口縁をもつ。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含むが、角閃石は含まない。45は、壺の口縁部とするよりも加飾の高杯か器台の脚裾部とすべきであるかもしれないが円周の3分の1の破片であり穿孔がないところから壺とした。色調は、内面が黄褐色、外面が橙茶色で、表面が摩滅して調整不明。46は、内傾する頸部と外反する口縁部の壺で、ハケ目の上からミガキが部分的に施されている。色調は、にぶ橙色を呈している。

47～49は、小型丸底甕で、全体的に製作が荒仕上げで、とくに49が手捏的で器壁も厚い。時期は、布留系の新しい時期である。

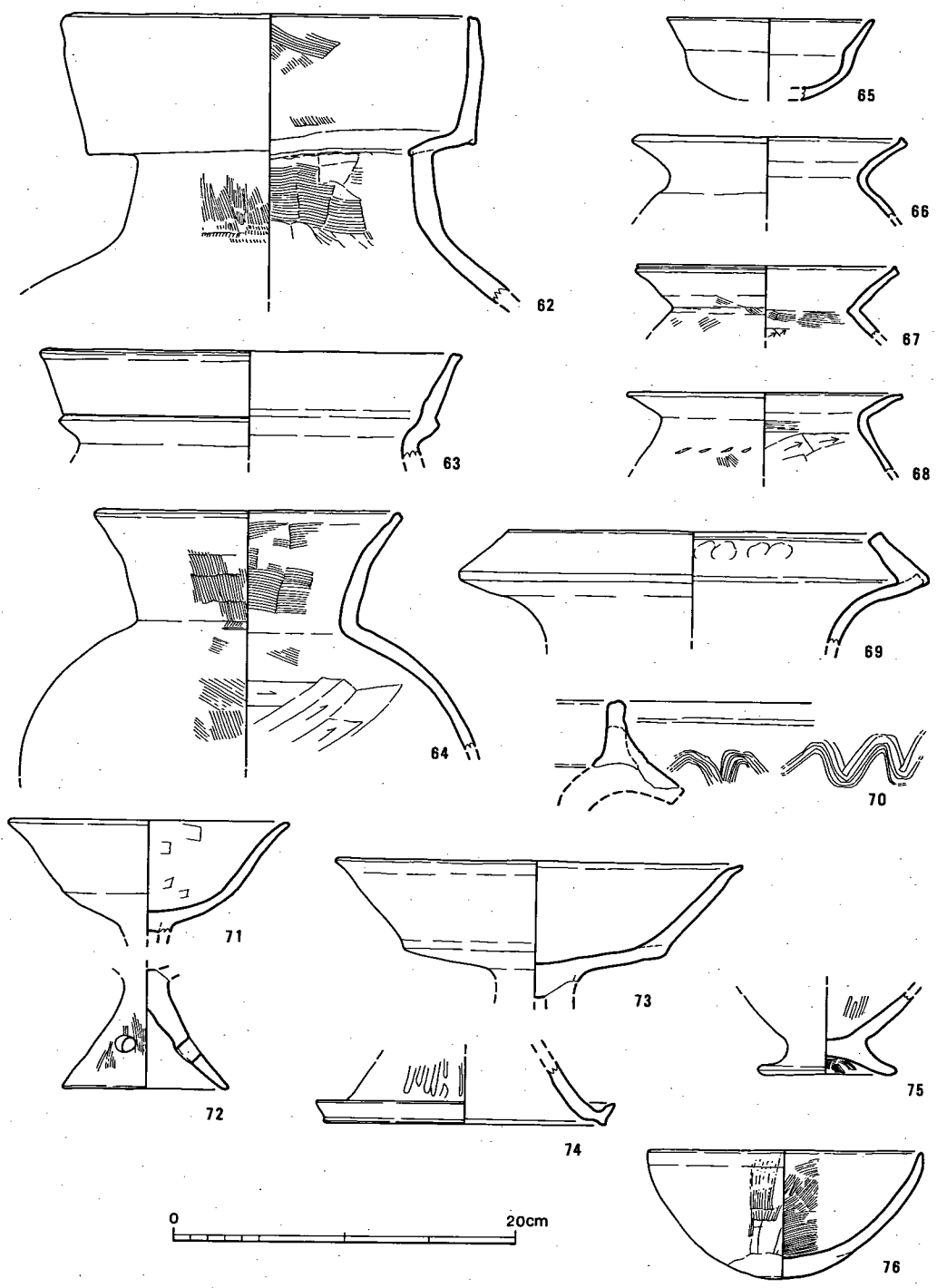
50～52は小型の底部であるが、胴部上半を欠損しているので、器種が不明である。50には、底部外面に木葉痕があり、内面が荒いハケ目仕上げ、51が底部内面に工具による直線交差紋が残っている。52は台付で、くびれ外面に指圧痕がある外がナデ調整となっている。54も台付であるが大型で、台部内面天井にハケ目残り、底部内面がヘラケズリ調整である。

53は丸底鉢で、外面がケズリで丸底とした後にハケ目、内面がナデ調整となっている。

55は精製の鉢である。大きく開く口縁の先端が内湾し、扁球形胴部内面をケズリ、外面をケズリのちハケ目のちナデ調整としている。色調は、にぶ橙色をしている。

56～59は、外来系の甕である。56・57は複合口縁の口唇部が直立し、57の外面に櫛描紋をめぐらしている。両者共に胴部内面はケズリがある。57は、胎土に赤褐色粒・金雲母・角閃石・黒色粒を含み、内外共に橙褐色をしている。

58・59は畿内系甕で、58の胴部外面の左下りのタタキ目と外反する口縁部、59の口縁部の特徴が布留系であることを示している。両者共に胴部内面はヘラケズリである。



第59图 長通2区溝1出土土器実測図(溝5)(1/4)

60・61は高杯の杯部で、上半は、60が広く外反し、61が直線的でありあまり広がらない。61は屈曲部外面が強調されているところから60よりも古式で、短脚が付く酒津式の時期であろう。

62は、複合口縁の中型壺で、肩部から頸部の屈曲がゆるやかで、口縁が内湾ぎみに高く直立するのが特徴で、瀬戸内系であろう。同一個体の破片が、溝2西下層と溝2西と溝2東の間の下層からも出土している。

63は、山陰系の複合口縁甕で、小さく屈曲する頸部と外反ぎみに直立する口縁部が特徴。

64は、山陰と畿内の双方にもある広口壺で、全体に器壁に厚味がある。

65は鉢で、55より口縁が広がらず、体部のふくらみも少なく、器壁も厚い。

66～68は、庄内系から布留系へ移行過渡期の甕である。三者共に口縁は外反しているが、66が屈曲部と先端に丸味があるところから、布留系の最古期、67が屈曲も鋭く、胴部外面に細い左下りのタタキ目があるところから庄内式、68が口縁部は外反するが、胴部がなで肩で外面に刺突紋があるところから布留最古期とされるであろう。

69・70は、在地系にもある弥生後期の複合口縁壺であるが、70の櫛描波状紋が豊前地方と瀬戸内の特色でもある。70は大型であるが、複合口縁の粘土継目から剝離しており、大型複合口縁の継方と補強が明瞭に観察できる。

71～74は高杯で、71～73が土師器、74が瀬戸内系の中期末～後期初頭の弥生土器である。71の杯部は小型で深味があるが、外形が丸味があり、72が直線に開く脚であるが厚みがあり、73も大型で割合浅い杯部がいつでも布留期新しい時期のものである。74は、脚裾部端のかえりに特徴があり、内側下端のおさえによるくぼみを摘出し、さらに上方への複合口縁状のかえりに古相を残している。胎土には、石英・雲母・赤褐色粒を割合多く含むが、角閃石を含まぬ茶褐色である。

75の台付底部は、底部内面にミガキがあるところから広口壺か鉢であろう。

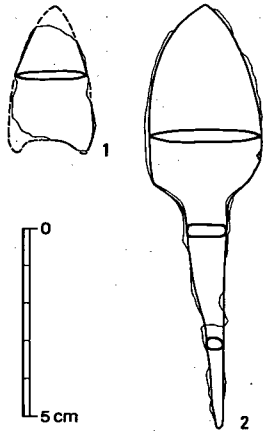
76の丸底鉢は、外面をケズリにより丸底にしたのちハケ目調整しているので弥生終末。

溝1からは、手捏土器も若干出土している。

手捏土器は、第65図の2・3が1区溝1東下層出土、1・4・5が2区溝1東下層から出土している。1は、破片が溝6からも出土した鉢形で、2がそれよりさらに小型のもの。双方共に手捏という名のとおり指圧痕が著しい。

3は、第57図39と同一土器の台付鉢で、製塩土器の可能性がある。

4・5は器台形で、どちらが上下か区別ができない。外面にはタテ方向の指圧痕後に若干ナデ調整も加わっている。胎土には、砂粒が割合多く含まれ、4に雲母、5に角閃石が混入している。



第60図 長通溝1東出土
鉄鏃実測図
(溝6)(1/2)

滑石製紡錘車(図版51-5、第66図5)

滑石製紡錘車の破片が、5区溝1から出土している。本例は4分の1程の破片であるが、直径3.8cmに復原できる。紡錘車は、截頭円錐台形をしており、上下両面に細線でシャープに直線による幾何文が陰刻されている。片面にはわずかなふくらみがあるが、径の大きな方は平坦な作りで、孔径も0.6cmに復原できる。現在の重さは、11.45gである。

鉄 鏃(図版53、第60図)

2区の溝1東から鉄鏃2本が出土している。第60図1は、無茎式鉄鏃で、弥生から古墳初期に見られる北部九州と朝鮮半島南部特有の型式である。復原長4cm、最大幅2.3cm、厚さ0.2cm弱の大きさ。孔は見られない。

2は、有茎平根式で古墳時代のもの。大きさは、全長11.3cm、身最大幅3cm、身長5.3cm、身厚0.3cm弱である。

長通溝2(M2)出土土器(図版48、第61~63図、表8)

第61図83~86は、長通1区溝2西下層出土土器である。

83は外面にミガキ、内面にハケ目調整のある丸底壺であるが、底部外面に径2.3cmの丸いくぼみがあるのが特徴で、北部九州では見られないので、布留系の小型丸底埴などのくぼみに関連するものであろうか。

84は、頸部が丸味をもって屈曲し、口縁が少し立上がる山陽系の弥生終末の壺。胎土に雲母・赤褐色粒と粗砂を少し含み、橙色を呈する。

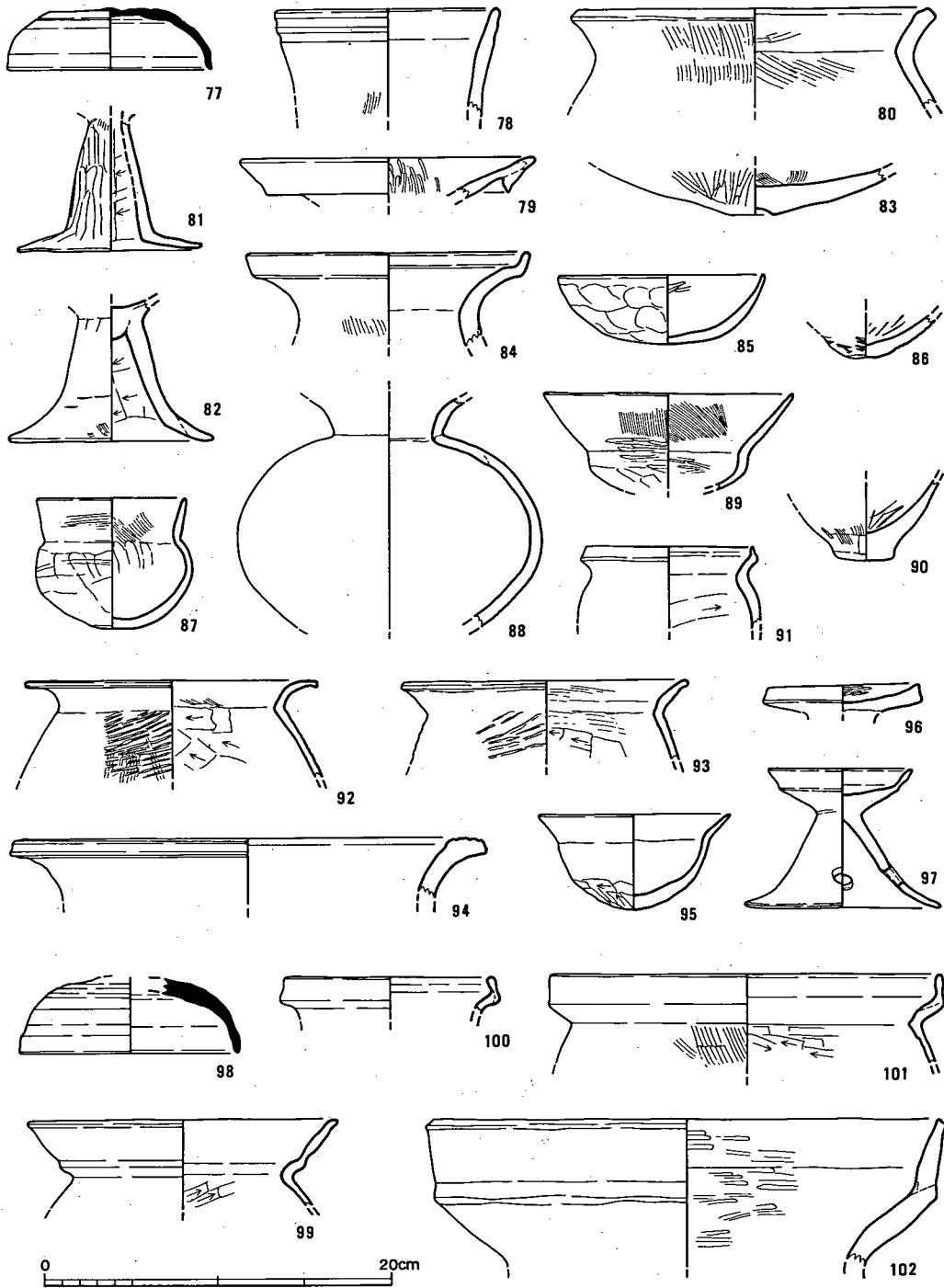
85の丸底鉢は、全体に摩滅しているが、外面がケズリによって丸底とし、内面がミガキの後に黒色の付着物がある。

86は、尖底の小型甕の底部で、胴部外面にタタキ目がある。

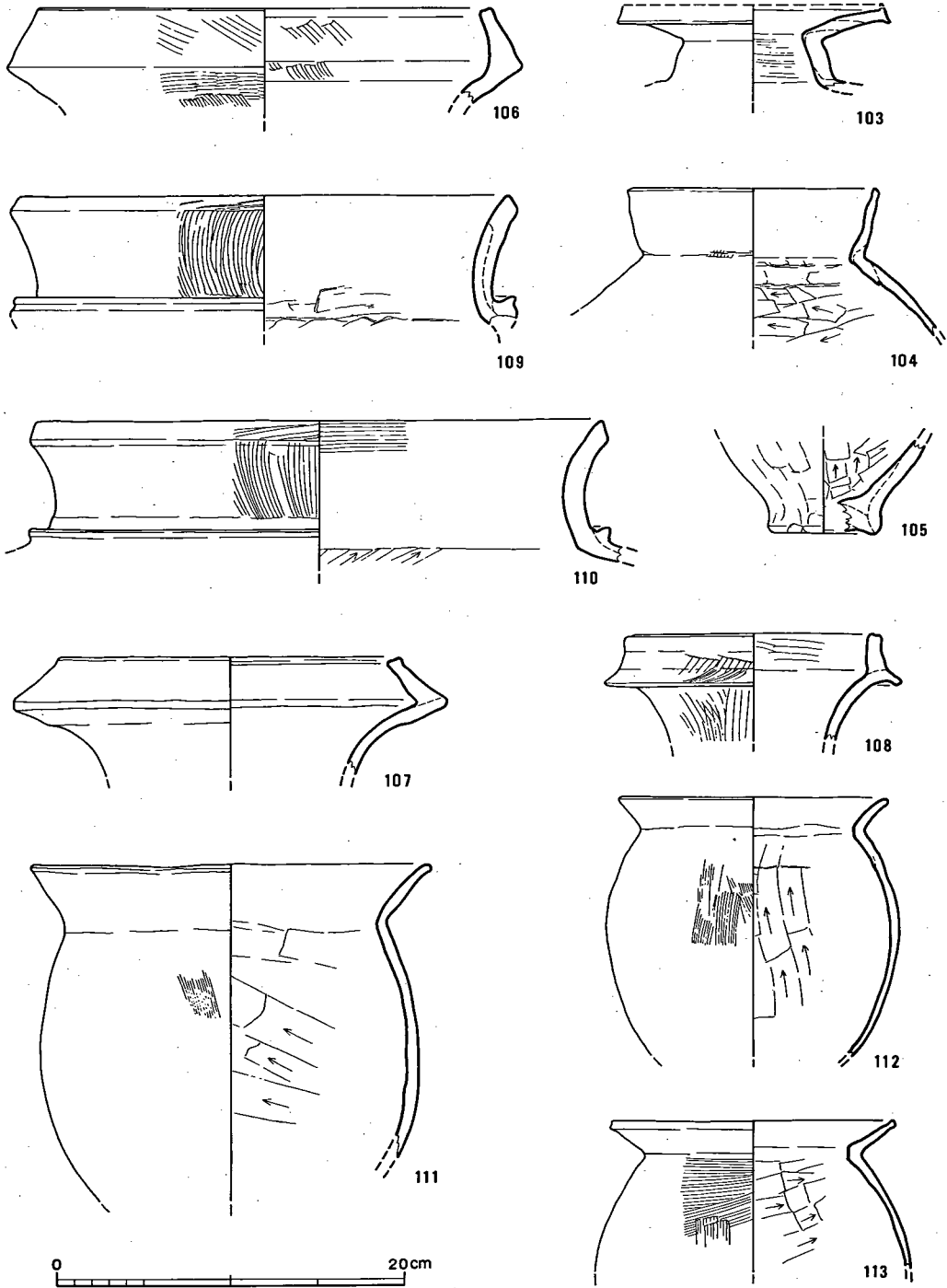
長通2区溝2西下層出土土器は、第61図87~97である。

87・88は土師器で、87が小型丸底埴、88が複合口縁壺である。87は、胴部外面をケズリによって丸底とした痕跡、内面に指圧痕があり、割合荒い仕上げとなっている。88は、少し扁球形胴部に外反する頸部で複合口縁の可能性の強い壺で、外面が全体的に摩滅しているが、内面は斜上方向にナデている。胎土には、雲母・赤褐色粒などの細・小砂を含むが、角閃石を含まず、茶褐色から褐色の色調に仕上がっている。長通3区溝2下層で出土した船の線刻絵画のある土器片は、この土器と同一個体か同型式の壺の破片である。87は布留式でも新しいが、88は山陽地域にある最古式土師器に属するであろう。

89の土師器鉢は、体部外面下半をケズリの後にナデ、その他の内外がハケ目の後に部分的に



第61图 畠田・長通1~3区溝2出土土器実測図(溝7)(1/4)



第62図 長通3区溝2出土土器実測図(溝8)(1/4)

ミガキがある。

90・91は小型甕で、90が厚底で凸レンズ状を呈し、91が複合口縁の摘上げと胴部内面へラケズリで山陽系の弥生終末土器。

92・93は、口縁部が丸く外反し、胴部外面にタタキ目をもつ畿内系甕。外面のタタキ目は、92が普通であり後に一部タテハケ目、93が荒いタタキのまま、双方共に内面がへラケズリである。93は、接合できる破片が2区溝1東下層からも出土している。

94は、外反して上面に厚味をもつ口縁に凹線紋を施す甕。岡山地方の弥生中期末頃に見られるものである。胎土には、砂粒を多く含み、金雲母・赤褐色粒が混入している。色調は、内外共に暗橙褐色をしている。

95は、口縁部がわずかに屈曲して開く鉢で、体部下半がケズリで丸底としたままで、ケズリ形態が北部九州的であるが、器形が山陽系であろう。

96・97は器台で、96が厚味のある小さな受部、97が屈曲する口縁によって深味のある受部に特徴がある。脚部はゆるく湾曲して開き、割合大き目の円孔を4個もっている。時期は、山陽の亀川上層式といわれている布留古期に相当するものである。

長通3区溝2西下層出土土器は、第61図98～第63図119・121・122である。

98は須恵器杯蓋で、時期が6世紀末と思われるので混入品であろう。

99～103は外来系土器で、103が壺でその他が甕である。99の山陰系の甕は、口縁が外傾しているところから布留期の中頃に位置するであろう。

100・101は、山陽の弥生終末期の甕で、口縁部が小さく屈曲し立上がる特徴をもつ。双方共に溝2の東西両溝の下層出土品である。

102の中型甕は、複合口縁上半が直立に近いところと内面のミガキが特徴である。山陽の酒津式に属するものであろう。

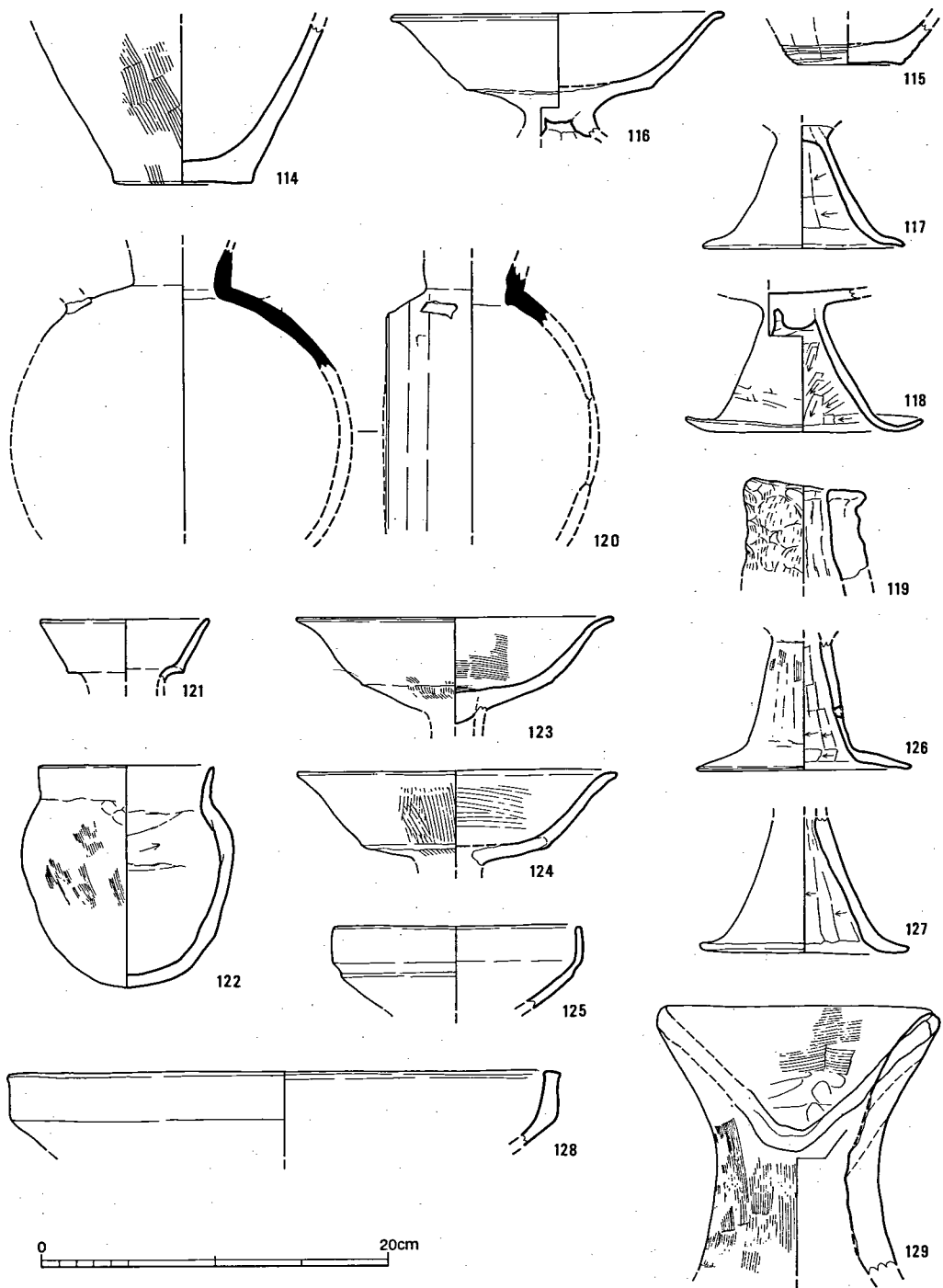
103は、内傾する頸部から直角に屈曲する口縁端両側を摘出する特徴が瀬戸内でも四国の吉野川下流域の古式土師器(庄内併行期)にある。本例は肉厚であるが、胎土に赤褐色粒・雲母・石英などの細砂を少量含むだけで、器面が滑らかなにぶ橙色から肌色をしている。

104・111～113は、布留系の甕の113が最古式、他が最新式である。113は、口縁が内湾せずに先端の上部を摘上げているところに庄内式の名残がある。

105は、平底で胴部内面にケズリがあるところから瀬戸内系の弥生土器甕である。胎土に雲母・赤褐色粒・角閃石や多量の小砂を含み、外面はにぶ黄橙色、内面が茶灰色と黒色を呈する。

106～108は、在地系の弥生の複合口縁壺である。106の口縁のように直角に近い屈曲から、107の鋭角の屈曲、さらに108のように屈曲から上が直立する型式へと型式変遷する例である。106が後期中頃、107が後期後半、108が弥生終末である。

109・110は、在地系のあまり口縁が広がらない甕である。口縁が直立に近いことと口縁下の突



第63图 長通4区他溝2出土土器実測図(溝9)(1/4)

帯から、109が後期前半、110が後期中頃の時期ではなかろうか。

114・115は平底の底部で、114が弥生中期であるが、115のように胴部外面をタテにナデた後に断続的な沈線をめぐらす例は、所属地域や時期を知らない。

116～118は通有の5世紀前半の高杯である。3例共に、脚部が大きく開くのが特徴であり、裾部は丸味のある屈曲をしている。

119は手捏的な支脚で、外面に指圧痕が著しく、後にハケ目とナデも見られる。

121は複合口縁の土師器壺であるが、北部九州では5世紀前半に初期須恵器の甕の模倣品として出現するもので、斜上に開く口縁と円孔のある扁球形胴部が特徴である。

122は、2区溝2西下層の破片と接合できた粗製甕である。

長通4区溝2西下層出土土器は、第63図120・123・124・127である。

120は須恵器の提瓶で、直立する頸部と胴部の一部に把手の痕跡もある。

123・124・127は、5世紀前半で一般的な土師器高杯である。

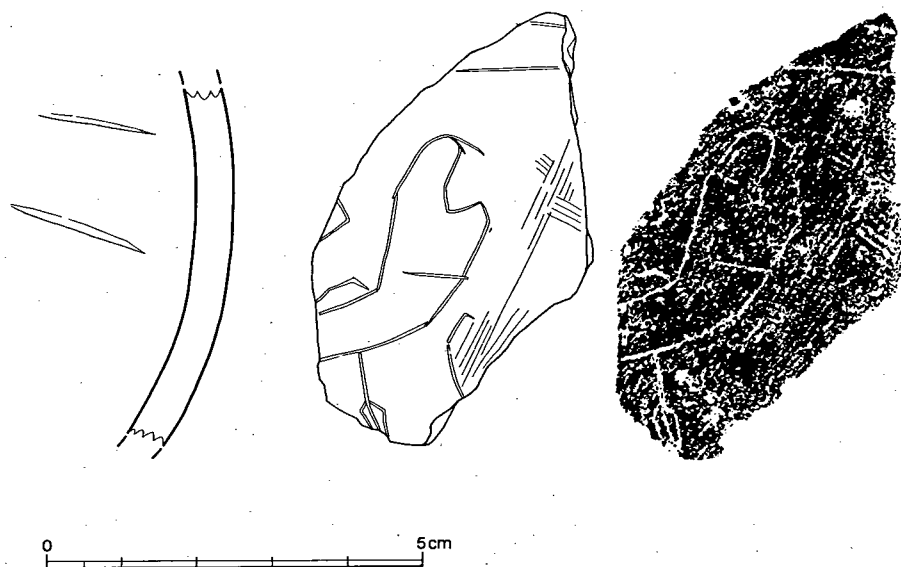
125・126・128～130は、溝2西下層出土土器であるが、出土した地区名が不明な土器。

125・126・128は高杯で、125・128が杯部の直立と段から後期中頃の瀬戸内系、126が5世紀前半に属するものである。

129の器台は、受部片側に大きくV字形の切込みがあるところが、東九州の特徴的なもの。

線刻画土器(巻頭図版15-2、図版52-4、第64図)

長通3区溝2東と溝2西の間の下層から出土した土器に、線刻画のある土器片が含まれてい



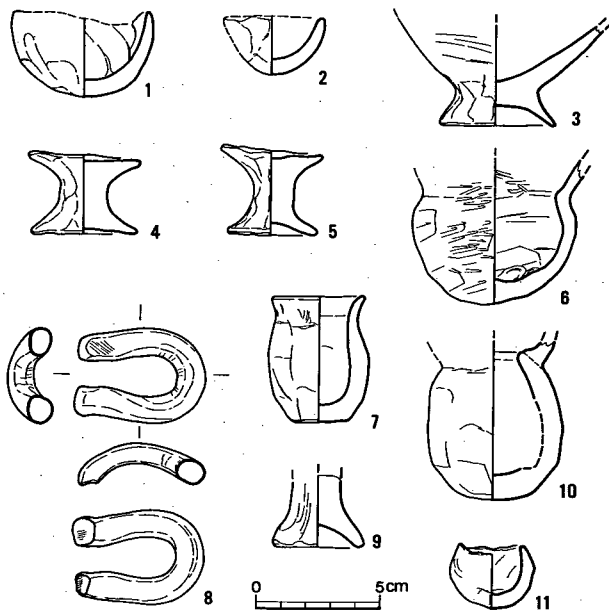
第64図 船の絵の線刻土器片実測図(溝10)(1/1)

た。出土地点の溝2東と溝2西の間というのは、溝2が分岐して溝2東と溝2西になるが、その下層には分岐する以前の溝2が存在し、これから出土したことになり、直接共伴した土器が第61図100・101・111である。しかし、共伴土器は、出土した遺構が溝という性格上、第61図98～第63図119までの範囲、さらには溝2全体の中で考えるべきかもしれない。したがって、ここでは線刻画のある土器片の観察によって、その器種の復原と所属年代を最後に推測したい。

線刻画のある土器は細片で、最大6.1cm、幅3.4cm、厚さ5mmの大きさである。外面は、ハケ目の後にナデ調整されたうえで、線刻画が描かれている。内面も工具痕が残るものの、丁寧にナデ仕上げされている。胎土には、粗砂を若干含むものの細砂も少なく、雲母・赤褐色粒・黒耀石が混入している。色調は、外面が茶橙色で、内面が暗灰褐色をしている。

この土器片は、湾曲の具合から壺の肩部片と思われ、同一個体の破片を精査したが発見できなかった。しかし、最も近似するものとして、第61図88の複合口縁と考えられる壺があり、同一個体である可能性を残している。

線刻画は、鋭利な筧先で描かれた絵の一部であり一見して抽象的であるところから、最初に目に付く「矢」または「櫂」の認定から始めた。これを「矢」とすると「矢」が刺さった動物の正体が何かということになる。この絵を動物とすると怪獣ということになり問題の解決にならない。したがって、もう一方の「櫂」とすると、本体の船の下から櫂が1本出ている絵ということになり、説明しやすくなる。船は、櫂の傾きから舳部分が残っていると見られ、船底から



第65図 島田・長通出土捏土製品実測図(溝11)(1/3)

から分れて高く立上った縦板の表現から、丸木舟や独木舟ではなく、外洋を航行できる準構造船であること明らかであろう。さらに、この絵を船の舳部分とすれば、縦板部分から船底に伸びる1本の直線は、舵を表現したものではなかろうか。縦板上端から飛出した線も気にかかる。船上にも折線の表現が2カ所あり、舷側板や突起(ピボット)などの船上の構造物を示しているものと思われる。別に縦板上方に2条の平行線と、船底右側にハケ目と不鮮明な折線もあるが、何の表現であるかわからない。

この線刻画土器は、土器の調整

や胎土から弥生土器とは考えられず、出土層位や共伴土器から溝2の最終段階の5世紀初めでもないことから庄内式の新しい時期の複合口縁壺と見るべきであろう。

手捏土器(図版50—6・10・11、第65図6・10・11)

6は、2区溝2西下層出土で、成形が手捏的であるにもかかわらず、外面と口縁内側にケズリ後のミガキが見られるので、小型丸底甕の粗製品というところであろう。10・11は、長通地区出土であるが出土地点が不明になったもの。

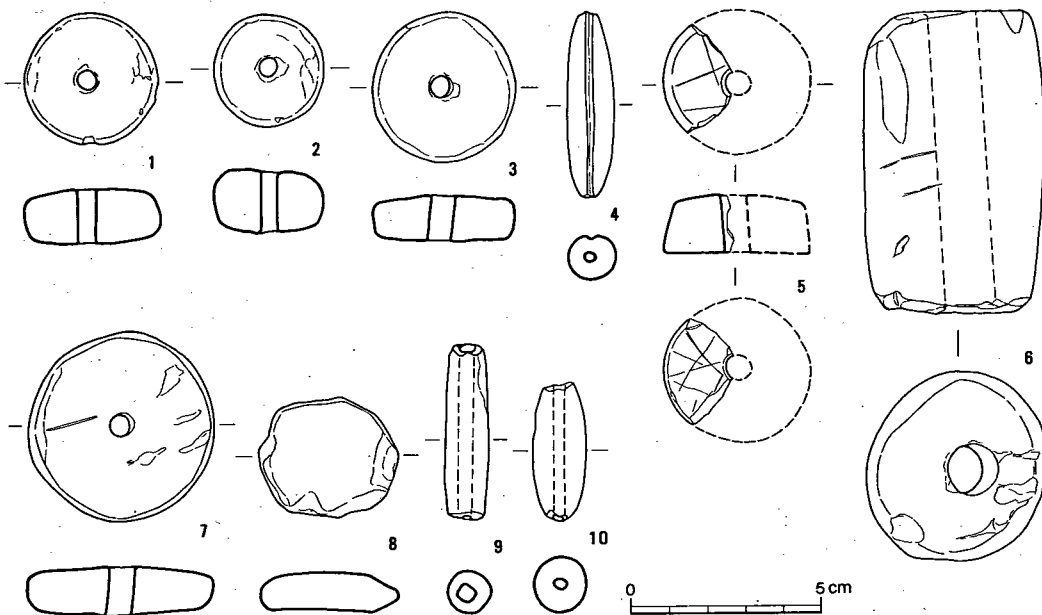
紡錘車(図版51—7、第66図7)

長通2区溝2西下層から出土した比較的大型の紡錘車である。直径4.95cm、最大厚1.3cm、孔径7mm、重さ35.7gで、胎土には石英などの細砂を多く含み、金雲母・角閃石が混入している。色調は、鉄分を含む水質のためか茶褐色をしているが内面が灰褐色となっている。この紡錘車は、弥生前期のものと思われる。

土 錘(図版51—6・9、第66図6・9)

6は、瀬戸内特有の大型管状(円筒形)土錘で、大きさが長さ8cm、最大径4.8cm、孔径1.3cm、重さ232.5gである。胎土には、石英などの細砂を含み、赤褐色粒が混入している。色調は褐色で部分的に黒色部があり、保存良好である。時期は、伴出した土器から古墳前期になる。

9は、長通地区北端の試掘トレンチの表土出土の土錘で、胎土に砂粒をほとんど含まないところから古墳時代以後の新しい時期のものと思われる。大きさは、長さ4.6cm、最大径1.15cm、



第66図 畠田・長通出土紡錘車・土製品実測図(1/2)

孔径0.4cm、重さ5.9gである。

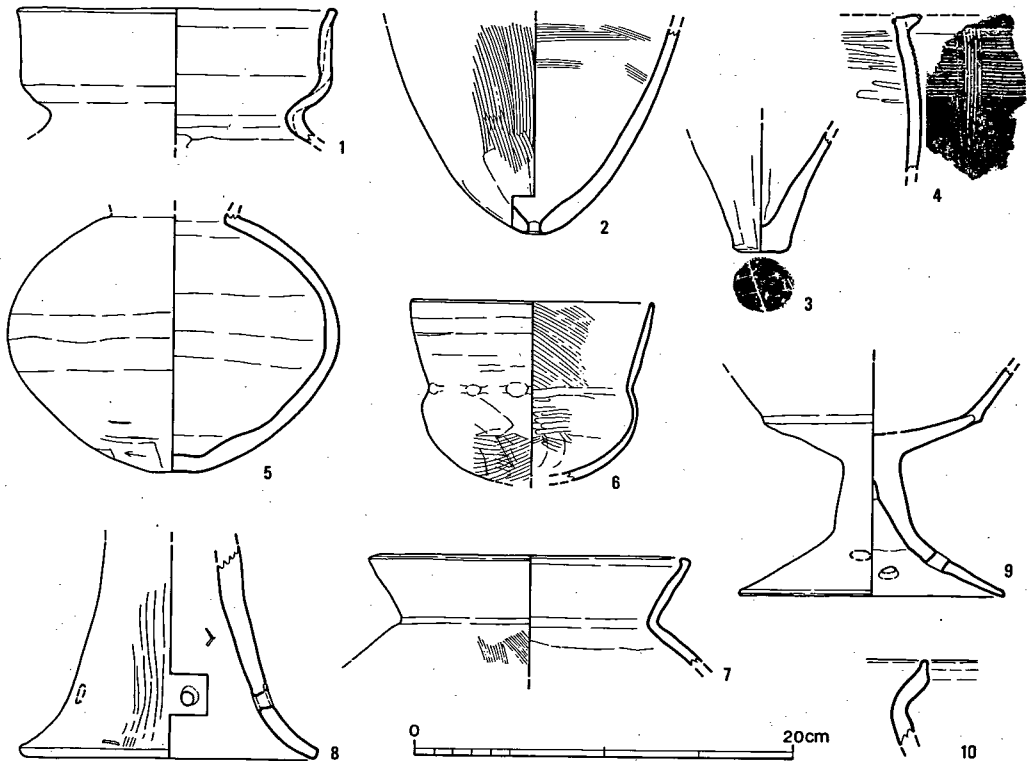
円形土器片(図版51—8、第66図8)

第66図8の土器片は、長通4区溝2西下層から出土しているが、内面にあたる面に朱が付着しているところから、5区大溝3層を中心に出土している一連の朱が付着土器群に関連するものと思われる。胎に石英などの砂粒を多く含み、赤褐色粒・炭・角閃石などが混入し、灰褐色を呈するところから、第42図12の鉢に近いものである。しかし、この破片は、円形に再加工していることから、破片になっての再利用が考えられる。外面調整は、摩滅して不明。

溝6(M6)出土土器(第67図)

溝6からは、古式土師器が主体に出土し、外来系の弥生土器が混入している。1～4が1区、5～10が2区出土品である。

1は、外来系の複合口縁土師器壺で、ゆるやかに屈曲した頸部と高く立上って先端が外反する口縁部が特徴。口頸部の内外面はヨコナデされ、胴部内面がケズリがある。胎土には、細・小砂を多く、角閃石・黒色粒を割合多く含み、雲母・赤褐色粒も混入している。色調は、褐色を呈し、口縁の一部に黒色部分がある。



第67図 長通溝6出土土器実測図(1/4)

2は、尖底に焼成前の穿孔があるところから甗である。外面はハケ目後に底部付近のみケズリ状のナデ調整、内面がナデの後に一部にヨコハケ目が施されている。胎土には、細砂をかなり含み、雲母・角閃石・赤褐色粒が混入している。

3は、天地が不明であるが、平坦面に木葉痕があるところから、大分県豊後地方の尖底甗とした。外面には工具によるタテ方向のナデがあり、内面がナデられている。底径3cmの小型品である。

4は、口縁が三角形でその下に櫛描沈線紋を施す、いわゆる「瀬戸内型甗」である。櫛描沈線紋は、胴部のハケ目の後に施され、内面がヨコミガキである。胎土には、細砂を多く含み、粗砂・雲母・黒色粒が若干混入している。

5は、丸底に近い壺であるが口縁部を欠損している。口縁部は複合口縁と思われ、扁球形胴部に底部が若干くぼむ。外面は胴下半をケズリによって丸底にした後にナデ、内面もナデ調整が行われている。胎土には、細・小砂と雲母・赤褐色粒を含む。

6は、小型丸底埜で、広目の口縁部が直立に近く高く延びる。口縁の外面はミガキ状ヨコナデ、内面がハケ目、胴部外面上半がナデ、下半がケズリで丸底とした後にハケ目、内面がミガキとナデ調整されている。胎土には、小砂と雲母・赤褐色粒・角閃石を含む。

7は、布留系甗で、口縁がわずかに内湾して先端が内側に突出している。胴部は、外面がハケ目の後ナデ、内側がケズリ調整されている。

8は、瀬戸内系高杯の脚部で、瀬戸内では弥生後期中頃に位置づけられる土器型式。器面調整は、外面がタテミガキ、内面がナデである。裾部の穿孔は、5個あったと思われる。

9は、古式土師器高杯で、短脚で裾が大きく開くことから、庄内系か布留最古式であろう。全体に器表面が摩滅していて調整法は不明。

10は、瀬戸内系甗の小片で、弥生終末前後のものであろう。

手捏土器(図版50—7、第65図7)

第65図7は、平底の甗形の手捏土器で、口径3.8cm、器高5.1cm、底径2.4cmの大きさ。胎土には、細砂を含み、赤褐色粒・金雲母が混入している。時期は、平底であることから弥生期のもので、混入品であろう。

溝9出土土器(第53図8・11)

8は、溝の下層から出土した大型広口壺の口縁部で、丸く外反する口縁とその下の三角形突帯が特徴。口縁の外反曲線と三角形突帯から後期中頃と思われる。胎土には、粗・細砂を多く含み、雲母・角閃石が混入している。

11は、鋤先口縁と肩部の台形突帯が北部九州的であるが、口縁の沈線紋と頸部の綾杉紋が山陽地方の影響であろう。胎土には、砂粒を多く含み、雲母・角閃石・赤褐色粒が混入している。この土器は、溝9から一部の破片が出土しているが、破片の大半が溝の北側の包含層から出土

して。土器の時期は、肩部の台形突帯を重視すると後期前半になる。

9・10は、11に共伴した土器で、9が後期前半の大型甕の口縁、10が須恵器杯蓋である。須恵器が6世紀末から7世紀初めであるから、包含層は攪乱されていることになる。

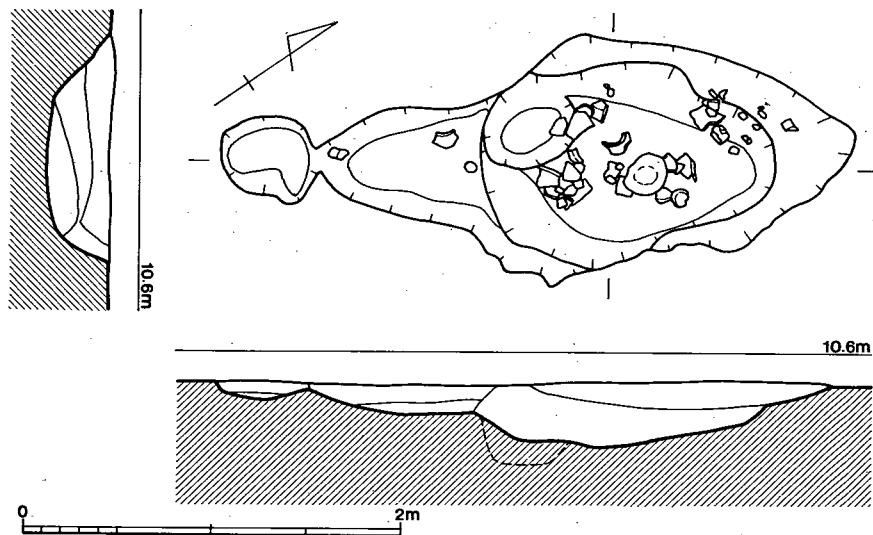
⑥ その他の遺構と遺物

長通地区には、その外に多数の小溝や柱穴状のピットがあるが、出土品がないことと、柱穴も明確に掘立柱建物と認定できるものがなかった。ただ1例として溝9の北側で第44図のように5本の小柱が並ぶ柵状の掘立柱が検出できたただけである。柱穴は、先に述べた7世紀初めの須恵器が混入する包含層の上から掘込まれていることから、これ以後のものとなる。柱穴は、直径30~40cmの小型で、柱も径15cm前後である。柱間は、東から1.8m、1.35m、1.6m、1.75mであり、2間目の間隔が30cm前後狭くなっている。

ピット群は、長通地区の北東側に集中して検出されているが、この地区での土器片等の遺物の発見が皆無に近く、時期決定が困難である。このような中であって、3区東側で土器が比較的多く出土する不整形土壌が発見された。

不整形土壌(巻頭図版13-2、第68図)

不整形土壌とは、用途不明のごみ穴とも呼ぶにふさわしい土壌で、名の通り説明しにくい形態をしている。強いて名を付けると、主軸を北東から南西に向けた舟底状土壌とピットが重複したもので、埋土の上層に土器が破棄されていた。土壌の大きさは、長さ2.85m、最大幅1.25m、最大深さ35cmである。土壌内から出土した土器は、古式土師器の一括資料であるとこ



第68図 長通不整形土壌実測図(1/40)

ろから、辻垣遺跡が古墳時代前期にも、単なる溝の集まりではなく、付近に生活遺構が存在していることを証明している。

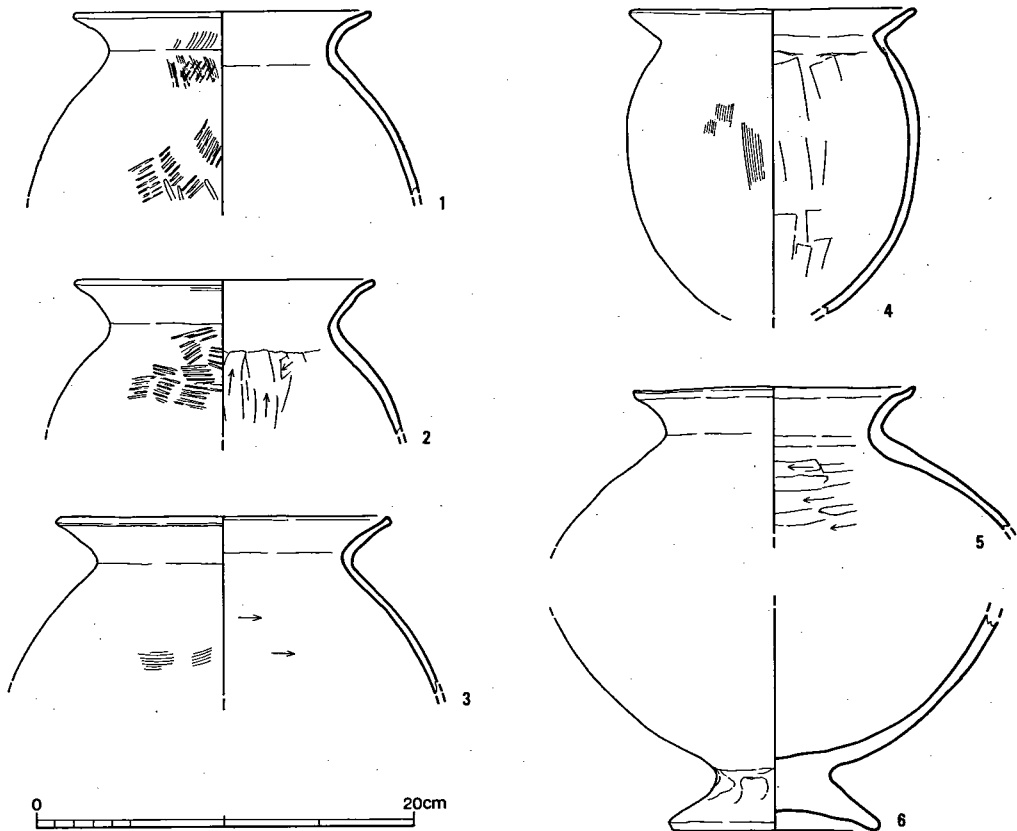
不整形土壙出土土器(第69図)

第69図のように不整形土壙出土土器は、甕に限定されている。1～4はほぼ同形態の甕であるが、胴部外面調整と口縁先端がわずかに違っている。1・2は胴部外面にタタキ目があり、3・4がハケ目調整である。口縁部は、先端内側がわずかにくぼみ、2がわずかに外反し、3が内側をわずかに摘上げ、4が直線的に外反している。1～5の胴部内面は、ケズリ調整である。ただし、1は表面の摩滅が著しく不明。

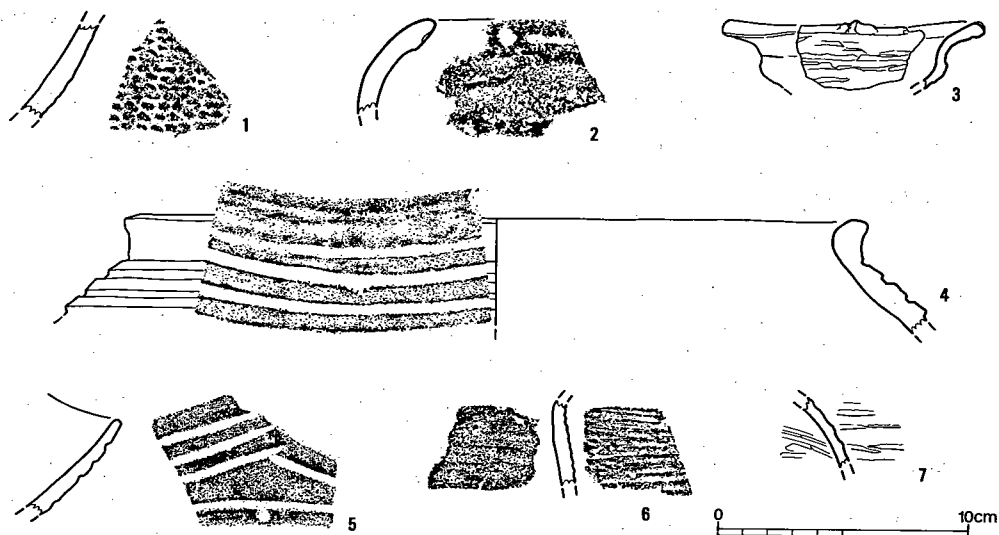
5は、1～4の口縁部と違って先端屈曲して尖り、古式の様相を示す。

6は、全体に手捏的な器面調整の粗製台付甕または鉢の製塩土器であろう。

4以外は、布留系の古式に属すると思われるが、4が口縁部と胴部のバランスが新しい様相を呈している。



第69図 長通不整形土壙出土土器実測図(1/4)



第70図 島田・長通出土縄文土器実測図(1/3)

縄文土器(図版53、第70図)

辻垣遺跡群では、大溝最下層を中心に若干の縄文土器片とその石器が出土している。

1は、長通5区大溝最下層底面から出土した押型紋土器片。押型紋は、長径5mm前後の楕円形紋の早水台式である。器壁の厚さは7~8mmで、胎土に細砂を多く含み、赤褐色粒が混入している。色調は、灰色味の淡黄橙色をしている。

2は、長通5区北端大溝第7層から出土した後期前葉の小池原上層式土器。外反した口縁端に厚味があり、中に円形と凹線をもつ。全面が摩滅して調整は不明。胎土には、細砂と雲母を多く含み、淡黄褐色を呈する。

3は、長通4区大溝第3層下部出土の晩期前半広田式の浅鉢。小型鉢で、直径10.2cmに復原できる。器面は、内外面共にヨコミガキされている。色調は、黒色から灰黒色をしている。

4は、島田大溝中区第7層出土の後期中葉の鐘崎式土器。口縁の屈曲と大きなヨコの凹線が特徴。胎土には、細砂を多く含み、赤褐色粒・雲母・角閃石が混入している。

5は、島田大溝中区第7層から出土した晩期前葉の浅鉢。波状口縁と凹線による文様が特徴。胎土には、細砂と雲母を多く含み、暗褐色を呈する。

6は、長通5区大溝最下層出土の晩期後半の甕。器面は、外面にヨコの貝殻条痕、内面にハケ目状のヨコナデがある。

7は、長通3区溝2西下層出土の晩期後半の土器片。調整は6と同じようで、胎土には砂粒やや含み、雲母と赤褐色粒が混入し、黄褐色から褐色を呈している。

(柳田 康雄)

(3) 石 器

本遺跡で出土した石器の総点数、並びに出土遺構は別紙観察表の通りである。

本遺跡の遺構は、弥生時代の溝が中心であり、報告する石器の大半はその溝等より出土した。遺物の年代もその時期に求められるが、観察の結果、縄文時代等の遺物も混じっていると考えられる。

ここでは、遺物の観察を中心に行い、あとで小結として若干の考察を行いたい。

① 磨製石鏃(第71図1・3)

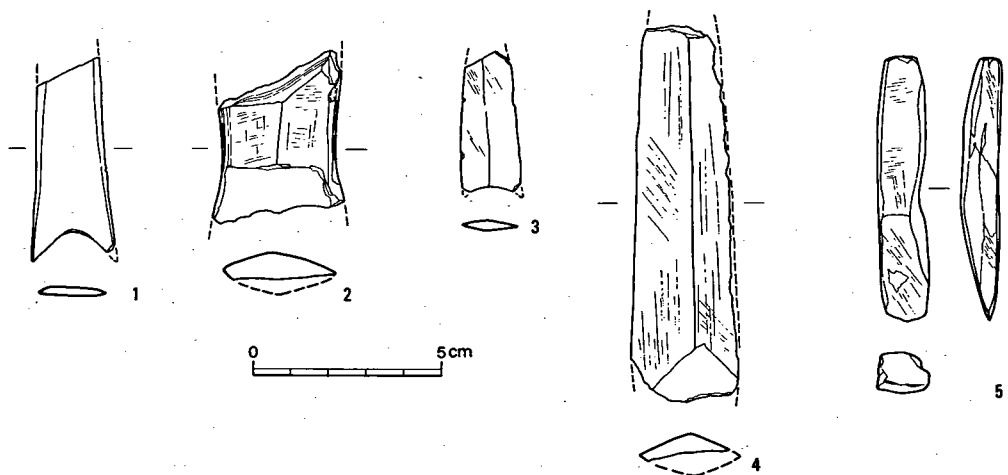
1は、珪化凝灰岩製の磨製石鏃である。4区大溝最下層より出土した。残存長5.40cm、幅2.25cm、厚0.25cm、重3.60g。先端部と基端を欠損する。3は、珪化凝灰岩製で、先端と基端を欠損する。石質からか、摩滅・風化が進んでいる。

② 磨製石剣(第71図2・4)

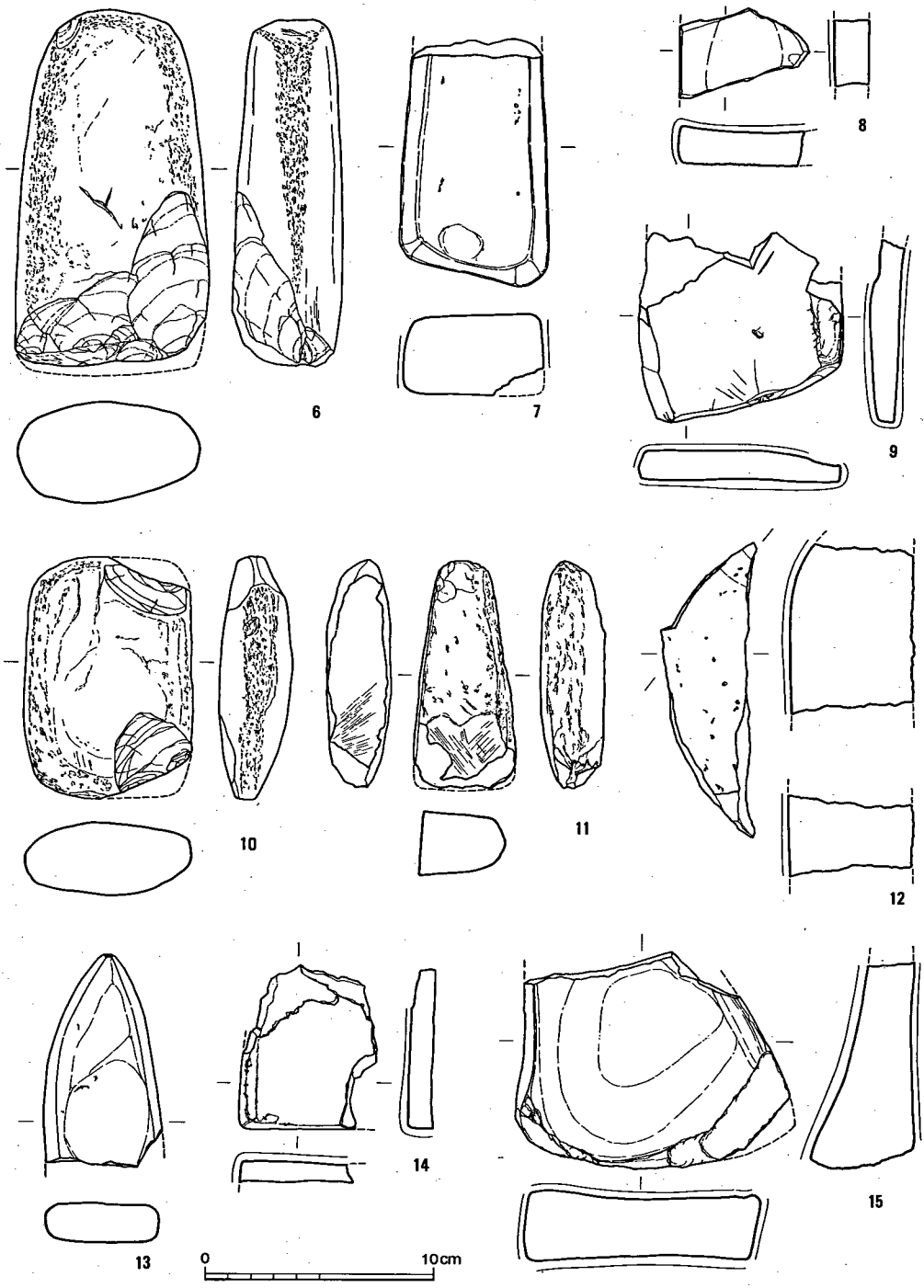
2は珪質層灰岩製の磨製石剣である。5区大溝第7層より出土した。先端部・基部を大きく欠損し、図の腹面側も欠損している。流状の石理を剣の両側を走る模様として、意識的に取り入れている。残存形態より、有柄式と考えられる。4は赤紫色砂岩製である。先端部と基部を欠損し、図の腹面部も半損している。4区大溝最下層砂利より出土した。

③ 石ノミ(第71図5)

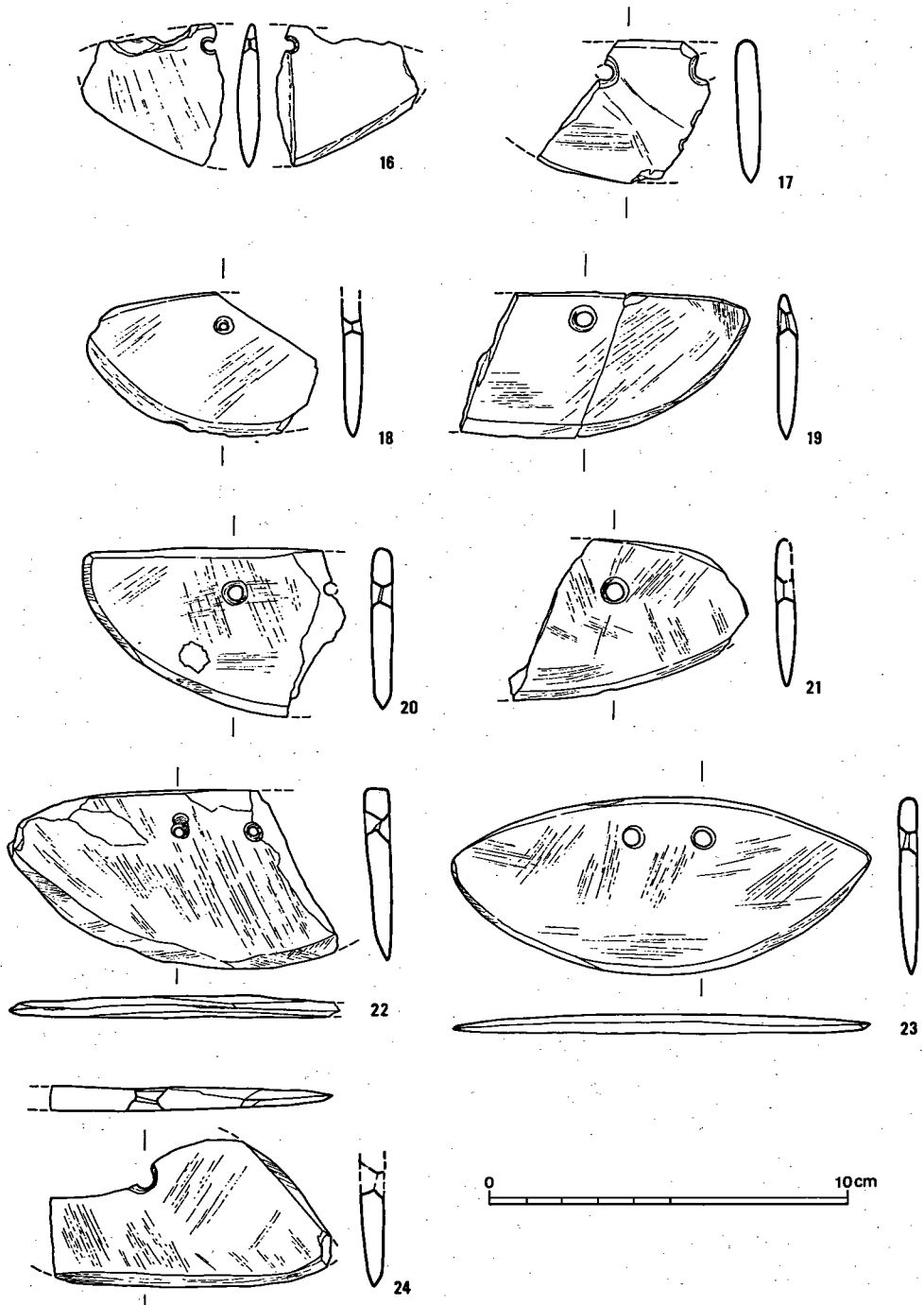
5は、珪質層灰岩製の石ノミである。刃部付近は特に摩耗している。長7.00cm、幅1.40cm、



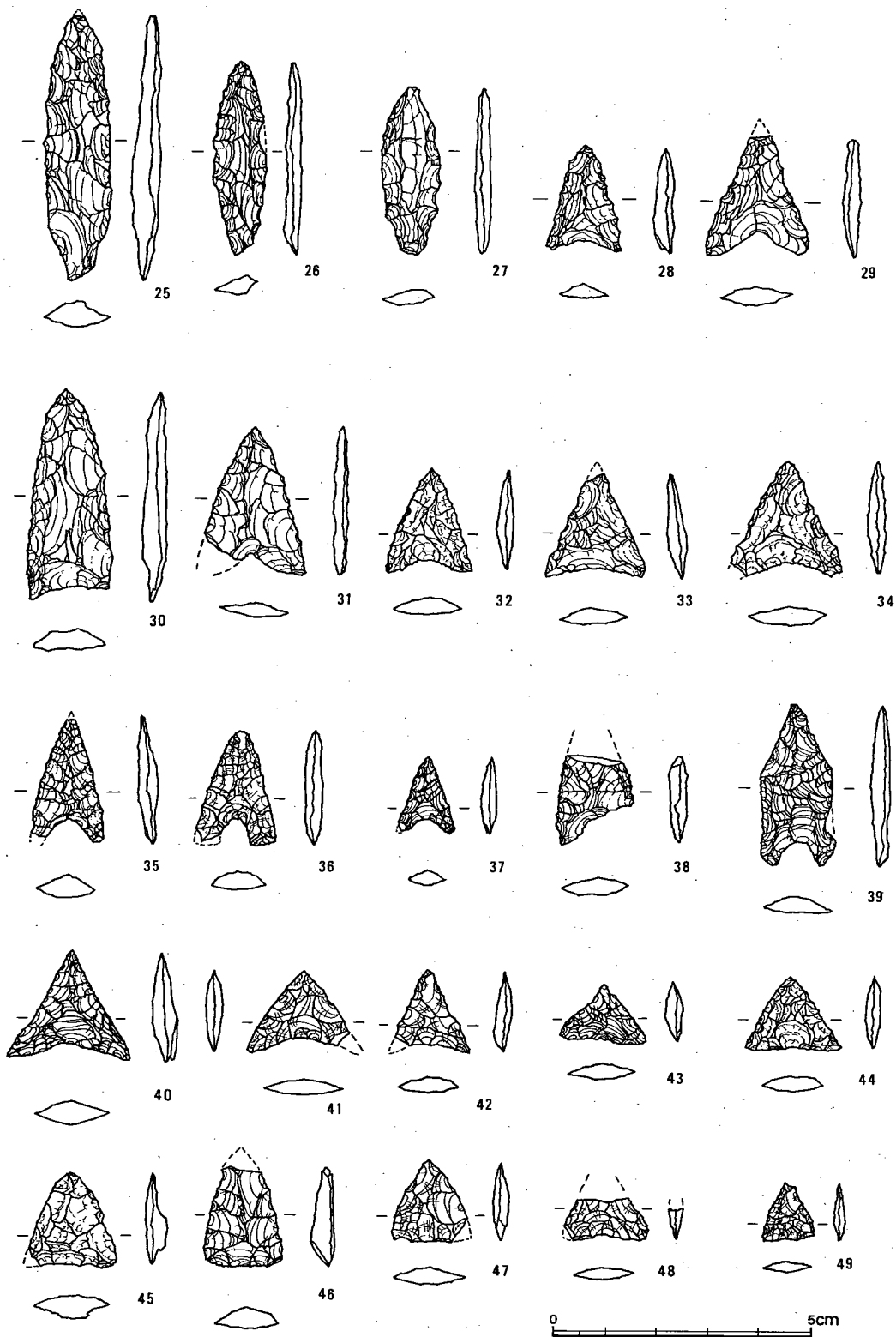
第71図 畠田・長通出土磨製石鏃・石剣等実測図(1/2)



第72図 畠田・長通大溝・溝出土石器実測図 (1/3)



第73図 畠田・長通出土石庖丁実測図 (1/2)



第74図 畠田・長通出土石鏃実測図 (4/5)

厚0.25cm、重1.85g。

④ 磨製石斧(第72図6・10・11)

6は、大型の磨製石斧で、砂岩製である。刃部が破砕している。また、基部周辺は装着のために残された痕が認められる。10は、ホルンフェルス製で刃部と基部を一部欠損している。また、風化により、石材の硬質部が浮き上り、斑点状の状態に残っている。11は、やや小型の安山岩製の石斧である。図左側縁は、節理に沿って割れた部分を側縁としている。

⑤ 砥石(第72図7～9・12～14)

7～9・12～14は、砥石である。8は、花崗岩質砂岩製で、腹面には、石材生成過程に付着した石英が浮かび上っている。9は、珪質層灰岩製で器厚は薄い。磨面は、両面・側面に及んでいる。14は、赤紫色砂岩製、側面にも磨面がある。15は、砂岩製の石皿で火を受けてか、やや赤味をおびている。

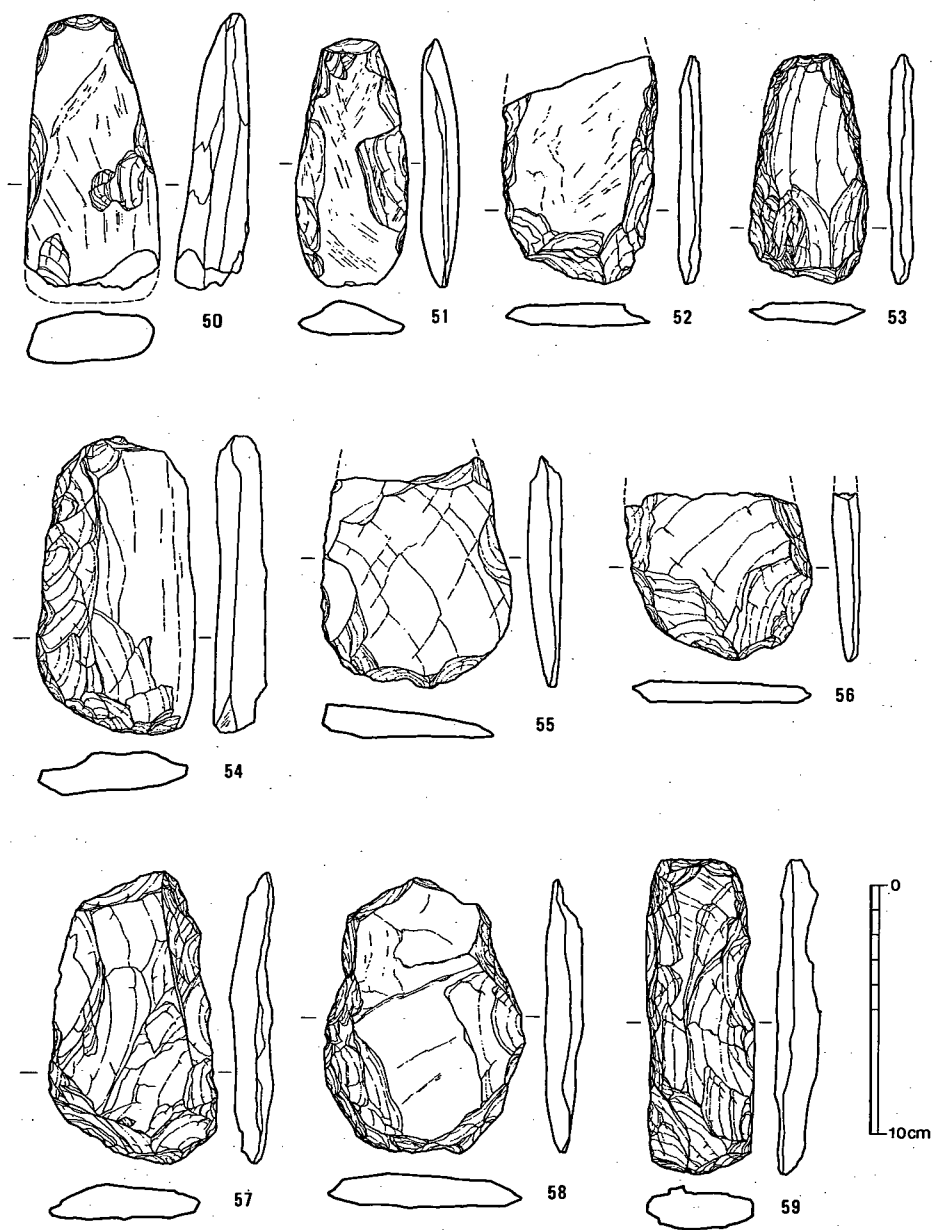
⑥ 石庖丁(第73図16～24)

16は、花崗岩質砂岩製で片刃である。残存形態より刃部は外湾すると考えられる。2区溝1東下層より出土。17は、頁岩製で片刃。18は、サヌカイト製である。19は凝灰質角礫岩製で片刃。刃部には深い擦痕が、また背面の細部には中央部へ紐ずれの痕が残る。20・21は、赤色泥岩製。20は両刃で刃縁が端部に向うにつれて腹面側へそっている。また、はっきりと稜を形成しないが、刃部は、何度かとき直されている。21は両刃で、刃縁中央で腹面側へそっている。5区大溝第1層出土。22は、凝灰質頁岩で両刃である。刃縁が端部に向うにつれて、腹面側へそっている。紐部左穴の付近には、穿孔途中で放棄された窪みが残る。このため腹面側の紐部は、使用によって刃部側へ大きく紐ずれの痕が残っている。4区大溝第3層より出土。23は砂岩製で両刃、完形。4区大溝第4層より出土。24は、砂岩製で大きく半損する。残存形態より直線刃半月形を呈していると考えられる。破損断面より紐部の穴は背面側が中央へ、腹面側が外側へ開いていることがわかる。5区大溝第7層出土。

⑦ 石鏃(第74図25～49)

本遺跡出土の石鏃の総点数は、石鏃25点である(石器観察表)。使用石材は、サヌカイト・姫島産黒耀石・腰岳産黒耀石である。

25は、加工が全面に及び、茎部を意識した調整が行われており、両側縁がほぼ平行する。2区溝6出土。本遺跡中、最も大型のもので長5.10cm、幅1.35cm、重3.20gを測る。26・27についても、同25と同タイプと考えられる。28は、サヌカイト製で、基部がやや湾曲するよう加工されている。29はサヌカイト製で、白色に風化している。30は、サヌカイト製で、溝5中層出土。形態的には磨製石鏃に近い。模倣して製作されたのであろう。31は、5区大溝第6層より出土

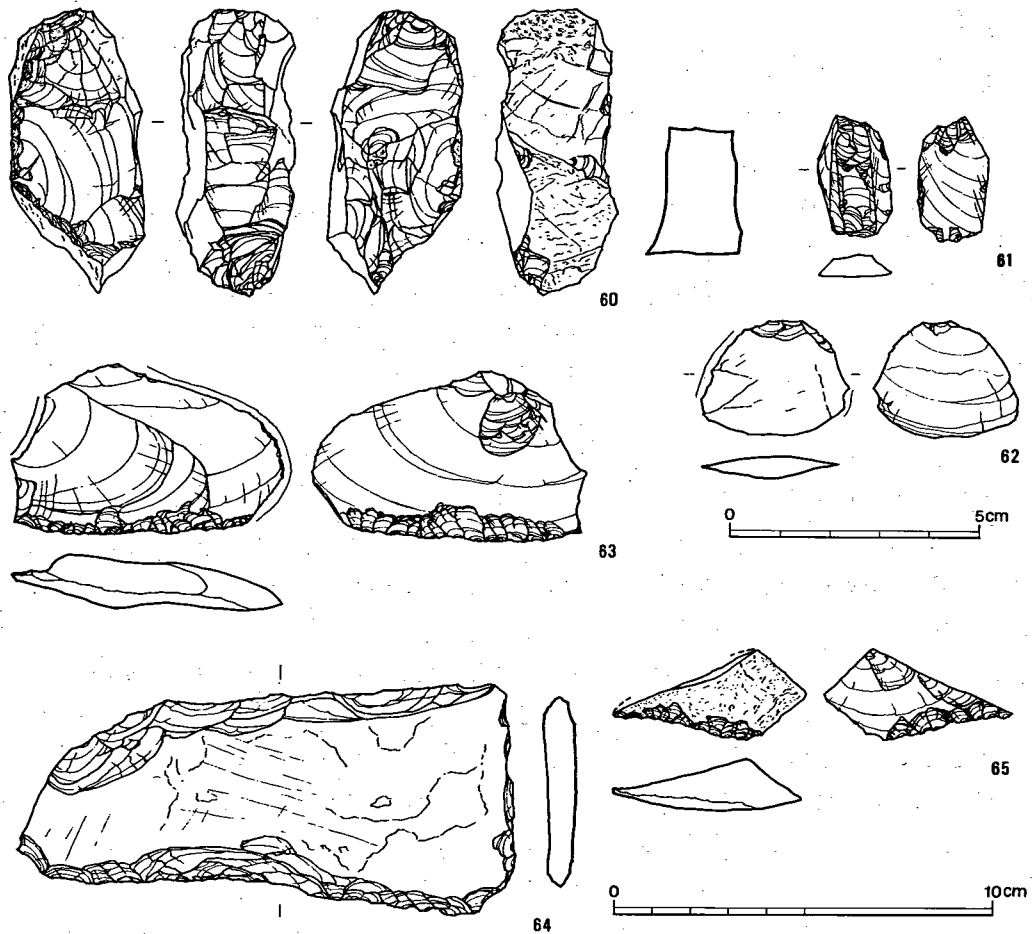


第75図 畠田・長通出土打製石斧等実測図 (1/3)

した。サヌカイト製で、左基端を欠損する。器厚は他に比べ薄く、先端は鋭く尖っている。32も31と同形態である。33・34は、サヌカイト製。形態的には31・32に近い。基部はやや内湾する。35は、腰岳産黒耀石製で、5区大溝最下層より出土した。押圧剝離によって調整加工が行われており、基部は逆V字形に内湾している。36~38も同形態である。39は、先端部付近側縁がはり出し、両側縁が平行している。基部は逆V字状に加工されている。腰岳産黒耀石製。40は、左右側縁が二等辺に近い。基部は少し内側に入っている。41も形態的には同じであろう。46は姫島産黒耀石製で基端は、平坦に加工されている。47は、正三角形に近く加工されている。49は、小さいが47と同形態であろう。

⑧ 磨製・打製石斧等(第75図50~59)

50・51は、磨製石斧である。50は胴部厚く重量感ある。51の、胴部は薄い。52~59は全て、緑



第76図 畠田・長通出土石器実測図(1/2. 61、62は約2/3)

色変岩製の打製石斧である。55・56は半損している。58は、刃部が広く撥形である。先端は摩滅している。59は、両側縁が平行し、細身の長方形である。基部に近い右側縁と図の腹面基部は、装着を意図してか、加工されている。5区P5(弥生前期貯蔵穴)より出土。

⑨ その他の石器(第76図60~65)

60は、珪質岩製の楔形石器である。上端には加撃痕が残されている。また、図左側縁には、刃部加工が認められる。搔器としても使用されたのであろう。61も、両端よりリングが走る腰岳産黒耀石製の楔形石器である。62は、珪質岩製の使用痕のある剝片。63は、横長剝片を素材とした、両面に刃部加工をした、姫島産黒耀石製のスクレイパーである。周辺にも使用痕が認められる。64は、緑色変岩製の石鎌である。内湾刃、薄手で、図背面には擦痕がある。65は、サヌカイト製の横長剝片を素材としたスクレイパーである。

⑩ 小 結

大陸系磨製石器について

本遺跡で出土した大陸系の磨製石器は、先に述べた通りである(第71・72図)。1以外の磨製石剣・石鎌は、破損資料のため、確実な形態的復原は難しいが、これまでの周辺地域の出土例から逸脱しない(長嶺他編1985)。

ただ、1の磨製石鎌のみが特異である。周辺地域で出土している磨製石鎌は、その大半は平基式(基部が平坦)である。石材も、粘板岩・砂岩が用いられる傾向がある。

しかし、1は珪化凝灰岩であり、かつ凹基式である(基部が内湾し基端を有す)。基端を有した磨製石鎌の出土例は、当地域でもこれまでいくつか確認されている(赤崎他編1977・伊東編1981)が、このように基端がシャープに張り出したものは珍しい。また使用石材の選択も異っている。実用具としてでなく、別の目的で製作された可能性も考えられる。なお、本資料は4区大溝最下層(弥生前期)より出土している。凹基式の磨製石鎌が普及していくなかで、製作されたのであろう。本遺跡出土の石剣は先述した通り、2点である。2の珪質層灰岩製の石剣は、筆者が確認した限りでは、周辺地域に類例を求められないのだが、同石材を用いている資料には、9の砥石や、片刃石斧がある。

6の太型蛤刃石斧は、環濠(溝10上層 弥生前期)より出土した。本遺跡では6の1点のみであったが、当地域では、例えば下稗田遺跡などでは多数確認されている。遠隔地からの搬入であるのか、周辺地域で製作されているのか確認も含めて検討が必要である。

石庖丁については、24のみ直線刃半月形である。直線刃のタイプは、当周辺地域では、僅かながら存在する。しかし、背部がしっかり張り出したこのような例は少ない。

石 鎌

出土石鎌については、幾つかグルーピングできる。ここで、松本武彦の分類方法(松本1989)を土台とし分類を行えば、5+aに分けられる。つまり、

I類(凸基II式)……鏃身上の下半部を装着のための部位とするもの→25・26・27

II a類……鏃身上の着柄部位を持たず、基端の幅が厚く、基部が内側にやや三角形となる。

→31・32・33・34

II b類……着柄部位を持たず、基部が大きく内湾する。→35・36・37・38

II c類(平基式)……着柄部位を持たず、基部が内側にやや三角形となり、両基端が鋭く尖る。

→40・41

III類(平基式)……着柄部位を持たず基部は平坦である。→45・46・47

となる。

これ等の分類から導きだされることは、I・II a類がサヌカイト、II b・II c・III類の大半が黒耀石(特に姫島産)でしめられるということである。また、これ等の型式の中で編年的位置付けがほぼ可能な型式は、I類である。この型式は、弥生時代中期頃に瀬戸内地域で盛行する。周防灘に面し、土器などが影響を受けていることを考えれば、存在しうる型式であろう。

また、遺跡内で検出された、石鏃の未製品・剝片石核の石材は、ほとんどサヌカイトである。それ等は、全て弥生時代以降の遺構より検出されている。

ところでこれ等の状況より考えられることは、本地域における“弥生石鏃”とサヌカイト石材の結びつきである。肉眼観察より言えることは、どちらの石材も粗雑な材質で、当地域に転石として認められる在地の「サヌカイト」である。他方、黒耀石製が大半を占めるII b・II c・III類については時期を決定できる型式はなく、縄文以来の形態である。

まとめると、一つは、限定的でないにせよ、弥生時代以降、石鏃の石材を在地に求め、獲得する傾向が挙げられる。もう一つは、瀬戸内地域のサヌカイト石材を用いて石鏃を製作するという技術と経験が流布した可能性である。

以上観察結果に基き述べてきたが、今後、当地域史解明のために、確実なデータの蓄積と明確な方向性を持った研究がおこることを期待し結びとしたい。

なお、一部の石材の鑑定には、北九州市立自然史博物館の藤井厚志氏の手を煩わせた。ここに記して心よりお礼申し上げます。
(杉原 敏之)

参考・引用文献

赤崎敏夫・長嶺正秀編 『竹並遺跡』行橋市教育委員会 1977

伊東照雄編 『綾羅木郷遺跡』下関市教育委員会 1981

長嶺正秀・末永弥義編 『下稗田遺跡』行橋市教育委員会 1985

平井 勝 『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64 ニューサイエンス社 1991

松本武彦 「弥生時代の石製武器の発達と地域性—とくに打製石鏃について—」『考古学研究』第35巻4号 考古学研究会 1989

表 3 畠田・長通出土石器観察表

挿図番号	器位	出土地	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石質	備考	図版番号
71-1	磨製石鏃	4区大溝最下層砂利	(5.40)	2.25	0.25	3.60	珪化凝灰岩	先端、基端一部欠	68
2	磨製石剣	5区大溝7層	(3.65)	(3.25)	(0.80)	11.6	珪質層灰岩	先端、下端欠	〃
3	磨製石鏃	3区溝2西下層	(3.70)	1.60	0.25	0.90	〃	先端、基端欠	〃
4	磨製石剣	4区大溝最下砂利	(10.0)	(2.80)	(0.70)	24.8	赤紫色砂岩	先端、下端欠	〃
5	石ノミ	3区溝2下層	(7.00)	1.40	0.95	18.5	流文岩		〃
72-6	磨製石斧	溝10上層	(15.5)	8.50	4.80	10.40	砂岩	刃部欠	69
7	砥石	〃	(10.7)	6.50	3.50	45.4	砂岩	上部欠	〃
8	〃	溝10下層	(3.80)	(5.50)	1.60	45.0	花崗岩質砂岩	胴部のみ残存	〃
9	〃	4区大溝3下層	(8.30)	(8.80)	1.40	128.3	珪質層灰岩	先端、右側縁欠	〃
10	磨製石斧	4区大溝5下層	(10.55)	7.20	3.15	371.0	ホルンフェルス	先端、上端欠	〃
11	〃	4区大溝6下層	(10.0)	4.45	2.80	183.3	安山岩	先端欠	〃
12	砥石	〃	(12.8)	(4.20)	(5.60)	360	花崗岩	右側縁欠	〃
13	〃	3区大溝3層	(9.05)	5.10	1.70	126	砂岩	下端欠	〃
14	〃	溝1中層	(7.10)	(6.00)	(0.90)	62.4	赤紫色砂岩	上端、右側縁腹面欠	〃
15	石皿	3区溝2最下層	(9.40)	(11.4)	(3.05)	50.5	砂岩	上端、右側縁欠	〃
73-16	石庖丁	2区溝1西下層	(4.00)	(4.00)	0.65	9.4	花崗岩質砂岩		70
17	〃	〃	(4.95)	(4.00)	(0.75)	16.1	頁岩		〃
18	〃	溝2下層	(6.40)	(4.00)	(0.60)	18.9	サヌカイト		〃
19	〃	3区大溝3下層	(8.10)	(4.00)	0.60	21.6	凝灰質角礫岩		〃
20	〃	〃	(7.40)	(4.70)	0.60	31.5	赤色泥岩		〃
21	〃	5区大溝1層	(6.50)	(4.50)	(0.65)	21.8	赤色泥岩		70
22	〃	4区大溝3層	(9.25)	5.00	0.55	32.6	凝灰質頁岩		〃
23	〃	4区大溝4層	9.65	5.00	0.50	43.0	砂岩		〃
24	〃	5区大溝7層	(0.80)	(4.10)	0.50	30.0	〃		〃
74-25	石鏃	2区溝	5.10	1.35	0.55	3.20	サヌカイト		71
26	〃	2区溝2最下層	3.75	1.05	0.35	1.30	〃		〃
27	〃	4区大溝最下砂利	3.20	1.25	3.50	1.40	〃		〃
28	〃	2区溝1、2	2.05	1.45	0.40	0.80	〃		〃
29	〃		2.30	1.95	0.40	1.20	〃	先端欠	〃
30	〃	溝2中層	4.10	1.70	0.55	3.10	〃		〃
31	〃	5区大溝6層	2.80	1.95	0.30	1.19	〃	左下端欠	〃
32	〃	地山直上	2.00	1.16	0.30	0.80	〃		〃

挿図番号	器位	出土地	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石質	備考	図版番号
74-33	石 鍬	6区大溝最下砂利	2.00	1.90	0.40	0.90	サヌカイト	先端欠	71
34	”	2区溝1最下層	2.25	2.10	0.35	1.30	”		”
35	”	5区大溝最下層	2.40	1.40	0.50	1.00	腰岳産黒耀石	左基端欠	”
36	”		2.20	1.50	0.30	0.98	黒耀石	左基端欠	”
37	”	4区大溝4層	1.45	1.10	0.30	0.30	姫島産黒耀石		”
38	”		(1.70)	1.50	0.35	0.80	”	先端大きく欠	”
39	”	1区溝1未下層	3.10	1.45	0.40	1.30	腰岳産黒耀石		”
40	”	4区大溝最下砂利	2.10	2.35	0.50	1.21	姫島産黒耀石		”
41	”	溝6	1.60	(2.00)	3.50	0.60	”	右基端欠	”
42	”	地山直上	1.60	(1.50)	3.50	0.40	”	左基端欠	”
43	”	1区溝3最下層	1.15	1.65	0.30	0.40	”		”
44	”	9トレ表採	1.40	1.80	0.30	0.45	サヌカイト		”
45	”	地山直上	1.80	1.80	0.40	1.10	”		”
46	”	溝1上層	(1.90)	1.50	4.50	1.10	姫島産黒耀石	上端欠	”
47	”	P1	1.55	(1.50)	0.30	0.70	”	下端欠	”
48	”	地山直上	(0.80)	(1.65)	0.25	0.45	”	先端欠	”
49	”	溝9上層	(1.10)	(0.95)	2.00	0.20	”	基端欠	”
75-50	磨製石斧	5区P5	(10.9)	5.50	2.90	234	緑色変岩		72
51	”	1区溝2下層	10.0	4.50	1.50	102	”		”
52	打製石斧	5区P5	(9.20)	6.20	1.10	75.5	”		”
53	”	1区溝2下層	9.25	4.70	1.10	60.0	”		”
54	”	5区溝	12.5	6.25	2.15	224.5	”		”
55	”	5区大溝最下層砂利	(9.40)	7.50	1.40	135.0	”		”
56	”	5区大溝	6.75	7.50	1.10	75.0	”		”
57	”	5区大溝5層	11.7	6.70	1.80	162.5	”		”
58	”	4区大溝最下	8.00	8.10	1.50	170.0	”		”
59	”		12.5	4.20	1.80	140.5	”		”
76-60	楔形石器	5区P5	7.55	3.20	3.50	106.6	珪質岩		73
61	”	P2	2.30	1.40	10.5	1.60	黒耀石		”
62	使用痕ある剝片	0区溝下層	2.15	2.25	0.45	2.40	珪質岩		”
63	スクレイパー	4区溝1	4.55	7.15	1.40	32.2	姫島産黒耀石		”
64	石鍬	4区大溝7層	8.20	6.15	1.10	165.0	緑色変岩		”
65	スクレイパー		2.40	5.05	1.30	8.80	サヌカイト		”

挿図番号	器位	出土地	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石質	備考	図版番号
	砥石	11号長方形土壌	(10.25)	(12.4)	8.60	1,480	花崗岩	胴部残	以下未掲載
	〃	4区大溝3層下	15.2	7.30	5.70	750	〃		
	〃	溝2-1	(7.40)	(7.10)	(6.50)	260	砂岩		
	〃	5区2層	6.00	8.80	6.70	540	花崗岩		
	〃	溝10南中層	(14.0)	8.30	7.10	1,300	〃		
	〃	溝2床面	(10.25)	(5.20)	0.80	65.0	赤紫色砂岩		
	〃	5区大溝3層	(3.35)	2.00	1.80	15	流文岩質凝灰岩		
	磨石	4区大溝6層	10.6	(5.90)	5.80	460	花崗岩	半損	
	石皿	1区溝6	(7.30)	9.60	1.50	140	花崗岩		
	石錘	2区溝2西1層	6.40	6.00	2.50	105	花崗岩		
	〃	3区溝2西下層	6.65	5.50	4.10	160	〃		
	くぼみ石		(7.60)	(4.60)	(4.30)	116	砂岩		
	石製めんこ	溝10層4	4.00	4.75	1.10	33.4	綠色変岩		
	〃	中区大溝西側	5.90	5.75	0.65	34.5	安山岩		
	石鏃(未製品)	2区溝1-2	2.10	1.65	0.30	1.10	サヌカイト		
	〃	〃	2.95	1.70	0.45	2.70	〃		
	〃	〃	2.95	1.80	0.45	2.50	〃		
	〃	2区溝2西下層	3.30	1.90	0.45	2.80	〃		
	〃	〃	3.20	1.90	0.45	3.20	〃		
	〃	〃	2.30	1.60	0.30	1.10	〃		
	〃	地山直上	1.70	1.90	0.75	2.10	〃		
	〃	12号長方形土壌	2.40	1.50	0.50	1.75	〃		
	〃	溝10土層	1.40	3.10	0.40	1.50	〃		
	〃	〃	2.10	1.45	0.40	0.80	姫島産黒耀石		
	片刃石斧	4区大溝3層	2.40	2.70	0.60	9.40	珪質層灰岩製		
	打製石斧	溝1床面	11.4	7.40	1.55	235	綠色変岩		
	〃	4区5区大溝6層	(7.00)	(4.30)	(0.80)	25	〃	破損品	
	〃	4区溝西下層	(9.90)	7.40	1.35	137	〃	〃	
	〃	4区大溝最下砂利	(8.80)	6.20	1.20	90	〃	〃	
	〃	5区大溝最下砂利	(7.50)	6.60	2.05	105	〃	〃	
	〃	2区溝1東下層	(11.5)	4.30	2.00	160	〃	〃	
	〃	〃	(6.50)	(4.70)	(1.25)	60	〃	〃	
	〃	溝5上層	(5.50)	(6.50)	0.95	50	〃	〃	

挿図番号	器位	出土地	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石質	備考	図版番号
	石斧	中区大溝3層	(8.80)	7.20	4.30	515	花崗岩		
	石鏃(未製品)	2区溝1-2	2.10	1.65	0.30	1.10	サヌカイト		
	〃	〃	2.95	1.70	0.45	2.70	〃		
	〃	〃	2.95	1.80	0.45	2.50	〃		
	〃	2区溝2西下層	3.30	1.90	0.45	2.80	〃		
	〃	〃	3.20	1.90	0.45	3.20	〃		
	〃	〃	2.30	1.60	0.30	1.10	〃		
	〃	地山直上	1.70	1.90	0.75	2.10	〃		
	〃	12号長方形土壌	2.40	1.50	0.50	1.75	〃		
	〃	溝10土層	1.40	3.10	0.40	1.50	〃		
	〃	〃	2.10	1.45	0.40	0.80	姫島産黒耀石		
	片刃石斧	4区大溝3層	2.40	2.70	0.60	9.40	珪質層灰岩製		
	打製石斧	溝1床面	11.4	7.40	1.55	235	綠色変岩		
	〃	4区5区大溝6層	(7.00)	(4.30)	(0.80)	25	〃	破損品	
	〃	4区溝面下層	(9.90)	7.40	1.35	137	〃	〃	
	〃	4区大溝最下砂利	(8.80)	6.20	1.20	90	〃	〃	
	〃	5区大溝最下砂利	(7.50)	6.60	2.05	105	〃	〃	
	〃	2区溝1東下層	(11.5)	4.30	2.00	160	〃	〃	
	〃	〃	(6.50)	(4.70)	(1.25)	60	〃	〃	
	〃	溝5上層	(5.50)	(6.50)	0.95	50	〃	〃	
	石斧	中区大溝3層	(8.80)	7.20	4.30	515	花崗岩		
	スクレイパー	2区溝1-2	3.70	1.30	0.30	1.20	サヌカイト		
	〃	溝2床面	8.00	8.05	2.40	1.90	〃		
	〃	5区大溝3層	1.85	1.85	0.75	2.40	〃		
	〃	5区大溝7層砂利東側	3.60	4.00	0.9	20	〃		
	〃	12号長方形土壌	1.90	1.80	0.80	2.45	〃		
	礫器	5区大溝5層	(6.80)	(6.20)	2.0	96.0	花崗岩		
	〃	溝10下層	7.20	4.50	4.40	175	〃		
	石核	4区大溝5層	6.80	4.60	5.80	200	珪質岩		
	〃	P4	6.00	4.70	3.80	114	〃		
	二次加工ある剥片	3区大溝6層	2.20	1.45	0.50	1.70	腰岳産黒耀石		
	〃	2区北側溝2西下層	2.10	3.05	0.40	3.50	サヌカイト		
	〃	ピット9	1.40	0.50	0.20	0.2	腰岳産黒耀石		

挿入番号	器位	出土地	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石質	備考	図版番号
	使用痕ある剥片	2区溝2西下層	1.35	1.45	0.90	5.40	腰岳産黒耀石		
	〃	〃	1.55	1.95	0.20	0.60	珪質岩		
	〃	3区溝2西下層	1.65	3.90	0.30	1.60	サヌカイト		
	〃	5区大溝7層	2.90	4.20	6.50	7.00	珪質岩		
	〃	溝10下層	2.40	1.60	0.45	1.50	姫島産黒耀石		
	剥片	4区大溝最下層砂利	2.70	1.90	0.70	3.70	珪質岩		
	〃	溝10下層	4.05	1.55	1.10	5.00	姫島産黒耀石		
	〃	畠田貯蔵穴	6.00	1.75	1.20	7.30	〃		
	剥片	3区溝2西下層	1.20	1.55	0.15	0.30	姫島産黒耀石		
	サヌカイト剥片	5区大溝7層	10.6	6.70	2.20	155	サヌカイト		
	〃	東南側地山直上	4.60	4.10	0.90	16.3	〃		
	緑色変岩剥片	4区大溝最下砂利				440	緑色変岩		
	〃	5区大溝最下砂利				130	〃		
	〃	5区大溝7層				205	〃		
	〃	3区溝2西下層				125	〃		
	〃	5区溝2				67	〃		
	〃	5区溝2下層				12	〃		
	〃	中区大溝3層				55	〃		
	〃	5区大溝黒色粘土				15	〃		

IV おわりに

辻垣遺跡群の報告を終わるにあたって、いくつかの問題点を整理しておきたい。この辻垣遺跡群は、遺跡群としたからといって、けっして大集落遺跡を意味するものではなく、先に『椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集として「辻垣ヲサマル遺跡」を報告したことによって、今回の「辻垣畠田・長通遺跡」が別個の遺跡とならないようにしたものである。この3地区は、辻垣遺跡の中が現在の小字名でたまたま3地区に区分されていただけで、辻垣遺跡の中の地区名にすぎないのである。

辻垣遺跡群は、大別すると弥生前期、弥生後期、古墳前期の3時期に営まれた集落である。したがって、弥生前期から断続的に集落としてこの地が利用されているだけで、継続して営まれた集落ではない。これは、遺跡が立地している自然的環境にも大きく影響されている。遺跡が立地している微高地は、海拔10mの祓川の自然堤防といえども、祓川流域には網状流的な流路跡が明瞭で(註1)、宿命的な洪水によって集落の永続性は望めなかったであろう。それにもかかわらず、この地が後述するように各時期の拠点になった。この地は、弥生時代の海岸線が金屋から今井に発達した浜堤にあるとすれば、海岸から2kmたらずであり、祓川を利用すれば瀬戸内海各地との交流が可能である。

1 弥生前期環濠集落

(1) 環濠

京都平野の弥生前期遺跡のうち環濠集落は、苅田町葛川遺跡(註2)と豊津町神手遺跡(註3)が知られている。

葛川遺跡は、標高20m前後の舌状丘陵の先端に立地し、東西径57m、南北径43mの卵形環濠の外内に35基の貯蔵穴が分布している。遺跡の時期は、弥生前期中頃から前期後半である。

神手遺跡は、辻垣遺跡と同じ祓川右岸に位置するが、立地が祓川水面と10m前後の高低差のある河岸段丘上にある。遺跡は、弥生前期から弥生中期・後期、古墳前期にかけて断続的に営まれている。弥生前期の環濠は、一連のものが2カ所で弧状に検出されており、同時期の16基の貯蔵穴と若干の土壌が調査されている。環濠と貯蔵穴の時期は、前期中頃から前期後半であるが、土壌が前期後半から中期前半に及んでいる。

これら2遺跡の特徴は、小型環濠をめぐらし、集落遺跡として貯蔵穴を伴うものの住居跡が存在しない。弥生前期環濠として住居跡が検出されることは稀であるとしても、両遺跡共に弥生後期の住居跡が検出されており、後世の地山の削剝によって消滅したとは考えられない。現

に、両遺跡では、保存のよい貯蔵穴があり竪穴住居跡が消滅するほど地山が流失していない。このことは、住居が竪穴住居でなく平地式であるか、住居は別の場所にあったと考えなければならぬ。これは、何も京都平野に限定したものでなく、福岡地区でも同様であり、貯蔵穴群に同時期の竪穴式住居跡が伴うのは希有なことである。ただし、下稗田遺跡のように前期末～中期前半になると竪穴式住居跡が伴っている。

そこで辻垣遺跡と比較して見ると、遺跡の立地について明瞭な違いがある。辻垣遺跡の大溝群を、小型の旧河道と理解すれば、辻垣の住人達は危険を犯してまで水を利用するために水辺に定住したことになる。

辻垣遺跡では、定住するために東側の大溝の内側に沿って断面V字形の環濠(溝5・溝7)を掘り、場合によっては大溝と環濠の間に土塁も築造したにちがいない。西側の環濠(溝10)は、一部分の調査であったことから、東側の環濠(溝5・溝10)と一連の環濠になるという確証はないが、東西両側の間の幅にして東西約35m、南北長約180mの長細い空間に、環濠と同時期の生活遺構である貯蔵穴と住居跡の可能性のある長方形土壌が存在する事実を唯一の証拠としたい。

このような水辺に営まれた集落を低地性集落とすれば、この遺跡は低地性環濠集落ということになる。この低地性環濠集落は、東西両側を水害から集落を守るために環濠を築いたことは判明したが、南北長約180mの間に東西に走る環濠がないことから、南北側の守りはどうしたのだろうか。弥生前期の溝といえば、ヲサマル地区4～6区発見の直径約30mの小型環濠がある。ただし、これも弥生前期前半から前期中頃の多量の土器が出土していながら、墓地の可能性を示唆し、溝状遺構の円形周溝とされている。「中央部を近世～現代の排水路によって削平されているため」(註4)であるが、直径約30mあるとすれば、弥生前期前半の墓よりも環濠とすべきであろう。この円形環濠と畠田地区までの距離は、第2図に示すとおり270mも離れており、その間に複雑に旧河道が入組んでいる。したがって、ヲサマル地区4～6区の円形小型環濠は、畠田・長通地区環濠と別の小集団が営むもので、網目状に旧河道が入組んでいることからすると、畠田・長通地区の環濠が国道と日豊本線の間限定された南北長約180mの環濠であったと理解すべきであろう。辻垣遺跡群の環濠集落は、小規模ながら網状流の旧河道間の自然堤防を巧みに利用して営まれていたのである。

(2) 貯蔵穴

辻垣遺跡群は、低地性環濠集落でありながら、貯蔵穴や長方形土壌が造られている。辻垣遺跡が低地性環濠集落とすれば、葛川遺跡や神手遺跡は台地性環濠集落としなければ、高地性環濠集落とすると、瀬戸内から近畿地方に多い弥生の山城ともいわれる高地性集落と誤解される。

台地性環濠集落の保存のよい貯蔵穴は、葛川遺跡が2m前後、神手遺跡が1m前後の深さとなっている。さらに環濠集落ではないが、下稗田遺跡では2m以上の深さで規模も大きくなっ

ている。これは遺跡の立地と水面の比高差によるもので、辻垣遺跡の貯蔵穴の深さを、復原したとしても1m未満であることが理解できる。それにしても、低地性でありながら、地下に貯蔵穴をよくぞ掘ったものであり、湧水を防止するため排水施設が環濠の第1の役割であったろう。

貯蔵穴には、床面の平面形が円形と方形をするものがあったが、出土した土器が少なく、新古関係が不明である。方形の2号は、前期中頃から後半の時期である。

(3) 長方形土壙

長方形土壙は、西側の環濠に整然と並行して連ねて造られるなど特異な存在である。長方形土壙は、床面積が最小で2.7㎡、最大で5.4㎡であるから辻垣遺跡の貯蔵穴の3倍から5倍の規模である。神手遺跡と葛川遺跡の貯蔵穴の規模は、辻垣遺跡の貯蔵穴の約1.5倍から2倍であるが、これと比較しても辻垣遺跡の長方形土壙の床面積が大きい。

辻垣遺跡の長方形土壙の性格を考える場合に前提となるのが、第1に床面中央に柱穴があるものがあり、土壙が埋没しても立柱が存在したものに4号・5号があること、第2に堅穴の上部にはその立柱を利用した木造構造物が存在すること、第3に床面積を拡張してまで、堅穴と上部構造物からなる空間をある程度長期間使用していることである。

京都平野はもとより、北部九州で上記条件をもった遺構を求めたがなく、山口県下松市宮原遺跡(註5)の弥生前期環濠集落に存在することを知った。宮原遺跡は、辻垣遺跡と周防灘を隔てた対岸の徳山下松港から3.5kmの低平な台地に立地する弥生前期後半の環濠と円形土壙・長方形土壙からなる。長方形土壙群は、辻垣遺跡と同じように環濠内の南東側に片寄り、大半が長軸を環濠と直角方向に向け、一部が平行方向に向けて設けられている。長方形土壙は、貯蔵穴と思われる10~15基の円形土壙と区別しにくいものもあるが、30基前後検出されている。長方形土壙の規模は、床面積が最大で43号の約4.5㎡、大きいもので2.5㎡前後以上が10基前後であり、辻垣遺跡より小さい。

宮原遺跡の土壙は、円形が「貯蔵穴の性格がないとはいえない」とし、「長方形の土壙は、墓壙となる公算が大きい」としている。墓壙とするための要因として、小型土壙に壺棺と考えられるものがあること、出土したミニチュア壺・石剣片・石匙は祭祀用具と考えられること、これらと同じ大きさや形態をもつものが、北部九州・岡山・大阪地域の墓地で見られ、木棺の痕跡がとらえられていることなどをあげている。しかし、長方形土壙には、柱穴や焼土・炭化材が検出されているものがあることや、壺棺ではなく、多量の土器片や石斧・石ノミ・凹石・石鏃など生活関連の遺物が自然流入したものが多く、土層図にも木棺の痕跡がないことから、墓壙の可能性はまったくないといってよい。この遺跡でも弥生後期の堅穴式住居跡が検出されているので、弥生前期の堅穴式住居跡が存在したとすれば、その痕跡が残るはずであり、この長方形土壙が

一種の住居関連遺構と考えられないだろうか。

辻垣遺跡の長方形土塋の3要素に、宮原遺跡長方形土塋の焼土の存在や生活関連遺物の出土などの要素を合せると、ますます住居関連遺構としか考えられない。北部九州の弥生前期から中期前半の墓塋は、整然と並ぶことが多いが、墓地を環濠の内側に営むことがなく、墓塋内に生活廃棄物を投入することもない。

この長方形土塋を住居関連遺構とするには、あまりにも小規模すぎるものが存在することが障害となるが、単身であれば居住可能であることから、今後の類例の増加をまって検討課題として残しておく。

(4) 弥生前期土器の位置づけ

辻垣遺跡群の畠田・長通地区では、弥生前期として重要な環濠や貯蔵穴および長方形土塋がありながら、出土品として完形土器や石器類の資料が少なかったことが惜まれる。しかし、土器が少ない中でも、突帯紋系甕や夜白系壺の存在が確認できたし、完形品はヲサマル地区の豊富な同類土器でその不足を補うことができる。

畠田・長通地区の弥生前期遺構の中で唯一、層位関係で相対編年できるのが環濠である。環濠の溝5と溝10では、上層と中層において明解に区分できなくとも大略の方向性が見える。溝5の甕においては、突帯文系の甕がキザミ目のあるものが中層で、ないものが上層で出土するが、中層において如意形口縁も伴うことから突帯紋系甕がさほど古くないことも示している。溝10においては、突帯紋系甕が中層で如意形口縁甕が上層にあり、キザミ目のない突帯紋甕も上層にある。

数少ない壺資料を見ると、溝10において口縁貼付補強が屈曲部にまわり込んだ板付I式系のもの(1)が上層で、胴肩部に拙劣な線刻紋を施す例(4)が下層にあり、板付I式系の古い要素をもつものが実際は古くないことを示している。

次に層位的一括資料としては、あまり信頼するに足りない資料として大溝最下層資料を見ると、畠田地区中区・南区の第7層と最下層で、突帯紋系甕(20~25)と貼付が屈曲部にまわり込まない壺(31・35)が共伴している。壺の肩部の線刻紋(39~43)は、溝10の4と比較するまでもなく、巧妙なタッチで古式の要素をもっている。ここでも、如意形口縁先端にキザミ目をもつ甕も共伴するが、大きな特徴として屈曲度が小さいことで、古い要素となるのではないだろうか。しかし、新しい要素として、突帯紋系甕と比較してもキザミ目が小さい。

長通4区大溝では、5層で如意形口縁下に段と沈線を施すもの(134・135)、6層で口縁の屈曲が小さく貼付のない壺(139)と拙劣な作りの如意形口縁甕、最下層で突帯紋系と如意形口縁甕が混在している。

5区大溝7層と最下層では、やはり突帯紋系と如意形口縁が混在している。

最後に、混入のない貯蔵穴と長方形土壇およびピット出土の資料であるが、これが最も資料が少ない。

2号貯蔵穴の土器(第53図)は、如意形口縁甕でキザミ目がなく段をもつもの4、キザミ目と沈線をもつ2、貼付が屈曲部までまわり込む壺3が共伴している。

長方形土壇出土土器は皆無に等しいが、1号で口縁の屈曲が小さく貼付のない黒塗壺(第51図10)、2号で有段如意形口縁甕(11)、5号で突帯紋系甕(12・13)が出土している。

P3(第53図1)や長通4区大溝3下層(第22図112)などでは、キザミ目・竹管紋・沈線紋を多用する瀬戸内系前期末の土器が出土している。

以上をまとめると、甕においては第1に突帯紋系が先行するものの、第2に後に如意形口縁が共伴し、第3に板付I式の如意形口縁がない、第4に瀬戸内系前期末～中期初頭土器の存在。壺においては、第1に口縁部の屈曲が少ない夜白系壺(第25図139、第51図10)の存在、第2に口縁貼付の幅が狭く屈曲部にかからないもの(第7図31、第8図35)、第3に貼付幅が広く屈曲部にまわり込むもの(第51図10、第53図3)の順列が考えられる。

これをヲサマル地区小型環濠出土土器と対比すると、甕の第1の突帯紋が多く、第3の板付I式甕がわずかであるが出土し、第4がない、壺の第1が少なく、第2が最も多く、第3が少ない。

京都平野では、長井遺跡で突帯紋夜白式甕と板付I式壺および板付II式から前期末・中期初頭、葛川遺跡・下稗田遺跡などで板付II式土器が出土している。これらの遺跡と辻垣遺跡を対比して見ると、長井遺跡に突帯紋甕と夜白系壺・板付I式壺があるが、他の前期中頃以後といわれている遺跡には、甕の第1の突帯紋や第2の板付I式もなく、板付II式以後に限定され、第4もある。壺も口縁の屈曲が大きく、第2・第3もあるが、形態が歪んでこの稿で問題にしている土器から逸脱している。

さらに瀬戸内の代表的前期遺跡である岡山県津島遺跡南池地点資料と対比して見ると、甕の第1の突帯紋系があるものの微量で、第2の板付II式が大半で、第3の板付I式らしきものも微量である。壺は、第1がなく、第2が微量で、第3が大半を占める。報告では、「板付I式の末葉から同IIa期初頭段階のもの」(註6)とされている。さらに、田中良之氏は、辻垣遺跡の壺の第3の特徴ある土器を板付I式としている(註7)。たしかに津島南池資料には、壺の第2と甕の第3が微量ながら存在するが、田中氏が図示した例は遺跡内で大勢を占める型式で、辻垣遺跡と比較しても最も新しい順列に位置する。

以上を総合すると、辻垣遺跡の弥生前期土器は、甕の第1と壺の第1が夜白式系で古い要素を残しているが板付I式に併行し、壺の第2も板付I式であるが、壺の第3が板付II式の古式に属することになる。

2 外来系土器

本稿で取扱う外来系土器とは、明らかに他の地域で作られた土器が搬入されたものから、他の地域の土器を模倣したもの、および他の地域と在地土器の折衷様式を含めた土器とする。本来ならば、上記三者を明解に分類して論証すべきであるが、筆者の力量不足と時間的制約から、明らかに搬入土器と思える土器でも地域を特定できなかったものが多く残った。

(1) 弥生前期の交流

北部九州に発生した弥生文化がどの経路をへて瀬戸内各地に運ばれたのであろうか。中部瀬戸内に津島岡大式のような弥生早期が存在することなどから、豊前地域のいずれかの海岸から船出したにちがいない。ところが豊前地域の弥生早期遺跡が未確認の現状では、それに近い時期で予測するしかないだろう。そこで唯一取上げられるのが辻垣遺跡群である。弥生前期前半の土器群が多量に出土した辻垣遺跡は、石器においても特記できるものが1点ある。弥生早期に出現する特徴的な石器の1つ、有柄式石剣がそれである。

有柄式石剣は、最初に模範となった原型の中国式銅剣(有節柄式)に酷似する古式が対馬に分布し、次に佐賀県唐津・福岡県糸島・福岡の各平野に伝わっている。さらに比較的早く伝わったと思われるのが遠賀川流域で、中間市付近で集中的に発見されている。このことは、弥生文化の北部九州内での伝播経路の1つが遠賀川を上り、田川盆地経由で京都平野に到達したと考えられる。これまで有柄石剣は、京都平野で唯一行橋市天生田で採集された例(註8)が知られていただけである。田川市原若狭例(註8)・天生田例・辻垣例(第71図2)の有柄式石剣は、有光教一氏分類の「BII形式」にあたり、対馬や遠賀川流域に分布する「BI形式」が未発見である。しかし、周防灘に面する豊前沿岸の京都平野で発見された2例の有柄式石剣の持つ意義は大きい。中国地方で弥生早期遺跡が報告されている中で、有柄式石剣の発見は時間の問題であるかもしれないが、対岸の四国の伊予で集中してBII式が発見されていることは、弥生文化の伝播にも違いがあることを認めなければならないだろう。いずれにせよ決論として辻垣遺跡を含む京都平野は、東への弥生文化の発進基地の1つであったことになる。

北部九州は、弥生前期後半まで一方的に弥生文化を発進するが、西日本各地で弥生文化が定着し地域色が強くなる前期末から中期初頭になると一部に違いが出てくる。

辻垣遺跡では、長通5区大溝最下層で綾羅木III式に見られるような壺底部に沈線をめぐらす例(第34図237)や4区大溝3層下部(第22図112)・長通P3(第53図1)などのように竹管紋を施す土器が見られるようになり、逆転現象が見られる。板付I式文化と違った、遠賀川流域以東にしかない「遠賀川式土器」文化は、線刻紋土器文化ともいえ、瀬戸内において瀬戸内型甕も出現し、これも辻垣と下稗田遺跡で発見されているようにその影響下にある。

辻垣遺跡長通5区大溝最下層の沈線をめぐらす底部は、綾羅木Ⅲ式より形態的に古いことから先行するが、辻垣遺跡の瀬戸内型甕だけでなく、福岡県古賀町鹿部山遺跡の櫛描紋土器(註9)のように前期の形態を残し、吉備地域では前期末(註10)に位置づけられる壺が中期初頭から中期前半の土器と伴出しており、この時期すでに北部九州の直接的交流が300km規模に達していたことがわかる。

(2) 弥生後期の交流

弥生中期後半に特定個人墓の中に王墓を出現させた北部九州は、銅鐸をはじめとした青銅祭器の東進も促している。中国地方に見られる邪視文銅鐸や中細形銅剣・銅矛、四国地方の中細形銅剣・中広形銅矛・広形銅矛は、北部九州との交流を証明しているし、とくに四国の銅矛の分布が弥生全期間の交流の存続を示している。有柄式石剣の時期からの四国との交流が、広形銅矛の弥生終末までとだえなかった理由がどこにあるのだろうか。

土器から見た瀬戸内各地との交流は、これまで吉備の高杯が注目されて来た。報告では、北九州市守恒遺跡D-1出土例(註11)が中期後半、福岡市板付遺跡F5dⅦ区SD31(註12)が後期初頭とされている。ところが、守恒D-1では、凸レンズ状底部の壺胴下半が共伴していることから、少なくとも中期でないことが確実であり、板付例が拙稿で後期前半(註13)である。さらに、辻垣遺跡と同じ椎田道路工事の調査で、築城町安武深田遺跡50号住居跡から水鳥と鹿らしき足を線刻し、凹線紋を口縁と頸部に施した中国地方東部の壺が出土し、中期末と報告されている(註14)が、共伴した在地土器は後期前半である。

このような地域間の土器編年上の時期の齟齬は、今回の辻垣遺跡でも立証された。大溝3層を中心とした土器群は、北部九州系が後期中頃であるのに対し、瀬戸内系がⅣ様式末からⅤ様式前半のものである。逆に山陽地方で北部九州系の高杯を見てみると、Ⅲ様式(中-Ⅱb含む)に北部九州の後期初頭から前半の鋤先口縁系高杯が共伴している(註15)ことから証明できる。

辻垣遺跡の外来系土器は、近畿以外の瀬戸内各地の土器とその影響下にあることがわかり、正確な比率を計算できないが、図示した大溝の弥生後期土器の中で39%の高率を占めている。いかに辻垣遺跡が瀬戸内各地と広範に交流したかがわかり、地域間交流においてみせる求心力の強さが証明できたのではなかろうか。しかし、その地域間交流は、辻垣遺跡の場合で300km規模であるが、北部九州の代表的遺跡の三雲遺跡群の求心力は強大で500km以上に達する可能性をもっている。

三雲遺跡番上地区Ⅱ-5土器溜は、下層から上層までに弥生前期から古墳初期の莫大な量の土器が出土し、漢式土器・韓式土器・瀬戸内系土器・伊勢湾類似土器なども含まれていた。尾張地域の伊勢湾類似土器とは、比較的大きな脚台を持つ有窓甕のことで、10個体前後が出土している。同形態の台付の甕は、さらに10個体以上出土しているので有窓台付甕が20個体以上出土していると思われる。甕胴肩部に焼成前に穿たれた窓は、不整形のものもあるが、大半が縦5cm、横10cm程の隅丸長方形と思われる。有窓台付甕の時期は、口縁部の形態から後期前半から一

部後期中頃を含む可能性をもっている(註16)。後期初頭～前半の有窓甕は、鹿部山遺跡や福岡市有田遺跡第3次1・2号井戸(註17)でも出土しているが、台が付くものと付かないものがある。

これらの有窓甕は、伊勢湾地域の有窓壺と甕と壺の大きな違いがあり直接交流で搬入されたものではないが、600km以上の遠距離地域間交流において、その地域の「情報」がもたらされる可能性が他の遺物からも証明できる。それは有鉤銅釧がその1つであり、分布は近畿地方を越えて北陸・東海・関東にまで達しており(註18)、硬玉原石との需給関係も含めるとその情報網の宏大さが証明される。

伊都国最大の拠点集落である三雲遺跡は、近畿地域の「情報」が皆無でもない。三雲遺跡サキノ地区I-7の3層で後期前半の土器に伴って櫛描紋土器が出土している。櫛描紋土器は、肩部に台形突帯をめぐらすことから搬入土器ではなく模倣による変容であるが、櫛描直線紋に挟まれた扇形紋帯を有しており、近畿の「情報」なしでは作れない紋様であろう(註16)。

決論は出せないが、外来系土器の流入の背景には、北部九州型青銅祭器の東伝と密接に関連しているし、四国地域との関連でも次項で述べる武器形青銅祭器と朱の需給関係が問題となってくる。土器は女性が作るという立場からすると、近距離の移動は婚姻関係によることも多いが、300kmを越える移動が平和裏にのみ実現するとは考えられないことから、土器製作者を略奪的・強制的に移動させたことも考慮しなければならない。北部九州の後期中頃を紀元100年前後とすると、『後漢書』倭伝の「安帝の永初元(107)年、倭国王帥升等(倭面土国王帥升ともある)、生口百六十人を献じ、請見を願う」という記事が想起される。この50年前の「建武中元二(57)年」の条も合せると、北部九州の「王」が莫大な数の生口を後漢に献じている可能性があり、その背景は北部九州勢力の東への政治的伸張としか考えられない。この時期、北部九州には井原鏡溝遺跡などの「王」が健在であり、北部九州型青銅祭器の朝鮮半島南端や東への伸張がその証左となる(註18)。

辻垣遺跡は、弥生後期中頃に最盛期があるが、その前後が中断している。後期後半は、北側に近接する津留遺跡で、鏡片を伴う若干の遺構と遺物があり古墳前期まで存続している。

辻垣遺跡の繁栄は断続的で、次に弥生終末から古墳初期に繁栄を向える。この時期の外来系土器は94%の高率となり、わずか6%の在来系土器には弥生終末に属するものが多い。外来系94%のうち約50%が近畿系、44%が瀬戸内系の割合であるが、瀬戸内系の大半が弥生終末と土師器の区別ができない。それにしても地理的条件か瀬戸内系の多さは特異である。

3 朱付着土器

辻垣遺跡では、長通地区5区大溝3層を中心に多数の「内面朱付着土器」が出土した。朱付着土器は、特殊な形態をすることから「広片口三耳鉢」と命名したものの3～5個体、鉢形6～8個体、甕形2個体、壺形1個体が出土した。土器の大きさは、広片口三耳鉢が小型甕と同じ大

きさ、鉢形の大半が大型、甕形が小型と中型、壺形が中型であるところから、中に朱を充満すれば相当の容積量となる。

朱付着土器の大半が、外面に2次加熱による変色や煤が付着していることから、朱として完成されたものを加熱する目的をもって使用されたことになる。しかも相当の高熱に達し、内面の黒色化と剝離をおこした壺と鉢(第41図3・4・11)があり、朱を乾燥させるなどの目的ではない。辰砂または朱を高熱蒸溜すれば水銀が生産できると聞いたが、鉢のような広口土器では無理であろう。三雲南小路1号棺内出土の水銀は、中国からの下賜品であろうか。三雲遺跡の番上II-6と仲田21号住居跡から中国産の大粒辰砂が出土しており、使用法は墓だけであろうか(註19)。三雲遺跡での同種土器の出土も可能性が高い。

広片口三耳鉢の、類似品が徳島市名東遺跡の住居跡で2点の石杵などを伴って2個体が出土している。住居跡内には、大量の土器と朱の沈澱した層もあり、朱の精製に関する工房跡の可能性と、中期末と報告されている(註20)。

次に大阪府東大阪市巨摩廃寺遺跡21地区の沼状遺構下層出土例は、「樽を縦に二分割したうちの一つを鉢形にあてたような形状」で、遮断立上りを「横耳状突起」とし、「その下にさらに受口状の羽根状突起(尾部把手)がつく」「耳杯」と報告されている(註21)。「横耳状突起に2紐孔があり、吊して使用されたものらしい」、「暗茶褐色の生駒西麓産の土器」で、水銀朱(HgS)が付着し、「水銀朱に関する容器なりの用途をもった道具」とされている。

さらに兵庫県男鹿島大山神社遺跡D地点からも同形態の土器が出土しているが、朱の付着した痕跡についての報告がなく、中期末後期初頭に併行するとされる(註22)。

3遺跡の鉢は、形態的に広片口三耳鉢に近いが、片口部と側面把手が最初から存在しないのか欠損したのか判明しないので「広片口三耳鉢」とは呼べない。しかし、用途は同様であろう。

九州では佐賀県川寄吉原遺跡3号井戸から、甕を縦に半截した同形態で内面に赤色顔料が厚く残ったものが鍋形土器として報告されている(註23)。土器は焼成前に半截され、底部が丸底であるが、相伴土器の時期は後期中頃である。これは完形品であるところから、三耳が付かないことが確実であろうし、名東・巨摩廃寺・大山神社の3遺跡例も三耳が付くとはかぎらない。しかし、川寄吉原例から甕を縦に半截する方法で製作することが、広片口三耳鉢の製作法を示唆していることになる。

辻垣遺跡は、朱付着土器が15個体前後出土したにもかかわらず、朱生産に必要な石杵の出土がない。また、朱付着土器の内面が著しく摩滅していることもないことから、顔料が朱として完成されたものであることの証拠であろう。

辻垣遺跡の朱付着土器は、外来系土器の多さと無関係ではなからう。弥生前期文化の発進基地ともなった辻垣遺跡は、後期に瀬戸内各地域間の交流拠点となり、とくに四国各地の辰砂と朱の流通に多大の役割をはたしたにちがいない。

最後に船の線刻画について述べなければならないが、時期的に近い船の資料を掲げるとど

める。

- (1) 福岡県小郡市津古2号墳出土土器線刻画広口壺(古墳II a)(註24)
- (2) 大阪府八尾市久宝寺遺跡南地区Iトレンチ出土準構造船船体(古墳I)(註25)

報告を終るにあたって、とくに外来系土器についてご教示いただいた石野博信・佐原眞・春成秀爾・正岡睦夫・菅原康夫・梅木謙一・田崎博之・寺沢薫・妹尾周三・禰宜田佳男の各氏に感謝の意を表すと同時に意を尽くせなかったことに謝罪したい。(柳田 康雄)

- 註1 千田昇「前田山遺跡周辺の地理的環境」「前田山遺跡」『行橋市文化財調査報告書』19 1987
- 註2 「葛川遺跡」『苅田町文化財調査報告書』3 1984
- 註3 福岡県教育委員会「神手遺跡」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』6 1992 ただし、当報告書には、環濠として報告されていないが、調査担当者の1人として環濠と貯蔵穴群の組合わせの一種の集落として理解している。
- 註4 福岡県教育委員会「辻垣ヲサマル遺跡」『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』1 1993
- 註5 「山口県下松市宮原遺跡・上広石遺跡」『山口県埋蔵文化財調査報告』20 1973
- 註6 藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報』17 1982
- 註7 田中良之「縄紋土器と弥生土器—西日本—」『弥生文化の研究』3 1986 雄山閣出版
- 註8 有光教一「朝鮮磨製石剣の研究」『京都大学文学部考古学叢書』2 1959
- 註9 九州大学文学部考古学研究室「鹿部山遺跡」1973
- 註10 秋山浩三「弥生前期土器—遠賀川式土器の地域色と吉備—」『吉備の考古学的研究』1992 山陽新聞社の図4の9の南方遺跡出土土器
- 註11 北九州市教育文化事業団「守垣遺跡」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』50 1986
- 註12 「板付周辺遺跡調査報告書11」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』135 1986
- 註13 柳田康雄「高三瀨式と西新町式土器」『弥生文化の研究』4 1987 雄山閣出版
- 註14 福岡県教育委員会「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」4 1991
- 註15 藤田憲司「弥生中期の地域性」と平井典子「弥生土器からみた備前・備中南部とその周辺」『吉備の考古学的研究』1992 山陽新聞社
- 註16 「三雲遺跡III」『福岡県文化財調査報告書』63 1982
- 註17 「有田・小田部8」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』155 1987
- 註18 柳田康雄「青銅器の創作と終焉」『九州考古学』60 1986
- 註19 「三雲遺跡I」『福岡県文化財調査報告書』58 1980
「三雲遺跡II」『福岡県文化財調査報告書』60 1981
- 註20 「名東遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』4 1992
- 註21 大阪文化財センター「巨摩・瓜生堂」1982
- 註22 石野博信「古墳文化出現期の研究」1985 学生社
- 註23 「川寄吉原遺跡」『佐賀県文化財調査報告』61 1981
- 註24 波多野暁三「筑紫史論」3 1975
- 註25 大阪府教育委員会「久宝寺南その2」1987

土器觀察表

凡 例

单 位 : cm

R : 反転復原

後3新 : 弥生後期3様式新段階(註1)

古II C : 古墳土師器II様式C段階(註2)

前期後 : 弥生前期後半

- 註 1 柳田康雄「高三瀨式と西新町式土器」『弥生文化の研究』4 1987 雄山閣出版
- 註 2 柳田康雄「土師器の編年—九州—」『古墳時代の研究』6 1991 雄山閣出版

表 4 畠田・長通大溝出土土器観察表

插图 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	口径 ①肩径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
5-1	甗	古II C	畠田北区3層	20.0 R			小細砂多 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 褐色、黄茶色 内) 黄茶色	外) ヨコナデ、ミガキか、工具ナデか 内) ケズリ	二次加熱
2	壺	後3新	畠田北区3層	15.2 R	16.0	①17.5 ② 7.8	小砂多、石英、赤褐色粒 金雲母	外) うす橙色、黒色 内) うす橙色	外) ミガキか、ナデ 内) ミガキ、ヨコナデ、ハケ目 ナデ	煤付着
3	壺	前期	畠田北区黄褐色層			②14.4	細小砂多 雲母、赤褐色粒	外) 灰味淡黄褐色、黒色 内) 濁灰黄色		
4	壺	後3古	畠田北区4層黒褐砂層	11.8	12.5	①15 ② 6.3	細砂多、小砂若干 金雲母	外) 白橙色、黒色 内) 白橙色	外) 粗タテハケ目、粗ナメハケ目、ミガキ 内) ハケ目、ヨコナデ、ナデ	煤付着
5	甗	後3新	畠田中区1層	23.5 R			雲母、赤褐色粒、角閃石 細砂粒多	はだ色、茶褐色	外) ハケ目 内) ヨコハケ目、ナデ	
6	鉢	後期	畠田中区1層	10.2	4.9	①10.3 ② 3.1	細小砂多、雲母	淡黄味灰色	ナデ、指旺盛	
7	鉢	前期	畠田中区2層	14.2 R	7.5	② 5.6 R	細小砂多 赤褐色粒、雲母	灰色味の白黄褐色	外) ケズリのちナデ、ミガキか 内) ケズリのちナデ	
8	甗	前期後	畠田中区2層	20.0 R			細小砂多、雲母	灰色味白褐色	外) キザミ、ハケ目のちナデ 内) ナデ	
9	甗	後3新	畠田中区3層	8.7	18.2	①17.5 ② 5.2	小細砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) にぶ黄褐色、淡褐色 内) にぶ黄褐色、灰色	外) ハケ目、ハケ目のちナデか、ミガキかケズリか 内) 指ナデ一部ハケ目ナデか	二次加熱
10	甗	後期中	畠田中区3層	14.2			細砂多、金雲母 赤褐色粒	外) うす橙色、黒色 内) うす橙色	外) ハケ目、ナデ 内) ハケ目	二次加熱か煤付着
11	甗	後期中	畠田中区3層	22.0 R			細砂多、小砂若干 雲母、赤褐色粒、角閃石	外) 褐色 内) 茶褐色、褐色	外) ナデ、沈線 内) ナデ	煤付着
6-12	甗	後期中	畠田中区3層	17.5	25.8	①20.2 ② 9.7	雲母、赤褐色粒、角閃石 細砂粒	はだ色、にぶ褐色	外) 凹線、ナデのちタテハケ目、ハケ目、ナデ、 刺突文、ナデ 内) ハケ目、ナデ	黒斑、煤付着、二次加熱
13	甗	後期中	畠田中区3、4層	16.4 R	25.05	② 7.7	砂粒多、金雲母	外) 灰色、黒色、一部赤褐色 内) 灰色、黄褐色	外) ハケ目のちヨコナデ、ハケ目、ヨコナデ、ナ デ	
14	高杯	後3新	畠田中区3層	31.1	26.1	②17.0 R	赤褐色粒、雲母、黒曜石 角閃石、白色砂粒多	淡黄褐色	外) 雲母、多分金雲母、ハケ目、 角閃石、赤褐色粒、ヨコナデ、 ナデ、ミガキ、ナデ、ハケ 目、沈線	黒斑、穿孔4ヶ
15	高杯	後3新	畠田中区3層			②19.8 R	雲母、赤褐色粒、角閃石 細砂粒	にぶ褐色	外) ハケ目のちミガキ、タテミガキ 内) ミガキ、ナデ、シボリ、ハケ 目	
16	鉢	後3新	畠田中区東3層	10.3	6.3	② 5.4	小砂多、金雲母、石英	黒色、暗褐色	外) ハケ目、タテミガキ、工具ナ デ	
17	器台	後5古	畠田中区3層	12.0 R			雲母、角閃石、赤褐色粒 細砂多	暗褐色	外) ヨコナデ、ハケ目、ナデ 内) ナデ、ハケ目のち一部ナ デ	
18	壺	前期前	畠田中区4層				細砂多、小砂、角閃石 雲母	外) 砂色 内) 明茶色、砂色	外) ヨコナデ、ナデ、指ナデ、工具痕 ナデ	
19	壺	中期	畠田中区5、6層			② 8.2	細砂粒多、雲母、角閃石	外) 砂色、暗灰色 内) 暗灰色、黒色	外) ナデ、タテハケ目のちナ デ 内) ナデ	内面にこげ着

挿入 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①口径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
6-20	甕	前期前	島田中区6層	22.2R			霏母、赤褐色粒 小粗砂粒多	外) にぶ褐色、茶褐色 内) もも色味灰褐色(赤変) 褐色	外) キザミ、ヨコナデ、キザミ突帯、ナデ、ハケ目 ナデか 内) キザミ、ナデか ナデ	
7-21	甕	前期前	島田中区7層上層				細小砂多、霏母、角閃石	外) もも色味灰褐色(赤変) 内) 黒色、淡黄褐色	外) キザミ突帯、ハケ目 ナデ	煤付着(凸帯以下に)
22	甕	前期前	島田中区7層上層				細砂多、霏母	淡褐灰色	外) キザミ突帯、ヨコナデ、ナデ 内) ナデ	煤付着
23	甕	前期前	島田中区7層上層				細小砂多、霏母	茶褐色、黒褐色	外) キザミ突帯、ヨコナデ、ナデ 内) ナデ	煤付着
24	甕	前期前	島田中区7層上層				細小砂多、霏母、角閃石	褐色、口縁部白褐色	外) キザミ突帯、ナデ 内) ナデ	煤付着
25	甕	前期前	島田中区7層上層				細砂多、霏母、赤褐色粒	外) 淡褐色、褐色 内) 淡褐色	外) キザミ突帯、ヨコナデ、ナデ 内) ナデ	煤付着
26	甕	前期中	島田中区7層	23.0R			細小砂多、霏母、角閃石	外) 黄茶、黒色 内) にぶ黄橙、黄茶色	外) キザミ、工具ナデか、ハケ目、ミガキか 内) 工具ナデ	煤付着多
27	甕	前期中	島田中区7層上層	23.0R			細砂粒多、霏母	外) 黒色、黒褐色 内) 黒色、黒褐色	外) キザミ、ヨコナデ 内) ナデ	煤付着(広範囲)
28	甕	前期	島田中区7層			② 8.4	細砂粒多、霏母	淡白橙褐色、淡褐色	外) ナデ、工具タテナデ 内) ナデ	煤付着
29	甕	前期	島田中区7層			② 9.2	細小砂多、金霏母、白英	外) 明橙色、黒色 内) 暗褐色	外) ナデ 内) ナデ	底部、胴部煤付着
30	甕	前期	島田中区7層			② 7.3	細小砂多、霏母、角閃石、 赤褐色粒	外) くすんだ灰黄色、淡褐灰 色 内) 暗褐色	外) 細かいハケ目、ナデ、ナデのちヨコナデ 内) ナデ、ヨコナデ	(内面こびりつきあり) 内面(広範囲)外面煤付着
31	壺	前期前	島田中区西南側黒 色粘土層	40.0R			微砂多、細砂、金霏母、 角閃石	外) 白褐色、橙褐色 内) 白褐色、橙褐色	外) ヨコミガキ、ヨコナデのちミガキ 内) ミガキ	煤付着
32	甕	前期後	島田中区褐色砂層 下	23.0R			細小砂多、霏母	砂色	外) ナデか 内) ナデ	
33	壺	前期前	島田中区西北砂層 下部			②13.8	細小砂多、粗砂、霏母 角閃石、赤褐色粒	外) 黄灰褐色、暗褐色、黒色 内) 淡黄灰褐色	外) ミガキ、ナデ、底爪痕 内) ミガキ、ナデ	
8-34	壺	中期前	島田中区7層砂利	21.2R			霏母、赤褐色粒、黒曜石 角閃石、白色砂粒	暗灰黄色	外) ナデ、ハケ目 内) ヨコミガキ	黒斑2ヶ
35	壺	前期前	島田中区7層下部	27.8R			霏母、角閃石多、白色砂 粒	淡うす茶色	外) 程野太のちヨコミガキ、工具痕か、ハケ目のち ミガキ、ヨコナデのちミガキ、ハケ目のちミコナ デ	丹塗り痕
36	壺	前期前	島田中区7層下部			② 7.0	細小砂粒多、霏母、角閃 石、赤褐色粒	外) にぶ黄橙、橙色、黒色 内) にぶ黄橙、灰色	外) ミガキ、1条沈線 内) ミガキ	一部煤付着、黒斑か
37	壺	前期	島田中区7層上層			② 4.2	細小砂多、霏母	砂色、黒色	外) ミガキ 内) ナデ、ミガキ	黒斑
38	壺	前期	島田中区7層			② 7.0	細小砂多、霏母、赤褐色 粒	外) 暗赤褐色、褐色、底黒色 内) 褐色	外) タテミガキ、ナデ 内) ナデ、指圧痕深	二次加熱 煤付着
39	壺	前期	島田中区7層上層				細小砂多、霏母、赤褐色 粒	外) 淡黄褐色 内) 明茶褐色	外) ミガキ、3条沈線、重弧文 内) ナデ	

種別 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①口径 ②底径	胎土	色	調整	備考
8-40	壺	前期	島田中区7層上層				細砂多、雲母、角閃石	暗褐色、黄褐色	外) ヨコミガキ、2条沈線 内) ナデ	文様あり
41	壺	前期	島田中区7層上層				細砂粒多、雲母、赤褐色粒	砂色	外) ミガキ、ナデ、1条沈線 内) ナデ、指ナデ痕	文様あり
42	壺	前期	島田中区7層上層				細小粗砂多、雲母	褐色	外) 縹紗文、沈線 内) ナデ	煤付着
43	壺	前期	島田中区7層上層				細小砂多、雲母、角閃石	外) 暗灰色、黒色 内) 暗黄灰色	外) 縹紗文 内) ナデ	
44	甕	前期前	島田中区7層				細小砂多、粗砂、赤褐色粒	外) 淡橙褐色 内) 淡灰褐色	外) ヨコナデ、キザミ突帯、ナメハケ目のちナデ 内) ナデ	
45	甕	前期前	島田中区7層上層				細小砂多、雲母	外) 黒色、褐色 内) 淡褐色	外) ヨコナデ、キザミ突帯、ナデ 内) ナデ	煤付着
46	甕	前期	島田中区底7層				細小砂多、赤褐色粒	外) 黄褐色 内) 白黄褐色	外) キザミ、ナデ 内) ナデ	
47	埴	古II a	島田1~2層15卜		①12.4		細粒多、赤褐色粒、金雲母	淡黄灰色	外) ハケ目、ナデ、ハケ目のちナデ、ケズリのちナデ、ハケ目 内) ナデ、ハケ目	黒斑、外、底、内、胴、肩にかけ、赤色、内面胴部に煤付着
48	甕	後期	島田南区1層	17.0R			細砂多、金雲母	外) 白灰色、黒色 内) 白灰色	外) ハケ目 内) 粗ハケ目	煤付着
49	甕	中期	島田南区3層	16.8R			細砂多、赤褐色粒、雲母	砂色、黒色	外) ナデ 内) ナデ	煤付着
50	壺	前期	島田南区黒No.1		② 7.4R		微砂多、金雲母、角閃石	外) 暗橙色、橙褐色 内) 黒色	外) ミガキ一部指文、ヨコミガキか、ミガキか 内) ミガキ	
51	壺	前期	島田南区最下層		② 9.0		細小砂多	外) 灰褐色 内) 黒色	外) ナデ 内) ミガキ	煤付着
52	壺	前期	島田南区最下層		② 9.1		細砂多、雲母、角閃石	外) 黒色、灰褐色 内) 黄灰褐色、黒色	外) ミガキ、一方向ミガキ 内) ミガキ	煤付着
53	壺	前期	島田南区最下層		②10.0		細小粗砂多、雲母、赤褐色粒	外) 黄褐色、橙黄色 内) 褐色、砂色	外) ミガキ、ナデ一部ミガキ、一方向ナデ 内) ナデ、ハケか、指圧痕	二次加熱
54	甕	前期前	島田南区最下層	19.0R			細砂多、雲母	暗褐色、黒褐色	外) キザミ、キザミ突帯、ナデ 内) ナデ	煤付着
16-55	甕	中期前	長通0区包合層				小砂多、石英、雲母	外) 橙褐色 内) 暗橙色、黒色	外) キザミ、凹線文、刺突文 内) ナデか	丹塗りか
56	甕	後期後	長通3区2層		② 4.5		細小砂粒多、雲母、赤褐色色粒	褐灰色、黒色	外) ハケ目のちナデ、工具ナデのちナデ 内) ナデか	穿孔
58	壺	後3新	長通3区3層	5.2	①12.6R		細小砂多、雲母、赤褐色粒	外) にぶ淡橙褐色、赤栗 内) 黒色、にぶ橙褐色	外) ナメハケ目のちヨコナデ、ナメハケ目のちナデ、タテケ目、ケズリのちナデ、ナデ 内) ナデ、ハケ目、シボリ	黒斑
59	壺	後2新	長通3区下層	14.5			細小砂粒多、雲母多、角閃石、赤褐色粒	黄橙、暗褐色	外) ハケ目か、ヨコナデ、指圧痕 内) ナデ、指圧痕	
60	壺	後期中	長通3区3下層	14.2R			細砂多、赤褐色粒、金雲母、角閃石	うす橙褐色	外) ハケ目、ミガキ、ハケ目 内) ハケ目、ナデ	

插图 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①口径 ②底径	胎土	色	調	整	備考
16-61	壺	後2古	長通3区3層			② 7.6	赤褐色粒、角閃石 細小砂多、雲母	外) 橙茶色 内) 黒色、黄褐色(厚)		外) ハケ目、ナデか 内) ナデ、ケズリ、ハケ目	二次加熱受けて赤変
62	甕	後3古	長通3区3層	22.4R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	外) 淡橙褐色、暗褐色、黒色 内) 橙褐色、褐色		外) ハケ目か 内) ハケ目	
63	甕	後3新	長通3区3下層	26.0R			細小砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	にぶ黄褐色		外) ハケ目 内) ハケ目	
64	甕	後3新	長通3区3下層	22.1R			細小砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 黄茶、暗褐色 内) 黄橙、黄茶色		外) ハケ目 内) ヨコナデか、工具痕か。	
65	甕	後4古	長通3区3下層	22.0R			砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	にぶ黄褐色、黄褐色		外) ハケ目 内) ハケ目、ナデ	
17-66	甕	後3古	長通3区3層	27.0R	16.9		雲母、赤褐色粒 角閃石、細砂粒多	外) 茶褐色 内) 橙色、暗赤褐色		外) ハケ目 内) マメツ、ハケ目	
67	甕	後3古	長通3区3層	22.3	32.85	①24.1 ② 7.2	細小砂多、雲母	外) 赤茶色、灰褐色、黒褐 内) 黒色、淡灰褐色		外) ハケ目 内) ハケ目、ケズリのちナデか、ナデか	煤付着、二次加熱
68	甕	後期	長通3区下層			② 6.6	雲母、赤褐色粒 細小砂多	外) 黒色、淡黄褐色 内) 淡黄褐色		外) ハケ目、ヨコナデ、ナデ 内) ナデ、指圧痕、工具痕	
69	甕	後期	長通3区3下層			② 8.8	雲母、赤褐色粒、角閃石 細小砂粒多	外) 淡黄土色、暗灰色 内) 黄褐色		外) マメツ、ナデ 内) ナデ	
70	甕	後期	長通3区3下層			② 9.1	砂粒多、雲母、赤褐色粒	外) 赤褐色、黒褐色、黄褐色 内) 灰色、黒色		外) マメツ 内) ナデ	
71	甕	後5古	長通3区下層				細砂多、雲母、赤褐色粒	外) うす橙色、褐色、黒色 内) うす橙色、褐色		外) マメツ 内) ナデ、ケズリ	黒斑
72	甕	後4古	長通3区下層			② 6.3	砂粒多、赤褐色粒	赤褐色、黄灰色、灰黒色		外) ハケ目 内) ナデ	
73	鉢	後3新	長通3区3層	11.4R	6.5	② 4.9	細小砂多、雲母	外) 茶色、淡灰褐色 内) 茶褐色		外) タテハケ目 内) ハケ目、ナデ	
74	鉢	後3古	長通3区3下層	10.8	7.5	② 5.5	細小砂多、角閃石	黄褐色、灰色		外) ヨコナデ、ハケ目 内) ナデ	黒斑か
75	器台	後3新	長通3区3層	7.0R	10.3	① 7.3 ②12.0R	細砂粒多	淡黄、褐色		外) タタキのちナデ 内) ナデ、ヨコハケ目	
18-76	高杯	古1b	長通4区2層	17.25R	12.4R	②13.5	細粒多、赤褐色粒	赤褐色、肌色、黒色		外) ケズリのちナデか、ケズリのちハケ目か、ハケ目 内) マメツ、ナデ、工具痕	円孔は2個 (3個の可能性強い)
77	高杯	後4新	長通E区2下層			②19.6R	細小砂多、雲母、赤褐色粒	淡褐色		外) マメツ 内)	1ヶ所だけ穿孔残
78	高杯	後4新	長通4区			②19.0R	細小砂、雲母、赤褐色粒、 角閃石	褐色、淡黄褐色		外) タテミガキ 内) ナデ、ハケ目	1ヶ所だけ穿孔残
79	器台	後3新	長通4区2層	10.9R			細小砂多、赤褐色粒	黄褐色		外) タテハケ目 内) ナデ	二次加熱受けて赤変
80	甕	中期前	長通4区2層			② 7.3	細砂多、小砂、雲母	外) 砂色、黒色 内) 砂色		外) タテハケ目、ナデ、ヨコナデ 内) ナデ	

挿入 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①口径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
18-81	鉢	後3古	長通4区3下層	10.8R	10.0R	② 5.0R	石粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	黄橙、暗褐色、黄茶	外) ハケ目、ナデ 内) ナデ	
82	壺	後3新	長通4区3層東	12.3R	29.4	①21.9 ② 8.0	細小砂多、雲母、赤褐色 粒、角閃石	淡橙茶色	外) タテハケ目、突帯、ハケ目 内) ハケ目、ナデか	凹線
83	壺	前期	長通4区3下層			② 9.6	雲母、赤褐色粒、角閃石、 細砂粒多	淡黄土色	外) タテミガキ、ミガキ 内) ミガキ	一部黒斑
84	壺	後3古	長通4区3、6層			② 8.0	雲母、赤褐色粒、角閃石、 細砂粒多	外) 淡黄土色 内) 淡黄灰色	外) ナデ 内) ナデ	黒斑、工具痕
85	壺	中期	長通4区3層			② 8.2	角閃石、細小砂粒多、雲 母、赤褐色粒	外) 白黄橙色、黒色 内) 灰色	外) 工具ナデか 内) ナデか	
86	壺	後2新	長通4区3層			② 8.7	砂粒多、雲母、角閃石、 赤褐色粒	外) 明黄茶、灰色 内) 黄褐色	外) ナデか 内) ナデ	
87	壺	前期末	長通4区3層				赤褐色粒 細小砂粒、雲母、角閃石	にぶ黄褐色	外) キザミ、竹管文、ハケ目 内) マメツ	
88	壺	後期中	長通4区3下層4層	8.0	10.0	①15.2 ② 3.5	精製、細小砂粒、雲母、 角閃石、白色粒	外) 黄橙、黒色 内) 黄橙、暗褐色	外) 櫛描き文、ミガキ、ナデか 内) 指ナデ、ヨコハケ目、工具痕か	円孔4ヶ 穿孔間隔1cm
19-89	壺	後2新	長通4区3下層	17.1R			細小砂粒多、雲母、角閃 石、赤褐色粒	黄橙、淡橙、にぶ黄褐色	外) マメツ、ハケ目、ヨコナデ、突帯 内) ハケ目、ナデ	黒斑
90	壺	後期中	長通4区3下層	15.7	44.8	①37.0 ② 8.5	細小砂粒多、雲母、角閃 石、赤褐色粒	外) にぶ黄褐色 内) にぶ黄橙、黄灰色	外) 刺突文、ハケ目、突帯 内) ケズリ	
91	壺	後3古	長通4区3下層			② 7.0	細小砂粒、砂礫多、雲母、 角閃石	外) ハケ目、ナデか、指匠痕か 内) マメツ	外) ハケ目、ナデか、指匠痕か 内) マメツ	煤付着
92	壺	後3新	長通4区3下層			② 8.8	細小砂粒多、雲母、角閃 石、赤褐色粒	外) にぶ黄橙、黄橙、にぶ赤 内) 黄茶、黒色	外) マメツ、ハケ目 内) ハケ目	
20-93	壺	後3新	長通4区3下層	28.0R			雲母、赤褐色粒、黒曜石 白色砂粒多	外) 赤褐色、赤褐色 内) 茶褐色、こげ茶色	外) ハケ目 内) マメツ	黒斑、二次加熱
94	壺	後3新	長通4区3下層	28.0R			細小砂粒多、雲母、赤褐 色粒	外) 黒色、褐色、淡褐色 内) 淡褐色、黒褐色	外) ハケ目 内) ハケ目	黒変
95	壺	後3新	長通4区3下層	26.8R			細小砂粒多、雲母、赤褐 色粒	淡黄褐色	外) ハケ目のちヨコナデ、ヨコナデ、タテハケ目 内) ナデ、ハケ目	
96	壺	後期中	長通4区3下層	15.8R			雲母、赤褐色粒多 白色砂粒多	外) 灰淡褐色、薄黒色 内) 灰淡褐色	外) タテハケ目 内) 工具によるナデか、ナデ	
97	壺	後期中	長通4区3層	16.1	24.8	①17.8 ② 6.5	細小砂粒多、細雲母、角 閃石、乳白色粒多	外) にぶ黄橙、暗褐色、にぶ 赤色 内) 黄茶、黒色	外) ハケ目、ナデか 内) ナデ	二次加熱
98	壺	後3古	長通4区3下層	19.5R			細小砂多、雲母、赤褐色 粒	外) 褐色 内) 灰褐色	外) ハケ目 内) ナデ	
99	壺	後3古	長通4区3下層	20.6R			細小砂粒多、雲母、赤褐 色粒	茶褐色	外) タテハケ目 内) ハケ目	
21-100	壺	後3古	長通4区3下層	16.1R			砂粒多、赤褐色粒、雲母 色粒	外) 黄褐色、赤褐色、黒色 内) 黄褐色、灰褐色、黒褐色	外) ハケ目 内) ヨコハケ目、ナナメハケ目、ナデ、タテハケ 目	

插图 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①口径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
21-101	甕	後2新	長通4区3下層		② 7.5		雲母、赤褐色、角閃石 細小砂粒多	外) 淡赤褐色、暗茶褐色、黒色 内) 暗茶褐色	外) タテハケ目、工具ヨコナデか、ナデ 内) ハケ目	煤付着
102	甕	後2新	長通4区3下層	20.0R			細小砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 黄茶黒色 内) にお黄橙	外) ハケ目 内) ケズリ状ナデ	煤付着
103	甕	後3古	長通4区3下層	12.5R	② 5.7		細小砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 暗褐色、黄橙、黒色 内) 暗褐色	外) ハケ目 内) ナデ	煤付着
104	甕	後3古	長通4区3下層	10.4R	② 6.5		細砂多雲母	外) 赤褐色、黄褐色、黒色 内) 赤褐色、赤褐色	外) タテハケ目、ナデか 内) ナデ、指庄痕	
105	甕	後3古	長通4区3下層		② 8.0		細小砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 黄橙、橙色、にお赤色 内) にお黄橙、暗橙	外) ハケ目、ナデ 内) ハケ目、ハケ目のちナデ	二次加熱
22-106	甕	後3古	長通4区3下層	22.8R			細小砂粒多 石多、赤褐色粒	にお黄橙、黄橙、黄橙	外) ハケ目 内) ハケ目	
107	甕	後3新	長通4区3層	19.9			雲母、赤褐色粒、角閃石 細砂粒少	茶褐色、暗茶褐色	外) タテハケ目、粗ハケ目 内) ナデ	黒斑
108	甕	後3新	長通4区3下層	11.5			細小砂粒多、微細雲母、 角閃石多、赤褐色粒	外) にお黄橙、黒色 (黒菱) 内) にお黄橙、黄橙	外) マメツ 内) 工具ナデ	黒菱
109	甕	後3新	長通4区3層		② 6.5		細小砂多、雲母	外) 茶褐色、黒色 内) 茶褐色	外) タテハケ目 内) ハケ目のちナデ	底2ヶ所棒状、刺突
110	甕	中期	長通4区3下層	19.0R			細小砂粒多 雲母、角閃石	外) 淡橙、にお黄茶、赤茶色 内) にお黄橙、黄橙	外) ハケ目 内) ナデ	赤色顔料付着か
111	甕	中期	長通4区3下層		② 7.7		細小砂粒多 角閃石、赤褐色粒	砂色 外面一部黒色	外) マメツ 内) ナデ	煤付着
112	甕	前期末	長通4区3下層	35.6R			細砂多 赤褐色粒、角閃石	淡黄灰色	外) キザミミ、竹管文、ヨコナデ、ハケ目、工具痕 3条沈線 内) キザミ、ヨコナデ、ハケ目	
23-113	高杯	後期後	長通4区3層		② 9.3R		細小砂 雲母、赤褐色粒	橙褐色 外面一部黒ずむ	内) ナデ	
114	高杯		長通4区3層		② 14.0R		雲母、赤褐色粒 粒、黒曜石	淡灰黄色	外) ミガキ、ハケ目のち粗ミガキ、ナデ 内) ナデ	
115	高杯	後3新	長通4区3下層	29.2			中砂(多)、赤褐色粒、 角閃石	外) 赤褐色、黄褐色、黒色 内) 赤褐色、灰褐色	外) ミガキか、不連続沈線 内) 巻き上げ痕	二次加熱のため赤変 黒斑
116	高杯	後3古	長通4区3下層	31.0R			細砂多赤褐色粒、角閃石	うす橙色	外) ヨコナデ、ミガキ 内) ミガキ (マメツ気味)	
117	高杯	後3古	長通4区3下層	23.2R	② 15.0		細小砂多、粗砂 赤褐色粒、雲母	茶褐色	外) ハケ目のちナデ、タテハケ目かミガキか 内) マメツのため不明、ナデか	
118	器台	後3古	長通4区3下層	13.4R	② 16.1R		雲母、赤褐色粒、角閃石 細小砂粒多	外) 淡黄褐色、にお橙 内) 茶褐色	外) ハケ目 内) ハケ目、ナデ、紋り	二次加熱
119	支脚	後3新	長通4区3下層	6.0	② 12.5		細小砂粒多	にお黄橙・黄褐色	外) マメツ 内) ナデ	二次加熱
120	鉢	後2古	長通4区3層	12.6	② 4.9		雲母、赤褐色粒、角閃石 小砂粒多(粗砂粒まじる)	淡黄褐色	外) マメツ (一部ハケが残る) 内) ナデ	黒斑

挿入 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①肩径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
23-121	鉢	後4新	長通4区3下層	19.1R	10.0	② 6.5	細小砂多 雲母、赤褐色粒	淡茶褐色 外) 赤褐色、黄土褐色、底面に黒色 内) 黄土褐色	外) ハケ目、ケズリのちナデとハケ目、粗ケズリ 内) ハケ目、ナデ、工具痕	外底面から胴にかけて、やや広範囲に黒化
122	鉢	後3新	長通4区3層	10.9R	9.9R	② 5.1R	砂粒多雲母、角閃石	外) 赤褐色、黒色 内) 赤褐色	外) ハケ目のちナデ、ケズリのちナデ、ナデか 内) ハケ目のちナデか、粗ハケ目	殊か
123	鉢	後4新	長通4区3下層	9.4	7.0	② 4.0	砂粒多雲母	外) 淡黄褐色 内) 外面一部黒色	外) ナデ、工具痕 内) ナデ、ハケ目	
124	鉢	後3古	長通4区3下層	13.0R	8.5	② 4.3	細小砂多、赤褐色粒	淡黄白色	外) ハケ目のちナデ 内) 粗ハケ目のちナデ	
125	鉢	後3新	長通4区3層	16.9	9.1		雲母、赤褐色粒、角閃石 細砂粒多		外) ハケ目	
24-126	壺	後2新	長通4区4層	20.1R			砂粒、雲母、角閃石 赤褐色粒	外) にお橙、黒色 内) にお橙	外) タテミガキ、ヨコミガキ、突帯、ハケのちタテ 内) ヨコミガキ、ナデ、ヨコミガキ	丹塗りか
127	壺	後2新	長通4区4層			② 6.0	砂粒多	灰褐色、黒褐色、黒色	外) ハケ目、ナデ 内) ハケ目のちナデ、ハケ目、ナデ	外底面、内底面一部煤付着 (黒色)
128	壺	後1古	長通4区4下層	9.5			細小砂多 雲母、赤褐色粒	外) 茶褐色、淡灰褐色 内) 茶褐色	外) 突帯、タテミガキ、ヨコミガキ 内) タテナデ、ナデ、ヨコミガキ	
129	鉢	後2古	長通4区4層	7.75R	5.4	② 2.2~ 1.6	細小砂多 雲母、赤褐色粒	外) 褐色、黒色 内) 赤茶・褐色	外) ナデ、工具痕 内) ナデ	底槽円
130	鉢	後2古	長通4区4層	7.7R	8.0R	② 4.5	細砂、赤褐色粒、雲母	外) 黄褐色 内) 赤褐色、黄褐色	外) ハケ目のちナデ、ナデか 内) ナデ、指圧痕、工具痕	
131	甕	後期	長通4区4層	7.1R			雲母、黒曜石 白色砂粒多	茶褐色	外) 工具ナデか(砂粒の流れ有) ケズリ 内) ケズリ、ナデ工具痕	体部下側にうすい黒斑
132	甕	後2新	長通4区3下層 4区4層	27.0R			砂粒多	暗橙色	外) ハケ目 内) ハケ目、ナデ	黒斑
133	甕	後2古	長通4区5層	24.6R			細砂多、赤褐色粒 角閃石、雲母	外) にお橙色、灰色 内) にお橙色	内外面マメツのため調整不明りよう	
134	甕	前期後	長通4区5層	25.5R			細砂、小石粒多 赤褐色粒、雲母	暗黄茶色	外) キザミ、ハケ目、ヨコナデ、沈線、ハケ目の ちナデ 内) ハケ目のちナデ	
135	甕	前期後	長通4区5層	26.0R			細砂多 角閃石、雲母	黄灰色 内面数ヶ所橙褐色	外) キザミ、ヨコナデ、ハケ目、2条沈線 内) ナデ	赤色付着か
25-136	甕	中期前	長通4区6層	44.5R			細砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	黄橙、黄茶、にお赤色	外) キザミ、ハケ目のちヨコナデ、ヨコナデ、突 ナデ 内) ナデ	二次加熱
137	甕	中期	長通4区6層			② 9.4	砂粒多、雲母、赤褐色粒 角閃石、石英	外) 赤褐色、黄土褐色、灰褐 内) 黒色、灰黒色	外) ハケ目、ナデ 内) ナデ	
138	甕	前期後	長通4区6層	16.2R			小砂多、雲母 角閃石、石英	暗橙色	外) キザミ、継続的沈線、ヨコナデ、格子沈線 内) ミガキ、工具痕	
139	壺	前期前	長通4区6層	27.0R			雲母、赤褐色粒、角閃石 細砂粒、粗砂粒	淡黄褐色	外) ミガキ 内) ミガキ、部分的ナデ	
140	鉢	前期	長通4区最下砂利層			② 8.2	雲母、角閃石多、黒曜石、 石英、粗砂粒、赤褐色粒、白色砂粒多	外) 赤褐色、黒灰色 内) 黒灰茶色	外) ハケ目、五角形状のハケ目痕(底面) 内) ミガキ、ナデ	二次加熱で赤変か

挿入 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	胎土	色	調	整	備考
25- 141	壺	前期前	長通4区最下砂利層		①順径 ②底径 ② 7.3R	細砂多、小砂、雲母	外) 黄味灰色 内) 黒褐色、黄土色		外) ミガキ、ケズリ状ナデ 内) ミガキかなで	
142	壺	前期	長通4区最下砂利層			雲母、赤褐色粒、角閃石 細小粗砂粒多	外) 肌色、にお橙 内) 肌色		外) 織杉文 内) ミガキ	
143	鉢	前期	長通4区第7層			細砂、石英、雲母	暗褐色		外) 沈線、織杉文 内) ミガキ	
144	甕	前期後	長通4区最下砂利層			細小砂粒多、雲母、角閃石多、赤褐色粒	外) にぶ黄橙 内) うす橙		外) キザミ、沈線か 内) マメツ	溝の中丹か
145	甕	前期後	長通4区最下砂利層			砂粒	淡黄灰色		外) キザミ、ミガキ、ヨコナデ、ハケ目 内) ナデ	
146	甕	前期前	長通4区最下砂利層			細小砂多、角閃石金雲母	外) 黄褐色、黒褐色 内) 黄褐色		外) キザミ突帯、ナデ 内) ナデ	
147	甕	前期後	長通4区最下砂利層	28.4R		細砂多、雲母	外) 暗茶色 内) 黄灰色		外) キザミ、ヨコナデ、ハケ目、沈線 内) ハケ目	体付蓋 内面(5×3cm)口縁(2 ×1cm)、黒斑
26- 148	壺	後3新	長通5区1層	12.1R	② 6.7R	細小砂、雲母、赤褐色粒	茶褐色、橙色 (底部) 黒色		外) マメツ 内) ナデ	
149	甕	古1b	長通5区2層東南端		①31.2	赤褐色粒、白色砂粒	外) 淡褐色、濃橙褐色 内) 淡灰色		外) タタキ、タタキのちナデ 内) ヨコケズリ、タタケズリ	体部下五、濃黒斑 一部復原部分 (異色破片)
150	甕	後3新	長通5区2層東南端		② 8.0	細小砂多、粗砂、雲母 赤褐色粒	外) 黄土色、朱茶色、黒色 内) 黄土色、朱茶色		外) 粗ハケ目、ハケメ 内) 粗ハケメ	
151	壺	後5新	長通5区2層黒色土	17.0R		赤褐色粒、雲母、黒曜石 白色砂粒	外) 淡橙褐色 内) 口縁・頸部(淡橙褐色)		外) ヨコナデ、タタキ 内) ナデか、ケズリのちナデ、ケズリ	丹色調(明淡橙褐色) 丹差り
152	壺	古1a	長通5区2層	13.0R		赤褐色粒、雲母 白色砂粒、白色粒	淡橙味褐色		外) 工具痕か 内) ハケ目痕か	
153	壺	後2新	長通5区2層東南端		② 7.7	雲母、角閃石、赤褐色粒 白色多	淡褐色		外) タテハケ目、ナデか 内) ヨコハケ目のちナデ、ナデ	体部一部体状黒色 黒斑か
154	壺	後3古	長通5区2層		② 6.0R	細砂多、小砂、雲母 角閃石、赤褐色粒	外) 白黄灰色 内) 黒色、白黄灰色		外) ナデか 内) ナデ、シボリ痕、指圧痕	
155	壺	後3古	長通4区3層 5区2層	14.3R		雲母、赤褐色粒多 黒曜石、白色砂粒多	外) 灰色、淡橙褐色 内) 淡黄灰色、淡灰褐色		外) ヨコナデのち指押え、ナナメハケ目、タテハケ目 内) ナナメハケ目、ヨコハケ目	
156	甕	後3古	長通5区2層		② 4.4	細小砂多、雲母	外) 黄味灰色、黒色 内) 灰茶色		外) 工具のちナデ 内) ナデ	
157	高杯	古1b	長通5区2層	17.6		砂粒多、赤褐色粒	黄土色、淡黄土色		外) ハケ目のちナデ、ナデ 内) ナデ、ヨコナデか、ハケ目、ナデ	
158	高杯	古1b	長通5区2層東南端		②13.2	細小砂多、雲母 赤褐色粒	明茶色		外) ナデか、ハケメ、ヨコナデ 内) ナデ、ハケメ	穿孔4ヶ
159	鉢	後期	長通5区2層	15.6R	② 9.2R	雲母、赤褐色粒、角閃石 細小砂粒少	にお橙、棕色		外) ナデ 内) 工具タチナデ	
27- 160	甕	古1b	長通大溝5区2層	44.0R		細小砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	にお黄橙		外) ハケのちヨコナデ、ハケ目 内) ハケ目、ケズリ	内面上赤色顔料による丹差り

編年	出土地	口径	器高	胎土	色調	調整	備考
27-161	長通5区2層						
壺	後3新	12.2R	4.3	砂粒多、赤褐色粒、雲母	灰色、灰黒色	外) マメツ、工具痕 内) ハケ目、ナデ	
162	長通5区2層	12.1R	6.0	細小砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) にお黄橙、橙色、黒色 内) にお黄橙、橙色	外) ケズリのちハケ目 内) ミガキか	黒斑
163	長通5区2層	12.1R	6.0	砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) にお黄茶、黄茶、黒色 内) にお黄茶、黄茶色	外) 未調整 内) 工具ナデ、ナデ	手づくね風
164	長通5区2層			細小砂多 雲母、赤褐色、角閃石	外) 明茶褐色、淡黄土色 内) 暗褐色	外) ハケ目 内) ハケ目のちナデ	
165	長通5区3下層	7.4	11.0	微砂多、金雲母 角閃石	外) 黄土色、黒色 内) 黄土色、黒色	外) ハケ目 内) ハケ目のちナデ	黒斑
166	長通5区3下層	6.7R		雲母、砂粒	外) 褐灰色 内) 灰、暗灰色	外) ハケ目のちミガキ、ナデ 内) ナデ	
167	長通5区3層	10.9R		砂粒多、赤褐色粒 雲母	外) 黄肌色、黒色 内) 黒色	外) ヨコナデ 内) ナデ、ハケ目、ハケ目のちナデ	円孔2個対
168	長通5区3下層	12.4	16.0	砂粒多、雲母、角閃石多、 赤褐色粒	外) にお黄橙、黒色 内) にお黄橙、灰色	外) マメツ、粗ハケ目 内) ナデか、マメツ	黒斑
28-169	長通5区3層	27.2R		大砂粒、大粒赤褐色粒多 雲母	にお黄橙 突帯周辺前後黒色	外) 突帯、ハケ目、沈線 内) ハケ目	丹塗りか
170	長通5区3下層	23.6		細小砂多、雲母、赤褐色 粒	外) 茶褐色 内) 灰褐色	外) ケズリハケ目、突帯、沈線、ヨコナデ、ハケ 目、ナデ、ケズリ状ヨコハケ目、 土質不均	丹塗り
29-171	長通5区3層	15.1R	17.9	細小砂粒多 雲母、赤褐色粒	茶褐色 外底部一部黒色	外) 凹線文、ハケム、ケズリのちナデ、ナデ、指 内) ナデ、ハケム、指圧痕	
172	長通5区3下層	17.6R		細小砂多 赤褐色粒	砂色	外) ハケ目、ヨコナデ、タテハケ目、工具痕 内) ヨコナデか	
173	長通5区3層	15.5R		細小砂多 雲母、赤褐色粒、角閃石	淡黄褐色 外面一部黒色	外) ナデか 内) ナデ、ハケ目	
174	長通5区3下層	23.8R		細砂多、粗砂 赤褐色粒、角閃石、雲母	外) 茶褐色、黒色 内) にお橙色、茶褐色	外) ハケ目 内) ハケ目	煤付着 二次加熱
175	長通5区3層	30.0R		細小砂粒多、雲母、石英	外) にお黄橙 内) にお黄橙、赤褐色	外) ハケ目のちタテナデ 内) ハケ目、ナデ、ハケ目	丹塗り
176	長通5区3下層	13.8	16.5	細小砂多 雲母、赤褐色粒	外) 黒褐色、灰色 内) 黒褐色、灰色、茶色	外) ケズリのちナデ、工具ナデかナデ 内) ケズリ	煤付着、赤変
177	長通5区3層	13.7R		細小砂多 雲母、赤褐色粒	褐色	外) ハケ目 内) ハケ目、ナデ	煤付着
178	長通5区3下層	14.4R		細小砂多、雲母、赤褐色 粒	明淡茶 外面一部黒色	外) マメツ 内) ナデ	
179	長通5区3下層	11.6R		細砂 雲母、赤褐色粒	外) 灰色、暗灰色 内) 黄味灰色	外) ヨコナデ 内) ナデ	
180	長通5区3層	15.2		細砂多、赤褐色粒 角閃石	白橙色、白灰色	外) ハケ目(マメツで調整不明) 内)	

插图 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
29-181	甕	後期中	長通5区3層	15.0		①18.9 ②4.85	砂粒、雲母	淡橙 外面口径から肩部黒色	外) ハケ目 内) ハケ目	黒斑
30-182	甕	後3新	長通5区3下層			② 7.8	細小砂粒多 雲母、赤褐色粒	淡灰褐色、黒褐色	外) ハケ目のちナデか 内) ハケ目ナデ	
183	甕	後3古	長通5区3下層			② 5.6	細砂多、角閃石、石英	暗橙色	外) 粗ハケ目、ハケ目 内) 粗ハケ目、ナデ	煤付着か
184	甕	後4新	長通5区3下層			② 4.8	細小砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 黄茶色、黒色 内) 黄茶色	外) ハケ目、ケズリ、ナデ 内) 工具ナデ、ハケ目か、ナデ	
185	甕	中期後	長通5区3層			② 8.0	細小砂多 雲母、赤褐色粒、粗砂粒	外) 黄褐色 内) 淡暗褐色	外) ハケ目 内) ナデ	
186	甕	後2新	長通5区3層			② 4.5	細小砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 黄褐色、黒色 内) 黄褐色、橙色	外) ハケ目、ナデ 内) 工具痕	黒斑
187	甕	後3新	長通5区3層	9.8R			砂粒少 雲母	灰色	外) ハケ目のちナデか 内) ナデ	
188	甕	後3古	長通5区3層	10.5R	8.2	② 3.0R	細砂、雲母	黄灰色	外) ヨコナデ、一部ミガキ、ハケ目、ナデ 内) ナデ、工具痕	黒斑
189	甕	後期中	長通5区3下層	11.0R		② 2.8	細砂粒 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 褐灰色、にお淡黄褐色 内) 褐灰色、灰色	外) ミガキか、部分的ミガキ 内) ミガキ、工具痕	黒斑
190	鉢	後5新	長通5区3下層2層	17.2	7.2R		小〜大砂粒 赤褐色粒	黄土色、赤褐色、黒色 外面 部黒色	外) ケズリのちナデ 内) ナデ	
191	鉢	後4古	長通5区3下層	13.6	7.2	② 6.3	角閃石、雲母、白色砂粒	白味黄灰色	外) ハケ目のちヨコナデ、ハケ目、ナデ 内) ナナメヨコハケ目、ナデ	
192	鉢	後3古	長通5区3層	6.3R		② 1.9R	砂粒ほとんど含まず	黒色、黒褐色	外) ミガキ 内) ミガキ	うるし塗りか
193	鉢	後3古	長通5区3層	8.7	5.4	② 2.7	砂粒少 角閃石、赤褐色粒	外) にお黄褐色、黒色 内) にお黄褐色	外) ナデ 内) ハケ目、工具痕	黒斑
194	鉢	後3古	長通5区3下層	9.2	7.3	② 3.5	細小砂粒多、金雲母、角 閃石、赤褐色粒	外) にお黄褐色 内) 黄味灰色	外) マメツ 内) ナデ、ケズリ、ナデ	
195	鉢	後4古	長通5区3下層東 北端	14.9R	8.8R	② 7.85	細砂多 雲母	淡褐灰色	外) ミガキ 内) ミガキ	
196	高杯	後4新	長通5区3下層				細小砂多 赤褐色粒、雲母	淡橙褐色	外) マメツ 内) 指頭痕	1cm大の円孔5ヶ所
197	高杯	後4新	長通5区3下層	32.6	25.9	② 21.0	細小砂粒多、雲母 赤褐色粒、雲母	明淡褐色、白黄褐色 黒色	外) ヨコミガキ、タテヘラミガキ、ヨコナ デ、ナデ 内) ミガキ、ケズリ、ハケ目のちナデか、ヨコナ デ	円孔(1コ3ヶ所、1対3 ヶ所) 二次加熱
31-198	高杯	後3新	長通5区3下層	37.2			雲母、赤褐色粒、角閃石 細砂粒少	外) 淡黄褐色 内) 淡黄褐色、黒色	外) ハケ目 内) ハケ目のちミガキ	黒斑
199	高杯	後3新	長通5区3下層	29.0R			細小砂粒多、雲母 角閃石、赤褐色粒	外) 黄茶色 内) 暗褐色	外) マメツ 内) ヨコナデか	
200	高杯	後3古	長通5区3下層	29.4			中砂多、赤褐色粒	外) 黄褐色 内) 赤褐色、黒色	外) ハケ目のちナデ(一部ミガキ) 内) ヨコナデ、ミガキ、ナデ	

插图番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①口径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
31-201	器台	後5新	長通5区3層	8.8			砂粒、雲母、砂礫	にぶ黄橙・赤褐色	外) ケズリのちナデ 内) ナデ	二次加熱
202	鉢	古II a	長通5区4層東南端	16.2	6.9		細小砂粒 赤褐色粒、雲母、角閃石	淡黄白色、にぶ橙色	外) ケズリのちナデ 内) ハケ、ナデか	二次加熱
203	壺	古I b	長通5区4層東南端				砂粒多、雲母、赤褐色粒	外) にぶ黄橙、黒色、褐色 内) にぶ黄橙、暗灰色	外) ヨコナデ、ナチメタタキ、ハケ目、タテハケ目 内) ナデのちハケ目、ヨコナズリ、ナデ	煤付着、二次加熱
204	壺		長通5区4層東南端	17.8R			細小砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) にぶ黄橙、褐色、黒色 内) 黄橙、黄味灰、白灰色	外) ハケ目のちヨコナデ、ハケ目のちナデか 内) ハケ目のちヨコナデ、指などで跡	黒斑
205	壺	後3新	長通5区4層東南端		②9.6R		細小砂多、雲母、角閃石 赤褐色粒	外) 緑褐色、黒色 内) 橙褐色	外) ハケ目のちナデ、ナデ、ケズリ状ナデ 内) たてハケ目	
32-206	壺	後5新	長通5区4層東南端		②7.1		砂粒多、赤褐色粒	外) 肌色、薄黄褐色、薄赤褐色 内) 黒、灰色	外) ハケ目のちナデ 内) ナデ、ケズリのちナデ	黒斑か
207	壺	後2新	長通5区4層	22.6R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	外) 褐色 内) 灰褐色、黒褐色	外) ナデかハケ目、ハケ目のちナデ 内) ハケ目か、ナデ、ハケ目	
208	壺	後1新	長通5区4層				雲母、石英、白色砂粒 赤褐色粒	外) 白うす茶色、うす黒色 内) 黒色	外) ヨコナデ、突帯、沈線、ヘラミガキか、ナデ 内) ヨコナデ	黒斑か
209	高杯	後期末	長通5区4層東南端	18.6R	8.6		雲母、赤褐色、角閃石、 細砂粒	外) にぶ橙色 内) にぶ橙色、淡黄土色	外) マメツ 内) ナデ	黒斑
210	壺	中期前	長通5区4層東北端		②6.7		細小砂多、雲母、角閃石	外) 淡橙褐色、黒色 内) 褐色	外) タテハケ目、ナデ、ケズリ状工具ナデ 内) ナデ	
211	壺	前期前	長通5区4層		②7.3		細小粗砂多、雲母、角閃石	外) ハケ目、ナデか、ミガキか 内) ナデ、ミガキか	外) ハケ目、ナデか、ミガキか 内) ナデ、ミガキか	二次加熱、赤変、煤付着
212	壺	前期後	長通5区5層	24.5			砂粒、雲母、角閃石	外) 褐色 内) にぶ黄褐色、黒色	外) キザミ、ハケ目のちナデ、沈線、タテハケ目 内) ハケ目のちヨコナデ、ナデ	
213	壺	中期前	長通5区6層		②7.0		砂粒多、角閃石	外) 黄土肌色、赤褐色 内) 黒褐色	外) タテハケ目 内) ナデ	
214	壺	後1新	長通5区5・6層 下層7層、4区6	26.3R			雲母、赤褐色粒、角閃石 細砂粒	にぶ橙色	外) 沈線、ナデ、ヨコナデ、突帯 内) ナデ	丹塗り
33-215	鉢	古I b	長通5区E黒土 下3層	17.4R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	橙褐色	外) ナデ、ケズリのちナデか 内) ナデ、タテハケ目	
216	壺	古I b	長通5区E黒土 下3層	15.6R			細砂多、雲母、赤褐色粒	淡橙緑色	外) マメツ 内) ケズリ	
217	壺	古I b	長通5区黒土上下 3層有灰色、粘性土	17.0			細小砂、雲母、角閃石	灰褐色、褐色	外) ヨコナデ 内) ナデ、ケズリ	煤
218	壺	古II a	長通5区黒土下3層	14.4R			細砂多、雲母、赤褐色粒	白黄褐色	外) タテハケ目のちナデか 内) ナデ、ケズリ	
219	蓋	後期	長通5区	10.6	1.7		細小砂、雲母、赤褐色粒	上) 暗灰色、淡灰褐色、黒色 下) 淡灰褐色、黒色	上) ミガキ、ナデ、ヨコナデ 内) ナデ、ケズリ	黒斑、穿孔4ヶ
220	鉢	中期	長通5区7層	14.0R	6.1	②8.0	雲母、角閃石、赤褐色粒 黒耀石、白色砂粒	外) 赤褐色 内) 黒こげ茶、黄褐色、赤褐色	外) ハケ目のちナデか、工具ナデか 内) ナデ、ミガキ肌、工具痕	黒斑、二次加熱赤変

插图 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①順径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
33- 221	甕	後1新	長通5区7層	27.0R			雲母、赤褐色粒、白色砂粒多	黄褐色、黒色	外) ハケ目 内) ハケ目、ナデ、工具ナデ	
222	甕	後5新	長通5区7層			② 5.2	細小砂多、赤褐色粒	外) 白黄灰色、黒色 内) 白黄灰色	外) ハケ目、ハケ目のちナデ、ナデ 内) ケズリ、ナデ	
223	蓋	中期後	長通5区7層				細小砂多、雲母、赤褐色粒	外) 灰黒色、桃色味茶色 内) 黒色、赤茶色	外) タテハケ目、ナデかミガキか 内) ナデ	
224	壺	中期前	長通5区7層	21.1R			雲母、赤褐色粒 白色砂粒、黒色粒	灰黄色	外) ハケ目のちナデか、工具痕 内) ヨコミガキ	黒斑
225	壺	前期後	長通5区7層			①22.6R	細小砂多、石英	外) 淡橙色、明橙色 内) 明橙色	外) 綾杉文、重弧文沈線 内) ナデ	
226	壺	前期後	長通5区7層 5区7層 5区最下砂利				砂粒多、雲母、角閃石、赤褐色	外) にお橙色 内) 黄茶、黒色	外) 沈線、円弧文、綾杉文、ミガキ 内) ミガキ、工具痕	
227	壺	前期後	長通5区7層			② 9.3	砂粒、雲母、角閃石	外) にお黄橙 内) にお黄橙、黒色	外) 綾杉文、ミガキ、ハケ目、タタキのちナナメ 内) ミガキ、ナデ	黒斑か
228	壺	前期	長通5区7層			②15.3	雲母、角閃石、黒曜石 白色砂粒多	外) 白味灰色、うす黒色、暗 内) 暗灰色、黄土色	外) 工具ナデ 内) ミガキ痕、ナデのちミガキ、指圧痕	
34- 229	甕	前期後	長通5区7層				細小砂粒 雲母、角閃石、赤褐色粒	にお黄橙色	外) キザミ、突帯、ナデ 内) ナデか	
230	甕	前期後	長通5区7層				細小砂多、雲母、角閃石	褐色、黄褐色	外) キザミ、ハケ目、ヨコナデ、沈線 内) ナデ、ハケ目	
231	甕	前期前	長通5区7層砂層 東側				雲母、細砂多	外) 暗茶色 内) 灰茶色	外) キザミ、突帯、ナデ 内) ナデ	
232	甕	前期前	長通5区7層				細小砂多 雲母、角閃石	淡黄土色	外) キザミ突帯、ナデ 内) ナデ	
233	甕	前期前	長通5区黒色上面				細小砂多、赤褐色粒、雲母	淡黄褐色 一部黒色	外) ナデ、ミガキか 内) ヨコハミ、ミガキ	黒斑
234	甕	前期後	長通5区7層	18.6R			細小砂多、雲母、角閃石 赤褐色粒	外) 褐色 内) 淡褐色	外) タテハケ目 内) ナデ、指圧痕	
235	甕	中期前	長通5区最下砂利				雲母、赤褐色粒、角閃石 細砂粒	外) 暗茶褐色 内) 肌色、にお橙	外) ミガキのち櫛歯織線、刺突文、ミガキ 内) ミガキ	煤付着
236	壺	前期後	長通5区最下砂利				細小砂粒多 雲母、角閃石、赤褐色	外) 淡橙色、にお黄橙色 内) にお黄橙色	外) 2条沈線、綾杉文 内) ナデ	
237	壺	前期後	長通5区最下砂利				細砂、雲母、角閃石	外) 灰黒色塗りの上に朱塗り 内) にお黄橙	外) 3条沈線、ミガキ 内) 工具ナデ	外面黒塗りの上朱塗り
238	甕	前期前	長通5区東側最下				細砂多、小砂、角閃石、赤褐色粒	外) 淡灰黒色、桃色味黄土色 内) 黒褐色、赤褐色粒	外) キザミ 内) ナデ	二次加熱、赤変
239	甕	前期前	長通5区最下砂利				細小砂多、雲母	外) 褐色、黒色 内) 淡黄褐色	外) キザミ、突帯、ナデ 内) ナデ指圧痕	
240	壺	前期後	長通5区最下砂利			② 7.8	粗砂粒多、雲母、角閃石	外) にお黄橙、黒色 内) 淡橙色、黒色	外) ミガキ 内) ミガキ	底面に記号

挿図番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
34-241	高杯	前期前	長通5区最下砂利				細砂、雲母、角閃石	にぶ黄橙、黄褐色	外) ミガキ、突帯、竹筥文状刺突文、ヨコナデ、指ナゲナデ 内) ミミガキ	
242	壺	中期初	長通最下砂利	8.8R			細砂多、雲母、赤褐色粒	茶褐色	外) 突帯か 内) ナデ	
243	甕	中期前	長通5区7層最下砂利		② 6.4		雲母、赤褐色粒、角閃石 白色砂粒、黒色粒多	外) 黒灰色、茶褐色、黄灰色、 内) 明茶褐色 内) 黒色	外) ナデ、工具ナデか、指ナゲ 内) ナデ	
244	甕	前期	長通5区最下砂利		② 5.7		細小砂多、粗砂 雲母、角閃石	外) 淡茶褐色、黒色 内) 淡茶褐色	外) マメツ、指圧痕 内) ナデ、指痕	

表 5 畠田・長通大溝出土土器観察表 (大型土器)

35-1	甕	後1古	畠田大溝北区4層	35.0R	57.1 ②15.0	①66.0R ②15.0	細小砂粒多 粗砂、雲母	外) 茶褐色、淡黄褐色、肩一 部黒色、頸部は赤褐色ぬり 内) 黒色	外) ハケ目のちヨコミガキ、ヨコナデ、タテミガキ キ、タテハケ目、突帯 内) ナデ、ミガキ、ハケ目	内に塗りか 二次加熱、黒色 突帯は1/2周強残る
36-2	甕	後1新	長通大溝3区断面 3層	38.5	58.5 ②12 R	①42.7 ②12 R	1~3mm砂粒多 角閃石、雲母	外) 橙茶色、茶褐色、黒色(胴 中位) 内) 茶褐色、黒褐色(胴中位)	外) ナデ、ハケ目のちヨコナデ、ヨコナデ、タテハケ目、 細いハケ目、突帯、ヨコナデ、 ハケ目のちヨコナデ、ハケ目のちミガ キ、タテハケ目、ハケ目のちミガ キ、タテハケ目、ハケ目のちミガ キ、ヨコナデ、ヨコナデ、ハケ目のちナ デ、ヨコナデ	
3	壺	古I a	辻垣遺跡大溝4区 2層東南		①57.0 ② 6.6	①57.0 ② 6.6	1mm以下~3mm大砂粒多 5mm大砂粒 赤褐色粒	外) 赤褐色、茶褐色、黒色、 赤褐色、黒褐色、黄褐色 内) 赤褐色、黒褐色、黄褐色 (口縁部)	外) ハケ目のちヨコミガキ、ヨコナデ、タテミガ キ、タテハケ目、突帯 内) ナデ、ミガキ、ハケ目	二次加熱、黒斑

表 6 長通出土朱付着土器観察表

41-1	鉢	後期中	長通3区西下層 溝2西下層 溝1東端	41.2R			細小砂多、雲母、赤褐色 粒	褐色	外) ヨコヘラミガキ 内) ヨコヘラミガキ、タテハケ目	内面一部朱
2	鉢	後期中	長通5区大溝3下 層	39.2R			細小砂粒多、角閃石、雲 母	褐色	外) ヨコミガキ、ナナメミガキ 内) ヨコミガキ、タテミガキ	内・外面部分的朱の痕跡
3	鉢	後期中	長通3・4区				細小砂多、粗砂、雲母、 赤褐色粒	褐色、橙茶色	外) ヨコミガキ 内) ヨコミガキ、タテハケ目	内面朱
4	鉢	後期中	長通5区大溝3層				細小粗砂多、雲母	褐色	外) ヨコミガキ 内) ヨコミガキ	マメツ気味 内面朱の痕跡
5	鉢	後期中	長通5区大溝3下層 溝2西底	35.2R			細小砂多、金雲母、赤褐 色粒、角閃石	外) 褐色、橙褐色、黒色 内) 褐色、橙褐色	外) ヨコナデ、ミガキ、ヨコヘラミガキ、タテハ ケ目のちヨコナデ、タテハケ目、 内) ヨコヘラミガキ、ヨコナデ、 外) ヨコミガキ、凹線文	内面朱の痕跡点在
6	鉢	後期中	長通4区大溝3層	32.4R			細小砂粒多、雲母	褐色	外) ヨコミガキ、凹線文 内) ヨコハケ目、タテハケ目	内面朱の痕跡
7	鉢	後期中	長通5区大溝3下 層	22.8R			細小砂多、赤褐色粒	黄褐色	外) タテミガキ 内) タテミガキ	内面朱の痕跡、外面マメツ
8	鉢	後期中	長通5区大溝2・ 3層		② 8.2R		細小砂粒多、雲母、赤褐 色粒	外) 褐色、一部黒色 内) 黄褐色	外) タテミガキ 内) ナデ	内面朱、外面二次加熱
9	鉢	後期中	長通4区溝2		②10.0		細小砂粒多、粗目砂、赤 褐色粒	外) 褐色 内) 黄褐色、黒色	外) マメツ 内) ナデ、ハケ目	内面朱付着
10	鉢	後期中	長通4区溝2西底		② 7.0R		細小砂粒多、粒砂 雲母、赤褐色粒	褐色	外) ミガキ 内) ナデ	内面一部朱点在

插图番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①順径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
11	鉢	後期中	長通5区大溝2層西			②10.4R	細小砂多、角閃石	外) 黄褐色、茶褐色 内) 茶褐色、一部黒	外) ミガキ、ハケ目のちナデ 内) タテミガキ、直線的ミガキ	二次加熱、植物クキ状混入、 胴口部に茶 内面赤色顔料の付着(朱)
42-12	鉢	後期中	長通4区大溝6層	31.6R			細小砂多、雲母、赤褐色	黄褐色、灰褐色	外) タテハケ目 内) 工具痕、ハケ目、ミガキ	内面朱の痕跡
13	壺	後期中	長通4区大溝3下層	17.4	31.6	②10.0	大粒砂粒多、雲母、角閃石、赤褐色粒	外) にぶ黄橙、橙、黒色 内) にぶ黄橙、橙	外) マメツ 内) マメツ気味ナデか、ケスリ	内面朱 全体的に歪み、外底辺に黒 斑
14	甕	後3古層	長通4区大溝3下層			② 8.0	細小砂多、粗砂、雲母、赤褐色粒、角閃石	黄褐色	外) タテハケ目、ヨコナデ、ナデ、ハケ目 内) ハケ目、ナデ	内面朱、底面赤やかな赤 外底一部黒化
15	甕	後3新層	長通5区大溝3層			①43.0R ② 9.3R	小砂多、粗砂、雲母、赤褐色粒	外) 黄土色、黒色(黒斑) 内) 黒色	外) 粗ハケ目、ヨコナデ、2条突帯 内) 粗ハケ目、ナデ、工具痕	黒斑 内面全面朱付着

表 7 長通溝10・長方形土壙出土土器観察表

51-1	壺	前期中	上層	16.3R		①23.5	細小砂多、角閃石、雲母、赤褐色粒	淡橙茶色 外底部に黒色部分	外) タテハケ目のちヨコナデ、ミガキ、沈線 内) ミガキ、ナデか	内胴下位朱付着
2	壺	前期中	上層				細小砂多、雲母	黄褐色	外) 縞彩文、2条沈線、1条沈線、ナデ 内) ナデ	
3	壺	前期中	上層			② 8.2	細小砂多、雲母、粗砂	外) 茶色、黒色、底黒色 内) 茶色、黒色	ナデ	
4	壺	前期中	下層			①12.5 ② 5.8	細小砂多、雲母、角閃石、赤褐色粒	黄褐色、赤褐色	外) ナデかミガキ、3条、4条、2条沈線、重弧 文、縞彩文、指圧痕 内) ナデ、指圧痕	外胴に黒斑
5	甕	前期中	上層	21.0R			細小砂多、雲母、角閃石、赤褐色粒	暗茶灰色	外) キザミ、ナデ、ハケ目、沈線か 内) ナデ、工具痕か	
6	甕	前期中	上層				細小砂多、雲母、赤褐色粒	外) 黄褐色 内) 茶褐色	外) ヨコナデ、突帯 内) ナデ	
7	甕	前期中	中層	22.7R			細小砂多、粗砂、雲母、赤褐色粒、角閃石	褐色、赤茶色 外) 内) 一部黒色	外) キザミ突帯、ヨコナデ、工具ナデ 内)	
8	甕	前期中	中層				細小砂多	黄茶色、暗茶色	外) キザミ、ナデ 内) ナデ、指ナデ	
9	甕	前期中	中層				砂粒多、雲母、角閃石、石英	外) 黄橙、暗褐色、にぶ赤色 内) にぶ黄橙、にぶ赤色、黒色	外) ミガキ、突帯 内) ナデ、ミガキ	二次加熱
10	壺	前期中	1号長方形土壙	11.0R			細砂多、粗砂、雲母	外) 黒塗り 内) 橙褐色、暗褐色	外) ミガキ、工具痕 内) ミガキ、ナデ	黒塗り
11	甕	前期中	2号長方形土壙				黒曜石、白色砂粒多、雲母	外) 薄こげ茶色 内) 薄茶色	外) キザミ、タテハケ目、ナデ 内) マメツ、ナナメハケ目	黒斑
12	甕	前期中	5号長方形土壙				細小砂多、雲母	黒色、黒灰色	外) キザミ、キザミ突帯 内) マメツ	二次加熱
13	甕	前期中	5号長方形土壙				細小砂多、雲母	外) 黒褐色 内) 褐色	外) キザミ、ナデ 内) ナデ	

表 8 富田・長通溝1・2出土土器観察表

種別 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①順径 ②底径	胎土	色	調	整	備考
14-1	杯蓋	7世紀	溝1上層	14.0R			細砂	明灰色		外) ハラケズリ、ヨコナデ 内) ナデ	須置器
2	杯蓋	7世紀	畠田溝1中・上層	12.2	4.2		細砂多、小石粒、角閃石	淡黄灰色		外) ナデ、回転ハラケズリ、ヨコナデ 内) ナデ、ヨコナデ	須置器、ヘラ記号
3	高杯	古IIIa	畠田溝1床面	16.5R			細砂、赤褐色粒、石英、金雲母	にぶ橙色		外) ハケ目、ミガキ 内) ハケ目のちミガキ	外面鉄分付着
4	埴	古IIIa	長通0区溝1東下層	9.3	13.9	①12.7	細砂多、雲母、赤褐色粒、角閃石	外) 黒色、白橙褐色 内) 白橙褐色、黒色		外) マメツ、ケズリか 内) ナデ、マメツ	
5	埴	古IIIa	長通0区溝1東下層	12.3R	17.3	①14.6	細少砂多、粗砂、雲母、赤褐色粒	外) 鮮茶色、暗褐色、黒色 内) 鮮茶色、底黒色		外) ハケ目、ミガキ 内) ナデ、ケズリ	煤付着
6	埴	古IIIa	長通0区溝1東下層	6.3	9.0	① 8.8	細砂多、雲母、赤褐色粒	外) 暗褐色 内) 暗褐色		外) ハケ目、ナデ 内) ケズリ	黒斑
7	埴	古IIc	長通0区溝1東下層	10.2R			赤褐色粒、雲母、角閃石、白色砂粒	枯草色		外) ハケ目、マメツ 内) ハケ目、ナデ、ヨコケズリ	黒斑
8	甕	古IIIa	長通0区溝1東下層	16.9R			細小砂、雲母、赤褐色粒	外) 茶色、橙茶色 内) 黄褐色		外) マメツ 内) ヨコハケ目のちナデ	
9	甕	古Ia	長通0区溝1東下層				精製、細砂多、雲母、角閃石、赤褐色粒	橙色、黄褐色		外) ハケ目 内) ハケ目、マメツ、ケズリ	文様付突帯
10	甕	古IIIa	長通0区溝1東下層	14.2R		①16.4	小石粒、砂粒多、雲母、赤褐色粒	黄褐色、こげ茶色		外) ヨコナデ、ケズリのちナデ 内) 指ナデのちケズリ	
11	甕	古IIIa	長通0区溝1東下層	14.6R			細砂多、雲母、赤褐色粒	淡黄褐色、黒色		外) ハケ目 内) ケズリ	黒斑
12	鉢	古Ib	長通0区溝1東下層	10.6	6.0		細砂	黄灰色外、黒色		外) ナデ、工具ケズリ 内) ハケ目	
13	高杯	古IIc	長通0区溝1東下層			②10.5R	細砂多、赤褐色粒、角閃石	薄褐色		外) ケズリ、ヨコナデ 内) ヨコケズリ、ヨコナデ	
14	高杯	古IIc	長通0区溝1東下層			②12.0R	細砂多、角閃石	白褐色		マメツ	
15	高杯	古IIIb	長通0区溝1東下層			②14.7R	細砂多、赤褐色粒、金雲母、角閃石	明褐色		外) マメツ 内) ケズリ、ヨコナデ	
16	高杯	古IIIb	長通0区溝1東下層			②12.2	細小砂多、雲母、角閃石	外) 黄褐色、黒色 内) 茶褐色		外) ハケ目のちミガキ、ヨコナデ 内) ケズリ、マメツ	
17	高杯	古IIIa	長通0区溝1東下層			②11.2R	細砂多、角閃石、赤褐色粒、石英	外) 黄褐色、灰色 内) 黄褐色		外) マメツ、ハケ目 内) ケズリ、ヨコナデ	
18	高杯	古IIIa	長通0区溝1東下層			②13.2R	細小砂多、金雲母	外) 赤味褐色 内) 暗褐色		外) ナデ、ヨコナデ 内) ケズリのちナデ、ヨコナデ	
19	高杯	古IIIa	長通0区溝1東下層			②13.6R	赤褐色粒、雲母、黒曜石、白色砂粒	外) 赤褐色、薄茶色 内) 赤褐色、黄薄茶色		外) ナデ、ヨコナデ 内) ナデ、ナナメケズリ、ヨコケズリ	

補図 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①口径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
56-20	高杯 古IIc	長通0区溝1東下層	12.2			赤褐色粒、雲母、角閃石、黒耀石、白色砂粒	黄褐色	外) 沈線か指押え痕か 内) マメツ		
21	高杯 古IIIb	長通1区溝1東下層	23.8R			細砂、砂粒、雲母、角閃石、赤褐色粒	橙褐色	外) 斜めハケ目、タテハケ目、ナデ 内) ヨコハケ目、工具ヨコナデ、ハケ目のちナデ		
22	高杯 古IIIb	長通0区溝1東下層	19.3R	12.8	②12.0	砂粒、細砂、赤褐色粒、雲母、角閃石	橙褐色	外) ハケ目のちヨコナデ、ナデ、ハケ目のちナデ 内) ヨコナデ、へら鎌工具ナデ、ナデケズリ	底部内面黒斑	
23	鉢 古Ia	長通0区溝1東下層	8.9R	6.3R	①9.8 ②6.2R	雲母、赤褐色粒、白色砂粒	茶褐色	外) ケズリのちナデ、ナデ、工具痕一周 内) ヨコナデ、ケズリのち部分的ナデ		
24	器台 後5古	長通0区溝1東下層	14.0R			細小砂多、金雲母、角閃石	明るい橙色、暗橙色	外) ハケ目 内) ナデ、ハケ目		
57-25	柑 古IIc	長通1区溝1東下層	10.0	14.1	①13.6	砂粒、雲母、角閃石	にお橙	外) ハケ目のちナデ、ケズリのちハケ目、ナデ 内) ナナメハケ目のちナデ、ナデケズリ		
26	柑 古IIb	長通1区溝1東下層			①11.9	細砂多、雲母、赤褐色粒、角閃石	黄褐色	外) ハケ目、ケズリ	外面底部に楕円状黒斑	
27	甕 古IIa	長通1区溝1東下層	16.6			砂粒、角閃石、雲母、赤褐色粒	外) 黄褐色黄色、黒褐色付着 内) 薄黄土色、黄褐色、赤褐色	外) 工具ヨコナデ、ハケ目、ナデ、ケズリ、相庄 内) 工具痕	口縁部一部黒色	
28	甕 古IIa	長通1区溝1東下層	13.4R			細砂粒多表出せず、雲母、赤褐色粒	外) 橙褐色 内) 灰色味淡橙褐色	外) ヨコナデ、極細ハケ目 内) ナデ、ケズリ		
29	甕 古IIIa	長通1区溝1東下層	16.5R		①23.4	細小粗砂多、雲母	外) 淡黄褐色、底部黒ずむ 内) 褐色	外) ヨコナデ、ナデ 内) 工具によるヨコナデ、ナデ一部ハケ目、粗ケズリ		
30	高杯 古IIc	長通1区溝1東下層	17.4			細砂多、赤褐色粒、雲母、角閃石	黄褐色	外) ナデ、ハケ目のちナデ、ヨコナデ 内) ナデか		
31	高杯 古IIc	長通1区溝1東下層	14.8R			細小粗砂多、雲母、角閃石、赤褐色粒	にお黄橙、淡橙色、にお赤色	マメツ	二次加熱	
32	高杯 古IIIb	長通1区溝1東下層	20.4R	12.0	②13.0R	雲母、赤褐色粒、黒耀石、白色砂粒	にお黄橙	外) ナデ、ヨコナデ 内) 工具痕、ミガキかナデか、指押え痕、ヨコケズリ	黒斑	
33	高杯 古IIc	長通1区北溝1東下層	18.6			細砂、赤褐色粒	黄灰色	外) ハケ目、ヨコナデ 内) マメツ、ケズリ	黒斑	
34	高杯 古IIc	長通1区溝1東下層			②12.6R	細小砂多、雲母、赤褐色粒	茶褐色 内糖一部黒色	外) ケズリ風へラナデ、ハケ目のちナデ、ナデ工 内) ケズリ、ハケメ		
35	高杯 古Ib	長通1区溝1東下層			②16.0R	細小砂多、粗砂、雲母、赤褐色粒	黄褐色、茶色	外) ハケ目、ナデか、ヨコナデ 内) ハケ目か、ナデ	脚部四方向に円孔	
36	高杯 古Ib	長通1区溝1東下層			②7.5R	細小砂粒、微細雲母、角閃石、赤褐色粒	淡褐色	外) ハケ目のちミガキ 内) マメツ、工具ナデ、ハケ目、ヨコナデ	脚部四方向に円孔	
37	高杯 古Ia	長通1区溝1東下層	12.6R			細砂粒多、雲母、角閃石、赤褐色粒	橙色、黄橙	外) ナデ、ヨコナデ 内) ハケ目のち部分的ミガキ、ミガキ、ナデ		
38	高杯 古Ia	長通1区溝1東下層	15.8R			砂粒多、赤褐色粒多	にお黄橙、淡褐色	外) マメツ 内) ナデかマメツ気味		
39	鉢 古Ia	長通1区溝1南下層			②4.7R	細小砂多、雲母、赤褐色粒、角閃石	茶褐色、外裾一部黒色	外) 工具によるナデ、ミガキか、ナデ 内) ナデ		敷土器

挿図 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色	調	調整	備考
57-40	鉢	古I a	長通1区溝1東下層	14.0R	8.55		雲母、角閃石、細砂	赤褐色、黄灰色		外) ケズリ、マメツ 内) ナデか	
41	鉢	後期	長通1区溝1東下層	12.9R	8.15		砂粒、小石粒、雲母	黄灰色、黄黒色		外) マメツ 内) ナデか	外面底部黒斑
58-42	甕	中期初	長通1区溝1東下層	砂18R 内15R			細小砂粒多 雲母多	黄土色、暗褐色 外面一部黒色		外) 指圧痕、タテハケ目、ミガキ、板ナデ 内) ハケ目、ナデ、工具タテナデ	
43	甕	後期末	長通1区溝1東砂層	11.6R			砂粒ほとんど合まず、赤褐色、角閃石、雲母	外) 淡黄褐色、淡暗褐色 内) 白黄褐色		外) 擬凹線ヨコナデ 内) ナデ、ケズリ	
44	壺	後期末	長通2区北溝1東下層	12.4R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	茶褐色		外) ヨコナデ 内) ナデ	
45	壺	後期末	長通2区北溝1東黒褐色土				細小砂、赤褐色粒	外) 橙茶色 内) 黄褐色		マメツ	
46	壺	後期末	長通2区北溝1東下層	19.7R			雲母、赤褐色粒、角閃石 細砂粒、粗砂	にぶ橙色		外) ヨコナデ、ミガキかタテハケ目のちミガキか 内) ヨコナデのちミガキか、ミガキか	
47	柑	古III a	長通2区溝1東下層			①10.5	細砂多、金雲母	外) 橙褐色、黄褐色、黒 内) 橙褐色		外) ハケ目のちナデ、ナデ 内) ヨコナデ、粗ケズリ	黒斑
48	柑	古III a	長通溝1東下層			①9.0	細砂多、金雲母、角閃石	外) 橙褐色、黒色 内) 橙褐色		外) ハケ目のちナデ、ハケ目 内) ケズリ、ナデ	外面傑付着か
49	柑	古III a	長通2区溝1東下層			①8.8	細砂多	黄褐色、灰黒色		外) ケズリのちナデ、粗ケズリ 内) 指ナデ	黒斑
50	甕	後期	長通2区北溝1東下層			②4.6	小砂多、金雲母	外) 黄土色、黒色 内) 橙褐色、黒塗		外) ハケ目、ナデ、ナデ 内) ハケ目、工具痕	黒斑、底部に木葉痕
51	甕	後期	長通2区北溝1東下層			②3.2	角閃石、雲母、赤褐色粒、黒褐色、白色砂粒、細砂多	外) 淡橙味褐色、黒色 内) 淡橙味褐色		外) 指ナデ、シボリかナデ 内) 工具痕、ヨコハケ目か、指圧痕	黒斑、内底部工具痕、こげ茶土付着
52	甕	後期	長通2区北溝1東下層			②7~7.5R	角閃石、雲母、細砂	淡黄褐色、黒色		外) ナデ、指ナデ 内) ナデ	
53	鉢	古I b	長通2区北溝1東下層	10.0	4.1		細砂 雲母、赤褐色粒、角閃石	茶褐色		外) ナデ、ケズリのちナデ、ケズリのちハケ目 内) ナデ	
54	鉢	後期末	長通2区北溝1東下層			②11.6	細小砂粒多、雲母、角閃石	外) 橙色、黄褐色、黒色 内) 橙色、黄褐色		外) ヨコナデ、指圧痕 内) ケズリ、ハケ目、ハケ目のちナデ	黒斑、製塩土器 黒茶色のもの付着
55	鉢	古II a	長通3区溝1東下層	15.4R			雲母、赤褐色粒、角閃石、細砂粒	にぶ橙色		外) ハケ目のちナデ 内) ナデ、ケズリ	
56	甕	後5新	長通2区溝1東下層	15.2R			細砂、雲母、赤褐色粒	橙色		外) ハケ目 内) ナデ、ケズリか	
57	甕	古I a	長通2区溝1東下層	12.6R			細砂多、赤褐色粒 金雲母、角閃石	橙褐色		外) ナデか、轡描文 内) ケズリ	
58	甕	古I b	長通2区北溝1東下層黒褐色土	17.0R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	外) 褐色 内) 黄褐色、黒色		外) タタキ 内) ケズリ	
59	甕	古II a	長通2区北溝1東下層	17.0R			細小砂多、雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 黄土色、褐色 内) 淡黄褐色		外) マメツ 内) ナデ、ケズリ	

挿図番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
58-60	高杯	古I b	長通2区北溝1東下層	15.4			細小砂多、雲母、赤褐色粒	茶褐色	外) ミガキ 内) ミガキ	
61	高杯	古I b	長通2区北溝1東下層黒褐色土	12.0R			雲母、赤褐色、粗砂	黄褐色 一部口縁内外面黒色	外) マメツかナデ 内) ナデか	
59-62	壺	古II c	長通2区溝1東下層	24.3			雲母、角閃石、黒耀石、赤褐色粒、白色砂粒	外) うす茶色、淡橙褐色 内) 黒灰色	外) ハケ目のちナデか、ナデ、ハケ目 内) ハケ目、ヨコナデ、ナデ、ハケ目、粗ハケ目	黒斑
63	甕	古II b	長通2区溝1東下層	24.5R			細小砂多、雲母	外) 褐色 内) 橙褐色	ヨコナデ	
64	壺	古II c	長通2区溝1東下層	18.0R			雲母、赤褐色粒、角閃石、砂粒多	黄灰色	外) ハケ目のちナデ 内) ハケ目、ナデ、ハケ目のちナデ、ケズリ	
65	鉢	古II c	長通2区溝1東下層	12.0R			砂粒ほとんど含まず 雲母、赤褐色粒	橙褐色 外面一部黒色	外) ナデか 内) ナデか	
66	甕	古I b	長通2区溝1東下層	15.6R			細砂多、雲母、赤褐色粒	黄褐色	外) マメツ 内) ケズリ	
67	甕	古I b	長通2区北溝1東下層	15.2R			雲母、赤褐色粒、黒耀石、白色砂粒	橙褐色	外) つまみ上げ口縁、ヨコナデ、ハケ目、細多キ 内) ヲコハケ目、ケズリ	黒斑、煤付着
68	甕	古I b	長通2区溝1東下層	16.0R			細砂多	暗黄橙灰色	外) ヲコナデヘラ描刺突文 内) ハケ目、ケズリ	煤付着
69	壺	後3新	長通2区溝1東下層	22.0R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	黄褐色	外) マメツ 内) 指圧痕	
70	壺	後5新	長通2区溝1東下層				細砂多、金雲母	外) 暗褐色、茶褐色 内) 暗褐色、黒灰色	外) ナデ、重弧文、沈線 内) ナデ	
71	高杯	古II c	長通2区溝1東下層	16.4			赤褐色粒、雲母、白色砂粒	外) 橙褐色、砂色 内) 橙褐色	外) ナデか、工具痕 内) ナデか	黒斑
72	高杯	古I b	長通2区溝1東下層		② 9.7R		細砂粒多、赤褐色粒	黄褐色	外) 細ハケ目 内) ナデ	3方向に円孔 外面に盛り痕
73	高杯	古IV	長通2区溝1東下層	23.6			砂粒多、赤褐色粒、角閃石	外) 濃赤褐色、黄褐色、灰褐色 内) 赤褐色、黄褐色、黒色	マメツ	赤変
74	高杯	後1新	長通2区溝1東下層		② 16.4R		細小砂多、雲母、赤褐色粒	茶褐色	外) タテミガキ、ヨコナデ 内) ナデ	
75	鉢	古I a	長通2区溝1東下層		② 8.1		細小砂、雲母、赤褐色粒	黄褐色、鮮褐色	外) ナデ、ヨコナデ 内) ミガキ、工具痕、ハケ目、ナデか	内面塗り
76	鉢	古I b	長通2区溝1東下層	16.0R	7.5		雲母、赤褐色粒、黒耀石、白色砂粒	外) 橙褐色、薄茶色 内) 橙褐色	外) ハケ目痕 内) 渦巻状ハケ目	黒斑、内部黒色付着物
61-77	杯蓋	7世紀	畠田溝2中層	11.8	3.6		砂粒ほとんど含まず	うす灰色、灰色	外) ナデ、ヨコナデ、沈線状 内) ナデ、ヨコナデ	外面灰かぶり
78	杯蓋	後期	畠田溝2床面	13.0R			細小砂多、雲母、角閃石、赤褐色粒	淡橙褐色	外) マメツ、ハケ目か 内) マメツ	
79	壺	後期	畠田溝2床面	17.0R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	黄褐色、茶褐色	外) ナデ 内) タテミガキ	黒斑

插图 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色	調	整	備考
61-80	甕	後期	畠田溝2下層	20.4R			細小粗砂多、雲母、赤褐色粒	黄土色		外) タテハケ目のちヨコナデ、ナデか 内) ハケ目、ナデか	
81	高杯	古IIc	畠田溝2床面			②10.7	白色砂粒、雲母多	橙褐色		外) タテミガキ、ハケ目痕、ヨコナデ、ミガキ 内) ケズリ、ナデ、ヨコナデ	黒斑
82	高杯	古IIIa	畠田溝2床面			②11.9R	赤褐色粒、雲母、角閃石、白色砂粒	淡橙味褐色 杯内底部白灰色		外) ハケ目のちミガキか、工具痕、細ハケ目 内) ナデ、ケズリ、ケズリ、ナデのちナデ	
83	壺	古IIa	長通1区溝2西下層				赤褐色粒	外) 黄褐色、暗茶褐色 内) 黄灰色		外) ミガキ、ナデ 内) ハケ目	
84	壺	後期末	長通1区溝2西下層	16.6R			細小砂多、粗砂、雲母、赤褐色粒	橙色		外) タテハケ目のちナデ 内) ナデ	
85	鉢	古IIc	長通1区溝2西下層	11.7R	4.0		細小砂粒、雲母、角閃石、赤褐色粒	外) にぶ黄橙、黒色 内) 暗橙、黄茶色		外) マメツ 内) 部分的ミガキ	二次加熱、黒斑 内面黒色付着物
86	甕	古Ib	長通1区溝2西下層				細小砂粒、雲母、角閃石、粗砂	暗橙色、黒色		外) タタキ、ナデ 内) ナデ、工具痕	
87	埴	古IIc	長通2区溝2西下層	8.6	7.5		赤褐色粒多、雲母、黒耀石、白色砂粒	外) 黄褐色 内) 黄褐色灰黄色		外) ヨコハケ目、ヘラミガキ、ケズリ、ナデ 内) タテハケ目、ナデ、指圧痕	内面黒色付着物
88	壺	古Ia	長通2区溝2西下層			①17.5R	細小砂、雲母、赤褐色粒	外) 茶褐色、褐色、黒色 内) 茶褐色、褐色		外) マメツ 内) ナデ	
89	鉢	古IIa	長通2区溝2西下層	14.4R			細砂多、雲母、角閃石、赤褐色粒	黄橙、黒色		外) タテハケ目、ヨコミガキ、ケズリのちナデ 内) ハケ目、ナデ、ミガキ	
90	鉢	古Ib	長通2区溝2西下層			② 3.3	細砂、雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 淡黄灰色 内) 黄褐色、こげ茶色		外) ハケ目のちナデ、ナデ 内) ナデ、工具痕	内面一部焦付着か
91	甕	古Ia	長通2区溝2西下層	9.5R			細砂多、雲母、赤褐色粒	外) 砂色、黒色 内) 淡橙褐色		外) マメツ 内) マメツ、ケズリ	
92	甕	古Ia	長通2区溝2西下層	17.0R			細砂、金雲母、角閃石	橙褐色 口縁部赤褐色部分的有		外) タタキのちハケ目 内) ハケ目、ケズリ	
93	甕	古Ib	長通2区溝1東下層溝2下層	16.6R			小砂、金雲母	黄土色		外) タタキ 内) 粗ハケ目、ヨコナデ、ケズリ	
94	甕	後期	長通2区北側溝2西下層	27.6R			細小砂多、金雲母、赤褐色粒、石英	暗橙褐色		マメツ、口縁3条沈線	
95	鉢	古IIa	長通2区溝2西東の閣下層	11.0R	5.5		細砂多、雲母、赤褐色	茶褐色		外) ケズリ 内) ナデか	
96	器台	古IIa	長通2区溝2西下層	8.7			砂粒、雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 黄橙色 内) 暗橙色		外) マメツ 内) ミガキ	
97	器台	古IIa	長通2区溝2西下層	8.3R	8.0	②11.5	雲母、赤褐色粒、黒耀石、白色砂粒	淡橙褐色		外) マメツ 内) 指ナデか	円孔4ヶ
98	杯蓋	7世紀	長通3区溝2下層			②12.8R	小砂粒、雲母	黄灰色		外) 粗回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内) ヨコナデ	須臾器
99	甕	古IIb	長通3区溝2西下層	18.0R			雲母、赤褐色粒、角閃石、細砂粒	にぶ橙色		外) ヨコナデ 内) ヨコナデ、ケズリ	

挿入 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
61-100	甕	古I a	長通3区溝2東西下層	12.1R			雲母、赤褐色粒、角閃石、細砂粒	黄褐色	マメツ	
101	甕	古I a	長通3区溝2東西下層	22.7R			雲母、赤褐色粒、角閃石、細小砂粒	外) 肌色、褐色 内) 肌色、にお橙色	外) ハケ 内) ケズリ	
102	甕	古I a	長通3区溝2西下層	30.0R			雲母、赤褐色粒、角閃石、細小砂粒	外) にお橙色 内) 肌色	外) ミガキ 内) ヨコミガキ	赤色顔料か
62-103	壺	古I a	長通3区溝2西下層	15.1R			赤褐色粒、雲母、赤褐色粒、角閃石	外) にお橙、肌色 内) にお橙、黒灰色	外) ヨコナデ、ミガキか 内) 粗ハケ目、ナデ	
104	壺	古II a	長通3区溝2西下層	14.4			細小砂多、雲母、赤褐色粒、角閃石	淡黄白色	外) ナデ、工具痕 内) ケズリ	
105	甕	古I a	長通3区溝2西下層			② 6.0R	小砂粒多、雲母、赤褐色粒、角閃石	外) にお黄橙、灰色 内) 赤灰色、黒色	外) 工具ケズリ状ナデ、工具ヨコナデ、ナデ 内) ケズリ	
106	壺	後5古	長通3区溝2下層	26.2R			細小砂多、雲母、赤褐色粒、角閃石	肌色	ハケ目	
107	壺	後4新	長通3区溝2西	19.6R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	外) 黄褐色、黒色 内) 黄褐色	マメツ	
108	壺	後5新	長通3区溝2西	13.6R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	黄土色	外) ハケ目、ヨコナデ、粗クダハケ目 内) ヨコハケ目、ヨコナデ、ナデか	
109	甕	後4新	長通3区溝2西下層	29.2R			黒曜石、赤褐色粒多、白色砂粒多、雲母、角閃石	淡橙褐色、灰茶色	外) 工具ナデか、ハケ目、突帯 内) ナデか、工具ヨコナデか、ケズリか	
110	甕	後5古	長通3区溝2西下層	32.6R			細小砂粒多、雲母、角閃石、赤褐色粒	外) にお橙色 内) にお黄橙、淡黄褐色	外) ナナメ、工具ヨコナデか、ケズリか 内) ヨコハケ目、クダハケ目、ヨコナデ、突帯	
111	甕	古II c	長通3区溝2上層	23.0			細小砂多、雲母、赤褐色粒	外) 赤褐色、黒色 内) 黒色、灰褐色	外) ハケ目 内) ケズリのちナデ、ケズリ	黒斑
112	甕	古III a	長通3区溝2下層	15.4R			雲母、赤褐色粒、黒曜石、白色砂粒	外) 淡黄褐色 内) 淡黄灰色、黒色	外) ハケ目 内) ケズリ	黒斑
63-113	甕	古I b	長通3区溝2西下層	16.0R			雲母、赤褐色粒、角閃石、細砂粒多	淡黄褐色	外) ハケ目 内) ナデ、ケズリ	
114	甕	中期	長通3区溝2西下層			② 8.0	雲母、赤褐色粒、角閃石、細小砂粒多	肌色・灰色	外) ハケ目 内) ナデ	底部かんばん部分あり
115	甕	後期	長通3区溝2西下層			② 6.0	小砂多、石英、角閃石	外) 暗橙、赤橙、黒色 内) 暗灰色、黒色	外) タテナデ、ナデ、3条沈線 内) ナデ	黒斑
116	高杯	古III b	長通3区溝2西下層	19.0R			雲母、赤褐色粒、角閃石、細砂粒	にお橙色、脚内部黒色	外) ナメツ 内) マメツ	
117	高杯	古III b	長通3区溝2西下層			② 11.6R	赤褐色粒、黒曜石、雲母、白色砂粒	外) 淡橙味褐色、薄茶色 内) 橙味褐色	外) ナデ、ヨコナデ 内) ナデ、ヨコケズリ	
118	高杯	古III b	長通3区溝2西下層			② 13.6R	雲母、赤褐色粒、角閃石、細砂粒多	外) 黄土色、赤褐色 内) 黄土色、黒色	外) 工具ナデ 内) ケズリ、ナデ	黒斑
119	支脚	古I a	長通3区溝2西下層	70R			雲母、赤褐色粒、白色砂粒多	外) 濃茶、黄褐色 内) シボり痕	外) ナデ、ハケ目のちナデか、指圧痕 内) シボり痕	

器種	編年	出土地	口径	器高	①口径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
63-120 提瓶	5世紀	長通4区溝2西下層				細砂多	外) 松葉色、なまこ色 内) 灰色	外) 釉、ヘラケズリ 内) ナデ	把手付け根部分自然釉
121	古IIIb	長通3区溝2	9.8R			雲母、赤褐色粒、細砂粒少	赤褐色、茶褐色	ナデ	
122	古IIIb	長通溝2西下層	10.1R	12.8		雲母、赤褐色粒、黒曜石多、角閃石多	外) うす茶色、濃灰色 内) 黒灰色、黄灰色	外) ハケ目のちナデ 内) ヨコケズリ、ナデ	黒斑
123	古IIIb	長通4区溝2下層	18.3			赤褐色粒、雲母、黒曜石、白色砂粒	外) 橙褐色 内) 橙褐色、淡黄茶色	外) ナデ、ハケ目のちナデ 内) ヨコハケ目、ハケ目、ナデ	黒斑
124	高杯 古IV	長通4区溝2西下層	18.3R			細、小砂多、雲母、赤褐色粒	淡黄味砂色	外) なてハケ目、ハケメ、ナデ 内) ハケメ、ナデ	
125	高杯 後期	長通溝2西下層	14.3R			細、小砂多、雲母	黄褐色、黒色(一部)	マメツ	
126	高杯 古IIIa	長通溝2西下層			②12.3	小砂粒多、微細雲母、赤褐色粒	橙色、暗褐色	外) ハケ目、工具痕 内) ケズリ	円孔2個偏在
127	高杯 古IIIb	長通4区溝2西下層			②12.0	細小砂多、雲母、赤褐色粒	白黄橙色、裾一部黒色	外) ナデか、マメツ 内) ケズリ	
128	高杯 後3古	長通溝2西下層	32R			雲母、赤褐色粒	肌色	マメツ	胎土精製されている
129	器台 後5古	長通溝2北区下層	16.4R			細小砂多、石英多、雲母、角閃石、赤褐色粒	にぶ黄橙、暗褐色	外) ハケ目 内) ハケ目、ヨコナデ	黒斑

表 9 畠田・長通溝3・5出土土器観察表

11-1	甕 後1新	畠田溝3下層	24.0R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	砂色	マメツ	
2	甕 中期前	畠田溝3上層、溝4	23.0R			細砂多、雲母、赤褐色粒、角閃石	黄褐色	外) タテハケ目のちナデ 内) ナデ	
3	埴 古IIc	畠田溝3下層	10.8R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	外) 砂色、淡褐色 内) 砂色	外) ヨコナデ 内) マメツ	
4	甕 前期前	畠田溝5中層			①30.3 ② 9.0	砂粒、小石粒多、角閃石、雲母、赤褐色粒	外) 暗茶灰色、暗茶色、茶褐色 内) 濃茶、こげ茶色	外) ミガキ、指ナデ、ナデ、工具痕、沈線 内) ナデ、工具痕	
5	鉢 前期	畠田溝5上層			②10.0	小砂多、赤褐色粒、金雲母	外) 明褐色、灰色~黒色 内) 橙色、暗褐色	外) ミガキ、タテナデ 内) ミガキ	底穿孔、二次加熱
6	甕 前期前	畠田溝5中層				細小砂多	淡橙褐色	外) キザミ突帯、ナデ 内) ナデ	
7	甕 前期前	畠田溝5中層				細砂多、赤褐色粒	黄褐色	外) キザミ突帯 内) マメツ	
8	甕 前期中	畠田溝5中層				細小砂多、雲母、角閃石	外) 褐色 内) 淡褐色	外) キザミ、工具痕、ナデ 内) ナデ	
9	甕 前期中	畠田溝5中層	18.0R			細小砂多、雲母、赤褐色粒、角閃石	外) 茶色、褐色 内) 淡橙褐色	外) キザミ、ヨコナデ、ナデ 内) マメツ	

器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
11-10 甕	前期中	畠田溝5上層	22.1R			砂粒多、雲母、角閃石、赤褐色粒	外) にお黄橙、黄茶色 内) にお黄褐色	外) 突帯、ナデ 内) ナデ	二次加熱
11 甕	前期前	畠田溝5中層	23.0R			細砂多、粗砂、雲母	外) 淡褐色 内) 茶褐色、淡褐色	外) キザミ突帯、ナデ 内) ナデ、指田痕	

表 10 長通溝6出土器観察表

67-1 壺	古IIc	1区	16.4R			細小砂多、雲母、赤褐色粒、角閃石	褐色、口縁一部黒色	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ、ケズリ	
2 甕	古Ia	1区				細砂多、雲母、角閃石、赤褐色粒	淡黄土色、外面一部黒色	外) タチハケ目、ナデ 内) ナデのちヨコハケ目、ナデ	底穿孔
3 甕	後期	1区			② 3.0	小砂多、角閃石、雲母	外) 黄土色 内) 暗灰色	外) 工具によるタチナデ、底部木葉痕 内) ナデ	
4 甕	中期前	1区				細砂多、雲母、粗砂	外) 赤茶色 内) 黄褐色	外) 櫛描き文、タチハケ目 内) ミガキ	外面塗りか
5 壺	古Ib	2区上面			①17.6R	雲母、赤褐色粒、細砂、小石粒	暗黄褐色	外) ヨコナデ、ナゴ、ナチケズリ、工具痕 内) ナデ	
6 埴	古IIb	2区	13.0R			雲母、赤褐色粒、角閃石、白色砂粒	外) 粗味褐色、うす茶色 内) 粗味褐色	外) ヨコナデ、ナデ、ケズリのちハケ目 内) ハケ目、ケズリ、ミガキ、タチケズリ	黒斑
7 甕	古IIa	2区	16.1R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	外) 黒色 内) 淡黄褐色	外) ヨコナデ、ハケ目のちヨコナデ 内) 工具ヨコナデ、ナデ、ケズリ	黒斑か
8 高杯	後5新	2区			②15.8R	細砂多、角閃石、赤褐色粒	外) 黄褐色 内) 黄灰色、灰黒色	外) タチミガキ、一部ハケ目、ヨコナデ、工具痕 内) ナデ、工具痕	穿孔5ヶ
9 高杯	古Ib	2区			②14.0R	細小砂多、雲母、赤褐色粒	鮮橙色	外) マメツ 内) マメツ、ケズリか	四方向に円孔、二次加熱
10 甕	古Ia	2区				細小砂多、雲母、赤褐色粒	黄褐色	外) ヨコナデ 内) ヨコミガキ、ナデ、ミガキか	

表 11 長通出土器観察表

53-1 甕	前期未	P3	21.9R			赤褐色粒、黒曜石、角閃石、雲母、白色粒、薄褐色砂粒	外) 薄茶色、こげ茶色 内) 薄茶色、薄黒色	外) キザミ、1系沈線、竹管文、2系沈線、ハケ目 内) ナデ	黒斑
2 甕	前期後	P5				粗砂多、雲母	外) 茶褐色、黒色 内) 暗灰色、茶褐色	外) キザミ、ヨコナデ、沈線、粗ハケ目 内) マメツ	煤付着
3 壺	前期前	6区、P5	10.7			粗砂多、赤褐色粒、石英、長石	外) 粗灰色 内) 黄灰色	外) ヨコナデ 内) マメツ	
4 甕	前期後	5区、南端、P5	27.0R			細小砂多、雲母、赤褐色粒	砂色	外) タチハケ目、ヨコナデ、ハケ目 内) ヨコハケ目のちナデ、ナデ	
5 壺	後1新	P12、下層			② 9.1	細小砂多、雲母	砂色、外面一部黒色	外) ナデ 内) ナデ、指田痕	

插图番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①口径 ②底径	胎土	色調	調整	備考
53-6	罎	古IIc	P16	8.6R			小細砂粒多、 雲母、角閃石	外) にお黄褐色、黒色 内) にお黄褐色、黄茶色	外) ハケ目のちヨコナデ、ハケ目 内) ハケ目のちヨコナデ、ナデ、ケズリ	
7	高杯	後期	2区P16			②10.0	砂粒ほとんど含まず、 雲母	茶褐色	外) ナデか、ヨコナデ 内) ケズリ	
8	甕	後5古	B2-4、 溝9下層	33.4R			小細砂多、粗砂粒、 角閃石、乳白色粒	外) 橙色 内) 橙色、黄褐色	外) ハケ目、ハケ目のちナデ、 ヨコナデ、突帯 内) ハケ目、ハケ目のちナデ	
9	甕	後1新	包含層、 1層				細小砂多、雲母、 角閃石、赤褐色粒	淡黄褐色	外) ヨコナデ、突帯 内) ハケ目、工具ヨコナデ	
10	杯蓋	7世紀	包含層、 下層			②16.0R	細小砂粒	外) 暗灰色 内) 明灰色	外) 回転ヨコナデ、ヘラケズリ 内) 回転ヨコナデ	灰かぶり
11	壺	後期	溝9包含層	34.2R			細小砂粒多、 雲母、角閃石、赤褐色粒	橙色、にお褐色	外) 7条沈線、キザミ、 ヨコナデ、縹杉文、2条 細ハケ目のち暗文かミガキ、 ナデ、工具班 内) 班	黒班

表 12 長通不整形土壙出土土器観察表

69-1	甕	古Ib	3区東側	16.0R			砂粒多、雲母、 角閃石、赤褐色粒、 石英	橙色、黄褐色	外) タタキのち細かいハケ目か 内) マメツ	
2	甕	古Ib	3区東側	16.0R			砂粒多、雲母、 角閃石、赤褐色粒	外) にお黄褐色、 黄茶 内) 黄茶色	外) 一部ハケ目、 タタキのち部分的ナデ 内) 粗ケズリ	煤付着
3	甕	古Ib	3区東側	17.5R			細小砂多、 雲母、赤褐色粒	橙茶色	外) ハケ目、 マメツ 内) ケズリ、 マメツ	
4	甕	古IIc	3区東側	15.1R			細小砂粒多、 雲母、角閃石、 赤褐色粒	外) 橙色、 黄茶、にお赤色 内) にお黄褐色、 黒色	外) ハケ目 内) ケズリ	
5	甕	古Ia	3区東側	14.8			砂粒多、 赤褐色粒、 角閃石	外) 赤褐色 内) 黄土色、 赤褐色、 灰褐色	外) ナデ 内) ケズリのちナデ、 ケズリ	
6	甕	古Ib	3区東側			②11.1	細小砂粒多、 雲母、赤褐色粒、 角閃石	外) 暗茶色、 赤褐色、 黒色 内) 暗茶色	外) マメツ、 相圧痕、 ナデ 内) ナデ	黒班 製塩土器

辻垣長通遺跡出土の土器に付着している赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本 田 光 子
宮内庁正倉院事務所 成 瀬 正 和

(1) はじめに

辻垣長通遺跡から出土した土器に付着・残存している赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡による観察およびX線分析を行った。種類と状態を明らかにするために顕微鏡観察とX線分析を行った。試料の一覧と赤色物の分析結果、それにより推定される赤色顔料の種類を表に示した。

出土例に関する今までの知見に寄れば、赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄 Fe_2O_3 を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀 HgS を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだない。

今回の土器資料は、その外観的特徴から近年出土例が増加しているいわゆる「内面朱(HgS)付着土器」として捉えることができるものと思われるので、朱の特徴に注意して調査を行った。

(2) 試料

土器の主として内面に赤色物が薄く残っているのだが、一部を除いて全体に残存状態は良くないため、付着状況を推定するには少々無理がある。比較的残りの良い部分から赤色物をメスで削りとった。広片口三耳鉢では現在口縁部内外面に厚く残る。鉢類では、赤色物が密着し、光沢があり、外面には煤が付着している。甕には赤色物が比較的良く残っており、特にNo18の甕は内面が黒色化しその面に赤色物が付着しているので土器破片をそのまま借用させて頂き測定した。検鏡用には針先に着く程度を採取し、プレパラートを作成した。

(3) 顕微鏡観察

光学顕微鏡により反射光・透過光40~400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。

No.1・2・4・6・7・10・18・19にはっきりと朱の特徴を持つ粒子を認めた。やや角張った形状、落射光観察に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等である。その他に顕著なベンガラの特徴を持つ赤色顔料粒子は認められなかった。ただし、きわめて微粒のものについてはどの赤色顔料であるか判断できなかった。他の試料では朱か?と思われる粒子もあったが、大半は土器の胎土が赤く染まったような状態で赤色顔料の種類を

識別することができなかった。

朱の粒度は、広片口三耳鉢、片口鉢に付着していたものがほぼ0.5~50 μ mの範囲であるが、No.1には最大250 μ mの朱粒子が認められた。今回は試料自体が本来(使用時)の状態を推察できるような状態ではないので、これらの粒子径の差を積極的に評価することはできないが、ある程度は器種による用途を考える上で参考になるかもしれない。弥生時代後期以降の墳墓で出土する朱の粒度は最大でも40~50 μ m、弥生前期には墳墓及び漆器の赤色顔料として70 μ m前後の粒子も認められているが、今回のNo.1の粒子はそれらに比べて異常に「大きい」ものである。

(4) 蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置を用

表 13 赤色物の分析結果と推定される赤色顔料の種類

No.	試料	蛍光X線分析			X線回折		顕微鏡 観 察	赤色顔料 の種類	挿 図
		鉄	水銀	鉛	赤鉄鉱	辰砂			
1	広片口三耳鉢	+	+	-	-	+	朱	朱	38-1
2	広片口三耳鉢	+	+	-	-	+	朱	朱	40-9
3	広片口三耳鉢	…	……	……	……	……	朱?	朱?	39-3
4	広片口三耳鉢	+	+	-	-	?	朱	朱	40-10
5	甕	+	?	-	……	……	朱?	朱?	42-14
6	広片口三耳鉢	+	+	-	-	?	朱	朱	40-11
7	片 口 鉢	+	+	-	-	+	朱	朱	41-5
8	鉢	…	……	……	……	……	朱?	朱?	41-6
9	鉢	+	+	-	……	……	朱?	朱	41-1
10	鉢	+	+	-	-	+	朱	朱	41-2
11	鉢	…	……	……	……	……	朱?	朱?	41-7
12	片 口 鉢	…	……	……	……	……	朱?	朱?	41-4
13	鉢(底 部)	+	?	-	……	……	朱?	朱?	41-10
14	鉢(底 部)	…	……	……	……	……	朱?	朱?	41-8
15	鉢(底 部)	…	……	……	……	……	朱?	朱?	41-9
16	鉢(底 部)	+	-	-	……	……	朱?	朱?	41-11
17	鉢	+	-	-	……	……	朱?	朱?	41-3
18外	甕(外 面)	+	+	-	-	+	朱	朱	42-15
18内	甕(内 面)	+	+	-	-	+	朱	朱	42-15
19	甕	+	+	-	-	+	朱	朱	

+: 検出、-: 未検出、……: は採取試料が微量のため未測定

い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲(2θ)；10～65°、走査速度；208°/分、時定数；0.5秒の条件で測定を行った。

赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄、鉛丹であれば鉛であるので、3種の元素の有無のみ表中に記した。No 1・2・4・6・7・9・18・19には赤色顔料の主成分元素としては鉄と水銀が検出された。この他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されるが、それらはみな主として混入の土砂、土器胎土部分に由来するものなので、省略した。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。これらの試料は、水銀に比べて鉄のX線強度はきわめて小さいので、赤色の由来となる主成分元素は水銀と推定される。なお、鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

(5) X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として実施した。理学電機(株)製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25kV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク(通路幅)；4mm、ゴニオメーター走査範囲(2θ)；30～66°、走査速度；2θ4°/分、時定数；2秒の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分鉱物としては、朱であれば辰砂(Cinnabar赤色硫化水銀)、ベンガラであれば赤鉄鉱(Hematite酸化第二鉄)である。蛍光X線分析で鉛は検出されなかったため鉛化合物は除き、表には2種の鉱物の有無のみについて記した。No 1・2・10・18・19には辰砂(赤)が同定され、赤鉄鉱のピークは認められなかった。この他、石英、長石などが確認されたが、それは主として土器胎土混入土砂に由来するものなので、やはり省略している。

(6) まとめ

検鏡結果で朱、蛍光X線分析で水銀、X線回折で辰砂が確認された試料は朱である。X線回折の測定を行っていない試料については、各々の検鏡結果および蛍光X線分析の結果から類推した。以上の結果から本土器資料の赤色物は10点が赤色顔料、朱(赤色硫化第二水銀)である。朱？の試料については、採取量が微量のため確定はできないが、朱である可能性は極めて強く、他の赤色顔料はベンガラも鉛丹も含まれていないと推定できる。

以上の結果から、広片口三耳鉢・片口鉢・鉢・甕に付着している赤色顔料は朱(赤色硫化水銀)であり、これらの土器は「内面朱付着土器」である。

本例と同じような「内面朱付着土器」は、弥生時代後期中頃から古墳時代初頭に、北九州、

瀬戸内、畿内地方で認められる。器形は、甕・鉢が多く、壺・高杯にも見られる。広片口三耳鉢は本例の他は徳島県名東遺跡出土のものが知られるが、佐賀県川寄吉原遺跡出土の鍋型土器と呼ばれているものに通じるものと思われる。これらに共通する特徴は以下の通りである。

- ① 土器の主として内面に朱(赤色硫化第2水銀)が残る
- ② 朱が粉状あるいは塗膜状で付着しているのではない
- ③ 朱が磨り込まれたように密着し光沢があるものが多い
- ④ 朱が土器のヒビ等胎土深くに染み込んでいる
- ⑤ 土器の外面には著しく煤が付着するものが多い
- ⑥ 甕、鉢には片口が付くことが多い
- ⑦ 朱専用の定型の石杵(L字状石杵、棒状石杵c類)と供伴することが多い

朱の残存状態や外面の煤及び注ぎ口を持つこと等から、これらが単に塗料としての朱の製造・精製・貯蔵に関する土器ではなく、例えば朱等を主成分とする何等かの目的を持った「液体」の加熱製造などに関わるものではないかと考える。朱を塗料として用いるならば、漆や膠に混和することが最適であり、熱は不必要である。しかも朱は高温(580°C)になると昇華する。

須玖永田遺跡出土例については青銅器生産に伴う祭祀に関わる遺物と推定されている。朱を主成分とする「液体」の加熱製造が祭祀行為であるかどうかは別の問題としても、少なくともそれ以前は主として墳墓だけから出土していた朱が、弥生時代後期中頃以降は青銅器生産に関わる住居跡等からも出土するようになってきている。この頃から、北部北州地方ではそれまでは主として大量に墳墓から出土していた朱が急激に減少しベンガラに移行する。遺骸その他には「朱」を多量に塗ったり施したりした痕跡が認められないのである。しかも土器や木器の「彩色」に朱を用いる例は非常に特殊なものである。さらに古墳時代初頭には博多遺跡群50、59、65次調査では住居跡から棒状石杵c類、内面朱付着土器が、鉄器生産、玉製作に関わる遺物と共伴している。

辻垣長通遺跡では鉢も他に比べて大型であり、しかも複数出土している。甕は片口は持たず、大型である。「内面朱付着土器」は他遺跡では、破片が多く、たとえ完形だとしても1、2例である。また他遺跡のように朱専用の石杵を伴わないこと、何よりも広片口三耳鉢の複数の存在が本遺跡のある面での性格を物語るものであろう。今回は器形の異なる内面朱付着土器が多数共存すること、そして粒子径250 μ mという極めて粗粒の朱粒子が残存していることがわかった。これはこの時期この地域での、朱の原料の「状態」を考える上で非常に大きな成果である。

古代の赤色顔料には周知のように朱とベンガラと鉛丹がある。このうち朱と鉛丹は古代中国では代表的な「仙薬」であり、その「原料」であった。そのような「朱」が、3世紀から4世紀の日本でどのように扱われていたかを、具体的に考えるための重要な資料であることは間違いない。類例の出土に期待すると共に、今までに出土した「内面朱付着土器」あるいは石杵についても細かい観察と分析が望まれる。

版 圖



図版 1

1



1 椎田道路開通後の辻垣遺跡群周辺(南上空から)
2 辻垣畠田・ヲサマル遺跡(北上空から)

2



1



2

1 畠田全景空中写真 2 畠田・長通全景(南から)



1・2 畠田中区大溝 3 層
土器群

3 畠田中区大溝 3 層
三叉鉞



- 1 島田北区大溝 4層
土器
- 2 島田大溝最下層
- 3 島田中区大溝最下層





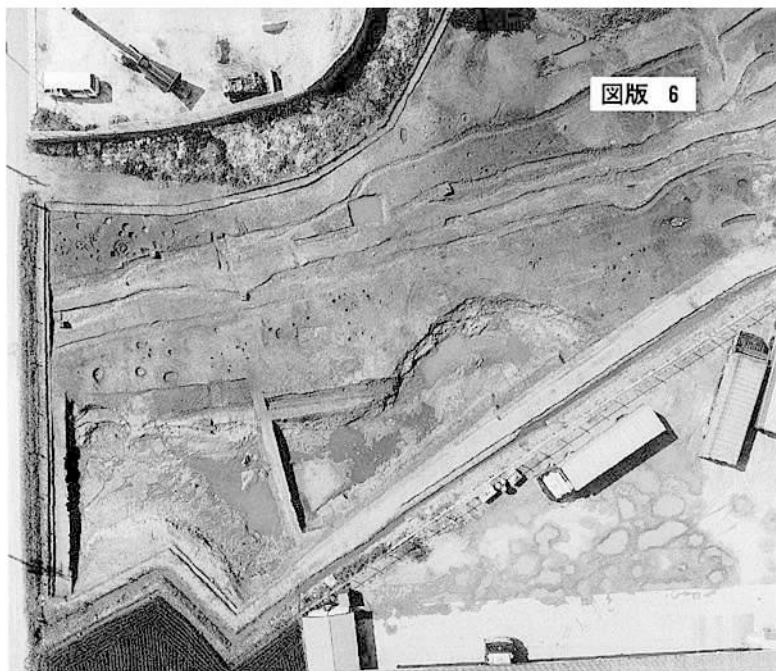
1

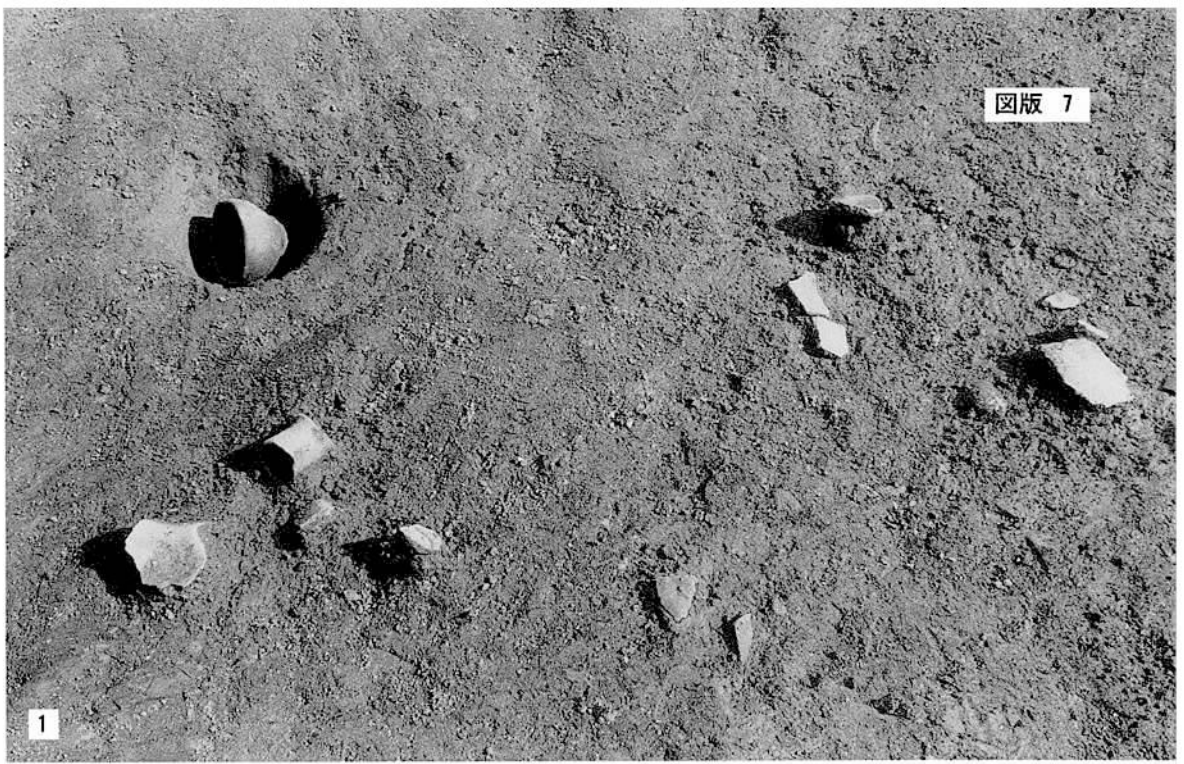


2

1 長通地区全景(南上空から)
2 長通大溝全景(南上空から)

- 1 長通大溝全景
- 2 長通3区大溝3下層
- 3 長通3区大溝3下層
土器群



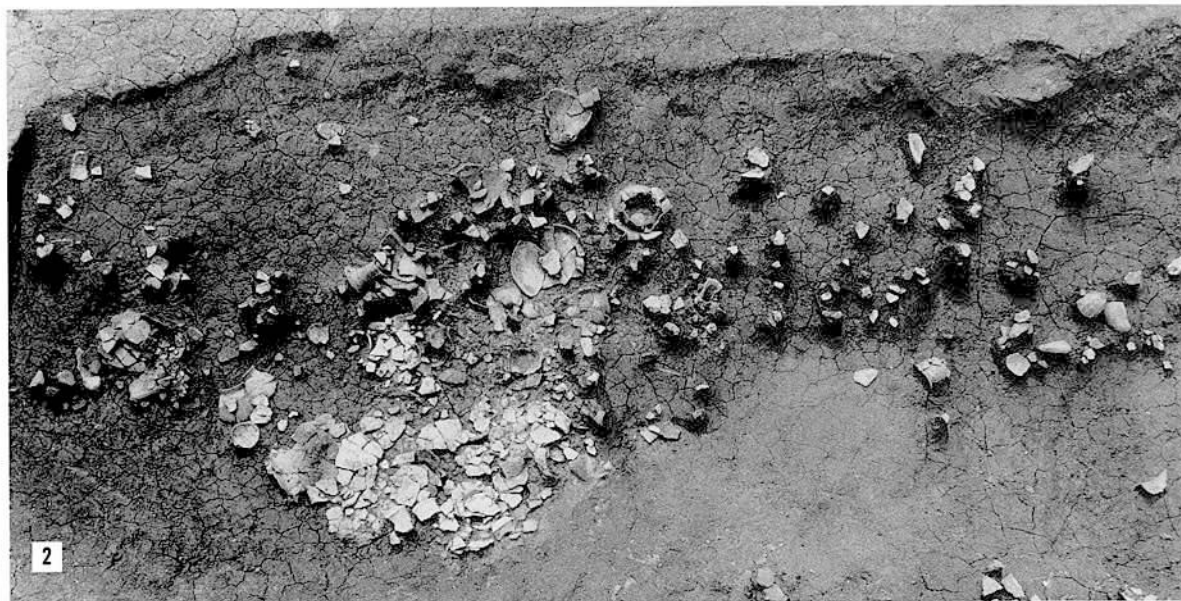


1 長通3区大溝3下層土器

2 長通3区大溝3下層勾玉

3 長通3区大溝4層ガラス玉と土器群





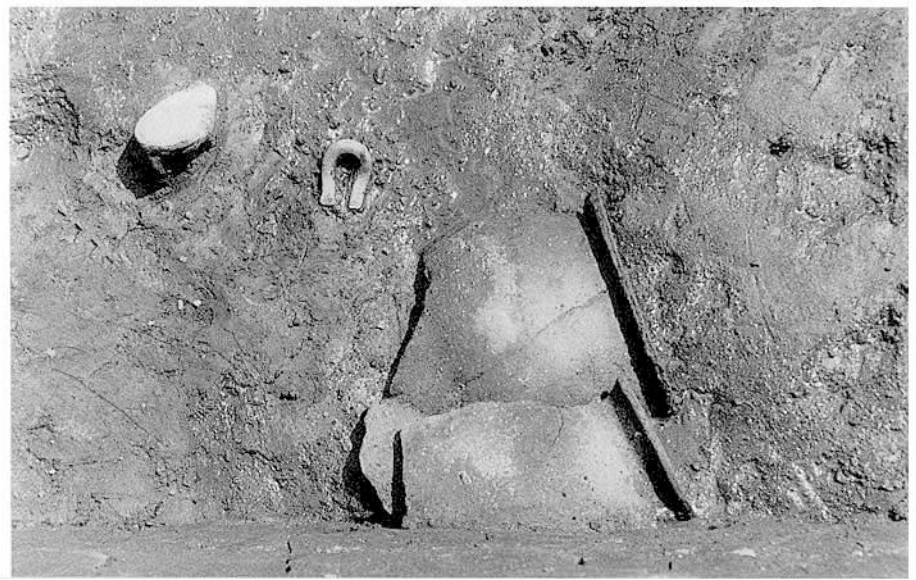
- 1 長通4区大溝2層大壺
- 2 長通4区大溝3下層土器群
- 3 長通4区大溝3下層土器群近景



1



2



3

- 1 長通4区大溝3層土器
- 2 長通4区大溝3層土器(内面朱付着)
- 3 長通4区大溝3下層土器



1

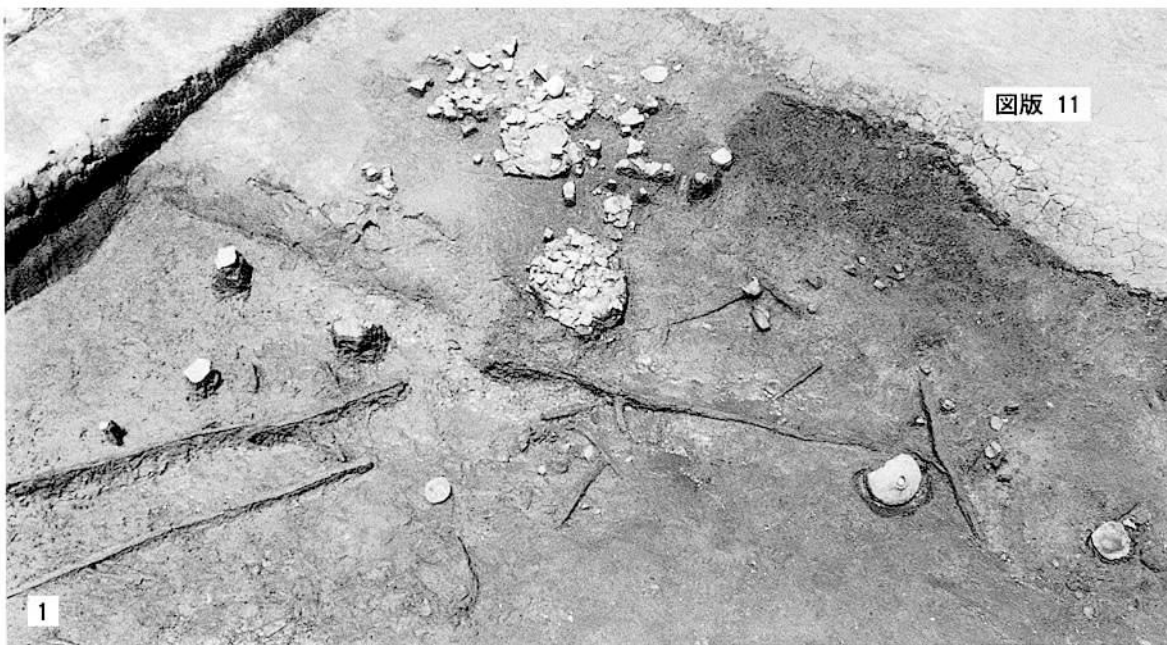


2



3

- 1 長通4区大溝断面(南から)
- 2 長通4区大溝3層土器
- 3 長通4区大溝4層土器・石庖丁



1



2



3

- 1 長通5区大溝3・4層土器・木器・流木
- 2 長通5区大溝4層三又鍬
- 3 長通5区大溝3層土器



1



2



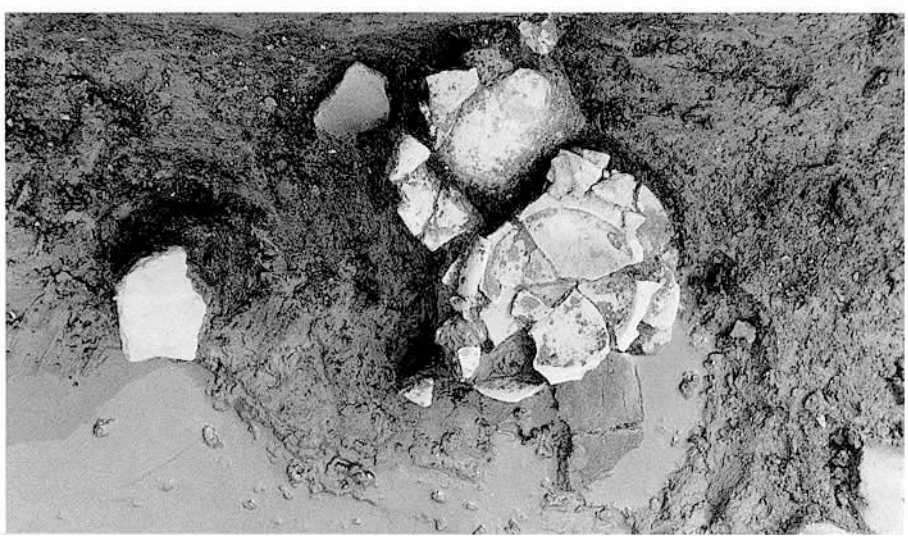
- 1 長通5区大溝3下層断面と土器
- 2 長通5区大溝3下層土器・木器
- 3 長通5区大溝3下層槽



1



2



3

1
2
3
長通5区大溝東南4層土器



1

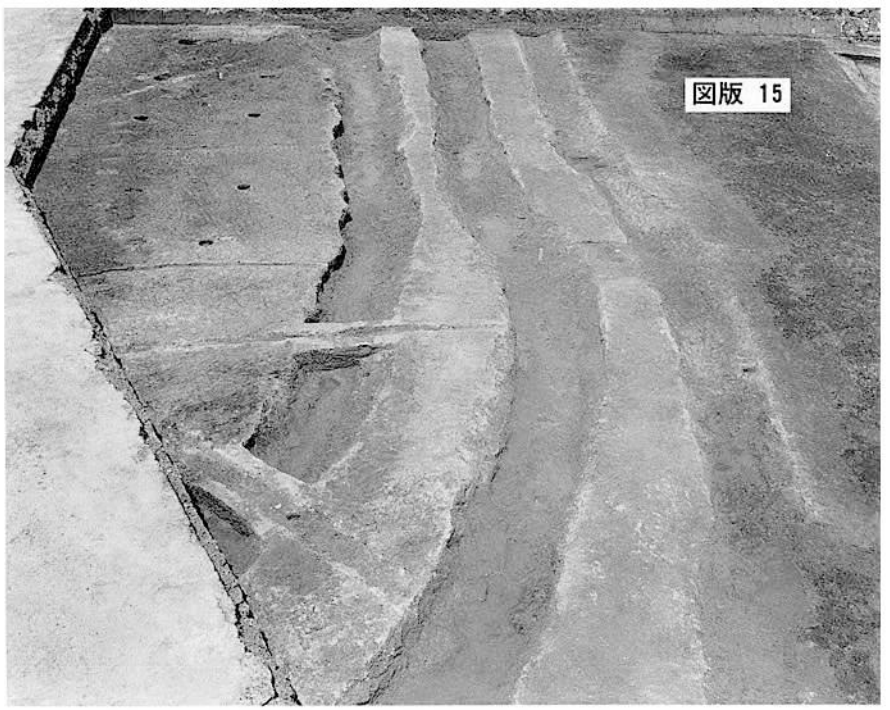


2

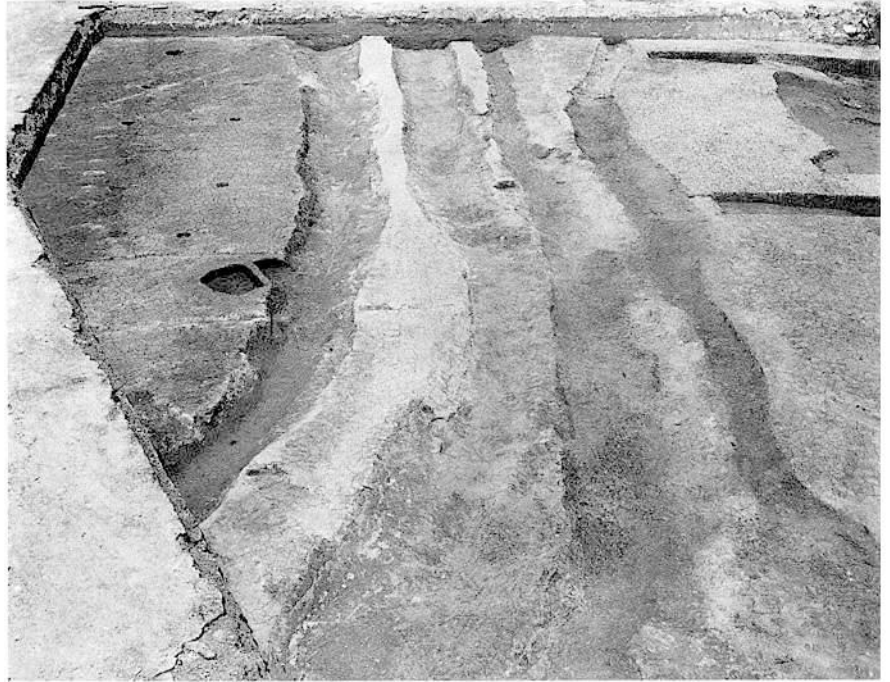
1・2 長通5区大溝土層断面(北から)
3 長通5区大溝と環濠の土層断面



3



1



2



3

- 1 畠田地区溝1〜3 (南から)
- 2 畠田地区溝1〜4 (南から)
- 3 畠田地区溝1〜3 土層断面

1 長通地区全景(南上空から)

2 畠田地区溝1~5全景(南上から)

3 畠田環濠(溝5)全景

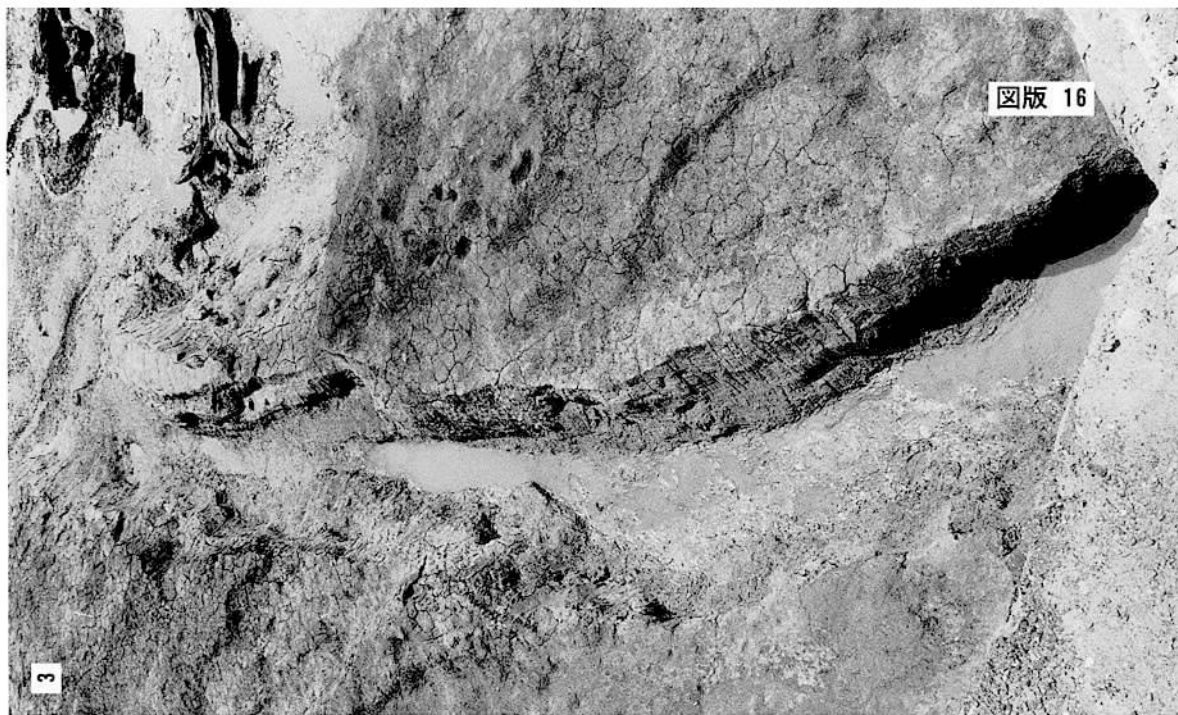
1



2

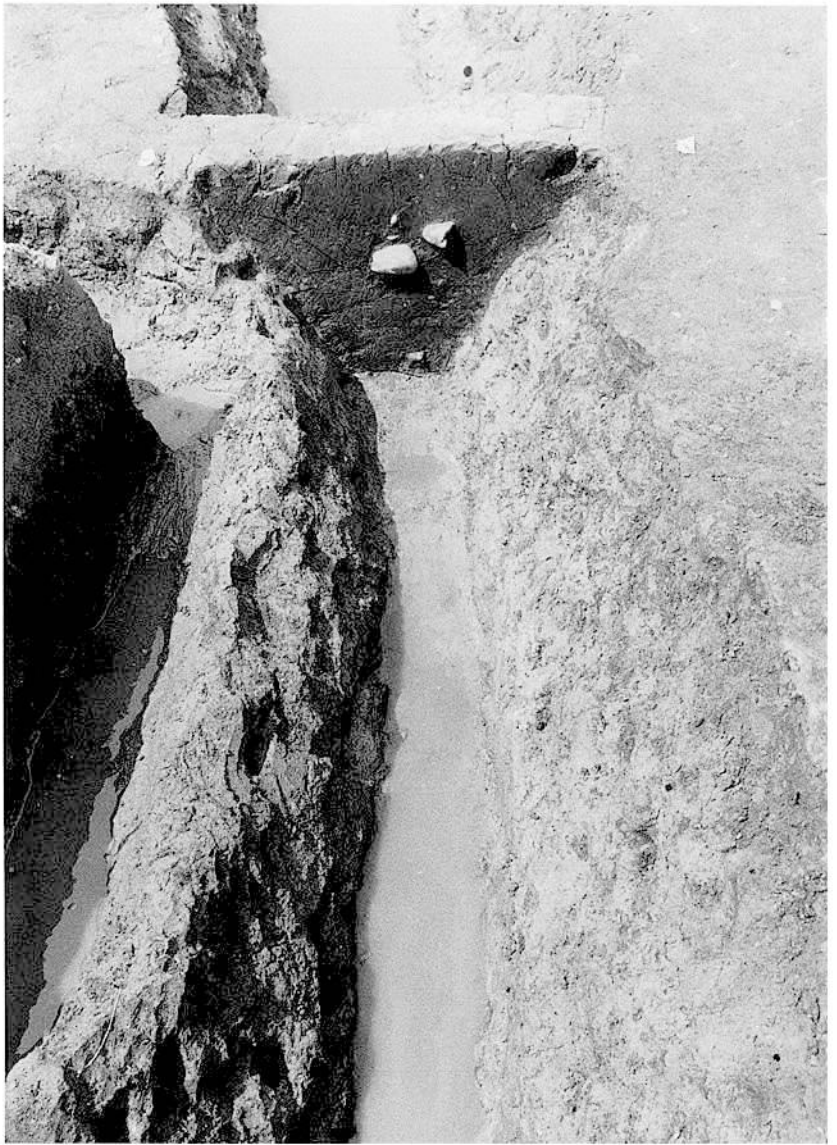


3



- 1 長通環濠(溝10)上層と長方形土壇(南から)
- 2 長通環濠(溝10)と長方形土壇
- 3 長通溝9(東から)





1 長通環濠(溝10)下層土器
2 長通環濠(溝10)と土層断面



1 長通環濠(溝10)と長方形土壇(南から)
2 長通環濠(溝10)と長方形土壇(上空から)

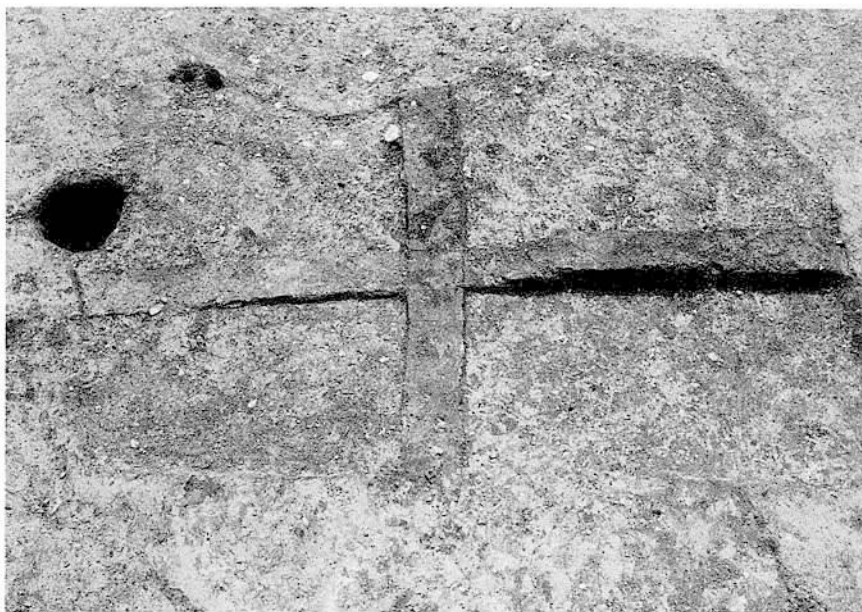
1



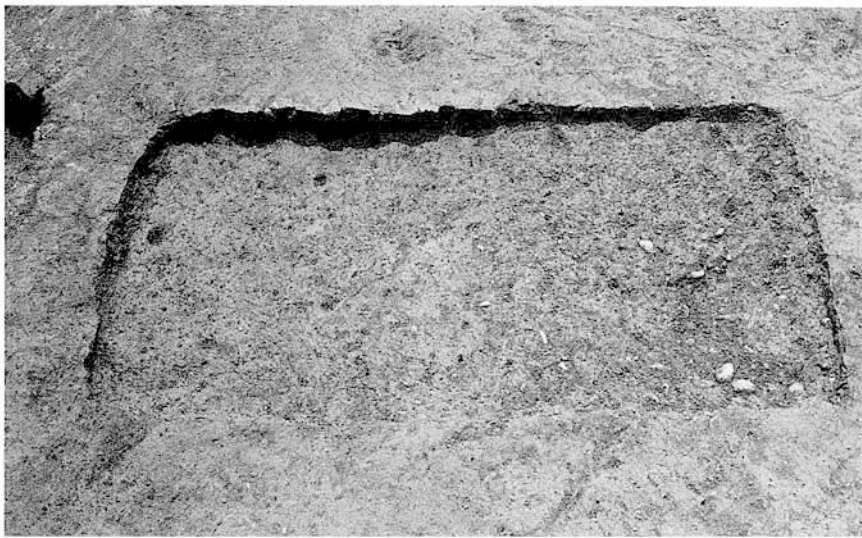
2



1

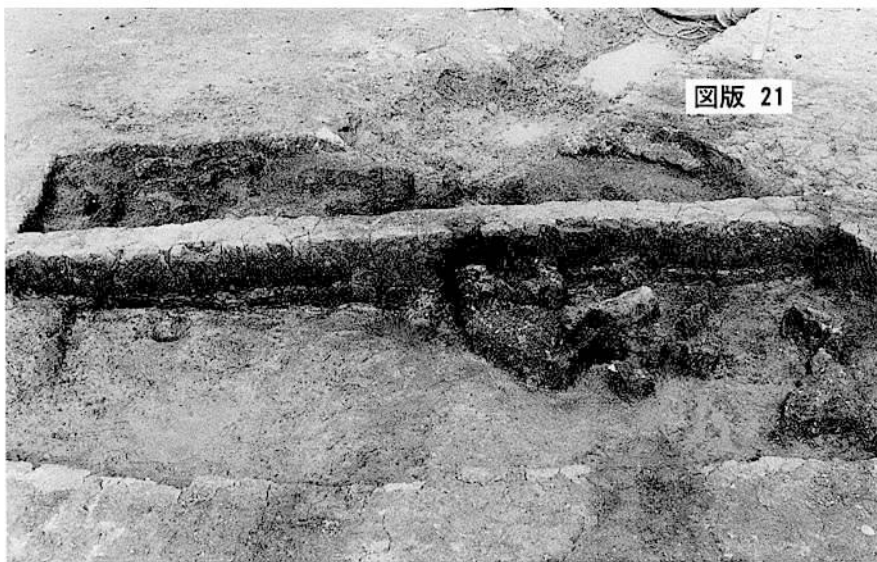


2



3

- 1 長通1号長方形土壙
- 2 長通2号長方形土壙
- 3 長通3号長方形土壙



1

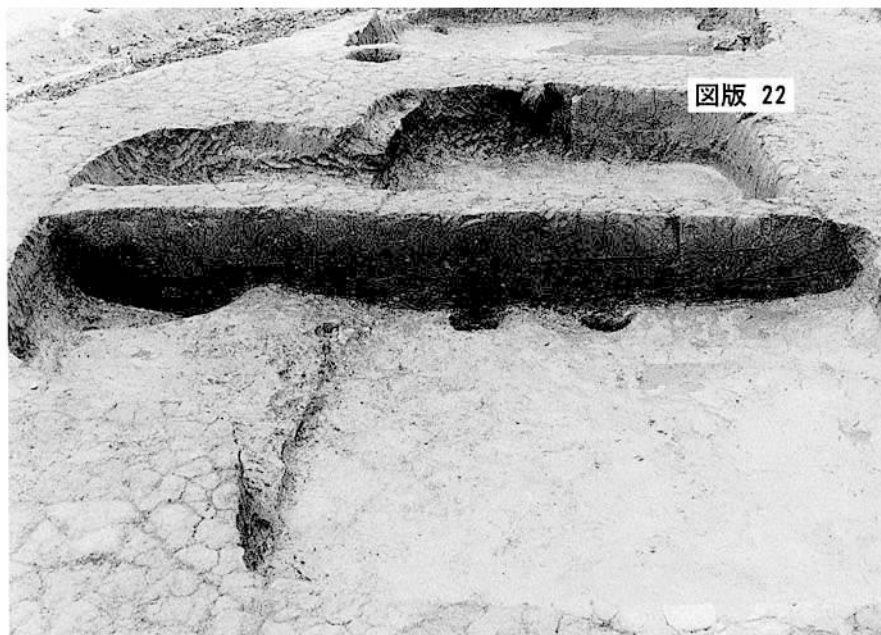


2



3

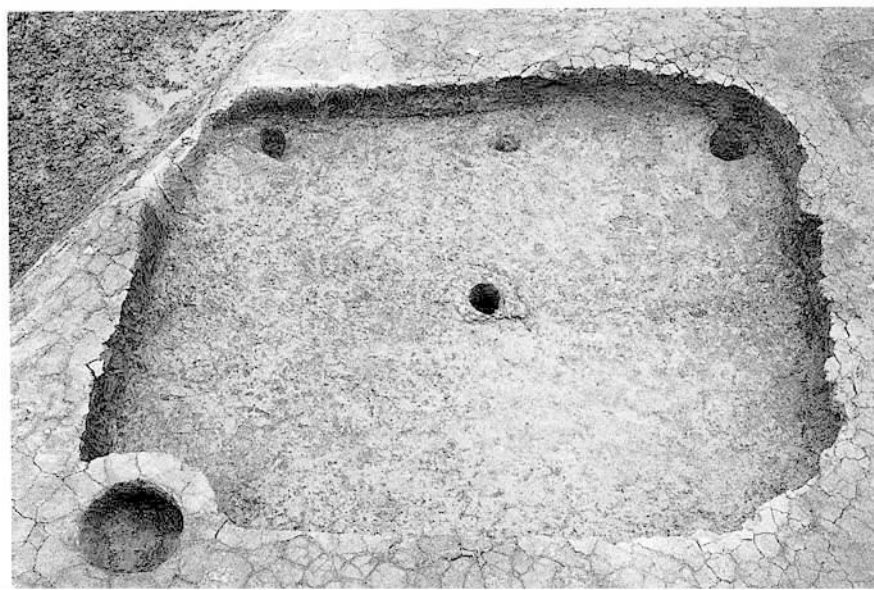
- 1 長通4号長方形土壟土層断面
- 2 長通4号長方形土壟炭化材
- 3 長通4号長方形土壟



1

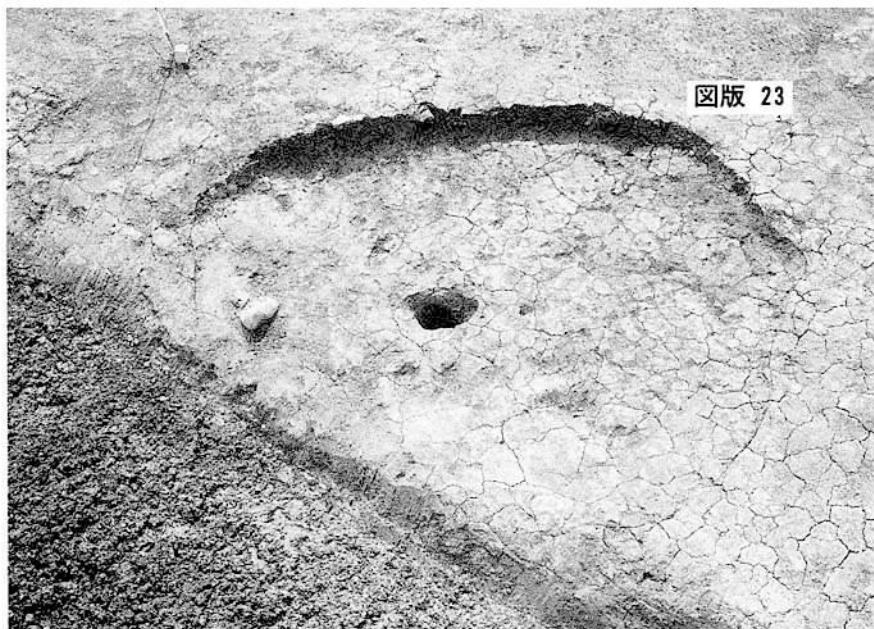


2

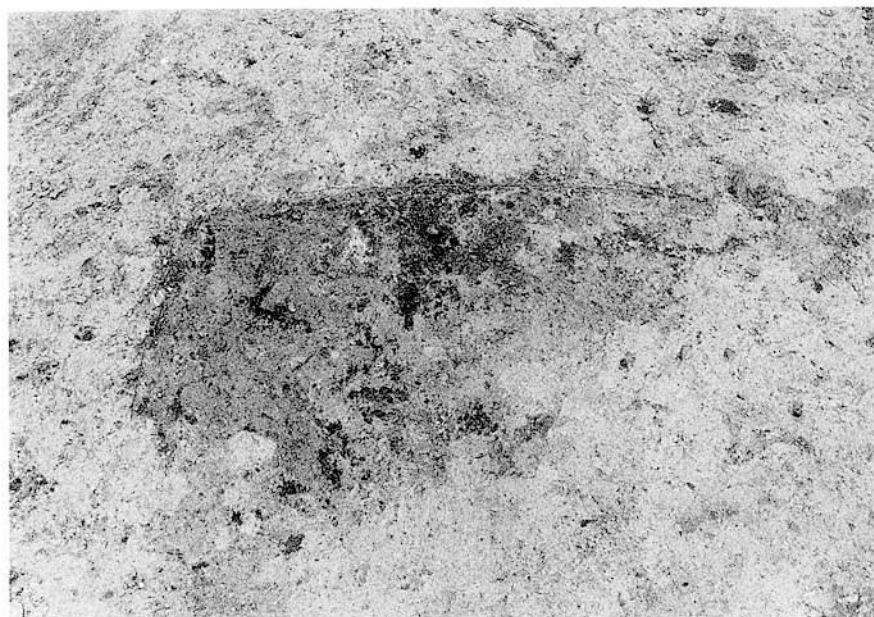


3

- 1 長通5号長方形土壇土層断面
2 長通5号長方形土壇
3 長通6号長方形土壇



1

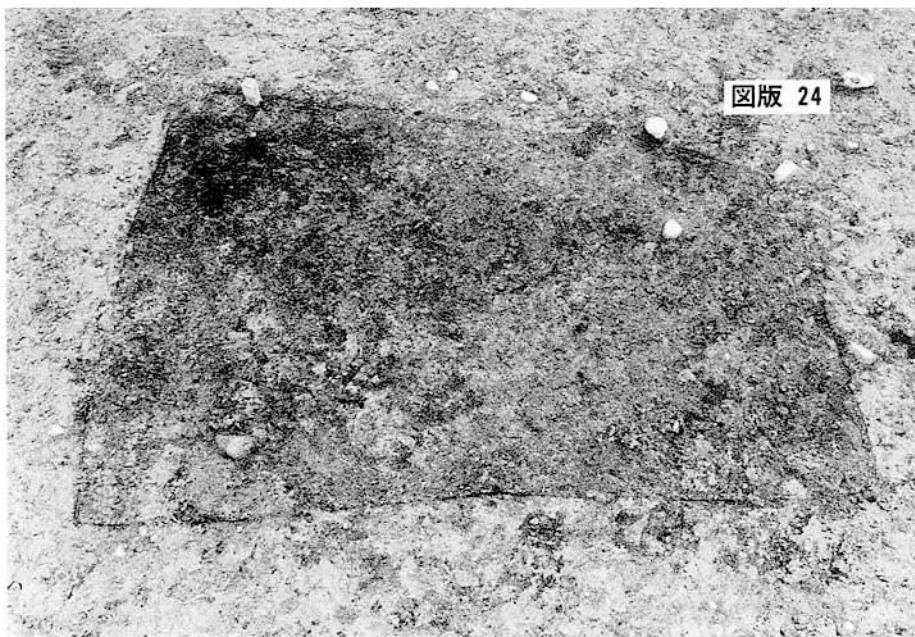


2



3

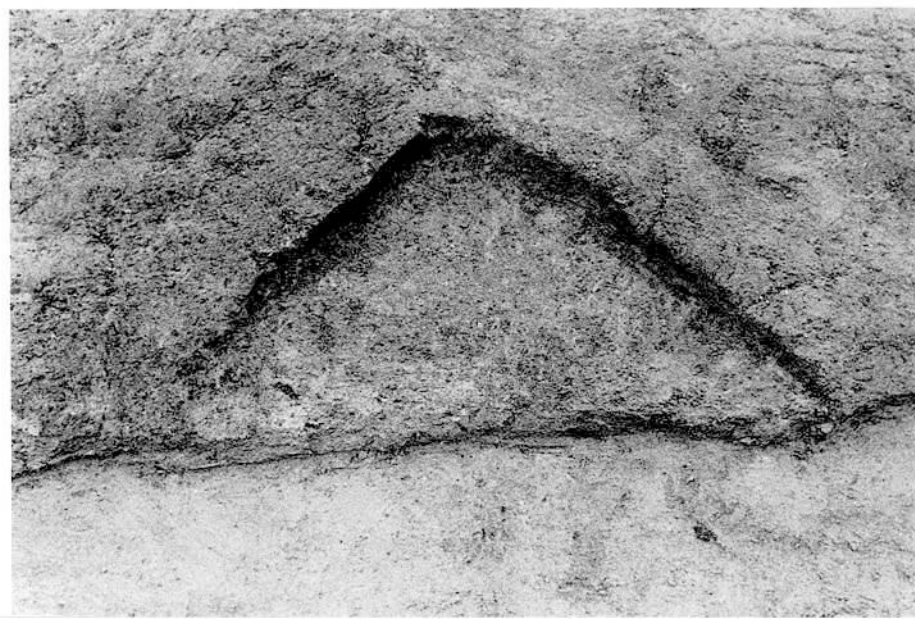
- 1 長通7号長方形土壇
- 2 長通8号長方形土壇
- 3 長通9号長方形土壇



1



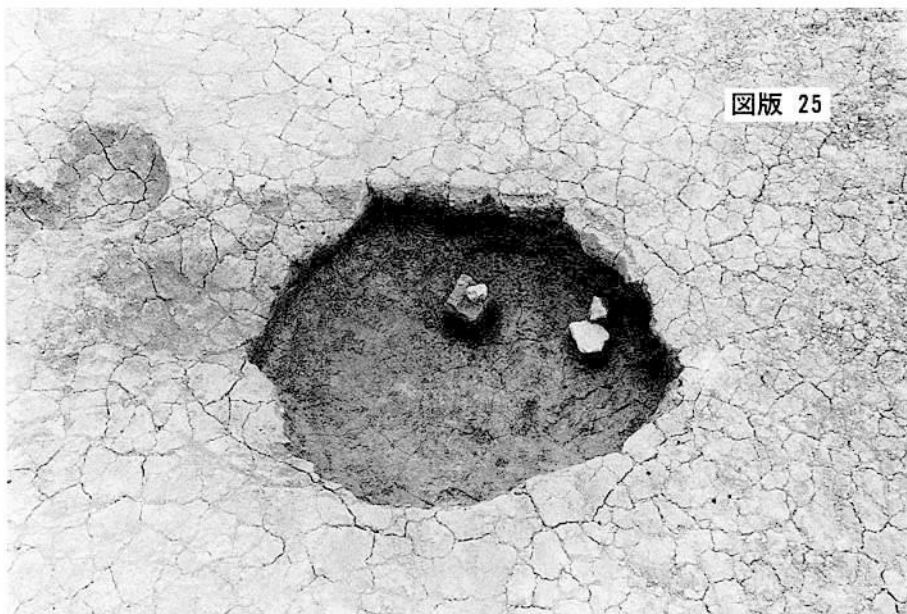
2



3

- 1 長通10号長方形土壇
- 2 長通11号長方形土壇
- 3 長通12号長方形土壇

1



2

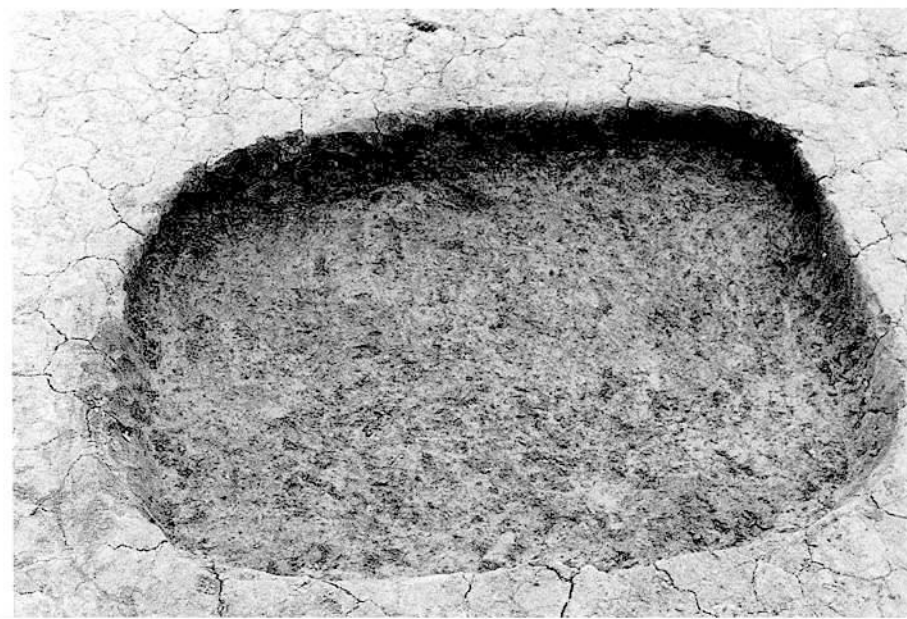


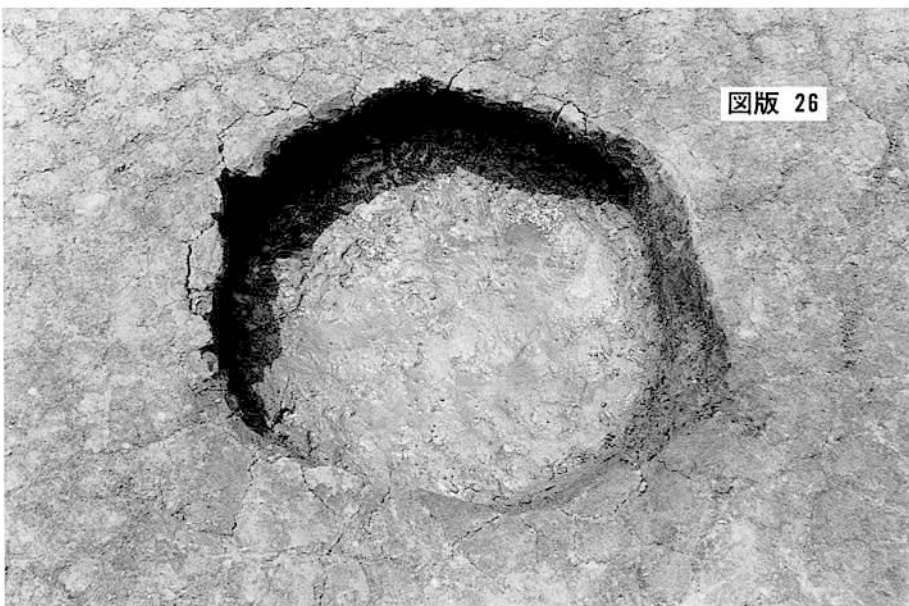
1
長通1号貯蔵穴

2
長通2号貯蔵穴

3
長通3号貯蔵穴

3





1



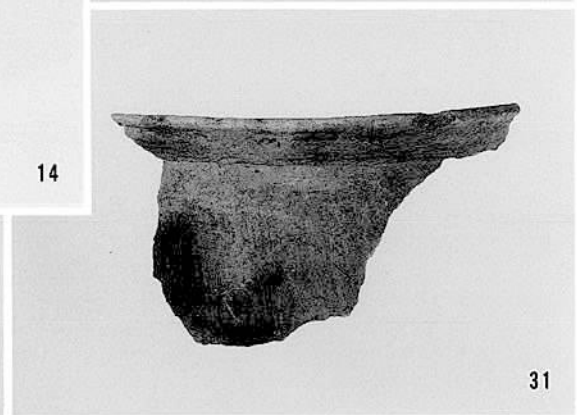
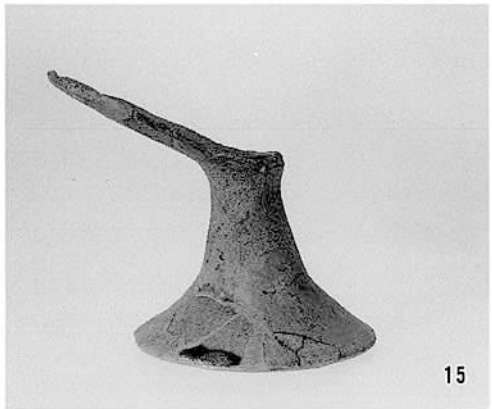
2

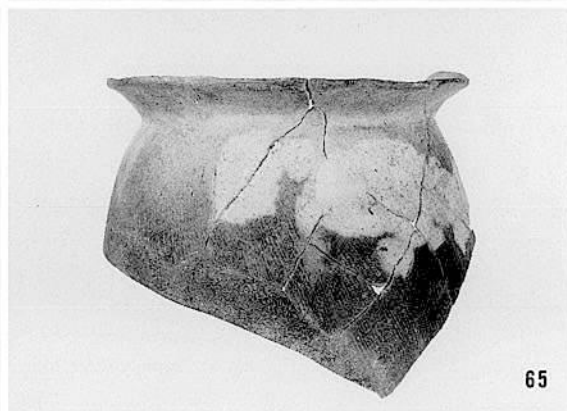
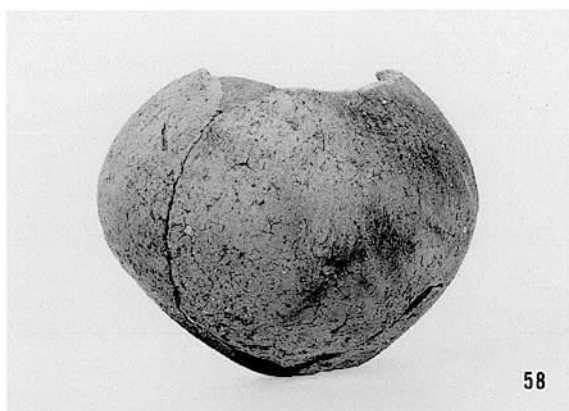


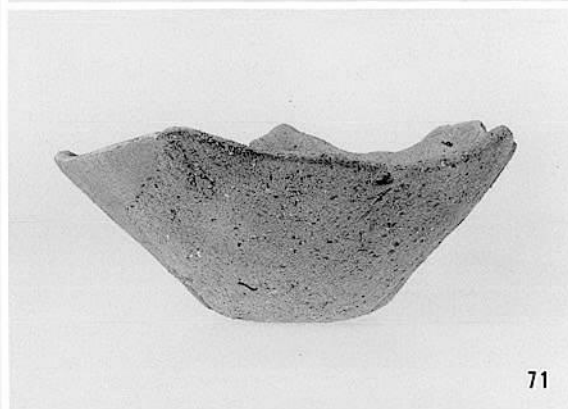
3

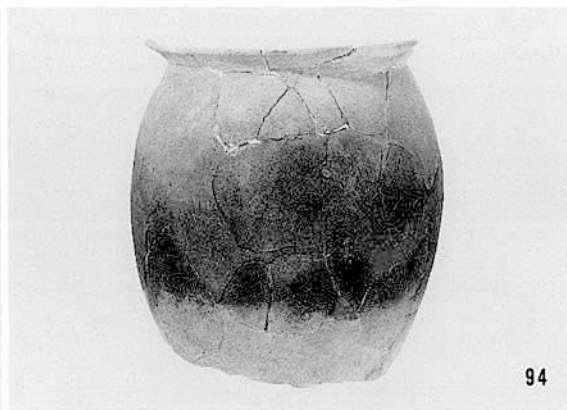
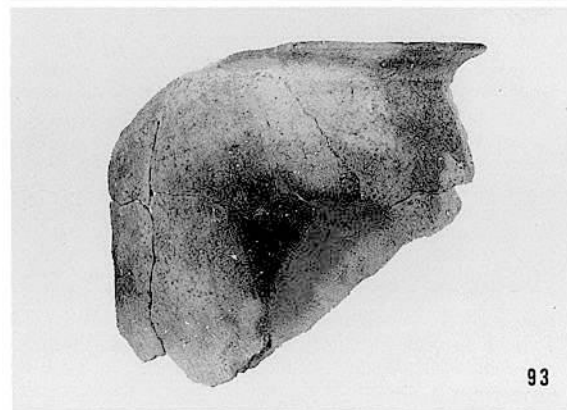
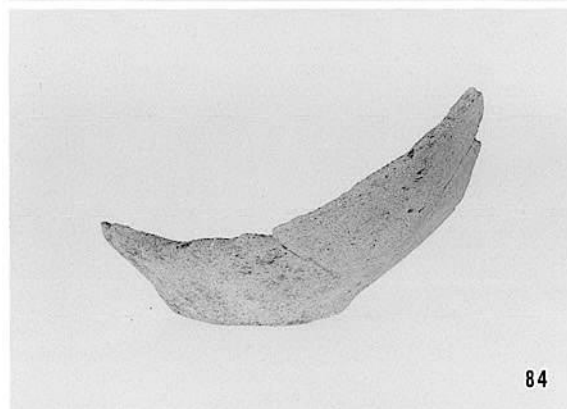
- 1 長通 4 号貯蔵穴
2 畠田 1 号貯蔵穴
3 長通 0 区柱穴群



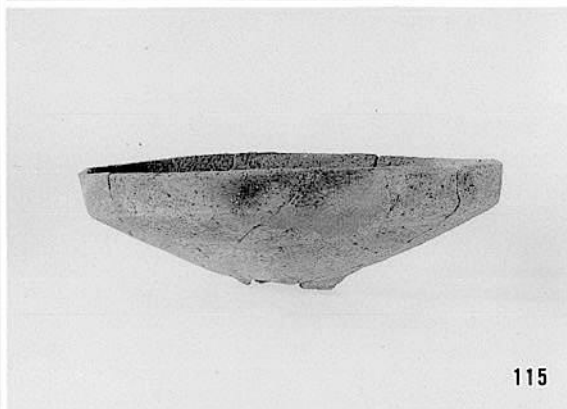




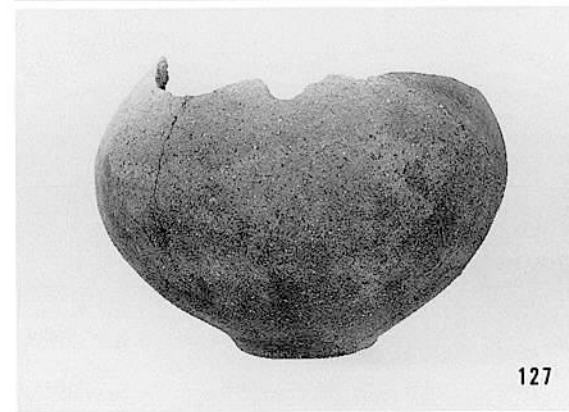


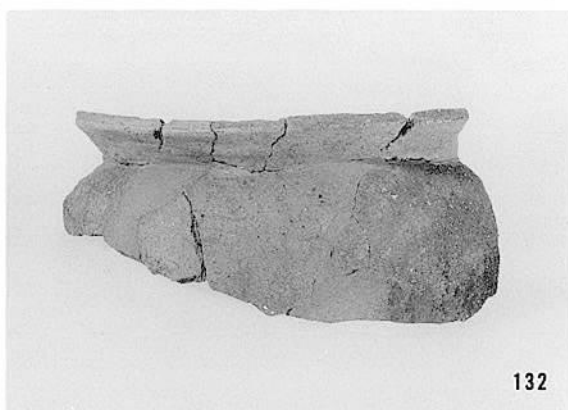


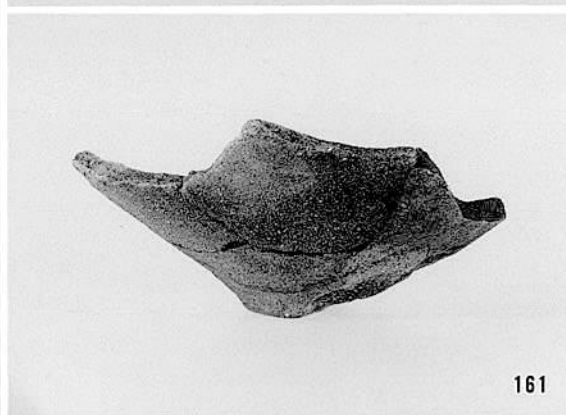
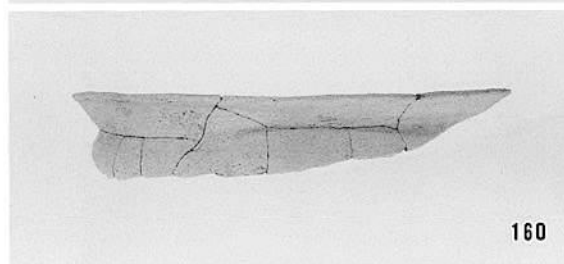
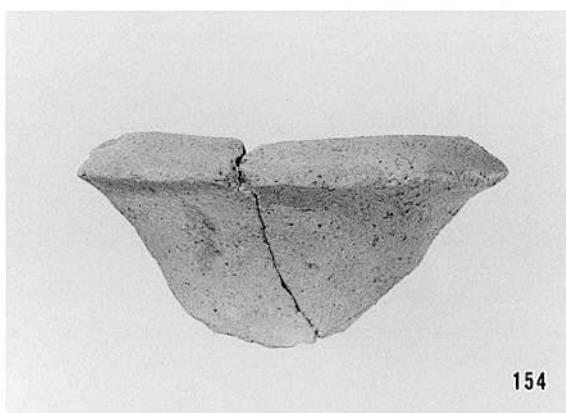




長通4区大溝出土土器



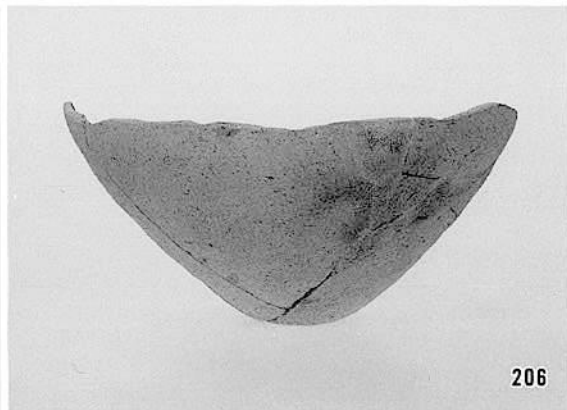
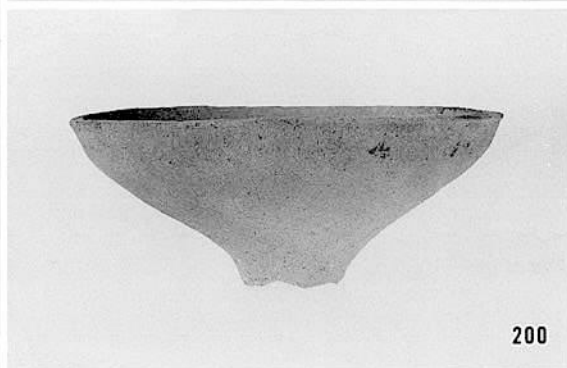
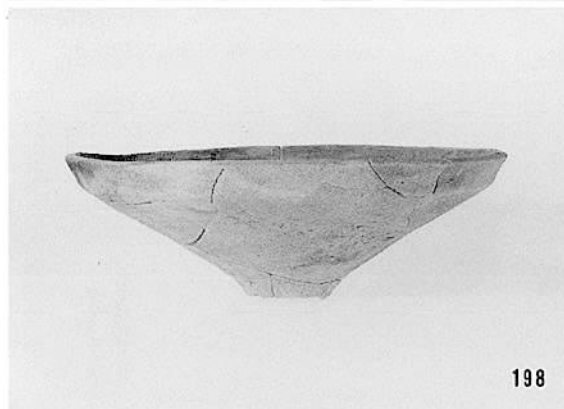


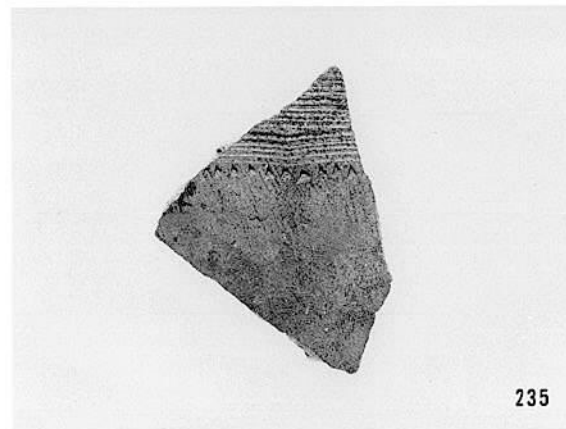


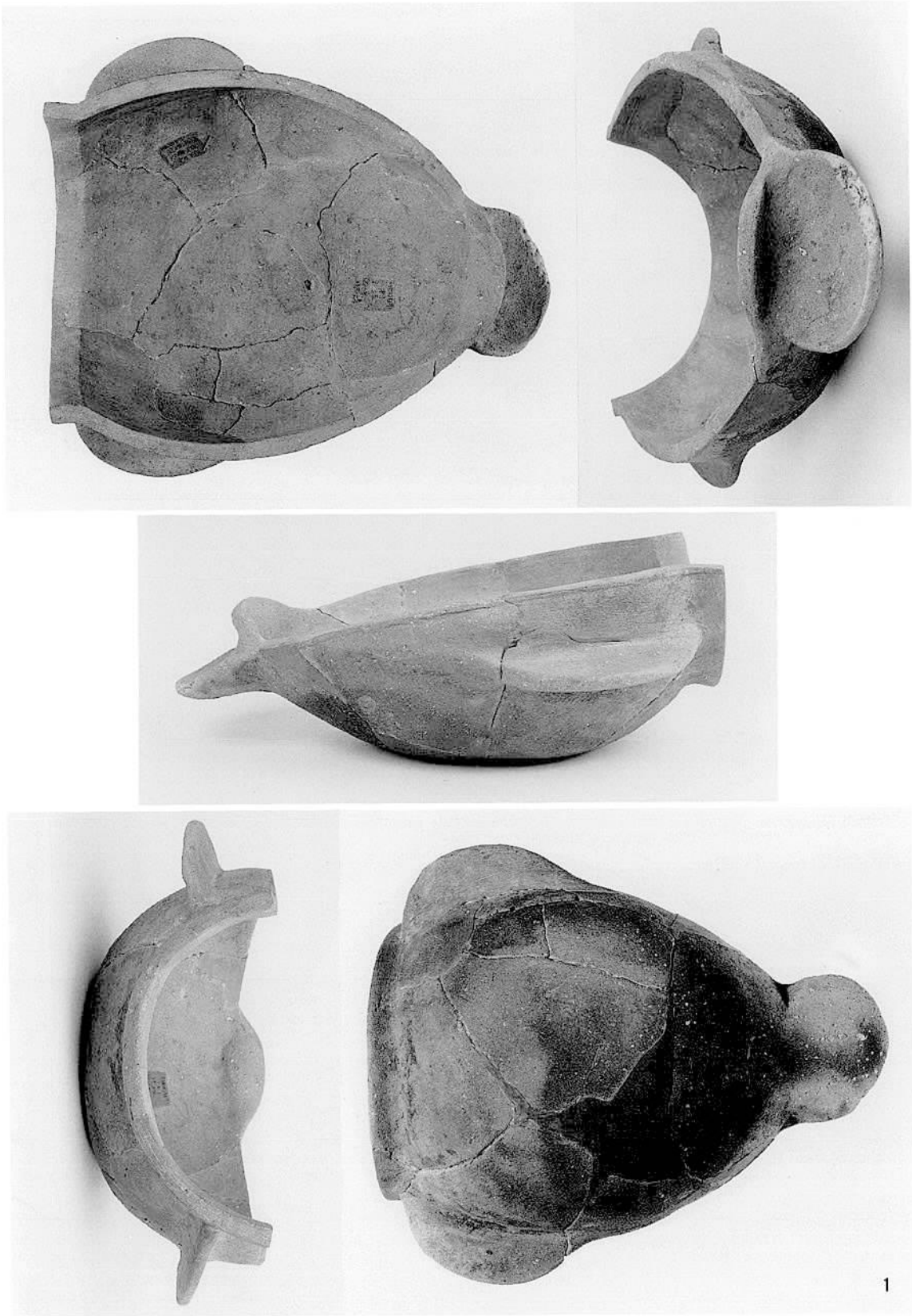




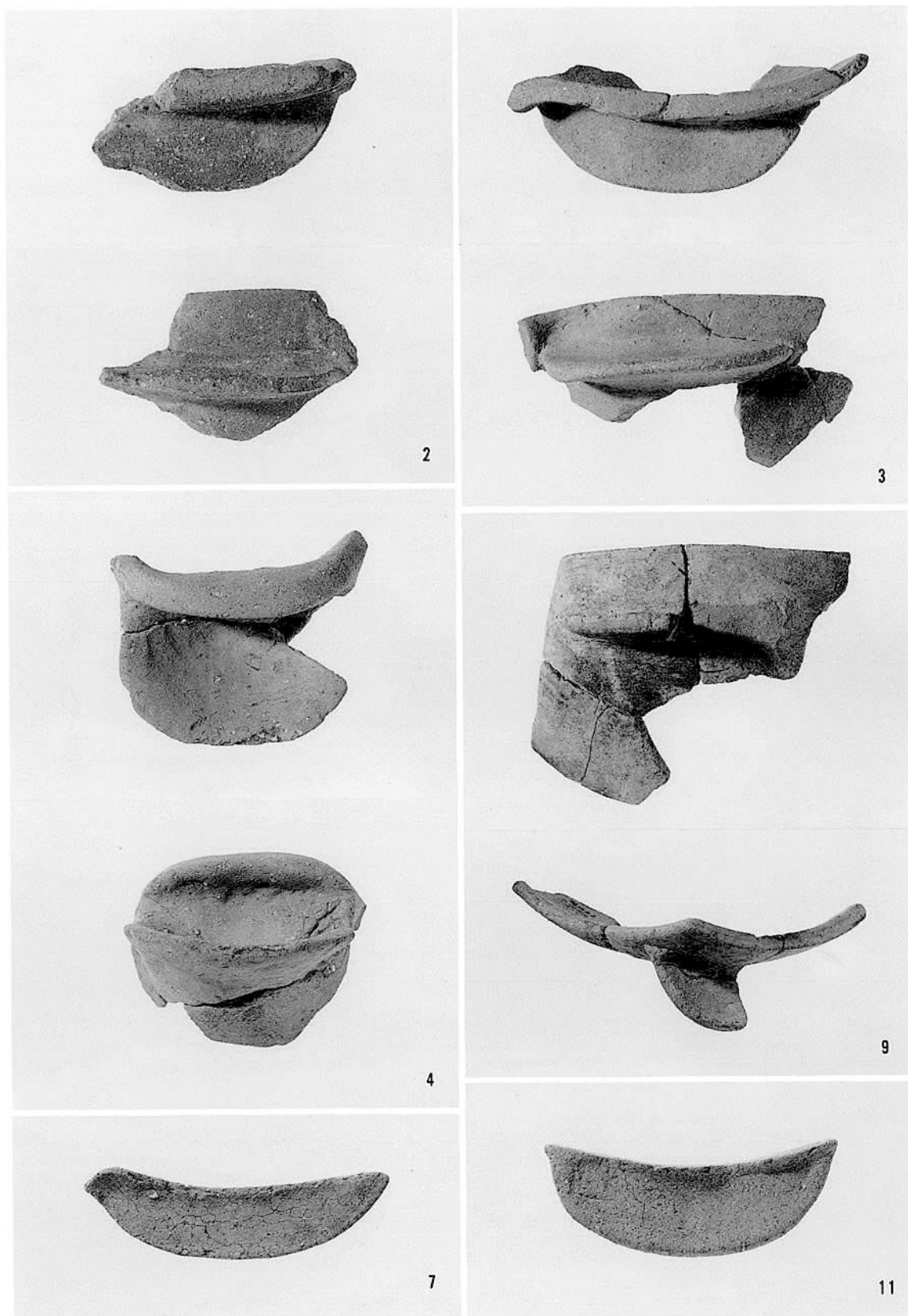
長通5区大溝出土土器



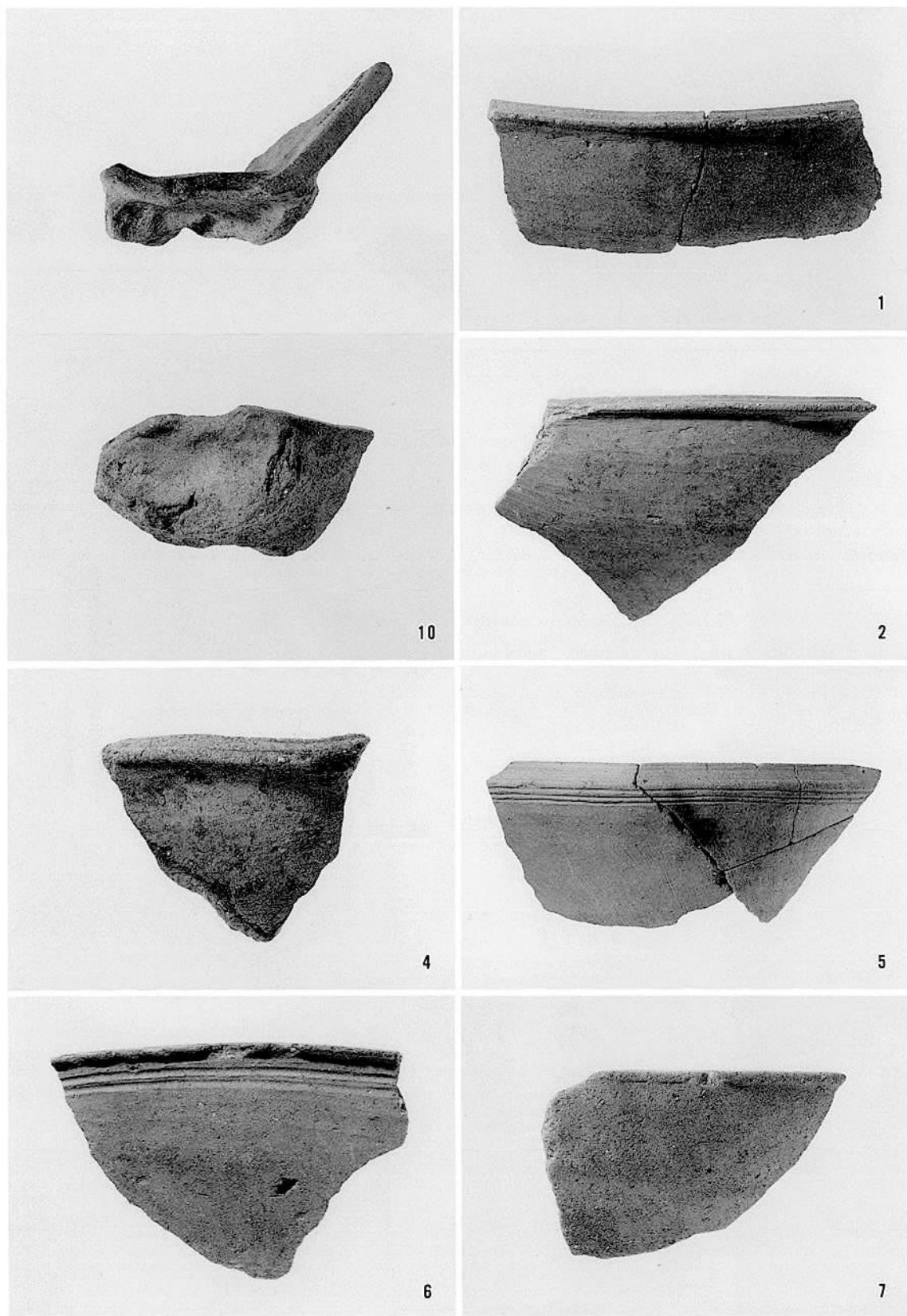




長通 5 区大溝出土片口三耳鉢 1



長通地区出土広片口三耳鉢



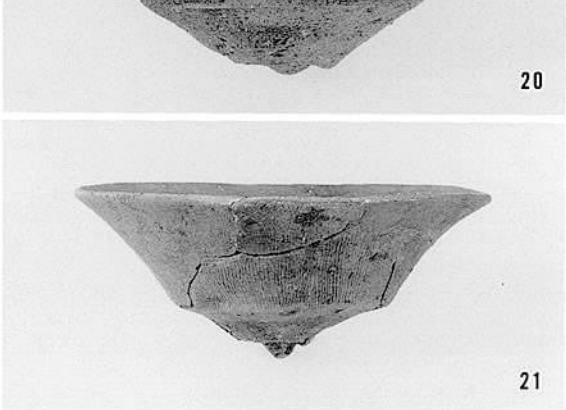
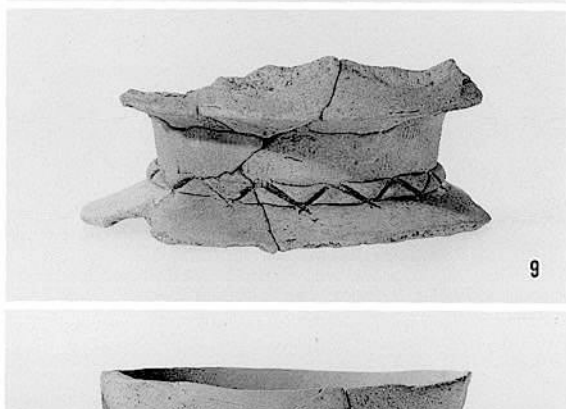
長通地区出土広片口三耳鉢・朱付着土器



長通地区出土朱付着土器



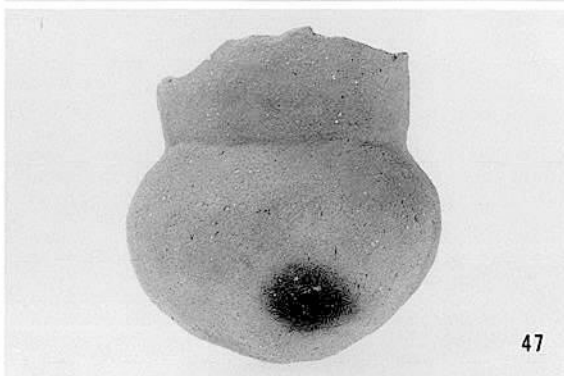
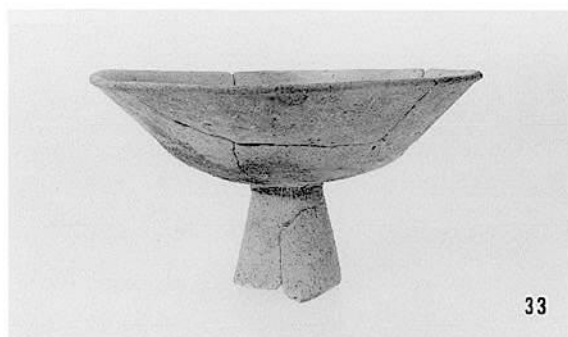
畠田・長通出土大型土器

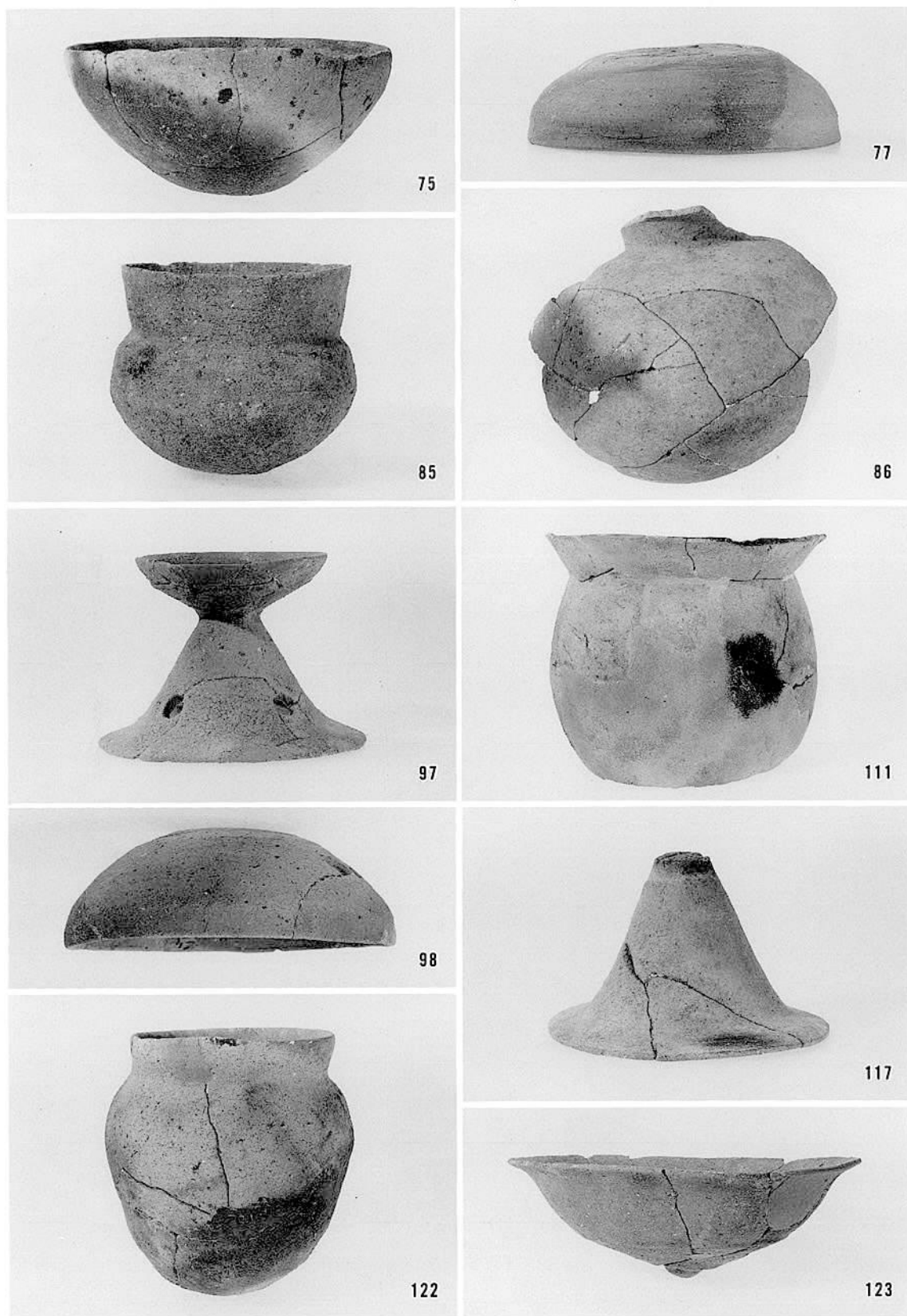


長通0区溝1出土土器

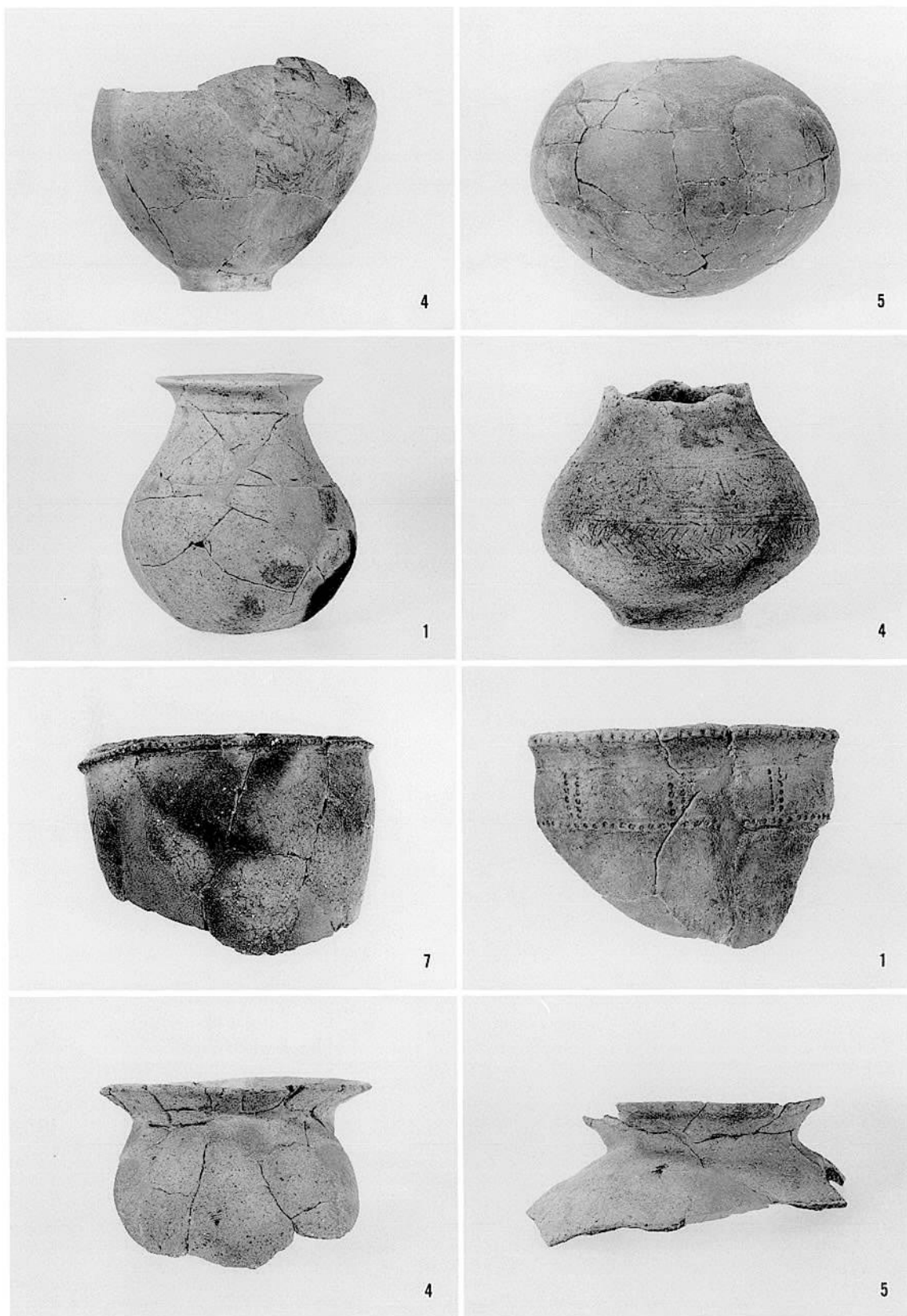


長通0~1区溝1出土土器





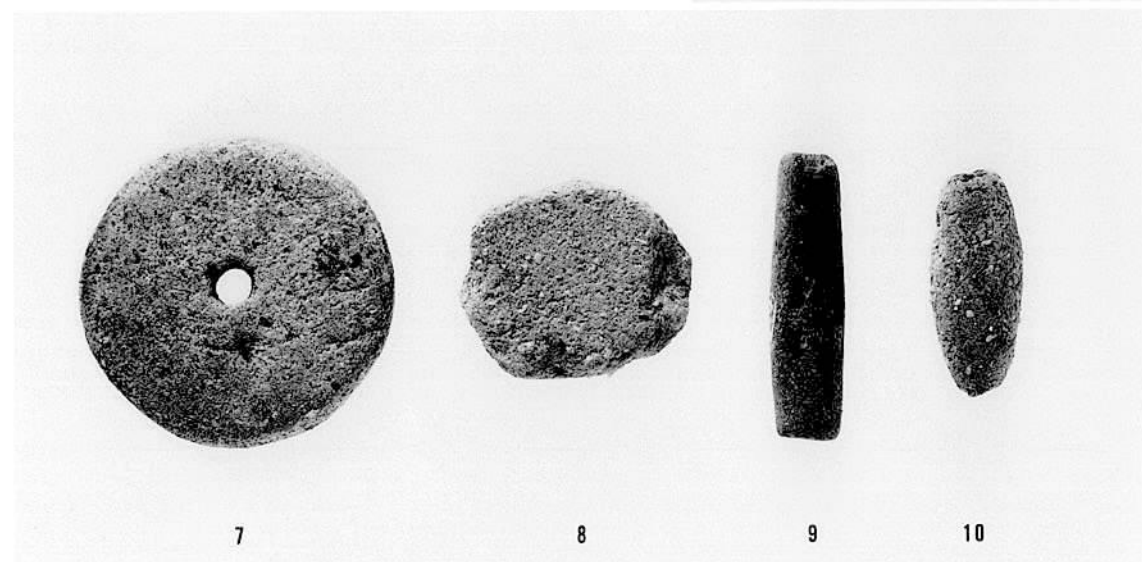
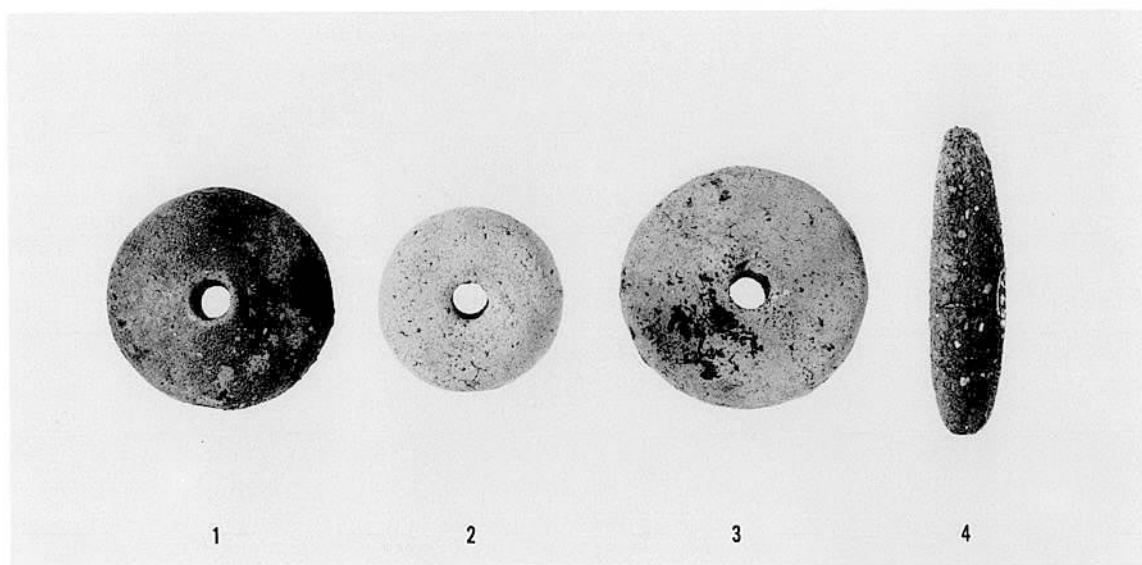
長通2区溝1、畠田溝2、長通2～4区溝2出土土器



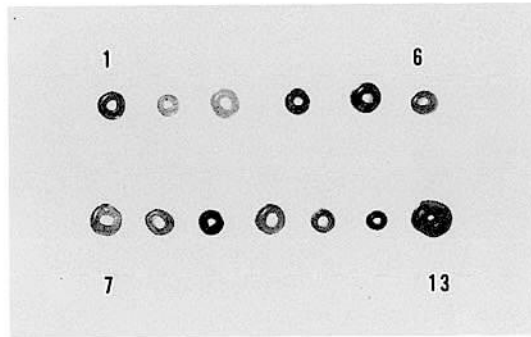
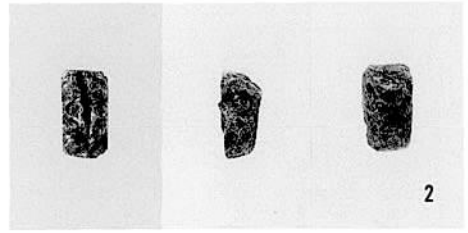
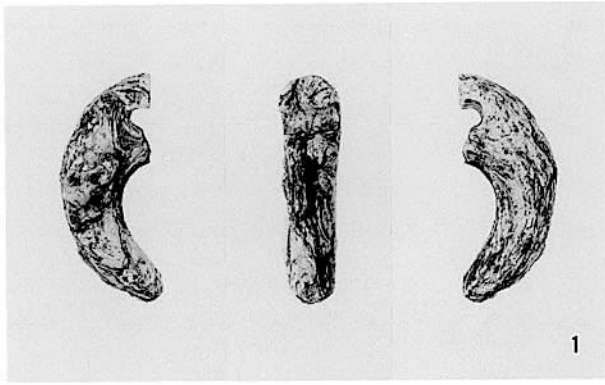
畠田・長通溝 5・6・10、貯蔵穴、不整形土壙出土土器



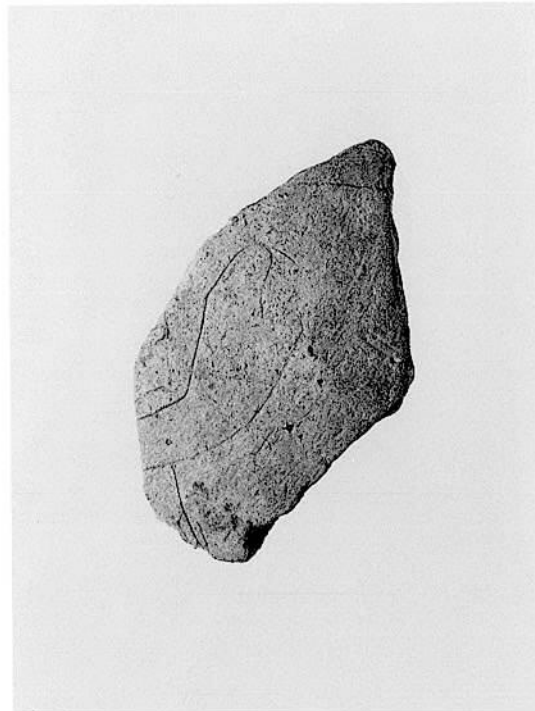
畠田・長通出土手捏土製品



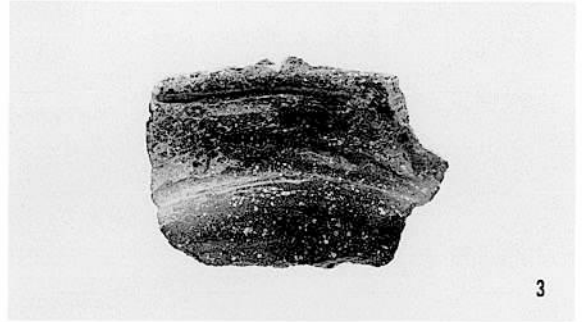
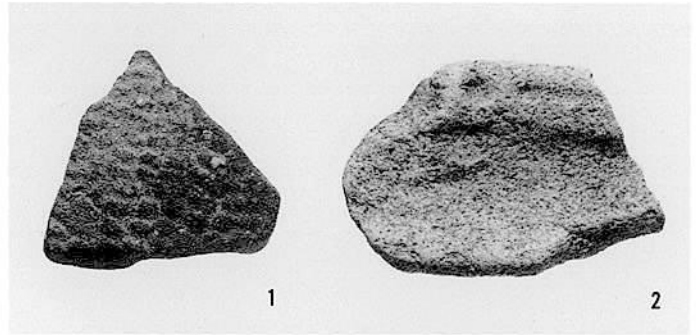
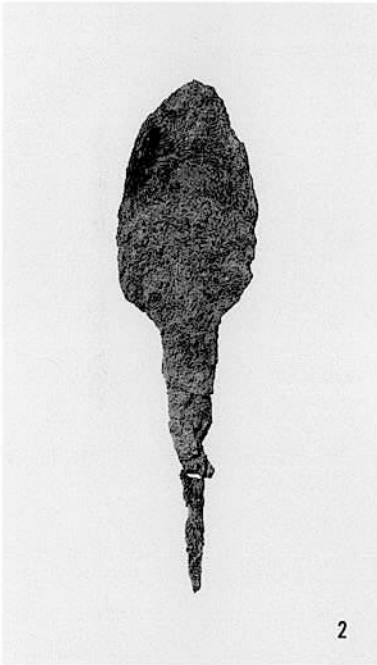
辻垣出土紡錘車・土製品



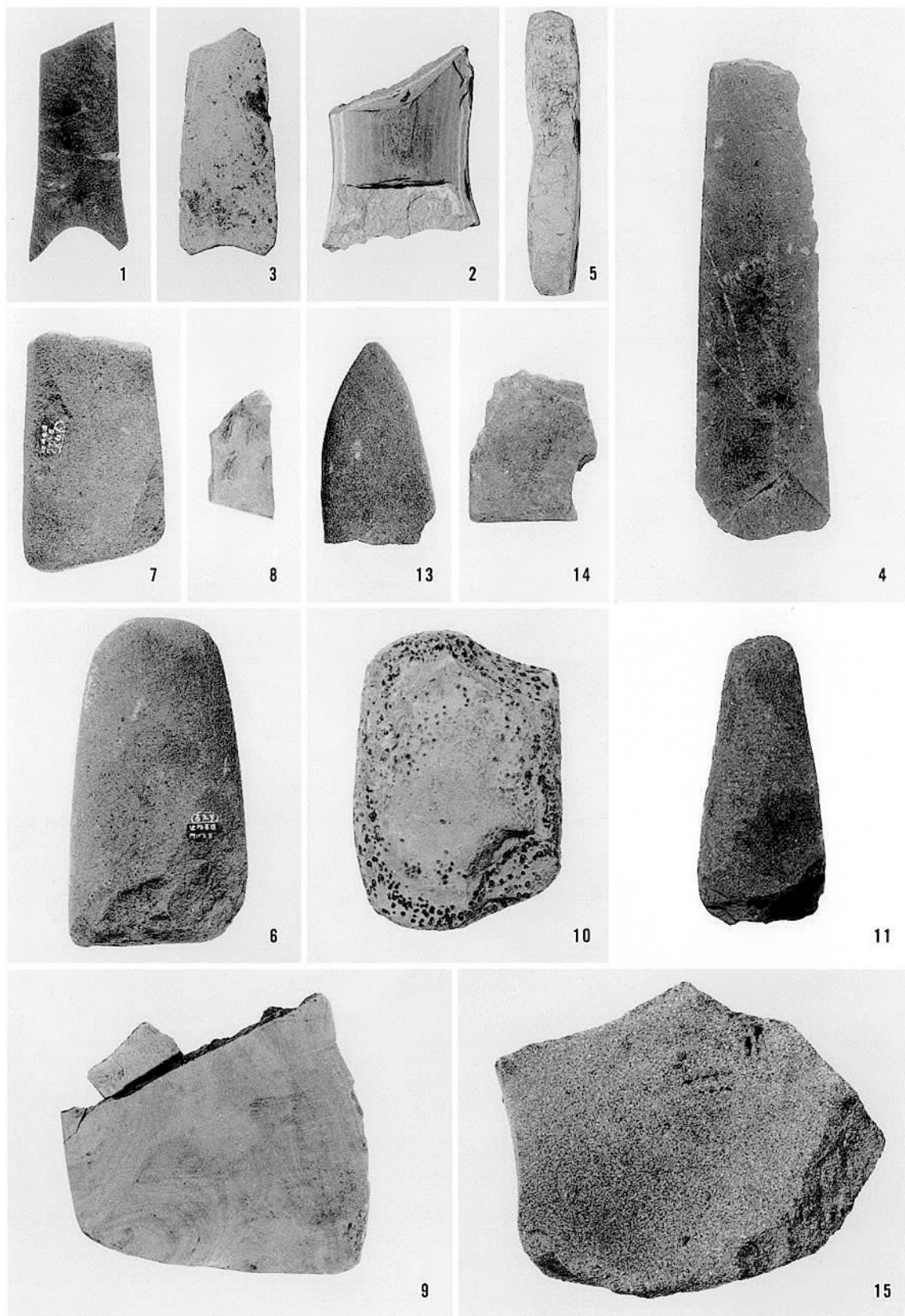
長通3区大溝3～4層出土玉類(実大)



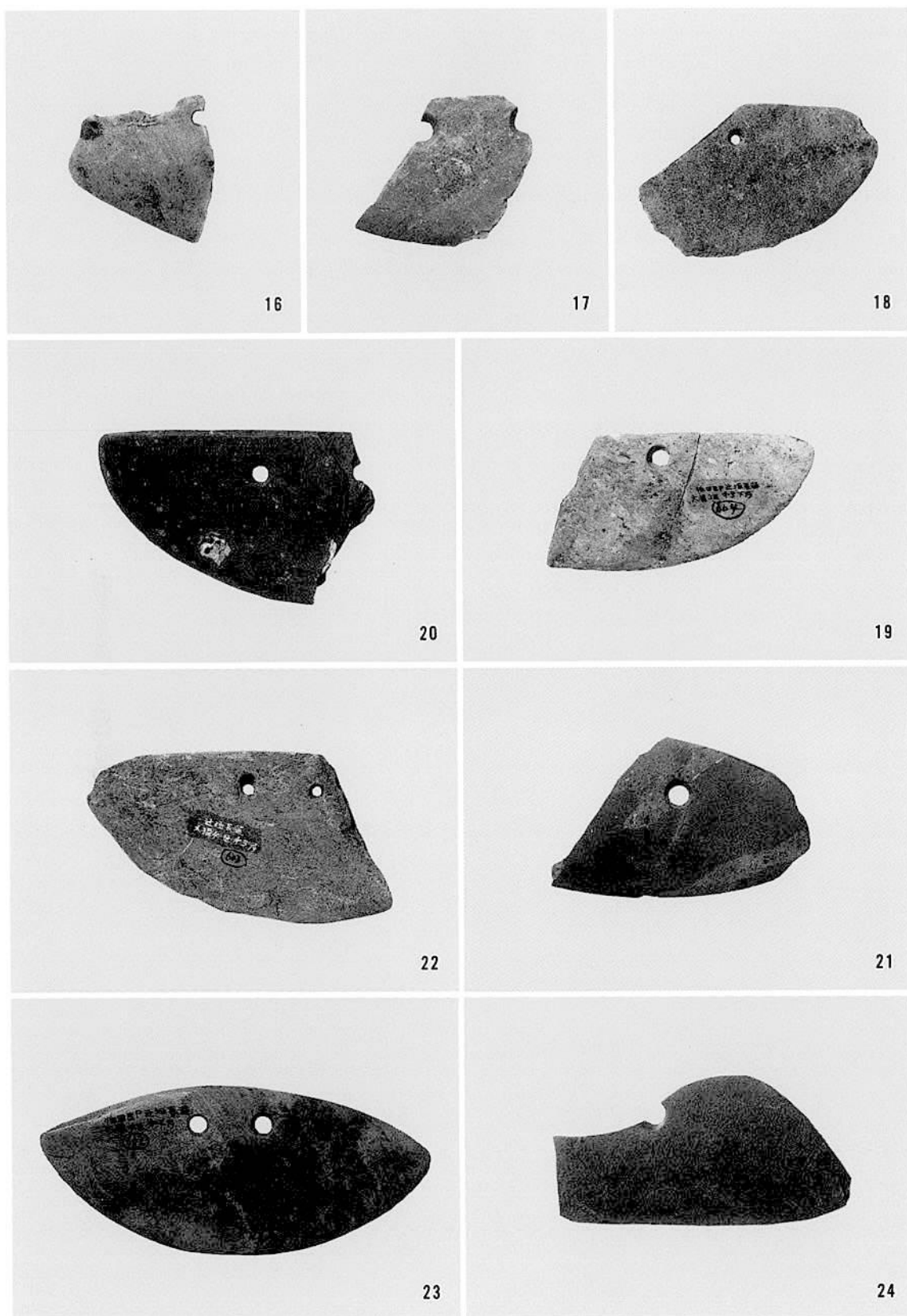
長通3区溝2下層出土船の絵(実大)

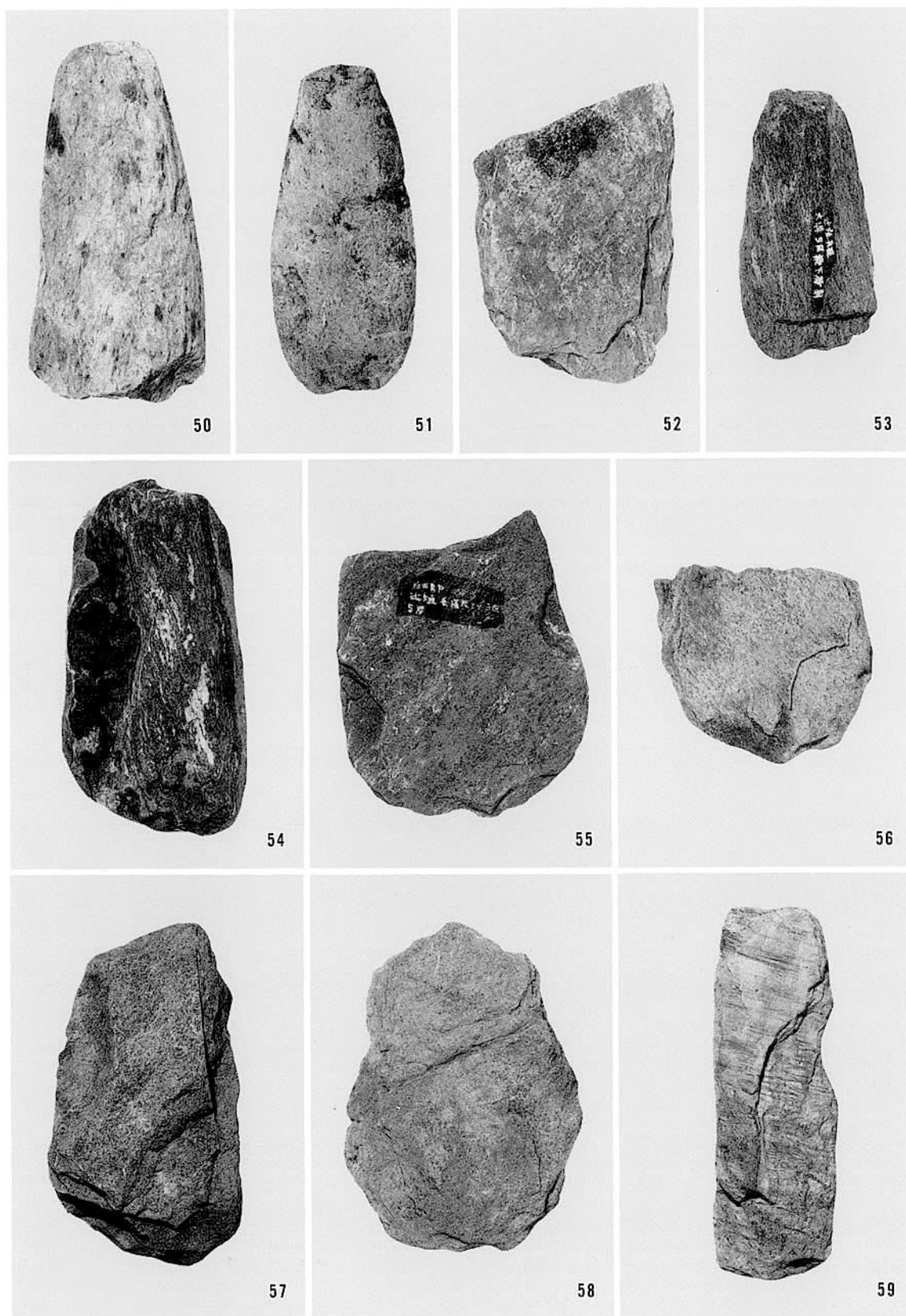


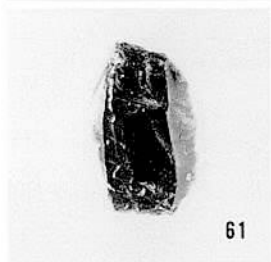
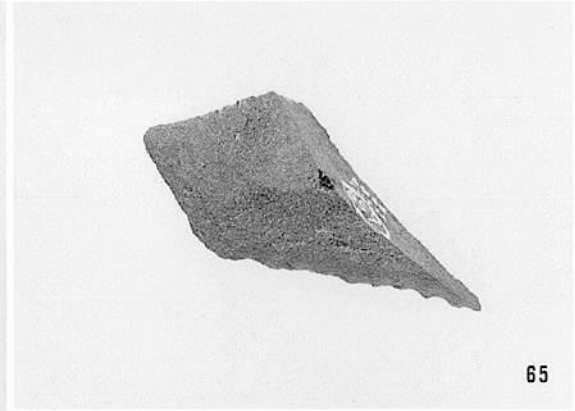
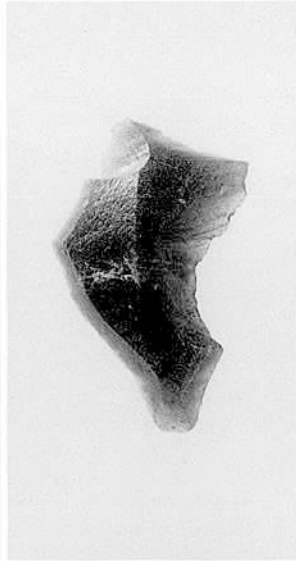
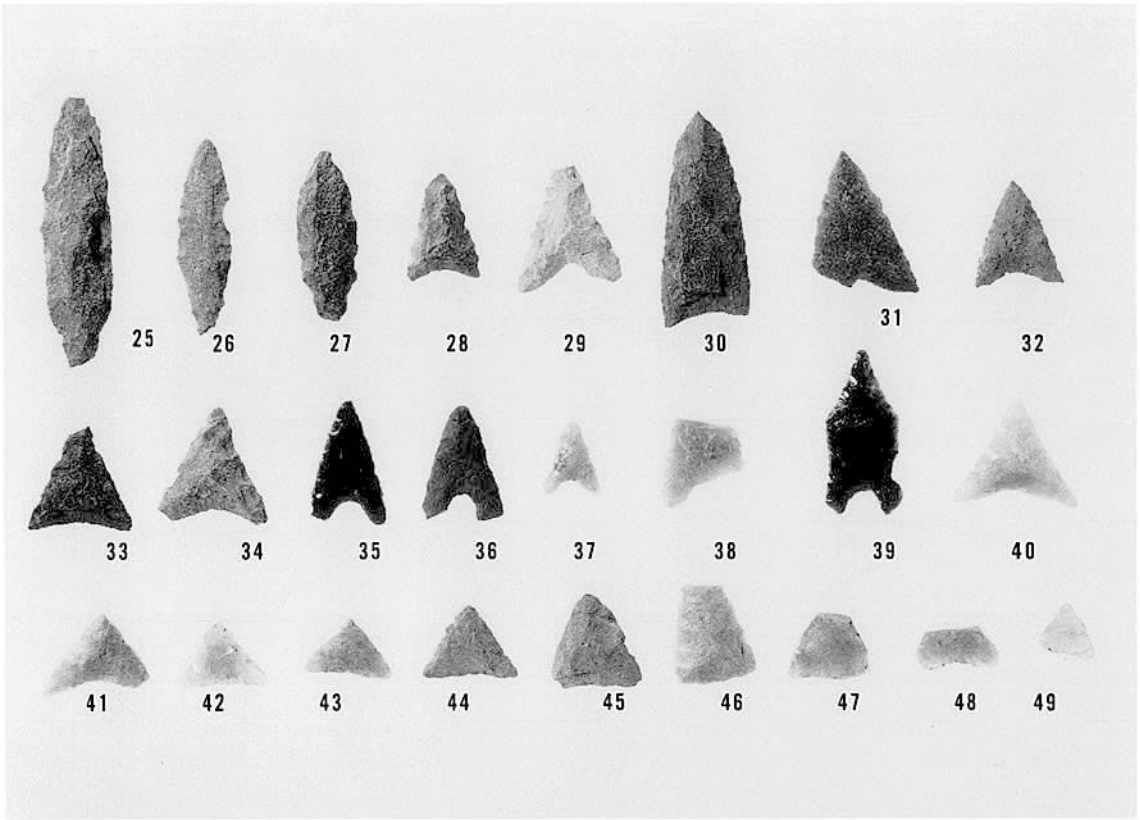
長通3区溝1の鋤先痕石膏型・鉄鏃・縄文土器片



畠田・長通出土石器 1







報告書抄録

ふりがな	つじがきはたけだ ながどうりいせき							
書名	辻垣畠田・長通遺跡							
副書名	一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告							
巻次	第2集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	柳田康雄・杉原敏之・本田光子・成瀬正和							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園 7-7 TEL 092-651-1111							
発行年月日	西暦1994年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つじがきはたけだ 辻垣 畠田・ ながどうり 長 通	ふくおかけんゆくほしし 福岡県行橋市 おおあざつじがき 大字辻垣 あざはたけだ ながどうり 字畠田・長 通	402133	—	33°42'	131°0'	1987.5 ～ 1988.7	34,500	道路(国道10号線バイパス)建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
辻垣畠田・ 長通	集落(溝)	弥生・古墳	大溝(旧河道) 環濠 2 貯蔵穴 5 長方形土壇 12 溝 6	弥生土器 石器 玉類 土師器		瀬戸内系を多数含む (朱生産に関係) 近畿・瀬戸内系を多数含む 船の絵の線刻		

一般国道 10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第2集

辻垣畠田・長通遺跡

1994年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社昭和堂印刷
福岡市博多区榎田2丁目2番52号
電話 (092) 471-8200

福岡行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 5	登録番号 6



附図 辻垣遺跡畠田・長通地区遺構配置図 (1/200)